女鑑

第十四年
第十二号

明治二十四年八月創刊 明治三十五年三月十二日第三種郵便物認可
每月一回一日發行


季節向
新柄品々
いろいろ取
揃置候間
御用命の程
奉希上候
東京日本橋
三井呉服店

女鑑　第拾四年 第拾三號　目次

口繪

陸軍少將中村覺氏留守宅
故高山盈子女史　赤十字社病院
米國ブライアン氏の家庭並邸宅
恩賜の義手義足を着けたる露國負傷兵
女子美術學校卒業生並職員
女子靜修學館職員並卒業生
女鑑兼題投稿優等者
戰時摸樣繪葉書圖案、東京女子師範學校生徒圖按

女鑑……一

論叢……七

戰後の女子概論……七
今後の女子敎育に就て……文學博士　上田萬年
女子敎育上男女敎員の優劣利害を論ず……佛國巴里文科大學敎授　ヘンリ、マリオン
經濟上より見たる風俗改良……園田孝吉

史談……二四

高山盈子の生涯……文事秘書官　工藤一記
奥羽の婦人……介洞主人
貞女一對……望月光子

學藝……三七

漢文講義……阿井笛村
英文雜錄……宮森麻太郎

訪問……四九

中村陸軍少將夫人を訪ふ……一記者
吉島海軍中佐母堂を訪ふ……同

女學校……六〇

日本女子大學運動會……記者
女子美術學校卒業式……同
日本女子美術學校々友會……同
第三高等女學校運動會……同

家庭……六七
米國に於ける模範的家庭……米國文學博士 山下瀰七郎
訪問の心得……菊池 雪子
防寒毛布……倭 翁
冬の衛生……小畑 蓬城
四季の臺所……中川 雪枝
牛乳日本料理……清水 鈴子
演壇……一〇七
奉公人に對する理想……江原 素六
日本婦人の行動……阿多 廣介
雜錄……一一八
ワーテルローの戰……文學士 濱田 紅於
軍國の片影……笠間 醉雨
留岡幸助氏の前夫人を想ふ……一の瀬 初子
確氷の紅葉……梅廼舍主人
滿洲事情……園田 紅村
米國通信……澁谷 馬頭
御題詠進に就て……中村 牧子
小説……一五〇
無限恨……中村 春雨 西村 醉夢
文林……一五七
各宮殿下の御歌
宮中月次御歌會兼題詠進
詞苑……一六三
歳暮(歌)……上田 德子外
秋(歌)……前田 河千年子外
家庭日記(文)……松原 みね子外
歳の暮に故郷の母君に贈る文(文)馬淵 なみ子外
彙報……一九二
數十件
廣告

登録商標

畏き邊りの御料に召させらるゝ

完全無鉛 高貴御化粧料

御料 御園白粉

濃。薄化粧 ねり製白粉	御園の雪	大壜入 金七十五錢 中壜入 金三十五錢 小壜入 金十八錢
うす化粧 水おしろい	御園の月	壜入 金二十五錢
洋風化粧用 粉製白粉	御園の花	紙包 金十錢
洋風化粧下 クリーム	御園の蕾	錫入 金十錢
特製貸功 化粧水	御園の露	壜入 金十二錢
國中化粧 打白粉	御園撫子	紙包 金五錢
濃厚特製 おれなほし	四季の花	壜入 金十錢

賣捌・全國小間物化粧品店

製造元 東京芝櫻川町 胡蝶園

發賣元 日の丸扇石鹸本舗。内外小間物化粧品問屋 東京日本橋區橋町四丁目 丸善商店

◉説明書御申越次第送呈◉ 電話浪花四四八番

中性。純良。壜折。機械煉製

衛生化粧用。模範石鹸

日の丸扇ムスク石鹸

◉大形金廿錢 ◉小形金十錢

◉懐中用一枚金十錢

◉日の丸扇ムスク石鹸は品質純良中性なるが故に肌のあれる事なく皮膚を潔白艶麗ならしむ

◉日の丸扇ムスク石鹸を使用せば愛すべき「スミレ」及高貴なる麝香馥郁として五日間身邊に薫りを保ち常に精神を爽快ならしむ

◉石鹸試験法……小量の石鹸と酒精を試験管に入れ少し熱を加へ振動する時は純石鹸は溶解透明し澱粉等の混交物あるものは混濁して沈澱を生ず

◉本品は化學上峻烈なる試験薬フェノル、フクタレインに毫も反應を呈せざる本邦唯一の中性完全なる模範石鹸也

◉總て石鹸は上等なる程輕く且溶け易きもの故に水のきれ能き石鹸入を用ゆべし

◉賣捌 全國小間物化粧品店

御料御園白粉發賣元。内外小間物化粧品問屋

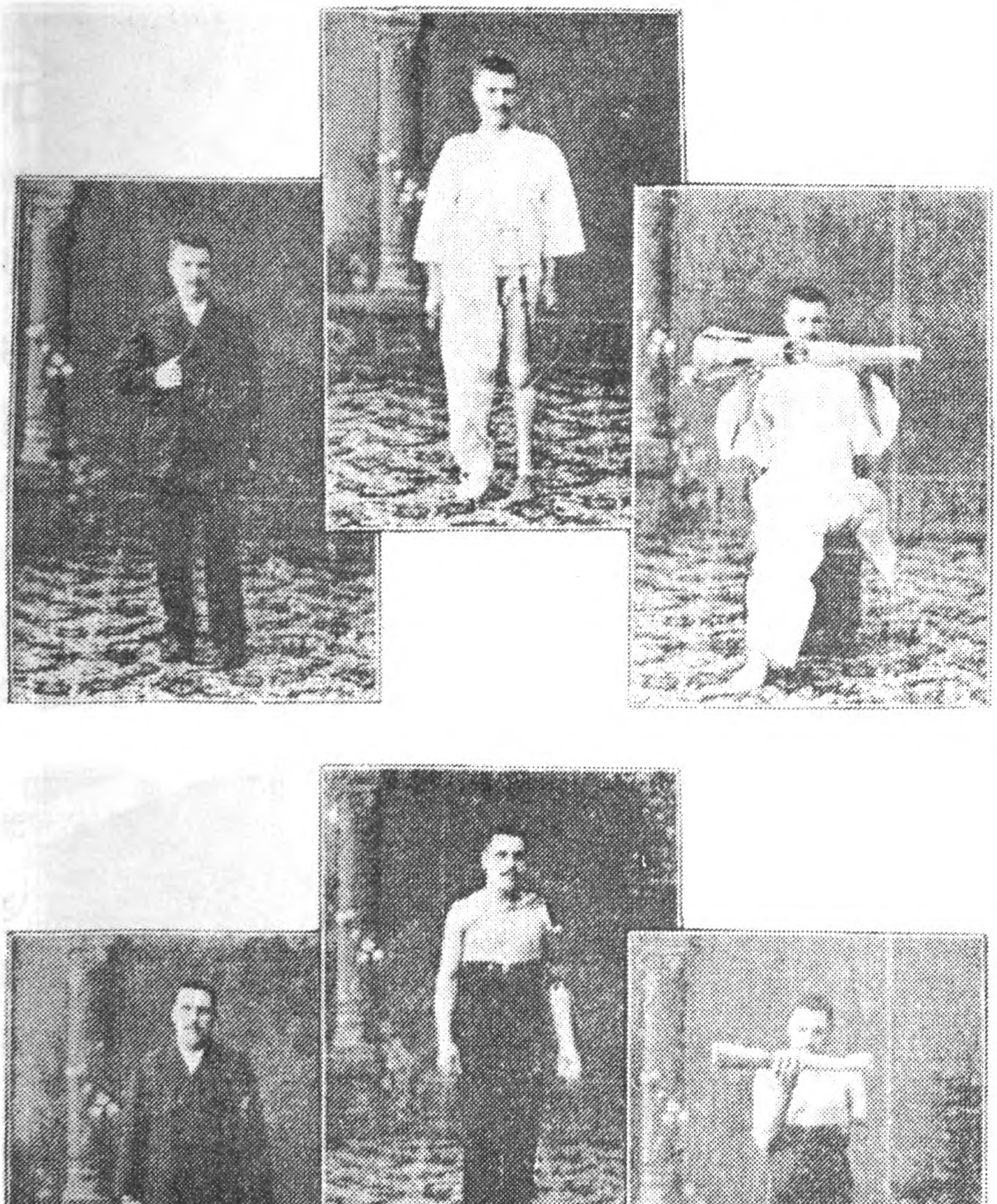
發賣元 東京日本橋區橋町四丁目 丸善商店

陸軍少將中村覺氏留守宅



(訪問欄參觀)

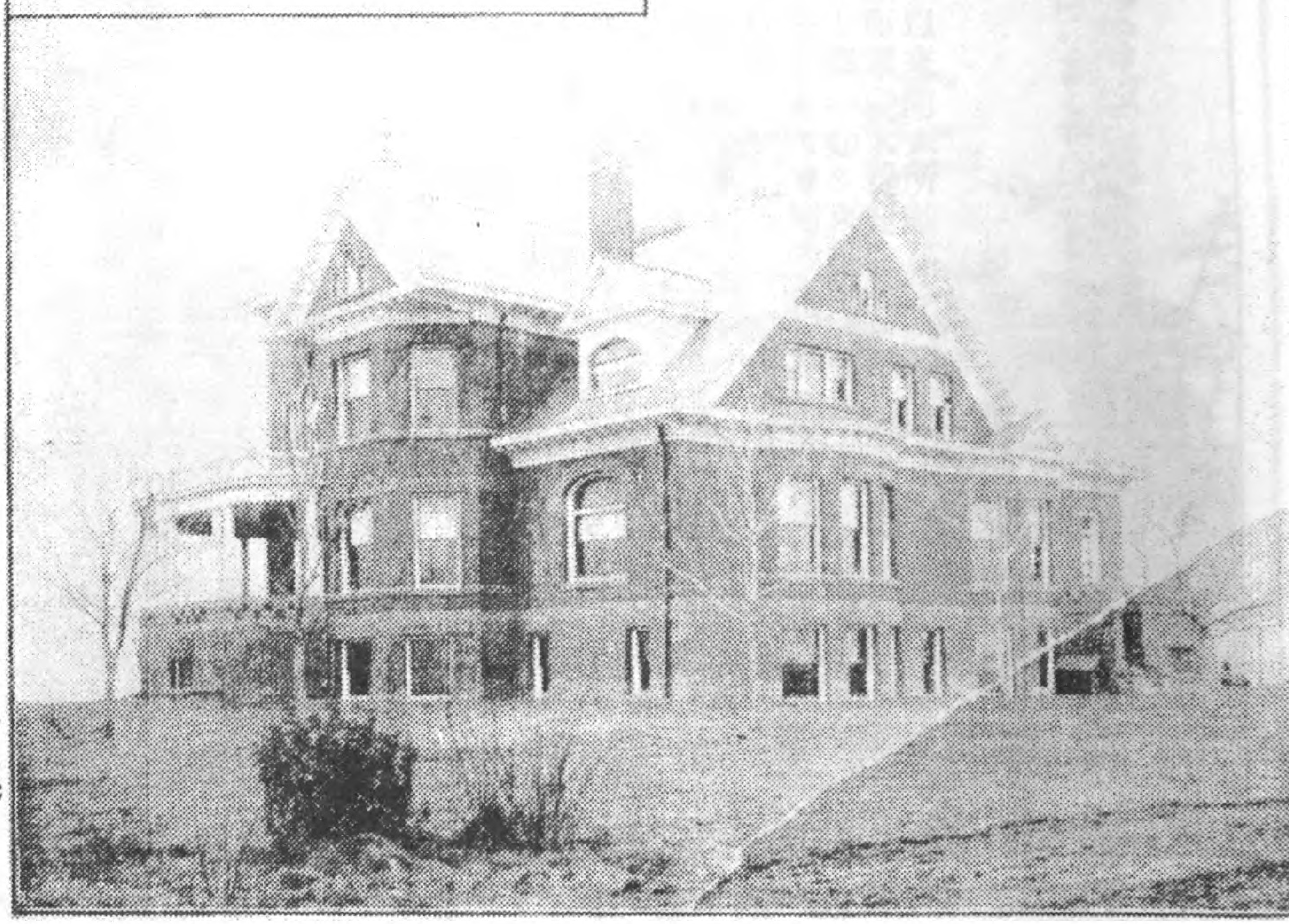
恩賜の義手義足を着けたる露國負傷兵



米國ブライアン氏の家庭並邸宅





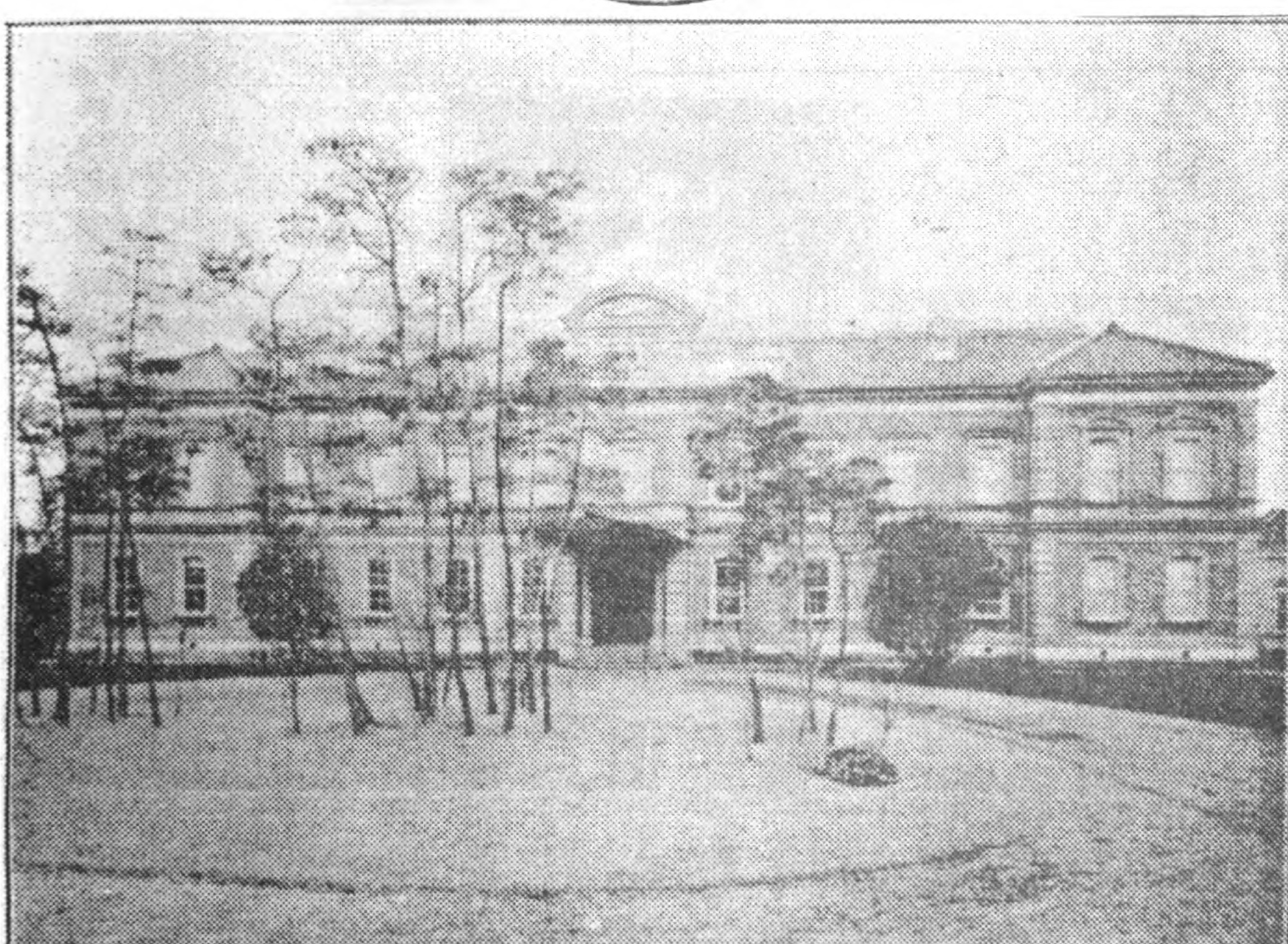


（家庭欄參觀）



故高山盈子女史

（史談欄記事参照）



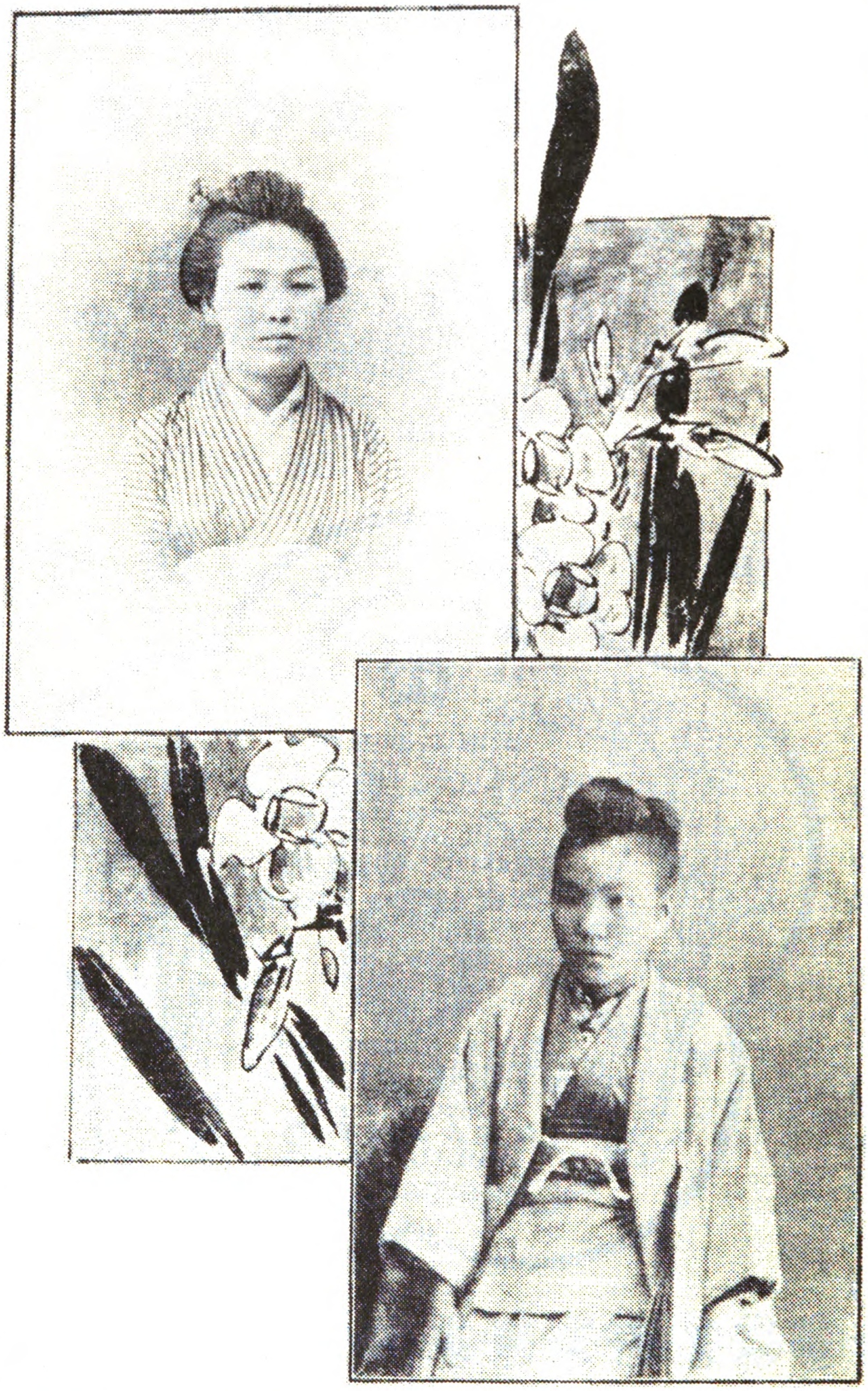
赤十字社病院



女子美術學校卒業生並職員

女鑑兼題投稿優等者

田村乡豆子



町田かつ子



女子靜修學館職員並卒業生


煉
ばら歯磨
粉

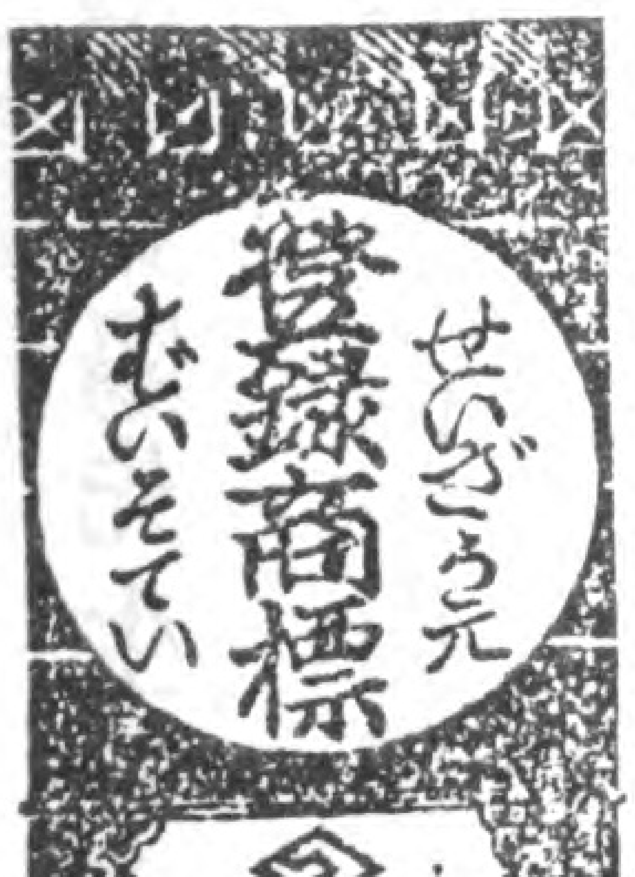


褒賞受領



定價 壹袋壹錢
鑵詰五錢

此名題洗粉は皆々樣の御引立に依り益々盛大に相成難有仕合に奉存候然るに近來諸方に名題洗粉の擬造品澤山顯はれ候に付弊舗製造品には袋の裏面に芝居櫓形の登錄商標を相印し御座候間何卒御求の節は篤と御熟覽の上多少に不限御用向の程偏に奉希上候也



東京淺草區黑船町
梅素亭謹製
下谷 一二三四番

模範家庭の讀物

日本女子大學講師　松浦政泰先生編纂

新刊發賣

英文　歐米名士の家庭

女子は家庭の帝王なり、纖弱優婉なる婦女子が社會的事業について占むべき地位亦尠きにあらざれども善良なる家庭の麗はしき玉座こそ、先づ求めて望むべきものならめ、本書は歐米名家の婦人が、その娘たり妻たり寡婦たる分に應じ境遇に順ひて如何によく、その親につかへ、良人を慰籍し子女を敎養し人を憐み惠みたるかの事跡を、流麗平易なる英文にてものせられたるものなれば健全にして美しき家庭を造らんとする婦女子にとりては、こよなき敎訓を與へ、ならびなき模範を示すなるべし世の賢明なる淑女の一讀を望むや切なり、女學校敎科書としてまた適せるを見る

洋裝美本　全壹册　定價金四十五錢　郵税金六錢

發兌　東京市神田表神保町二　同文館

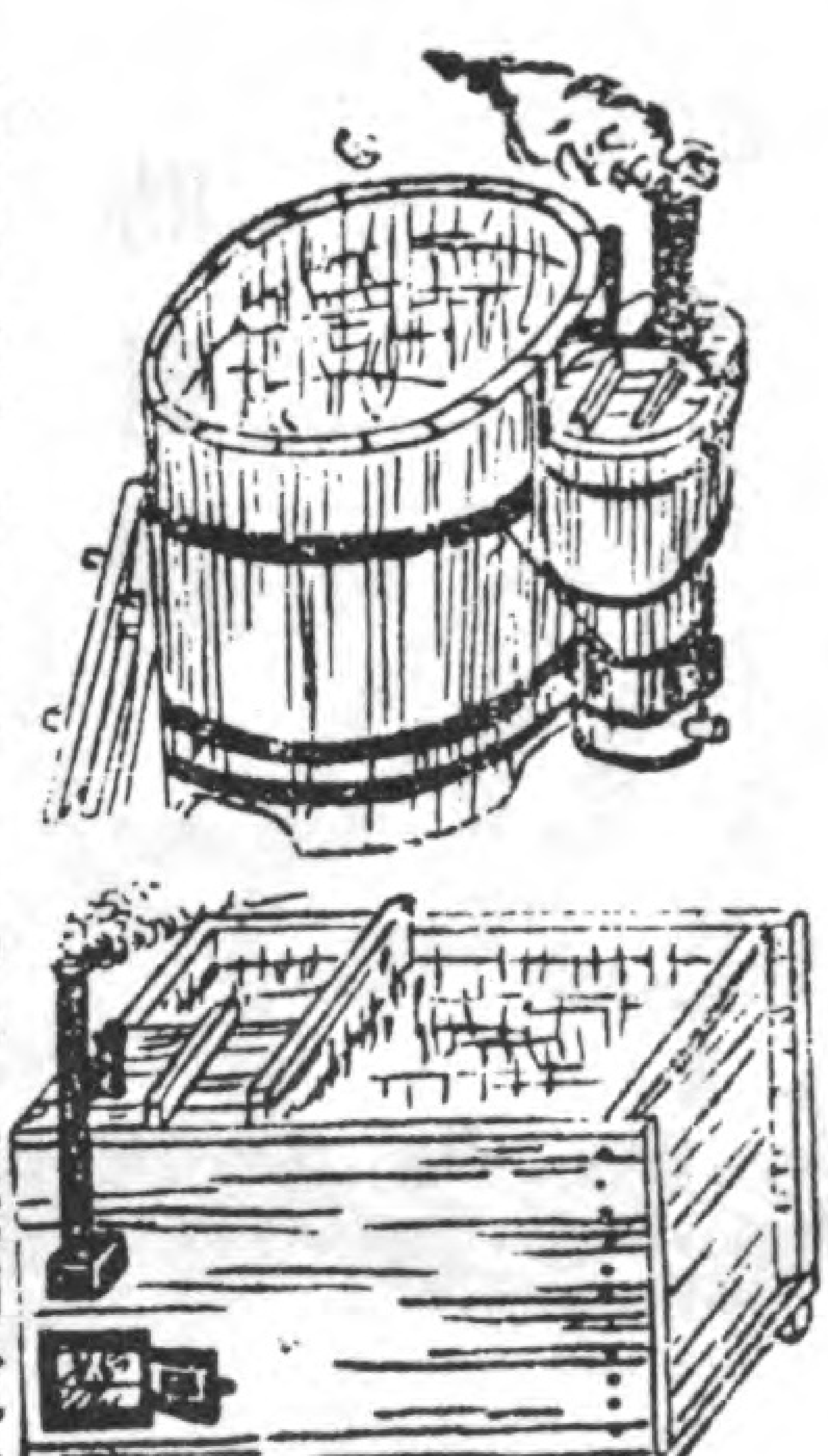
第五回內國博覽會

賜褒賞

專賣特許

竈全据風呂





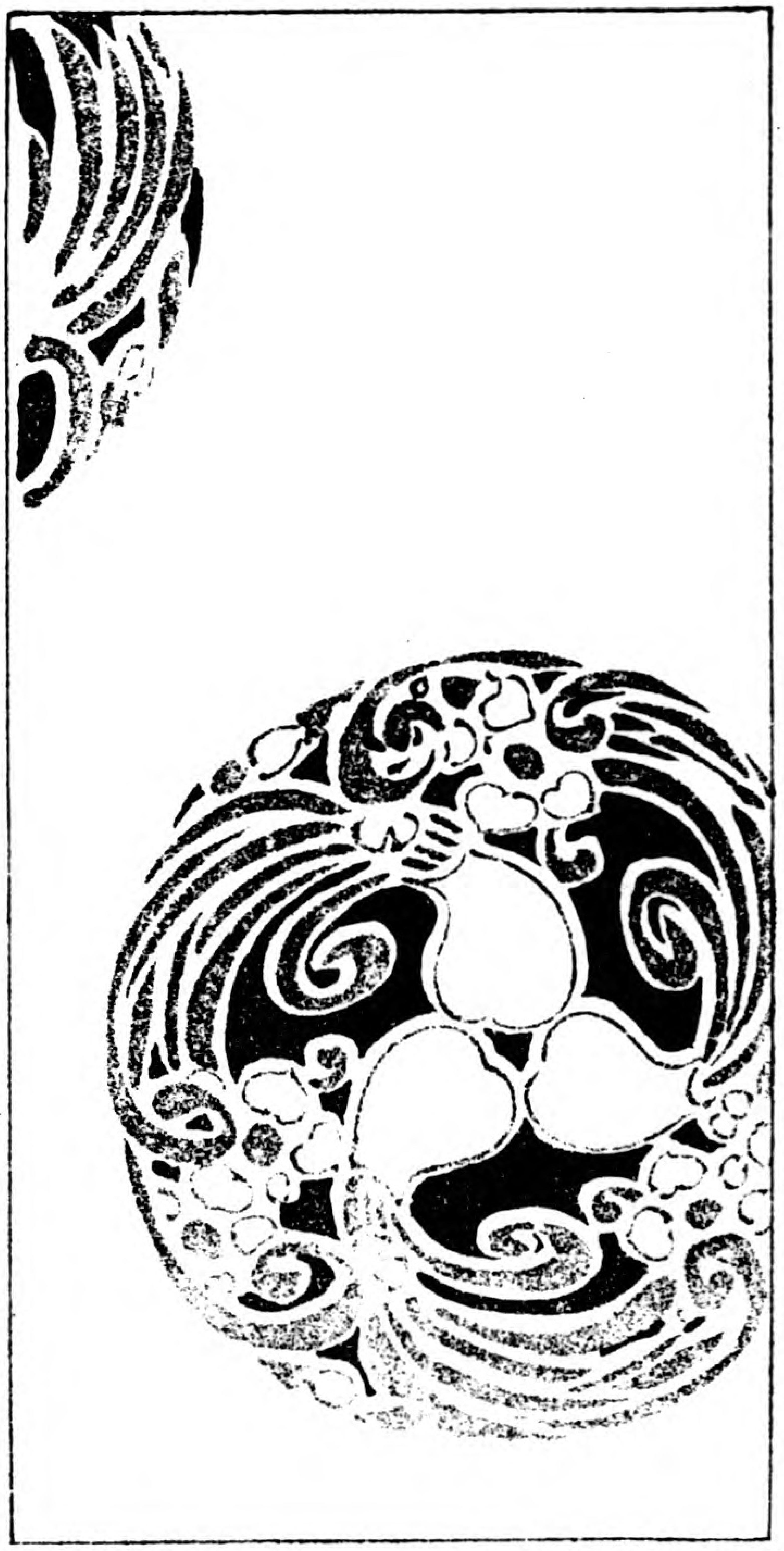
定價表御入用の方は郵券二錢御送附あれ

專賣許竈　同据風呂　製造發賣元

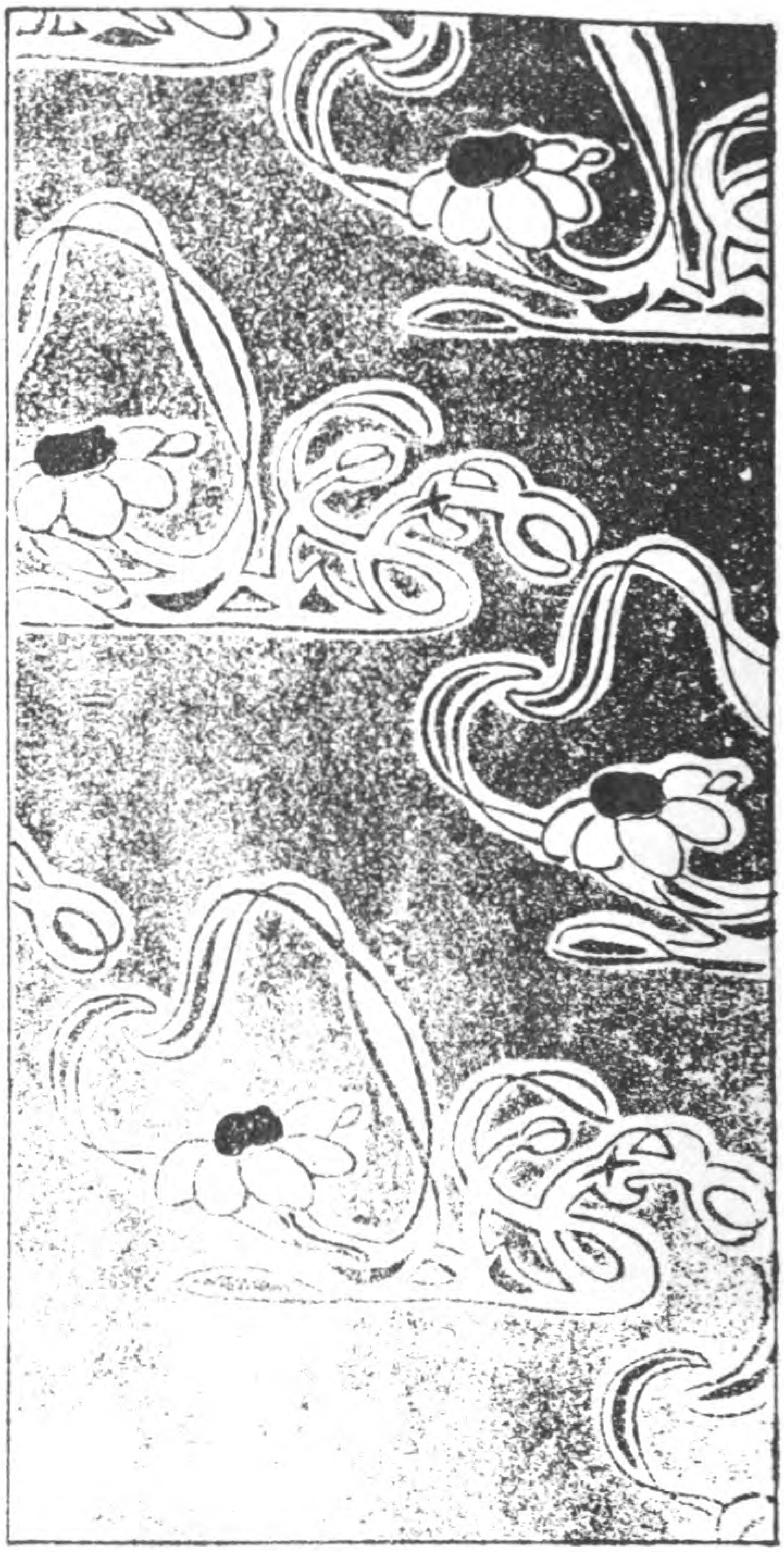
日本橋區蠣殼町二丁目十五番地

名和商店

東京女子師範學校生徒圖案



石橋かつ子案



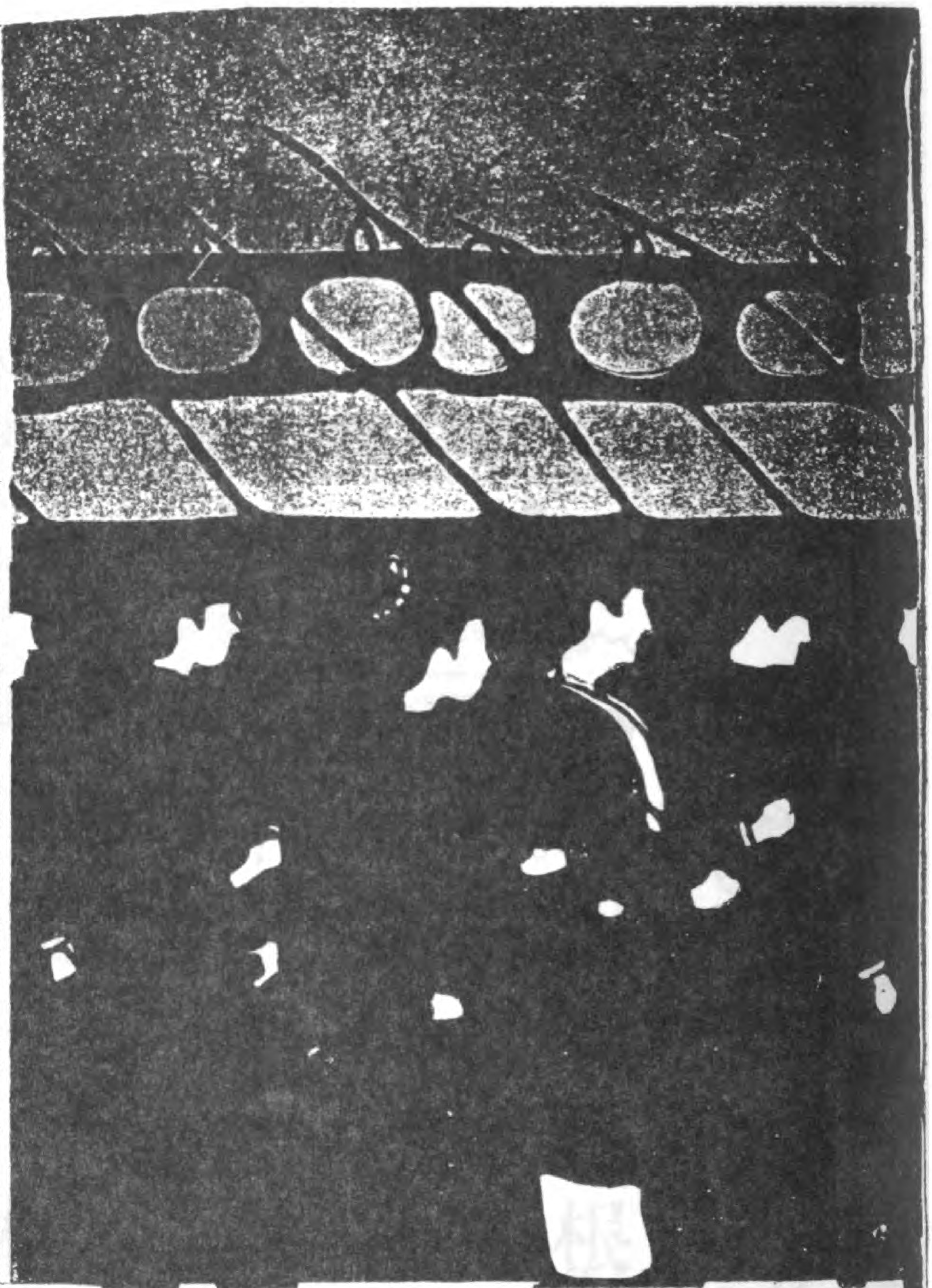
和田しけ子案



莊田ます子案

戦時はかき　貳圖

京都　長山栖龍按





投稿募集

兼題　和歌、文章

随意　短文、短歌、今様

自今新に**新體詩**を募集す

調も題も随意なれど七五或は五七を以て句とし

二十句以内に限る

右投稿規定を熟覽の上續々投稿あれ!!!

女鑑編輯局

東京市京橋區
築地二丁目

東京銀座一丁目河岸通り

帝國貯蓄銀行

（電話 新橋 八一六 二八〇八）

本郷一丁目 本郷支店
飯倉三丁目 飯倉支店
赤坂表一丁目 赤坂支店
四谷大通り 四谷支店
南品川一丁目 品川支店
横濱吉田町 横濱支店

牛込神樂坂 神樂坂支店
神田須田町 須田町支店
兩國米澤町 米澤町支店
淺草雷門前 吾妻橋支店

代理店 日本橋坂本町 田中銀行

●一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候

○大日本の淑女方が一般に渇望する處の原料の確實なる洗粉は此の花洗粉也



一度御試用の上御高評を乞ふ

特約販賣店
淺草公園第六區 辻小間物店
京橋區桶町 増田勉強堂





定價●金五十錢●金廿五錢●金十五錢●金十二錢



第十四年第十三號

戰後の女子概論

鷄卵を毀らされば、「オムレツ」を製する能はずとは、ナポレオン一世が、常に其の侍臣に語りたるところなりといふ。帝の一生が、彈丸とサーベルとの間に消磨され、血河と骨山との裏に送迎され、歐洲の全土に慘憺たる修羅場を現出したるは、思ふに此の簡單なる一片の理想より生じ來れる幻影なるなからんや。しかも幾多の鷄卵は毀られたるも、遂に一個の「オムレツ」は製作せらるゝを見ざりき。而して天地の大なるも、帝の一身を容るゝに地なく、末路蕭條、聖ヘレナの孤島に無殘の憤死を遂げたるは、啻に武力を利用する英雄豪傑に向つてのみならず、天下の野心家に向つて好戒を殘すものにあらずや。

女子をして、男子と同じく、社會國家の表面に立ちて、活潑なる行働を爲さしむべしとの說は、近時或る一派の論者が往々唱道するところの議論なり。而して女子自らも亦竊かにかゝる理想を抱きて、將來の目的を描くものなきにあらざるが如し。是れ全く數千年來に發達養成したる舊組織を破壞し、一旦唾手して新制度を起さんとするものなり。

女子の性格は、果して男子と同じく、同一の道途を辿り、同一の進行を爲し

同一の職務を執り、同一の事業を行ふに適せるや。將又た女子は女子として、自ら定まれる職務あり、事業ありて、男子と異なれる道途を經由し、男子と同じからざる進行を爲すべき天分を有せるものにはあらざるか、是れ未だ解決を與へられざる一個の大疑問なり。而かも若し既往數千年の歴史に據りて、今日の狀勢を推求し得べきが如くに、今日の狀勢を以て、更に將來の傾向をも卜知し得べしとせば、古今及び將來を通じて、女子と男子との社會に對する區別、國家に於ける關係も粗々判別するに難からざるが如し。予輩の見るところを以て、大なる過ちなからしめば、男女均等の主義を根據として、女子の進步發達を圖らんとするの甚だ危險なるは、更に言を待たざるべしと信ず。

婦女社會に於ける近來の進步と發達とは、寔に著しきものありて、智力に於ても體力に於ても之を五十年若くば百年以前の女子に比較せば、殆んど天壤の差別あるべし。されど此の發達は是まで男子の專有せる領域內に向つて侵入しつゝあるものなるか。其の進步は男子の特性と認められたるものに接近して、之と步調を同ふし、或は之に凌駕せんとするものなるか。仔細に觀來れば、或る部分に於ては、男子に接近し、或は凌駕すべき狀況なきにあらざるも、畢竟するに女子特有の範圍內に於ける進步と發達とに止まりて、男子本來の領域に向つて侵入したるものにあらざるを認め得べきに似たり。それ、智力の進步は、女子が文學者たり得べく、宗教家たり得べく、美術家たり得べく、又或る一定の職業に從事し得べきを示せり。されど未だ以て政治家として、英雄として

傑出したるものあるを聞かざるなり。體力の發達は、女子が能く端艇競爭に堪へ、獸獵に堪へ、又各種の競技運動に堪へ得べきを證せり。しかも未だ兵士として、拔群の譽れを現はし、將軍として三軍を叱咤したる例あるを知らざるなり。將來に於て智力體力兩ながら愈々増進して、或は巾幗大政治家を出し、或は美形無髯將軍を見るの日あらむも知るべからずと雖も、之を近く本世紀中に望み得べしとは、容易に信ずる能はざるなり。

かく云はゞ、或一派の人々は、奥村五百子刀自の愛國婦人會事業に於ける、下田歌子、棚橋絢子三輪田眞佐子、矢島楫子女史等の教育事業に於ける成功を證として、女子にして一たび發奮振作せば、男子に劣らざる事業を爲し得べしといふものあらむ。然り洵に是等の刀自女史等は、その傑出せる才能を發揮して、能く今日の女子社會に一新面目を開きたる人々なり。予輩は是等の人々が、明治の女子として、頗る尊重すべき性格を有するを知ると同時に、亦大に其の成功を祝するものなり。然れども是等の人々の已往の經歷に由りて觀るときは、始めより男子と比肩し、頡頏せんが爲に、獨立の生活を送りて、獨步の事業を經營せんとしたるにあらざるを知るなり。剛毅活潑殆んど男性的なる五百子刀自も、猶ほ一たびは、夫妻双棲の樂しき家庭に、日夕を送りたりといふにあらずや。才思湧くが如き、達識なる歌子女史も、嘗ては良人の傍らに侍りて、箕掃の事に當りたるにあらずや。矧んや三輪田、矢島、棚橋三女史の如きは、子女を擧げて哺乳鞠育の務めを自らせし人人なるに於てをや。而して是等の刀自女史等は、何れも不幸にして、早く其の良人を喪ひたり。或

は其の子女の夭死せるに遭へり。かゝる境遇は偶々成功の動機となりて、良人に仕ふるところの道を以て、之を一般社會に致し、其の子女を愛するところのものを以て、廣く之を公共の事業に及ぼして、拮据經營遂に今日あるに至りしに外ならざるなり。而してその施設せる事業の範圍もまた婦人團體、又は女子教育たるに止まるは、之を女性的性向の發揮と見るを得べく、男性的事業に競爭したる結果とはいふべからず。一歩を退いて熟思すれば、以上の女史刀自にして、其の境遇に變化なく、良人健在し子女俱存して、奉事鞠育の任に當らんには、家事經營の責と、家庭緝和の務とを放擲しても、猶且つ社會事業の爲に盡さるべきか、恐らくば全く社會的事業を捨てざるまでも、其の强半をば、家庭と家事とに致さゞるを得ざりしなるべし。願ふに是れ德性高き婦人の常として、その本來の希望は此にありて彼れにあらざればなり。又一歩を進めていはゞ、家庭家事に於ける多端の境遇と經歷とは、愈々其の德性を涵養し、益々其の技能を發展して、大に今日の成功を助けしものあるを知るに難からざるなり。されば徒らに獨立獨歩を理想として、家庭を輕視し、家事を放擲して顧みざるもの丶如きは、その目的とせる事業經營の上に就いても、決して成功を望む所以の道にあらざるを知るべきにあらずや。

目下進行しつゝある日露戰爭は、我國の歷史上實に一新紀元を開くものなり。此の戰爭の終局が社會の狀態に變化を與へ、萬般の事物に影響を及ぼすべきは、更めて論ずるまでもなし。蓋し東洋の一島帝國が、一躍して歐米の列國と軒輊し、謂ゆる一等國たる位置に進むと共に、國内に於ける

社會、教育、經濟等各般の事物に一生面を展開すべき氣運を來し、且展開せざるべからざる情勢に迫るべければなり。されば女子教育はいふも更なり、女子の思想、位置、職業、事業の如きも、自から變化あるを免かれざるは、必然の數なるべし。而して此の變化は眞正の意味に於ける進歩の趨勢より生ずるものならんには、甚だ慶賀すべしと雖も、萬一穩健なる自然の經由を爲さずして、强て一足飛びの輕業的進歩を爲さんには、啻に婦人社會のみならず、全體の社會に取りて、長く憂ふべき痕跡を留めずんばあらざるべし。例へば夫の女子撰擧權の如きは、輕忽なる急燥論者の主張に過ぎざるが故に、深く意とするに足らずと雖も、高等専門教育論の如き、獨立的生活論の如き、夫妻均等論の如き、其他公共事業に關し、又は體育に關する議論の如き、その所説の內容と實行の如何に由りては、現代社會の基礎を根底より振盪すべきものゝ出るを見んも知るべからず。何となれば、舊潮未だ全く去らずして、新潮更に來らんとするに際し、强風の煽動するあれば、白波跳りて岸石を嚙み、激浪怒りて船舶を覆へし、或は海嘯となりて、海岸一帶の地を洗ひ、家屋、人畜、庭園、樹木を倂せて一掃し去るの慘禍を現すべければなり。

　女子が高等の教育を受くるは、洵に好し。されど之が爲め、徒らに理想を高く走せて、實行を顧みざるが如きことあらば、啻に父兄に累を及ぼすに止まらずして社會も亦た餘弊を蒙むることなきを得ず。獨立生活を望む、必ずしも惡しからず。されど天質情に脆く、涙弱き妙齢の女子が、獨立獨歩して、善く生涯を過し得べきか、縱ひ過し得べしとするも、一歩を過たば、其人の不幸、延い

ては社會の不幸は言ふべからざるものなきか。體育の發達の如きは、大に奬勵すべきものなれども徒らに體格の强壯にのみ重きを措きて、精神上の修養を顧みるなければ、其弊の及ぶところ變性的男子を見ずんば已まざらむ。公業事業の如きも、慈善博愛等に關する婦女生來の職業に屬するものは婦人の盡力を要するは勿論なれども、さりとて家事家庭の責任を棄てまでも、偏に之に狂奔するわらば、予輩其の可なる所以を知らざるなり。又夫の夫妻均等論の如きは、我が國情の許さゝるところ況んや其の理由また甚だ淺膚薄弱なるに於てをや、凡そ以上のもの若し戰勝後の餘勢を藉りて、突飛急燥、猛然として進み來らば、社會の秩序は俄然變動して、國家また其弊に堪へざるに至らん。是に於てか秩序ある穩健なる進步は、社會を繁榮ならしめ、國家をして鞏固ならしむる所以にして、急激唐突の發達は、社會の基礎を紊り、國家全般の不幸を招くものなるを知らざるべからず。故に女子が今日に於て覺悟し用意すべきところのものは、急激極端の思想議論にあらずして、穩良健全なる進步と發達とに在るを知るべきなり。

「オムレツ」を作るは好し。然れども漫りに鷄卵を毀るは、必ずしも「オムレツ」を作る所以にあらざるなり。唯に鷄卵を毀るを知て、「オムレツ」を作る能はざるものは、それ危うからずや。女子の性質、本分、現狀、位置等を顧みずして、名を進步發達に藉り、亂倫破壞の設を唱へて、多くの婦女をあやまるものは、「オムレツ」の製作者にあらずして鷄卵の破壞者なるのみ。戰時の今日、及び戰後の將來に於て、最も留意すべきは、寔に此に在りといふべし。（靑眼稿）

論叢

今後の女子教育に就て

文學博士　上田萬年君談

茲にお話いたす女子教育のことは、おもに中等社會及びそれ以下の女子教育のことであつて、貴族とか富豪とか位祿に富み榮えたる御方々の女子教育に關してゞはない。私が茲にお話すること位は、右の御方々はとうに御承知のことであらねばならぬ。それ故これは先づ第一に御斷りをして置くのである。

扨て、此度の日露戰爭は誠に我邦未曾有の大事件であつて、國家存亡の決するところ一に此戰爭の結果に因るのである。われ〳〵は叡聖文武にまします天皇陛下の大稜威と、忠勇義烈なる我陸海軍の軍人の功勳とによりて、海に陸に連戰連勝、あの歐羅巴での大强國と、人もゆるし自分も誇る、露西亞國の海陸軍を物の見事に擊破して餘す所がない。勝敗は既に業に定まつたと云つても差問はない事と信ずる。しかし此戰爭が我邦の大勝利で終つたとして所で、われ〳〵は決して氣をゆるしてはならぬのである。今後のわれ〳〵は、勝つた國の經營を敗けた國のつもりの覺悟で以てせねばならぬのである。世俗にいふ、勝つて兜の緒をしめるといふ格言の下に働かねばならぬのである。

それに又、此度の戰爭は二十世紀の戰爭中の、初めての大戰爭であるが、しかしわれ

われは此戰爭を以て、我邦に於ける二十世紀の戰爭の終りのものと考へては、決してならぬのである。われわれは十年前の日清戰爭結末の當時、三國干渉遼東還附落着の當時、既に今日の戰爭のあるとを豫期したのではありませぬか。扨て今日の戰爭が始まつてから、其豫期した所があるにも關はらず、どの位不用意の事柄が殘つて居たか、どの位其不用意のために、今日こまつて居るか、それを現に今日目撃もし、經驗をもしつゝあるのではありませぬか。既に此度の戰爭が我邦に於ける二十世紀の戰爭の終りのもので、必ずしもなからうと思はれる以上は、われ〳〵は今日から、あらかじめ用意する所がなくてはなりませぬ大に覺悟をきめて種々の經營に從事せねばなりませぬ。

國民にかゝる用意が行屆き居り、かゝる覺悟が確乎として存ずる以上は、或は未來に戰爭は起らぬかも知れませぬ。どんな敵でも、決して其畏敬するものに向つては、戰を挑まぬからである、所謂權力の衡平は其處に保たれるからである。しかるにもしそうでなくつて、國民が徒に戰勝の熱に浮かれ、華奢に奔り、虚榮をこれ事とし、勤儉尙武の精神を痲痺し、用意を怠り覺悟を忘れるやうになれば、いつ何時、何處から敵が出て來ようも計られぬのである。これは古來歷史のわれ〳〵に敎示する所であつて、智者を待ちて後知るべき事ではない。

此のいつ何時戰爭が起つてもよい、其用意は充分してある、其の覺悟はとうからしてあるといふやうに、國民を養成して行く事は、今後我邦敎育の大方針となるべきものである。獨乙の敎育、佛國の敎育、所謂國民敎育の主義とする所は、根本的に此祖國を護る、此祖國の名譽を擧ぐる、此祖國の繁榮を期する、此等の上に建てられてある。

此大方針を國民に植え付けて行くには、先づ女子敎育から手を著けて行くのが一番早手廻しである。次代

の子孫は、現代の女子によりて產出せられ、撫育せられ、人物とせられるのである。良妻賢母は眞正なる健全なる富强なる名譽なる國家の基礎となるべきものである。

誠に、今日戰場に出て我邦の爲に戰ひ、我同胞五千萬人に其名譽、財產、生命を全うさせてくれる軍人を御覽になれ。軍人教育を特に受けた武人は暫く措いて論ぜぬとして、徵兵制度の下に出た兵卒其人は、抑も如何なる人によりて養育せられたものであるか。假りに兵卒其人の年齡を、二十歲より三十八歲までとして見ると、此等の人々は、明治元年から明治十九年頃までに生れた人々で、其母親にわたる人達は、大抵は御維新以前に生れた人達と見ねばならぬ。况して其父親にわたる人達は、其母親達よりも數年前に生れた人達であるに相違ない。この統計に據りて見ると、今日の忠勇義烈なる兵卒其人の兩親達は、御維新の大改革を目のあたり見て、自身も艱難困苦の渦中を渡り、新帝政の勃興するのを目擊すると同時に、國體の精華を知り、皇恩の偉大なるに感じ、直接間接に勤王愛國の武士道的感化を蒙つた人達であると見ねばならぬ。それ故此親達にわたる人達が、既に忠勇義烈の精神に富んで居たのである。當時は士農工商と云つて、武士の外は武人でないやうに云つた、從つて徵兵制度が布かれ、全國皆兵主義の世となつた時分には、所謂士百姓町人職人から出たものは、軍人に適さない樣にも云つた。しかし其後此制度は如何に發達したか。申すまでもなく見事に發達して、今日の整美なる軍隊となつたのである。これは國民一般に勤王愛國の精神に富んで居るからである。さうして此國民一般に勤王愛國の精神に富んで居るのは、其親達がかゝる感化を與へたからである。このありがたき親達の感化の下に、爾來小學校で受けた國民教育の感化と、自身が日清戰爭北淸戰爭等で直接間接に經驗した所とによつて、今日の兵卒其人の元氣は練り上げられて居るのである。

今後の富國强兵の策、勤王愛國の主義、勤儉尙武の風、凡てこれらは先づ家庭に於て其基礎を置くべきである。しかも其元氣は家庭の中心なる良妻賢母によつて注入せられねばならぬのである、鼓吹せられねばならぬのである。このなつかしき母より純粹なる健全なる血液を遺傳して生長すると同時に、其子女は又このなつかしき母より此大元氣此大精神を遺傳して生長せねばならぬのである。私は再び繰りかへしていふ、良妻賢母は眞正なる健全なる富强なる名譽なる國家の基礎となるべきものである。

此良妻賢母はたとえ其家は貧くとも、其家庭を純潔にし、質素勤勉、よく其良人を助けて、先づ一家の獨立を企圖する樣にせねばならぬ。一朝國家に事があつても、國家に對する一家の負擔は、少しも苦からず應じ得るだけの資格があるやうになつて居らねばならぬ。或は主人、或は家庭が、國家のために劍戟を執つて立つやうな場合があつても、其家は平常通り、びくともせぬ樣の覺悟を持たねばならぬ。よしさうはゆかずとも、其妻子は幾多の艱難を凌いで、其節操を戰場の男子と競ふやうにせねばならぬ。

世の中には自分は借金をして居ながら、義捐事業などに騷いで居る人がある。自分は亂雜きはまる家庭を持ちながら、慈善事業救世事業などに飛び廻はつて居る人もある。これはさしづめ惡い事とは云へないが丁度酒飮みの亭主を持つた妻君が、禁酒の演說をする位の滑稽はたしかにある。今後の女子はこんな事ではいかぬ。先づ内政をとゝのへ、一家を修めて、それから人樣の世話もし、慈善事業もするがよいのである。一家を治める事の出來ないやうな人間が、世間へ出て人の世話をするなどゝいふのは滑稽で、こんな事をゆるす社會は、やはり藝娼妓あがりの女子を貴婦人などゝ崇めるやうな社會と同じなのである。眞に家を愛し國を愛する女子はこんなキタナイ社會へは顏出しをせずともよいのである。立派な家庭、立派な子女を有ち、立派に國家に對する義務を盡さば、之れが女子の第一の名譽である。

この立派な家庭立派な子女をもち、立派な義務を盡さうが爲めに、女子には學問が必要であり、技藝が入用であるので、此大目的を度外視して居る女子なれば、學問技藝はむしろない方がよい。女子の淑德のないものは、如何に學者でも、如何に技藝家でも、女子の價値のないもので、むしろムダ花に近いのであるむしろ變生男兒の籍に入るべきものである。

そこで今後の女子は、此明治の聖世の、世界の歴史上殆ど無比ともいふべき聖世の、第二期の子女を養成する責任を持つて居る。此第二期の男子女子の氣慨抱負學藝操行の如何に依つては、此聖世の時運も或はどうなるかも知れぬのである。或は未來に非常な强敵が出て來て、われ〳〵をどんな目にあはせぬとも限らぬ。かう考へて見ると第二期の子女の教育は、誠に國家の大事であつて、經世家の少しも氣をゆるせぬ問題である。

此の大きな責任が、今日の女子諸君の上にある。女子諸君の充分此責任に對して盡力せらるると同時に、苟も教育家といふものは皆其心を一にして、此大効果を得させる樣にしなければならぬのである。

女子教育上男女教員の優劣利害を論ず

佛國巴里文科大學教授　ヘンリ、ンマリオ

余は女子教育に就て、先づ第一着に硏究して見なければならぬものは、男女教員其の孰れを採用すべきかと云ふ問題であらうと思ふ、詳言すれば、女子を教育するには女子を用ゆべきや、將た男子を用ゆべき

や、其の利害優劣如何と云ふ事である。

問題は中々複雑して居る、且教育問題たると同時に社會問題である、社會的に立言すれば何も六箇敷いとはない、吾人は今後女子の生計にも想到し、此生活の方法職分等を益々増殖擴張せしめなければならぬ、處で女子をして女子を教育せしむるほど能く出來るものはなからう、且是れは極めて自然的の事である、此の一事を考へて見ても凡ての議論が直に消えて了ふ、成程女子教育を單に女子にのみ托するは、教育上多少の不都合あるには相違ないが、然し社會の利害問題は、教育の利害問題の上に置かなければなるまい。

乍然小學校生徒に取りては、教育問題と社會問題がよく一致する、兒童に對しては、如何なる男教員も女教員には及ばない、北米合衆國には、小學校は多く女子の手に托して置くが、結果が中々良好である男子も亦不平反對を言はぬ、流石企業國だけあつて、男子は實業の方を教育の方よりも好んで居る、識者は多く思ふ、他國に於ても斯くの如くするに於て何の差支はないと。

然るに論者の中には、婦人は男生徒に對して、權利が尠いと云ふ者と、又兒童には寧ろ男子の氣質を授くべきであると云ふ者があるが、併し是れは六歳以上の兒童を教育する女教員に就て語るのではない。

ブレアル氏の如きは、語學の稽古の如きも、之を婦人に托する筈である、少くも小學校に於てと云ふ、氏の思ふには婦人は男教員よりも、ズット上手に通常語と實用語を教へると云ふことであるが、余も亦然か思ふ、是れは日頃余の經驗して見たいと思ふて居る所である。

然し問題外に奔らぬやうにしやう、女子教育に於ては、女子をのみ採用すべきや否やと云ふ事が問題である、然るに茲にも吾等の記憶して居らなければならぬのは、度々婦人自らが教員としては、男子に限る

男子でなければ公平にいかぬと云ふ事を言つて居る、某教員の言に『女子に對しても、女子に權利を授けてはいけません、司配權などは尙更いけません、女子は未だ權利を用ゐる癖が附いて居りません、猜忌心が深くて、それに同僚の中で、少しでも生徒に對して道義的權利でもあらうものならば、直ぐに嫉み出します、欣び賀するのが當然だのに云々』と、如何にも此言の裡には、眞理が藏せられてある、幅の利く女教員などになると、陰謀憎惡多感で氣六箇敷いことばかりして、人に對しては依怙贔負の沙汰が多く、實に困る者である、乍然責任の觀念は、婦人の氣質を非常に强めるものである、それに一番好い證據は最早や婦人として立派に其の職責を竭して居る者があることである、若も此の方針を取つたならば、今後益ゝ立派な女教員が出るであらう、余は教育の進歩と意志の鍛鍊とに基き、責任の觀念なども、益々女子の心に深くなるだらうと思ふ者である、且何事も今迄の如く男子にのみ委して、女子に適せる職責をまで奪取つて了うやうなことでは、どうして女子自身の修練が出來るであらうか。

初等教育に取り、十五歳位までは、婦人の方が却て女子を教育するに適して居ると、萬口一致していふが、高等教育になると、問題が中々六箇敷くなつて來る、男教員ならば、女子の方で尙よく聽從すると云ふ事は明かな事である、學識熱心が同等であつても、女子は男子の方を重んじて、尙一層之に耳を傾けると云ふ事も殆ど疑なき事である、是れは何の爲であるかと云ふに、男子の勢力ある所、勇氣のある所、其の語氣語勢などの凜たる所に原因するのでもあらうが、然し男女兩性自然の感應にも職由することであると云はねばならぬ、是れは女教員の男生徒を教へて居る學校に徵して見ても、其の反對の現象の顯はれるので直ぐに分ることである、一日某夫人が配下の年若き女助教員に向ひ、『アナタは男女兩生徒に教へますが、孰れが利巧で又孰れが教へ易く御座りますか』と問ふた、女教員の申すに『奥樣それは男の生徒で

すよ』、夫人之を聞て失笑した處が、年若き女教員は意味ありげに取られたのを耻ぢて、遂には泣き出して了つた、此時夫人は流石教育に熟達して居つた丈ありて、直に『御安心なさい、それは當然の事ですよ、天性斯くなくてならぬ所です、私も爾うお答へなさるだらうと思つて居りました、試に男女混合學校へ行つて御覽なさい、女の教員ならば、屹度男の生徒が、女の生徒よりも、ズット好成績ると申しませうし、男の教員ならば、イヤ女の生徒の方が優れて居ると申すでありませう、是れ天性です、女が男の贔負をし男が女に左袒のは自然の約束であります云々。』

年若き女子が男教員の教授をよろこんで受けるのは、彼の女子が知らず識らず、お化粧を凝して先生の氣に入らんことを求むるを見ても分る、勿論茲には弊害なしとは云はれぬが、然し其の弊害たるや、大ならずして、その利益に至つては爭ふ可からざるものである、就中男教員は其の教ふるに當りて、謹嚴、明正、精確、適切等凡て規則的精神を以てするが故に、往々此の精神の缺如して居る女子には萬事を賭しても與へなければならぬものである。

然し茲に一の眞面目なる難問があつて、それは輕々看過すべからざるものである、外でもない、男教員の女學校に教鞭を取る者は、多く女子に眞面目なる教育を授けず、殆と遊び半分に教へる、女子には餘り嚴格堅實なる教養を要せずと云ふ考を以て、充分の技量手腕を揮はない、立派な先生と稱せらるゝ者までが、僅少の教を垂れて以て滿足し、女子には是れ亦足れりと云ひつゝ、何事にも好い成績を與へると云ふ弊風がある、男生徒に對するときには、決して斯ることをなさぬであらうに、女生徒に對すると直ぐに心機一轉して來るのである。

これは中々急所を衝く批評であると云はねばならぬ、亦實に尠からぬ危害の在ることを指示して居る、

大に注目警戒せしむるに足ると難有く思はなければならぬ、乍併立派な教員が女子を教ふる際に當り、平穩を持し、一種の温和を示しつゝ女子の精神を餘り過激に燃さず、又競爭心を過度に煽動せぬやうに用心するのは、左程批難すべき事であらうか、寧ろ結構な事ではあるまいか。

女子は多感性の者で、何事にも餘り過激に流れるの弊がある、勉學の際にも、度々此弊に陷るから、男教員の冷靜なる者が、女子の神經を適宜に司配して、熱情で學ばぬやうに注意してやり、平穩にして健全なる教授を垂れるのは、洵に結構な事である、過度の勞苦は、女子に取つて最も有害なものであると記憶して居らなければならぬ。

處で積年の經驗に照して見るに、女教員は自分も多く神經質であるが上に、其の畜積した學問に司配されて、之を運用するの力なく、瑣末微細なる事柄を餘計にも大切になし、男教員よりもヅット苦勞性である、男教員の方は理性が感性に勝つて居る故、事の本末業の終始をよく辨へ、見識も博ければ、其の教授も廣く行屆き、特に健全なる堅實なる哲理が這入つて居るから、女教員とは到底同日の論ではない。

兎に角此の如き問題を解決するに當り、輕卒に優劣を定めてはならぬと思ふ、教育上唯一の必要な事は眞個適任の教員を認むるに在る事である、其の明確嚴正なる精神、其の權利、其の判斷力等が其の學識と並行して居る者は、實に立派な教員として見るべきである、若し此の如き資格を有する婦人あらば、亦是れ適任の教員として、大に之を觀迎すべき筈である、蓋し教員の榮譽とすべき所は、其の教ふる所の事柄に在らずして、其の教ふる方法如何に在る、又其の學科の高下や、生徒の員數の多少に在らずして、其の技量の巧拙と其の行ふ所の事業の深淺に在る、惟ふに遠き將來を待たずして、女教員も亦男教員に劣らず高尚健全なる教育を授くるに適するの日が來るであらう、其時に至らば、男女教員優劣問題は最早提供の

要なきに至るであらう。

〔をはり〕

經濟上より見たる風俗改良（下）

十五銀行頭取　園田孝吉君述

教育の弊

又教育上の弊風に就ても話して置きたい事がある。拙者は無論國民一般に教育を普及することは肝要な事と思ふて居るけれども、民力に伴はぬ教育は如何であらうか、それに就て一昨年拙者は郷里に歸つて一の實驗を得た。拙者の郷里は非常な貧村である。寒村である。多くは皆藁葺の家屋に住つて居るが、唯だ學校と避病院だけは瓦葺で立派に出來て居る。而して此瓦家に入て教育を受ける生徒はどうかといふと、勿論夏季の事ではあつたけれども、皆殆どボロ〳〵した衣服を着て、男女共總て跣足である。又其住家は如何かと云ふと、殆ど雨露を凌ぐにも足らぬ憫れな家屋に住つて居る。然るに學校を建築するには規則があつて、衛生上に適せねばならぬとか何とか喧しいので、貧村であるにも拘らず、隨分な費用を掛けて立派に建築した。けれども、此處に來る生徒が自家に居る時分には如何なる生活を爲して居るか、學校で許り喧しく衛生を論じた所が仕方のない話である。而して此學校を建築するに就て嚴しく税金を徴集するから村民は益々困窮する許りで、生徒の學問が少し上達するやうになつた時分には、生徒の家は殆ど破産して了ふと云ふ話である。いかに貴重なる教育事業も其處に至れば何の効能もない。是れ民力に伴はざる教育

は害あつて益なしと云ふ實例である。又避病院は何時建築したかと云ふと、三年許り前に出來た。拙者が歸省した時分には、丁度大風の後で、大分破損し、新たに修繕を加へざれば使用されないといふ狀態であつた。且此病院は建設後三年經つたけれども、未だ一回も使用した事がないさうだ。同地方には元來流行病が尠ないが、規則に依て建てゝ置かなければならぬので之を建築し年々修繕を加へて居ると云ふ事だ。然るに其經費は皆村民が負擔せねばならぬのだから困まる。此等の事情に依て考へて見ると、當局者は民度を計るとか、貧富を斟酌するとか云ふ注意に乏しいやうに思ふ。勿論規則通り學校病院等を作つて宜い土地も日本國中には幾干もあらうけれども、拙者の鄕里のやうな寒村では規則通り遣られては却つて堪らない。郡會議員、縣會議員等縣治に關係を有つて居る者は、何故尙一層親切に考へて吳れぬだらうか、實に困つたものであると拙者は思ふ。

學生の墮落

次に靑年學生の風儀に關して、薄志弱行と云ふことは近時能く耳にする事であるが、果して薄志弱行であるならば實に困つた譯である。鄕里を出づる時には大言壯語を吐きつゝ巧に父兄の資金を持出して來るが愈々東京に出て來て暫く經つと、都下の惡風に感染して、何時の間にか當初の石心鐵腸も破れて、甚だ宜しくない所に出入をすると云ふのは、誠に困つた事ではあるまいか。而して種々な口實を設けて父兄を欺き、學資を取寄せると云ふのは、實に不義不孝極まる譯けではあるまいか。警察抔で捕縛した者を調べて見ると、放蕩の結果警察の厄介になる學生が多數を占むるさうだ。苟くも靑年學生即ち第二の國民として重大なる任務を擔ひ、一旦志を立て學を修め、將來國家の大事に當らんとする有望の人物が事此に至る

とは、邦家の前途に對し憂慮に堪へざる次第である。之に對する矯正策は識者の大に講究すべきものではあるまいか。

國民教育の基礎

拙者の意見では、國民教育なるものは、道徳を基礎として其上に今世の西洋流儀の學問を築いて始めて完全を期すべきものと思ふ。試に英國の大學抔の氣風を見るに、専ら道徳智識兼備の人物を養成するのが其の眼目のやうである。我國が文明列國の交際場裡に入つたのは大に慶ぶべき事であるが、國民道徳の上に於て比較すれば、未だ遙かに及ばざる所がありはせぬかと窃に憂慮して居る。故に此德育の事に就ては、我爲政家並に教育家の熱心なる考慮を煩はしたいものと思ふ。

積極的經濟

以上の論議は主として消極的經濟即ち節約の點に就て述べた積りである。併し如何に節儉を行ふても、進で働らかなければ仕方がない。唯だ儉約するのみで、一方に於て資金を作ることを努めなければ、矢張喰ひ潰しと同然である。國家經濟上何の益する所はない。故に勤と儉とは毎に相伴はなければならぬ。即ち積極經濟と消極經濟と二者連れ立つて行かなければ國家の經濟は發達し難い譯である。さて此積極經濟の上より觀察して改良を加ふべきことは種々あるけれども、大體に於て此國民の多數が徒食せずに何れも自働自活すると云ふ決心を持たしむる事が肝要であらうと思ふ。例へば年々新に五十萬の人民が生れて來るとしても、其中の二十五萬人は自働自活を爲し、殘餘の二十五萬人は無職業の人民なりと假定して、之

を國家經濟の上より觀察するならば如何であらうか。兩方差引すれば結局零となつて、五十萬人は生れて來ないと同じ結果になる。一家も亦然りだ。一家十人空手なくして皆働けば其家は必ず繁昌する。又家族擧つて無職業で居るならば其家は早晩破滅せざるを得ない。平素でも此覺悟は必要であるが、今日の如き非常の場合に際しては又格別である。戰役の爲め國家の壯丁徴集せられ、勞力の缺乏を來せる場合に於ては、後に殘れる所の國民は一層奮勵して此勞力の缺乏を補ひ、以て國家の運命を保全するといふ義務を有して居る。加之莫大なる軍資の募集に應じて行かうと云ふには、唯だ儉約一遍では出來ぬ。儉約すると同時に大に勤勉するといふ事が必要である。されば國民たる者は此際平常よりも一層勤勞して、我忠勇なる陸海軍人をして後顧の憂なからしむる樣注意されたいものだ。

隱居及び徒食の弊

又經濟上是認すべからざる我國風俗上の弊害を擧ぐれば幾らもあるが、古風の隱居主義も亦確かに其一つである。自己の子息は最早立派に喰へる樣になつたから、自己は今後樂隱居で暮らすと云ふて、娘や伜の脛を噛るものもあり、又噛らぬまでも資金があるから晏眠坐食しても差支ないといふ者が多數居る。之を國家經濟の上より見る時は、誠に困まる話で、矢張喰ひ潰しと同然だ。自己が蓄へて置いた財貨を喰ふ譯なれば宜い樣なもの丶左樣でない。人間は眼球の黑い間、肢脚の利く間は、可成自己で働いて隱居とか何とか云ふ事は廢止しなければならぬ事と思ふ。又之と反對に親父が金を儲けて有福なれば、自己は如何でも宜いといふて、伜殿が飽食煖衣いつも親の脛を噛るのも一弊風だ。是れ又國家の穀潰しである。中には娘が金滿家の處へ嫁いたから、婿殿の脛を噛つて喰はふ抔といふ謬見を懷く者もあるが、此等は國家

經濟の上より見れば、寧ろ殺人罪よりも重い罪人と認められる。何故かといへば、無職業の徒は所謂國家を喰ひ倒す所の一種のバチルスに外ならぬからである。而して其弊風の及ぶ所は却々容易ならぬ事と思ふ例へば茲に俥車を輓く人と俥車に乘る人がある。輓く者は勿論下級の人民で、乘つて居る人は貴公子と見て、之を經濟上より細かに吟味したら如何であらうか。輓夫は躬ら勞して生活して居る人間で、乘客たる貴公子は親の脛を嚙つて居る人間ならば如何であらうか。鄙見を以て解すれば、此輓夫の方が遙かに上等の人物で、車に乘つて意氣揚々として居る貴公子は、何ぞ知らん國家の喰潰しであるといふ斷定を下さざるを得ない。故に吾人は可成此喰潰し人間の減少するやうに各自勤勉して事に當らなければならぬ。之は教育の振否如何にも因ることであらうが、兎に角國民たる者は各自其利害を自覺して獨立自活以て國家の厄介にならないと云ふ觀念を起さゞる已上は、所詮徒勞な話だ。今日出征の陸海軍將士が吾人に代りて艱苦を忍び、身命を拋ちて戰ひつゝあることを思へば、國内に居て汗汁流して稼ぐ位なことは何でもない事と思ふ。

園遊會夜會等の眞似被り

倘は一言を加へて置きたいのは、園遊會夜會等の改良に關することである。是等は日本人は元と西洋風を摸擬たものであらう。摸倣をするのが必ずしも惡いとは云はぬが、我國では此等會合の趣意を大に取り違へて所謂眞似被つて居りはしないかと思ふ。西洋では此等の集會は社交の爲めであつて、第一主人に敬意を表し、友人に面會して舊誼を温め、且新友を求めやうと云ふのが其目的である。拙者は在英中彼國の人人に招かれて、屢々園遊會抔に往つて見たが、食堂の混雜する事とか、又は餘興抔と云ふものは見た事が

ない。給仕の役抔は前陳の茶と同樣來客同士で互に務めるのが慣例である。而して第一に婦人を扶けて遊いて、夫れから一般に行渡つた處で、始めて男子が匙を取る。併し決して鯨飲馬食をするやうなことはない。故に別段世話人もなければ給仕も要らない。所謂給仕なる者の業務は、食卓の後方に立て食器の取次をするとか、或は酒瓶の栓を拔く位の事に止まるのである。然るに我國の宴會は如何であるか、先づ幾人と云ふ世話人が紅白の目標を付けて用事もないのに諸處に張番をして居る。立食以外に種々なる飲食店を設けて其給仕には多く醜業婦を使つてある。尙夫れでも足らぬと云ふので種々なる餘興の設備もある。皆溧と云ふて宜いか、不體裁と云ふて宜いか、如何にも言語同斷な狀態である。又立食場の混雜する光景抔は實に見物である。婦人が居やうが、誰が居やうが構つた事はない、我れ先きにと爭ふて食卓に馳せ集り、各種の肉類を皿一盃山盛りに取つて、他席を奪つても構はない仕澄顏で腰を掛けて居る。今日では最早其樣な人もあるまいが、以前はよく手巾に食物を包み、或は衣嚢に入れて歸へるといふ樣な惡風があつた。此等の不作法を歐米人の眼から見たならば、嘸抱腹絶倒に堪へぬことであらう。

西洋人は夜會園遊會等の終つた後で如何なる談論を試みるかと云ふと、多くは其時會合したる人物の評論をする。又名家抔に紹介されて面晤した場合には大に之を得意として居る。然るに其會衆中に若し世人より指彈さるゝ樣な不都合な人物が加つて居たならば、必ず不平を鳴らすと云ふ風である。之を以て見ても此等會合の目的の社交に在ると云ふ事が解かるのであるが、日本人はかゝる場合に餘り人物等の評論はしない。飲食物が吝嗇であつたとか、餘興が足らなかつたとか云ふ樣な小言許りである。詰まり口と眼とを慰むる爲めの集會が多いやうに見受けられる。而して此等の集會を催せる發起人は後で多くは惡評を被ることに極つて居るやうだ。今日は外國人との交際も益々頻繁に赴かんとする時代なれば、各種の集會宴會

をば今少しく質素にして不體裁に渉たらず、且可成會合の趣意の貫く樣に改善を加ふべき必要があると思ふ。

宴會は西洋風

又中流以上の人士の催す宴會には可成椅子卓子を用ゐて座食を廢したい。西洋風の立食なれば萬事極まりが宜い。演說等の場合には椅子卓子に限る。殊に餘興等を催す必要もなければ、費用も日本風に比して餘程減ずる方であらうと思ふ。併し當分日本風の宴會も廢し得られぬと云ふ譯ならば、拙者は夫れに就て大に希望がある。第一飲食の時間を一時間とか二時間とかに定めて貰ひたい。而して鉢肴、菓子箱、喰殘しの料理等を持歸へると云ふ樣な無益な事は禁じて、飲食物は凡て其席で喰盡される丈けの分量を調へる事に改めたい。兎角日本の宴席は萬事不規律で困まる。通常の宴會に於ては餘興抔は要らぬことであるが、若し必要の場合ありとすれば、食事後に之を催して、會食中座敷の中央を跳廻はる樣なことは廢めなくてはならぬ。又酒盃の獻酬も廢さなければならぬ。藝妓抔を給仕に使用することも無論大禁物である。

外國人と日本風の饗應

外國人を招待する時に日本室で日本食の饗應をするのを彼に取りて非常の御馳走と思ふのは大誤解である之は唯彼れの好奇心を滿足せしむる丈けの事で、我が料理抔は迚も彼等の口に適するものではない。論より證據、日本に何十年と在留した外國人でも、朝夕日本食を用ゐ、日本室に座つて居るものは恐らく一人もあるまい。況や來遊匆々の人に於ては尚更らの事である。一體外國人は多衆人の前に於て靴を脫ぐこと

をば、大失禮、大不敬として居る。新來の婦人抔は嘸嫌がるであらう。啻に嫌がる許りではない、寒中には直ぐ感冒を起すに極つて居る。且西洋人は木炭の火が大嫌である。自殺をする時は室房を密閉して木炭をドン〳〵焚て置くときは、自然と自殺が出來ると云ふて居る位のものである。然れば多數の外國人に表向き馳走するときには、矢張西洋風にして食事後に餘興を見せる樣にする方が宜からうと思ふ。而して好奇心を滿さしむる爲めには、內々で何處かに案內すると云ふ風に改めたら便利であるまいか。

風俗改良

苟くも我國が文明國の伍伴に入つた以上は、內外人の交際は今後益々頻繁となるべき故に、風俗上改善を加へねばならぬ事が種々ある。禮儀作法の如きも彼我正反對に出づる事が少なくない。又我國民の言行にして、吾人同胞すら尙聞くに堪へず、見るに忍びざる事も多い。此等は他日更に述ぶる事として、爰に早速改めて行かんければならぬのは時間の事である。兎角日本人は時間に頓着せぬ。時間で人を欺くのは何とも思はない。之に反して外國人は之を守ることが非常に嚴重である。所謂時は金なりとの金言を能く勵行して居る。然れば此一事の爲めでも彼我交際上容易ならざる故障となり、我國民の經濟上尠なからざる損害を被るに相違ない。故に之は是非共嚴重に守るやう同胞諸君に對つて呉々も希望せざるを得ないのである。

（終り）

史談

高山盈子の生涯（續）

文事秘書官　工藤一記

初め刀自の仙臺師範學校に聘せらるゝや、教諭にして女子部の舎監をさへ兼ねられしは、前にもいひし如くなるが、それまで學習院などに在りしときは、其の職只だ我が專掌せる藝術をのみ教授するに止り未だ生徒の全身に對ひて薫陶の功を施すこと能はざりしに、今は舎監に任ぜられたれば、始めて其の胸中に縕蓄せる教育主義を發揮すべき機會を得たり、其の成績の大なりしも亦宜なりといふべし、抑も刀自の教育主義とは、各生徒をして女子天然の職分を實際に盡すべき德性材能を養成するに在り、されば其の心に以爲らく、「日用常行に切ならざる學問技藝の如きは、先づ斯の質ありて而る後に之を文飾するが爲め、又は其の執るべき特別の職業の爲めにこそ學ぶべけれ、そもそも夫の高尙なる學藝の如きは、本と己れが知らざる所なり、たゞ女子普通の本分に對する品性の陶冶に至りては、身の經驗によりて聊か得たる所なきにしもあらざれば、希くば少しく之を試むることを得ん」と、此くて先づ該校女生徒の風習を察するに、矢張りその頃ありふれたるさまにて、男生徒のそれと同じく、只だ教場の課業にして良好なれば、それにて足れりとし、復た其他を顧

みさる趣向ありしかば、「若し此の儘にて進みたらんには、よし學術技藝の相當に熟達し、卒業の後、教鞭を執るには差支へなきにもせよ、肝腎なる女子の特色と認むべき性質才能に至りては、殆ど観るに足るものなからんとす、假りに此等の女子は一生教員にて終るとして、其の身の事はそれにて濟むとするも、他日此等の女子に教へを受くべき可憐の女兒等に至りては、生長の後、家婦ともなり家母ともなるべきものなるに、それ等の道を盡すべきことをも知らざる、いはゞ偏僻なる女子の感化を受けんには、形の如き氣風自づから稚兒の脳底に染み渡り、其の弊害の及ぶ所實に測るべからざるものあらん、いでや此の趣向を改めんず」とて、刀自が寄宿舍に入り込むと同時に、茲に夫の女子部教育革新の端緒をぞ開きたる。

かくて刀自は、各生徒をして室内机上の整頓、衣裳傘履の收藏拂拭等を始めとして、凡そ舍の内外の洒掃、食物の調理、器皿の出納、膳案の薦徹等、一々其の方法儀式を授け、或は交番に或は協同に之をなして其の事に慣れしめ、此の外頭髪の結束、服裝の脫着、應對進退の節に至るまで、之を實地に習はしめずといふことなし、去れば兼ねて讀書作文等を無上の能事とし、何となく男書生の風に感染して、動もすれば放肆粗野に流れんとする生徒どもの事とて刀自が眞意のある處をば知るよしもなく、其の事の煩瑣猥雜にして、多くは下婢の爲すべき業なるを厭ふものから、彼に此くとつぶやく聲の聞えざるにもあらざりしを、刀自は「縱令幾多の婢僕を使ふ程の者にても、自から其の使令する事に暗練せざれば、其の甘苦緩急を察知して、程克く之を御すること能はじとて、毫も顧みることなく、却つて其の蒙蔽を憐みて、益々之を開導せんことを勉めたり、併しながら刀自の人を率ゐるや、只だ躬づから其の事を行ひ、以て其の模範を示すのみにて、徒らに口舌を以て之を引達せんとするにあらず、然れども人終に其の至誠勤勉に感じて自然に之に服するに至るなり、

德の流行すること郵を置きて命を傳ふるよりも速なりとか、其成績の著しきこと驚くばかりなりき、茲に、事至りて雅ならざれども、之が一例を擧げん、初め刀自の寄宿舍に臨むや、其の便所の甚だ不潔にして殆ど堪へ難きまでなりしが、誰が汚したるかは、固より辨くよしもなきに、之を直さんには人々をして之を刷拭するの如何程可厭くして、其の淸潔なるの如何程可欲きかを知らしむるに若くはなしと思惟し、さて自から卒先して、甲斐々々しく之を洗ひ淸めしかば、生徒も顏を顰めながら、勢ひ之に效はざるを得ず、かくて幾人宛か順番を立て、更る〳〵之に當らしむる事としたりしに、未だ一順を畢らざるに、もはや拂拭の必要だになき程に至りしといふ、便所すら猶然り、況んや其他をや、其の頃、學事視察の爲めに出張せられし辻文部書記官などは、鏡の如くふき上げたりける寄宿舍の廊下を、其の本來の構造に隨ひて、「沓のまゝに」といはれしに、「これはこれは」とて爪立てゝ歩まれたりしとなん。

右は洒掃に關する事なるが、此の外生徒の進退容止を始めとして、舍中一切の事物皆好く修整したりしかば、元來其の建築器具等の粗野なる寄宿舍生活にてありながら、さすがに閑雅優美なる趣を備へたりとぞ、抑もこれらは概ね外面の事にして、嚮に所謂煩瑣猥雜なるものなれども、此の煩瑣猥雜なるものこそ、實に刀自が其の高大なる敎育上の效果を收めたる林叢なりけれ。

顧ふに天下の事物、一々に看來れば孰れか煩瑣猥雜にあらざらん、唯だ之を治むれば則ち文明の域に進み、之を忽にすればいつまでも鄙陋の境に止まるを免れざるのみ、是の故に、此の煩瑣猥雜なるものを舍きては、天下復た爲すべきの事なし、凡そ人物の高下才識の優劣、畢竟之を能くすると否とに因りて定まるなり、漢の名臣陳平が其の微賤なりし時、居村の祭禮の折りに取扱はせられし供物の配り方の善かりしとて、父老より褒められしに、平をして天下を宰かしめば亦此の肉の如くならんと戲むれしが、

後果して佐命の元勳と仰がるゝに至れり、刀自が器量の程も亦た此等の事に因りて推測するを得べし

倘は其の無形上の成績を傳へ聞くに、感ずべき節々いと多かり、先づ生徒等が其師に親しめることは、所謂「中心悦んで誠に服す」といふありさまにて、萬事之に倣ふ趣きは、恰も群雛の母雞を逐ひ、飲啄歩趨一に其の爲す所を視るが如し、又た生徒等の互に睦み合へることは、實の姉妹にもまさりしとなり、同じく一師を尊奉して彼れ此れ輔け導き、夫の「君は川流を汲め我は薪を拾はん」と詠はれし、淡窓が宜園の書生のそれならねど、日夜朝暮、前に擧げたる如き樣々の事を共にして、年月を重ぬることなれば、其の交情の暖かなることも亦宜なりといふべし孔子が「朋あり遠方より來たる亦樂しからず乎」といはれしも、此等の味ひを示されけんと覺えていとゆかし。

さて生徒の信從することと已に斯の如くなりければ、之を東にするも之を西にするも、唯々刀自が赴けんと欲するまゝなりしが、由來刀自の人を導くは前にもいへるが如く其の行と事とを以て之を示すのみにて、口舌を用ゐることいと稀なれど、もし偶々訓戒を與へらるゝことあるときは、句々歷練より來り言言肺腑より出づるものから、辭簡なれども入ること深く、皆眷々服膺して終身之を失はざらんことを期せり、夫の順風に駛する舟の舵操りが、よく其の機をはかりて微に之を動かし、以て其の方向を左右するに似たり、彼の「憤へざれば啓へず悱らざれば發かず」といへる孔子が敎育上の眞訣を、いしくも會得せられしものかな。

學記といふ古き敎育書に、「類を知りて通達し强立して反らず此れ之を大成と謂ふ」といへることあり、凡そ生徒の物を學ぶに、初め先づ先覺者の爲す所に倣ひて、勉めて之を反覆するときは、やがて其の事を能くするに至るべし、然れども、こは徒だ其の倣へることを其の儘に摸するのみにて、未だ之を他に應用することを得ざるなり、たとへば、手習兒の手

本に臨みてよく之を習ひ込みし後、謹みて清書するときは、其の清書のみはよく手本に似れども、もし任意に他の文字を書かしむるときは、拙劣にして言ふに足らざるが如し、此くて年月を累ぬるに隨ひ、漸く成熟の境に近づくときは、未だ習はざる文字にても、已に習ひ覺えたる他字の筆畫より類推し、己が工夫に頼りて書きても、亦よく其の手本に似るに至るものなり、此の如きを「一類を知りて通達す」といふ、是れ亦一段の進歩なれども、只だ此れのみにして止まるときは、もし少しにても師の教を守る心に油斷を生じ、又は他の違ひたる手本に目移りなどすることあれば、その手ぶりいつしか崩れて、遂には復た元の拙劣に返りゆくことあるべし、されば尙ほ彌が上に學習の功を積みて、手に入ること愈よ深くなるときは、手筋堅く定まりて、もはや如何なる外誘に偶ふとも復た變動せざるに至るべし、此の如きを「强立して反らず」とはいふなり、凡そ學問の道此の境に至るときは、全く成功せるものといふべし、故に之を「大成」とはいふなり。

刀自が此の師範學校にて預かりし生徒は、皆任學期限三年宛にして、さほど長きにあらざれども、其の品性陶冶の成績より視れば、殆ど大成に至らしめしといふとも可なる程なりき、彼等の性情皆已に順良となり、彼等の操行皆已に堅固となり、彼等の態度皆已に閑雅となり、彼等の技藝皆已に精巧となり、其の己を責むることは皆已に重く、其の人を待つことは皆已に厚きに至りき、是れ獨り寄宿舍にて刀自が監督の下にあるとき然りしのみならず、何處に之きても、何時まで經ちても、決して替はることなかりしなり、其の模樣の一斑を聞きしに、彼等が日曜などに家に歸省せる時、其の家に偶々脱ぎ棄てたる衣服、取りちらしたる器具、さては内外の掃除の行屆かざることなどあらんには、そを等閑に看過すこと能はず、一々收藏刷拭し、物各々其の所を得るに至りて止む、さればとて奴婢弟妹を責むるにあらず、甲斐々々しく起ちて自から之を爲し、時として

はあたら休暇日を此等の事のみにて暮らすこともあり、然れども其の色愉々然として何となく樂しむ所あるものに似たり、されば曾々堂房の清麗なるのみならず、藹然たる和氣其の家に滿るに至れるにぞ、父母之を歡ぶこと限りなし「さるにても彼が昔日の振舞と打つてかはりたるはそも如何に」など怪みしが、已にして高山先生の薫陶此の如くなるを知るに及びて、感歎すること大方ならず、曾て「學問は我が娘をして小理屈を覺え生意氣を言はしむるものぞと思へども、時世の風潮、立身の階梯なれば、此れも亦已むを得じと諦め居りしに、何の幸ひ歟、今斯かる先生に遇うて、花實兼ね收むべき女德養成の教法に與かるを得んとは」とて、此處にも、彼處にも、稱讃の聲絶えざりしといふ。

かくて此の生徒等の品性技能は、其の家庭に於て顯はれたりしのみならず、卒業後に奉職せる學校に於ても顯はれ、婚嫁せし先きの室家に於ても顯はれ、到る處にてもてはやされければ、其の影響の大なること推して知るべし、水を飲みて源を思ふは人情の自然なれば、之につけても刀自が名聲益す地方に騷がしかりしとなん。

已にして明治二十七年に至り、刀自が其職を辭して仙臺を去らんとするや、直接に刀自の薫陶を受けしものは更にもいはず、遠近傳へ聞くもの、之を惜まざるはなかりき、首途の日、男女の師範學校の職員生徒等を始め、刀自を仙臺停車場に送るもの、いと夥しかりし中に、女生徒等は別に一隊をなして、教官に引率せられ、やがて驛壇に整列したりしが、節度嚴肅にして擅まに行伍を離るゝことをゆるされず、刀自に近づきて別離の辭さへ叙ることを得ざりける心の程ぞやるせなき、既にして時刻愈よ迫り、鈴子嘶き滊笛吼へ、鐵輪轆りて滊車進む、此の咋迷き彼時遲き、今まで靜に佇立したりける那の乙女子等が、はや其の情にや堪へかねけん、一度にワッと叫ぶよと見るまに、紀律も危險もあらばこそ、ばらばらと驅け寄りて刀自の車に群り附きたり、駭く車

子悦つる御者、やつとの事に其の運轉を止めたりしに、窓を挙るもあれば扉を啓くもあり、遂に十數人車内に然入して、彌が上に刀自に纏はり付きたり、驛吏之を制し刀自亦喩せども、聽かず、乃ち止むを得ずして、彼等の乘りたるまゝに發車したりき、やがて白川の驛に着きければ、ともかくもとて刀自は生徒を伴ひて此に下車し、其の夜一宿して徐に之を慰諭せしかば、翌日に至りて僅かに袂を分つことを得たり。

其の後、互の消息常に絶えざりしが、刀自が歿せられしとき彼等のなげきはいかなりけん、總代の者仙臺より遙々と出來りて、其の葬に會せしに、染井の式場に於て柩に對ひ誄辭を述べたる時は、滿場幾千人の會葬者をして座に腸を絞らしめたり、其の仙臺に歸るや、彼所にて、當時の教子等を始め、直接間接の知人達許多相會して、盛大なる祭祀を營みたりしに、時の女子師範學校長は、特に其の大講堂を以て祭場にあつることを許されきといふ。

奥羽の婦人

介洞主人稿

原田大膳の妻（三）

我邦に數多き勇婦の中にも身に甲冑を帶して千軍萬馬の間に往來し敵の勇士と引組で其首を取つたのは彼の旭將軍木曾義仲の愛妾巴御前を第一に數へることであるが今其にも劣らぬ勇婦と云ふは原田大膳の妻女である、大膳は羽州山形の城主最上出羽守義光の武將で當時に勇名高き者であるが其夫人は又夫に勝るとも劣らぬ非凡の勇婦で力飽迄強く長刀を能く使ひ最も馬上の達者である、勇將の下に弱卒なしと云ふ如く其侍女にも亦二人の勇婦がありまして右の原田夫人は戰場に臨む毎にいつも此の主に劣らぬ女勇士を左右に從へ駒の首を揃へて敵陣へ乘込み縱橫無盡に驅散す其進退迅速にして三面六臂の女神が天降りしかと疑はるゝばかりでありました、抑も此の夫大膳の住居せる岩崎の城といへるは小野寺義道と

云へる人の持城であつたのを大膳が攻取りましたものであるから義道は之を無念に思ひ文祿四年これを取返さんと三千人を率ゐて逆襲しました、其時大膳には敵を城下へ近づけては合戰難儀と心得ましたから自ら手勢を以て途中水瀨川の沿岸に於て迎ひ戰ひましたが敵は何樣先度敗戰の恥辱を雪がんと必死を極めて戰ふに土地の案内は知つたり人數は大勢なれば大膳遂に敗けて水瀨川の岸邊に追詰められましたゆゑ據ろなく馬を乘捨て川を渡り擊漏されたる兵士數人に防ぎ矢射させ若しや援兵の來ることもやと暫く支へて居りました、是より先き味方敗軍の注進岩崎城へ屆きましたにより夫人には城内に留守せし兵と戰場より歸り來れる手負とを廣庭に喚び入れ酒瓶を並べて自ら酌して之を飮ませ扨いへるは我夫大膳殿には寄手に圍まれ生死の程もさだかならずと聞けば女ながらも自身馳向ひ生きておはすならば重圍の中より救ひまゐらせなむ、若しまた討れたまひしならば花々敷弔ひ戰して討死なし三途の川に追ひ付きまゐらせん御身たち心あらば自らを死出の山路に案内せずやとありました。最前より數盃の酒を傾けて勇氣百倍せる兵士どもは此の一言に勵まされ矢疵太刀創より流るゝ血潮を吸ひ其痛をさへ忘れて奧方の仰せ道理なり誰とて違背仕るべき早々御供仕らん御仕度よくば直に御出馬あらせ給へと一同勇み立ます、此有樣に夫人も大に滿足されまして健氣にも申すものかなさらば一時も早くせんと嗜なみの鎧冑に身を固め日頃覺えの大長刀を小脇に掻ひ込み秘藏の馬に打のり同じ出で立なる二人の侍女を左右に從へ二百餘人の兵士を馬の前後に引き具して疾風の如く水瀨川へ乘付ました。此時迄大膳はいまだ討死せず猶多勢の敵を相手に血戰して居りますのを見て夫人は遙に聲をかけ我夫には勇ましくも見え給ふものかな併し先刻よりの合戰にさぞかし疲れたまひしならむ妾代りて戰はんにあなたに休らひ給ひかしと會釋なし扨大音あげてこれこそは當手の大將原田大膳が妻なるぞ相手に取りて不足はあるまじ我と思はん

者は近寄りて我長刀を受けて見よやと呼はりつゝ勝ち誇りたる小野寺勢の眞只中に切て入り例の長刀を水車の如く振り廻はし前後に當り左右に開きさながら鬼神の荒れたる如く働きました。此の有様に敵は氣を呑まれあれ〳〵と叫びつゝ右往左往に遁げまどひ中を開て遁します、敵の勇將黒澤和泉は之を見て拙き味方の振舞かな唯一人の女に恐れて遁ぐると云ふ法やあると罵り勵まし槍をひねつて衝てかゝる夫人はやさしき敵の振舞やと莞爾と笑ひ大長刀を取り直し二三合鬪ひましたが忽ち槍を捲き落し大刀を拔んとする所をツト寄せて水もたまらず斬て落し是と同時に二人の侍女も黒澤の從者を前後に斬り捨てました。味方は之に氣を得て敵兵を追ひ擊つに義道は散々に敗北し横手をさして引き退く、大勝は程能く敵を追捨て馬を返し味方の勝利を打喜び夫人の身をいたはり兵士の働を賞し夫妻轡を並べて徐々と岩崎へ凱旋しました。若し此日の合戰に此の妻女がなかつたならば大勝は必定討死するのであつたに妻女の武勇によりて九死に一生を得たるにより是ぞ實に巴御前の再生であらうと其頃世人が大に稱讃したと云ふことであります。

貞女一對

望月光子

道德は一定不變のものにあらねば、倫理思想も時勢につれて變動するは異むに足らねど、さりとて、他の長所を見て我が佳所を顧みず、隣の庭の牡丹の美を愛して我が庭なる芍藥を捨つるが如きは好ましき事にあらず、されば、或る一派の人々が唱へらるゝ未亡人再婚說も、今時に於ける說として、將又そを行ふ人の心如何に依りては、決して否難すべきことにあらねど、斯かる說さへ唱道さるゝ時に於て古に在りし貞婦の事を記述するも、亦强ち無用の事にはあらざらん、况てや、必ずしも斯くあれかしとて記するにもあらで、斯かる人もありしとの意に過ぎねば、よし古めかしき嫌はありとも、文金の美を忘れ

ざる人もあるべしとて、和漢の貞女の似寄りたるもの一對を擇んで左に記しつ。

細川忠興の内室

細川越中守忠興は本姓長岡氏なり、豐臣秀吉に仕ひ羽柴氏を賜はりしかば、羽柴越中守とも稱せしが、豐臣太閤薨去の後細川に改む、而して其の内室は、今尚三歳の兒童にも亂臣賊子を以て呼ばるゝ明智日向守光秀が息女なり。

光秀二女あり、一人は織田七兵衛平信澄に嫁し、一人は即ち此の忠興の室なり、父光秀信長に背きて亂を起せし時は、家臣一色惣右衛門に伴はれて、丹波國山中三戸野に落行き、竊に世を忍びて在りしと云へり。されば、如何なる因縁のありしかは知れねど秀吉に仕へて羽柴の氏まで賜はりたる忠興が、光秀の騷亂後に、其の女を容れて室となすべくもあらず一說に、光秀未信長に仕へ居し節、忠興聟となりしものと云へば、或は眞か。

そはともあれ、如何に勝てば官軍敗くれば賊の亂世とは云へ、主信長を本能寺に弑して賊子の譏をかひ、又不運にして三日天下の嘲を遺して誅せられし光秀を父と戴くこの婦人が、如何にして美名を後世に垂れ、婦女の龜鑑と仰がるゝに至りしかを尋ぬるに、時は慶長五年の秋、石田三成秀頼の命と稱して、西國の諸侯に檄して兵を揚げ、最に上杉景勝を討たんとて諸軍を將えて東下せる家康を、後より軍をさしむけ、上杉と挾み擊にして亡ぼさんものと謀りしが、此時東西諸侯の妻子は多く大坂に居しものから、三成これを人質として城中に入れんと謀り、細川忠興は東方に屬し、家康の軍に在るを以て、先づ使を遣はして内室城中へ入らるべき由を告げしに、留守居の家老、稻留伊賀、河北石見、小笠原勝齋等は大に驚き、再三斷を述べしかども承引なく、軍勢をも差向けて是非に城中へ取り入れんとの風聞なりしかば、家老の面々熟議をこらし、如何にしても奥方を城中へ入るゝは本意ならねば、何處方へなりとも誘ひ奉り、世間の態を見合はするに如かずと議决して、そ

の趣を室家へ申し通じけるに、內室には、婦は夫に從ふ習なるに、自忠興の屋敷を預り居ながら、良人の下知もなきに子供を捨てヽ何方へ立ち忍び、親子夫婦の恥をさらさんこと、後難を如何にせん、さりとて、人質として城中へ捕はれんは、いよ〳〵厭はしき事なれば、若し兵共の來らば、玆處にてともかくもなりて、良人忠興の忠節を勵まさんと申されける故、心ある者は其の志に感じて、曩に殿の御下向の時も、後にて萬一の事などあらば、必ず恥辱をうけぬやうにと、篤と仰せられし事もあり、よくこそさはのたまひつれと、傷はしながら稱へけるが、中には俄に同せざる者もありけり。

然るに、稻留伊賀は元來物に臆する性質の者とて、敵來らざる前に色を損じて、今若し敵兵押寄せ來らば如何にせん、はや來るに間もあるまじ、我等は出向つて防がんとて門外さして出で行きしかば、內室はそを見送り、淺間しき者の心ばへやと笑を含みて云ひけるは、我は女の身にはあれど、命を惜みて決することなくば、如何なる憂き目にあひて良人や子供へ恥辱を與へ、猶又亡父明智殿の御名を汚さんも知るべからず、弓矢取りの家に生れては、今に初めぬ事ながら、節義を守りて死するが習慣、女なりとて心は些も男に變る事なしとて、守り刀を拔き放ち、心もとに突立てんとせしが、良人忠興や子與一郎の事を思ひ出でけん、東の空を詠めやり、名殘惜しげの樣なりしが、男も女も未練は恥辱と覺悟を決め、遂に我が懷劍に伏して見事玉の緒の長かるべき命を節義に縮めぬ。

川北石見、小笠原勝齋の兩人は、內室のこの潔き樣を見屆けて死骸を收め、四邊の調度など取り重ね、館に火を放ち、押並んで腹かき切り、局、女房も、後れはせじと跡を慕ひて、猛火の中に入りし者四五人ありしが、彼の臆病者の稻留伊賀と忠興の嫡子の嫁は此の場を立遁れて後人の笑を招きしぞ淺間しき又忠興の室在世の節、秀吉猿樂を好み、興行して諸侯の夫人に見物せよとの上意ありし時、天下諸侯の

妻女多くは命に應じて出で、見物せしが、忠興の室のみは、不倶戴天の父の敵仇を眼前に見ながら討たざるは、よし主君なりとて、將又如何に女なりとて、忍ばるべき事にあらねば、所勞と申し出でざるには如かずとて、遂に觀者の列に加はらざりしとぞ、さもあるべき事ながらまた氣慨ある婦人と謂ふべし。

想ふに、大酒家の子必しも飲酒家にあらず、賊子の子必しも破倫者にあらず、時に或は異例あり、反對の現象を呈することなきにしもあらず、この細川忠興の室、或は漢の孝平皇后の如きは適この異數を證するに足るものなるなからんや、而して此等異數の人、素より其の天稟の性にも依るべしといへども、世に父子孫曾相續ぎ相うけて其の弊を敢てし不善を遂行する者尠きを以て見れば、一は父母の行に鑑み自ら省み自ら制抑するに因るところなからんか、果して然らは不義の臣に貞烈の節女あるも、木に緣て魚を求むるの緣遠き事にもあらず、從て深く異むにも足らざるべし。

而して、忠興の内室を以て漢の孝平皇后に比するに其の事に於ては異りたる處なきにあらねど、共に不義の亂臣を父とし、潔き貞烈の行似し處尠からねば、この對として左に聊か記述せん。

孝平皇后

漢の孝平皇后は、孝平皇帝の后、安漢公王莽が息女なり。容貌端麗、心情温雅、才色兼ね備へて、稀に見る處の婦人なりけり。はじめ孝平皇帝幼にして位につき給ひしかば、王莽は外戚の故を以て帝の御うしろみとなり、天下の政權を心のまゝに統べ居けるが、席温まるにつれて座を起つに懶き小人の常とて、竊に帝位を奪はんとの密謀をこらし、先づ九歳なる我が娘を上げて皇后となし、其の後十年餘を過ぎて皇帝を毒害し、終に自帝位にのぼりぬ。されば皇后は、まだ年若きにもかゝはらず、皇太后と申しけるが、朝夕御氣色晴れやかならず、垂籠めてのみ居給へば、王莽も我が子ながら深く心をおきて、私に恥かしく又悲しき事に思ひ、如何にもして心を移

させんものと計り、皇太后の名を黄室主と改め、立國將軍孫建が嗣子を聟に擇びて、華やかに裝束させ、醫者をさへ添へて后の處へ遣はし、御容體を伺はせしかば、皇后はいと安からず思召て左右の御答もなく、たゞ皇帝をのみ慕はせられ其後はいよ〳〵深く垂籠めて御座せしかば、王莽も詮方なく、他に思案の浮ばぬを恨み居けり。

其後時移り物變りて、又後漢のいくさ起り、王莽は打負けて捕はれの身となり、內裏は燒かれ、未央宮に火の移りし時、皇后は我何の面目ありて、また漢家の人に見えんとて、火焰の中に身を投じて亡しくなり給ひけるが、此時御年僅二十八ばかりなりしとのことなり。

王莽叛逆を謀らず帝の政を補佐してあらんには、外戚の親を以て、將又皇后の父を以て、位高く勢盛に美しく終を全うすることを得べかりしならんに、一人の娘を犧牲に供して帝位を覬覦せしは、慘とや言ふべき、酷とや謂ふべき。されば彼れが終に漢家の者に亡されたるは自ら招きし禍とて當に然るべき事なれど、孝平皇后の其父の行に傚はず、欲する處として得られざる事なき身に在りながら清節を持して亂れざりしは眞に貴むべきの事にあらずや。

○息君夫人

古へ息君の夫人は其姓傳はらず楚王の息の國を破りて其君夫婦をとり來り君には門を守らせて夫人を宮中に入れたり或時楚王の出遊び給へる暇に夫人竊に息君に逢ひて宣はく人の生かならず一度は死ぬべしなど斯く無情て自ら苦しまん我寸時も君を忘れ參らせねば更に契を變る事侍らじ生きて此世に隔りなんよりは死して黄泉に待ち奉らんとて詩を詠じて曰く生きては則ねやを異にすとも死しては則墓を同じうせん君誠あらざる事あらば死なんこと明らけき日の如しと日をかけて其志を誓へるなり君押止め給ひけれども終に自害して死せり君も遲れじと續き共に空しくなり給ひけり楚王夫人の節義にめでゝ共に諸侯の禮にて合せ葬り同穴の志を遂げさしめ給へり。

漢文講義

學藝

節女阿正傳（續）

阿井笛村

義母方覺其不在祠之隣、隣曰、近久不見二姐也、歸家周搜遇流血淋漓大驚、嘉右時他適、聞變馳至、得遺書於傍、其一遺義父母、曰兒初喪爺孃、乃蒙覆育、恩不啻海山、今般婚事、已利父母、又利諸親、宜速奉命、獨奈初許嫁二郎、近聞其生業漸落、乘此時變適他、獨享富貴、是妾違遺言而負二郎也、使妾不違不負焉、則不孝於父母矣、妾身遭此罹、唯有一死、奉事不終、多罪萬恕、其一以遺長二、曰妾身許郎君、不更須言、近乃遭勸適勝浦、納幣有日、妾不任悲愴、昨託人欵說、一切不聽、所託之人、亦反來勸妾、無復有一人賛妾適郎君者也、妾於是殊覺郎君可痛也、饒使妾遂成不義之婚、身披錦繡、口飽肥甘、獨何面目見人乎、義父謂妾與郎君

通慇懃、亦宜然之疑矣、然實未嘗伸一夕之情、郎君所知也、特思許嫁義重、又欲有辭於逝者、思彼念此、萬愁纏心、所以自殘、冀見憐祭、嘉右憮然、萬助至見其屍竊罵曰執拗女子、自造罪孽、豈能成佛哉、遂告之善次、善次懼禍欵以狂疾聞賄郡宰事得寢、不問實享和辛酉十一月也、物論囂然、而莫敢上聞、其後十有八年、本藩儒臣竹田器甫、嘗因臨館賦詩、以節女詞命題、自賦長韵、悉敘其事、藩侯閲詩心異之、因密詢中外、侯生母賢而有惠、其所隷小婢赤間人也、呼而近之、訪得其實、語之於侯、侯遣吏廉問、遂奪兩村長職、追給當時郡宰以下、黜罰有差、賜節女家白金、使存邺以旌之云、

外史氏曰、嗚呼烈矣哉、阿正之爲其夫也、而推爲心亦可憐矣、彼其生長荒山破驛間、何所見聞、而其辨榮辱之分如是其明、何哉、蓋亦有不忍也歟、余多閲都邑婦女、爭託身富貴、以貧爲耻、相聚而語曰、某適某公矣、某嫁某君矣、或曰、某當適某、改醮於某、轉禍爲福矣、嘖嘖然艷羨其榮、而至結髮偕老之情槩乎不省、至與娼妓同見而不自知其爲辱也、婦女猶可恕也、乃鬚眉戟張、豪傑自許、而有愧於茜裙荊釵之人者多矣、則何尤於邑人以阿正爲顚倒也、男之委質與女之笄字也等耳、余嘗撿筑紫野乘近古雲擾之際、武夫健將、朝事立花、暮歸大友者、比々皆是、甚則觀其旗幟精彩、以卜去就、視去其君如驛舍、

然、噫何其無情也、故夫所謂忠臣無他有情於其君也、孝子有情於其父也、而節婦有情於其夫也、唯夫有情是以不忍以其不忍故能自忍於死生之際焉耳、余烈其節而悲其情作阿正傳

義母方覺其不在詢之隣々曰近久不見二姐也＝義母（お正の義理ある母）が其の時お正の在なくなつたのを心付て之を隣に詢ねました處隣の人の曰ふには近ごろ久らく二姐（二番目の娘さんと云ふことお正は次女なる故斯く云ふ）に御目に掛りませんとの事そこで歸家周搜遇流血淋漓大驚＝家に歸て來て周ねく彼方此方と搜す中に炭部屋の中で血が淋漓流れて死んで居るのを見出しまして非常に驚きました嘉右時他適聞變馳至＝嘉右衛門は其時恰ど他へ適て居ましたが變を聞て馳て歸て來ました得遺書二於傍其一以遺義父母＝然る處遺書二通をお正の死體の傍で得ました其一通は義理ある父母に遺るのであります其の辭に兒初喪爺孃乃蒙覆育恩不啻海山＝兒事幼少の時に爺孃を喪ひまして御二人樣の覆育を蒙けました其御恩は海共山共譬へ樣はありませぬ就ては今般婚事已利父母又利諸親宜速奉命＝今般の婚事は父上母上のお利にもなりまするし又諸親類の方々のお利にもなるとの事でありますゆゑ宜しく速かに奉命はづでございますが獨奈初許可二郎近聞其生業漸落乘此時變適他獨享富貴是妾違遺言而負二郎也＝獨致方のない事は最初に長二郎殿に許嫁して置ながら近ごろ其生業が漸落目に成たと云ふことを聞て此時に乘で約束を變へて外に嫁に適て獨りで富貴を享くるのは是は取りも直さず妾が一つには亡き父上の遺言に違ひ二つには長二郎殿に負くわけであります使妾不違不負焉則不孝於父母矣妾身遭此羅唯有一死奉事不終多罪萬恕＝されば云て妾が遺言にも違はず長二郎殿にも負かず自分の意地を立て通せば父上母上に對して不孝となります實に妾の身はか樣な羅

の場合に出逢たのでありますから唯一の死ぬと云ふ事の外には何の仕方もありませぬ兩親に奉申すとを終ずに死にますのは誠に多罪事ではありますけれども萬ぞく〳〵お恕しなされて下さいましと云ふ意味でありますその又一つは長二郎に遺るのでありまして其辭に妾身許郎君不須更言近乃遭勸適勝浦納幣有日妾不任悲愴‖妾の身を郎君に許してある事は今更に云ふを待たぬ事でありますす然るに近ごろ勝浦村に適する樣にと勸め遭れまして納幣の日までも既に極りました妾は實に悲愴に任へませぬ昨托人欵說一切不聽所托之人亦反來勸妾無復有一人賛適郎君者也妾於是殊覺郎君之可痛也‖それ故昨日も人に托んで欵ごろに說してもらいましたけれども一切聽入れてくれませぬのみならず其托んだ人すら亦反つて妾の所に來て勝浦村の方に適くのを勸める位で誰一人郎君に適くのを賛成する者がありませぬ妾は於是殊更郎君を可痛いと覺ふのであります饒使妾遂成不義之婚身披錦繡口飽肥甘獨何面目見人乎‖饒ひ妾が不義の婚姻を爲まして身には錦繡を披口には肥甘を食べ飽きましようとも獨り何の面目があつて人に見れましようか義父謂妾與郎君通慇懃亦宜然之疑矣然未嘗伸一夕之情郎君所知也‖義父の謂すには妾が郎君と慇懃を通じて居るだろうと是は一應宜然なる疑ではあります併し未嘗つひに一夕の情を伸べたこともないのは郎君も御存じの通であります特思許嫁義重又欲有辭於逝者思彼念此萬愁纏心所自殘冀見憐察‖特妾は許嫁の義理の重いことを思ひ又逝者に辭の濟む樣に欲いと彼を思ひ此を念ひまして萬の愁が心に纏ひてやるせがなくなりました故に、自害をする次第であります冀ぞ憐と思ふてお察し下さいましと云ふ意味が書てありました嘉右憮然‖嘉右衛門は憮然してしまひまして（憮然は失意のかたちにて手の中の物を取り落した樣なる意なり）萬助至見其屍竊罵曰執拗女子自造罪孽豈能成佛哉‖處へ萬助がやつて來てお正の屍を見て竊に

罵つて執拗な女子めが自分から罪孽を造り居つた
それで豈して成佛する事が出來るかと云ひました
遂告之善次々々懼禍數以狂疾聞賄郡宰得事不問‖
夫から其事を善次に告て遣りました處が善次は禍
を懼れて數をして狂疾の爲に自殺をしたのである
と云ふ事にしてお上へ聞を爲せまして猶又郡
宰（今の郡長の如きもの）に賄をして其事を寢に
して不問にして仕舞ふ事が出來ました其が實に享
保辛酉十一月の事でありましたが物論囂然而無敢
上聞‖物論がなか〳〵囂わりましたけれども
悲しい哉今の文明の世と違て新聞杯に書き載する
事もありませぬ故敢てそれを上聞に入れることを
する人もありませなんだ此後十有八年本藩儒臣竹
田器甫嘗因臨館賦詩以節女詞命題自賦長韵悉叙其
事‖其から後十八年立まして本藩の儒臣の竹田器
甫と云ふ人が嘗藩侯が館に臨に成て詩を賦る事の
有ました因に自分は節女の詞と云ふ題を命て長い
韵を賦てお正の事を悉しく叙ました處が藩侯閱詩

心異之因密詢中外‖藩侯が其詩を閱て心に之を異
しみまして因で密かに其事を中外の者に詢ねまし
た侯生母賢而惠其所隸小婢赤間人也呼近之訪得其
實語之侯‖然るに侯の生母が賢い上に惠み深い婦
人でありましたが其の所隸の小婢が赤間の人であ
りましたから其小婢を呼び近づけてお正の事實を
訪ひ尋ねて之を侯に話ました侯遣吏廉問遂奪兩村
長職追咎當時郡宰以下黜罰有差賜節女家白金使存
卹以旌之云‖そこで侯が吏を遣はされて廉く問ひ
調べさして遂に彼の赤間勝浦の兩村長の職を奪げ
當時の郡宰を務めて居た者を始め其下に居た者迄
も追咎をして夫々に黜罰を加へられまして節女お
正の家には白金を賜りまして存らく卹みを加へて
お正の節義を旌されたと云ふことであります。
外史氏曰嗚呼烈哉阿正之爲其夫也而推爲其心亦可
憐矣‖外史氏とは、山陽先生の自ら稱せらる、
所にて、別號と見て差支ありますまい、それで先
生が、此の阿正の事に就きて論を起して曰はる、
に、嗚呼誠に烈なる行ではあるぞ、お正が其夫の

爲に盡したることとは、（先づ嘆稱一番して其れより段を逐て次の辭を引起すなり）而して其の爲心を推し圖て見れば、亦實に可憐である、彼生長荒山破驛間何所聞見而其辨榮辱之分如此其明＝彼れお正は、山荒の破驛の間に生長して學問敎育を受くるではなく、見樣見眞似と云ふ樣なことのある筈もないのに、何を見聞して榮と辱との分を辨へることが、如此に明かなのであらうか、（自ら一の疑問を起して、次に其の解釋を附んとするなり）何哉蓋亦有不忍也歟＝何哉と云ふに、蓋亦忍びぬと云ふ一の心があつたからであろふ、余多閱都邑婦女爭託身富貴以貧爲耻＝余が多くの都邑育の婦女を閱るのに、爭て身を富貴の人に託け、貧きを以て耻となして居る、相聚語曰某適某公某嫁某君矣＝相聚りて語曰のを聽くと、某は某公に適矣とか、某は某君に嫁矣とか、或曰某甞適某改醮於某轉禍爲福矣嘖々然艶羨其榮而至結髮偕老之情槩乎不省至與娼妓同見而不自知其爲辱也＝或は又、某は當と某に適く筈であつたのに、改めて某

に醮した、禍を轉じて福と爲すとは此事じや抔と曰て、嘖々然其の榮を艶羨で、而して結髮とか偕老とかの大切の情に至りては、槩乎にして省ないで、娼妓と同樣な見を持つて居て、自ら其の辱しめたることを知らない樣に至て居る。

是より男子たる者の無節操なるを論じて暗に作者が此の文を作りたる微意のある所を見はす、婦女猶可恕也乃鬚眉戟張豪傑自許而有愧茜裙荊釵之人者多矣＝婦女の方は猶恕しても可いが、乃ち鬚眉戟張男子の身で、適れ己れは豪傑なりと自許て居りながら、（鬚眉戟張は、鬚や眉が戟の如くしやち張つて居て、男子としての風采の立派なるを形容したるなり）却て其の心根の卑しきことは、茜裙荊釵の婦人に對して愧かしい者が多い、（茜裙荊釵は、婦人のやさしき姿の形容にて、前の鬚眉戟張と、彼是相對する文章の華なり）則何尤於邑人以阿正爲顚倒也＝即ち右の如き有樣から考へて見れば、邑人等が（道全爲助の輩を指す）お正の貞節を以て顚倒と爲るのをば、何の尤がむるに

及ぶものか、（立派なる男子の節操のなきを、尤むる意を強くせんが爲、故さらに邑人の卑劣心をば尤なる如くに曰ふ、即ち文章の抑揚なり）男之委質與女之弁字也等耳＝男子たる者が委質（質を委ぬと訓む、一身を君たる人に委せて、他意なく奉公することと也）を爲るのと、女子の弁字（弁はかうがいにて、許嫁したるとき初て揷すもの、字はあざにて、支那にては成人に至れば、男女共字を附く、禮記の曲禮に、男子二十冠而字女子許嫁弁而字と云ふこれなり）を爲るのとは、等ことである、然るに、余嘗檢筑紫野乘近古雲擾之際武夫健將朝事立花暮歸大友者比比皆是甚則觀其旗幟精彩以卜去就視去其君如驛舍然噫何其無情也＝余が嘗て筑紫の野　乘を檢べて見たるに、近古（元龜天正の頃を謂ふ）世の中雲擾き時に際りて武夫建　將　等が朝に立花氏に事ふるかと思へば暮には大友氏に歸く者が比比皆是である（立花大友の二氏は其頃九州にて最も强き大名なり）甚しきは朝暮を待たず旗幟の精彩を觀て直様、是を去て彼れに就くと云ふ事をトめるので、其の君を去るのをば、全で驛舍を更ゆる位に輕く視なして居る噫何に斯樣に情と云ふものが無のであるか

是より忠臣孝子節女の何者たるを說き明して之を情の一字に歸し情は只不忍の二字より起るものたるとを論じ以て遙かに最初の蓋亦有不忍也歟の句に照應し爰に全文を結ぶ

夫所謂忠臣無他有情於其君也孝子有情於其父也節女有情於其夫也＝夫れ所謂忠臣とは、他ではない其君に情のあるので孝子とは其父に情のあるので又節女とは其夫に情のあるを云ふのである唯夫有情是以不忍以其不忍故能自忍於死生之際焉耳余烈其節而悲其情作阿正傳＝唯夫れ情と云ふものがある、是以に忍ばれぬ、其忍ばれぬ心を以てする故に、己れの一身をば死生の際に能く忍ぶことを得るのである、余は阿正の節を烈なりと感心すると同時に、其情を推し量れば、亦誠に悲れと思ふ故に、此の阿正傳をば作つたのである。

英文雑録

慶應義塾大學講師 宮森麻太郎

MISCELLANY IN ENGLISH AND JAPANESE.

By A. Miyamori.

I. Letters.

INFORMING OF THE BIRTH OF A CHILD.

30 Kouncho, Shiba ku,
Tokio, June 28, 1904.

Dear Mr. Miyamori,

On the 25th inst., there was born to us a new baby boy; and I am happy to say both mother and child are doing well.

As it will be difficult to have the Bible class for some time to come, I have decided to postpone the class until next September. I shall inform you in the autumn when ready to open the class again.

Yours sincerely,
Gilbert Bowles.

出産を報する文

拜啓荊妻儀去二十五日男兒分娩致幸に母子共健全に御座候就ては暫くの間聖書講義致兼候故九月まで延引致す事に決し候尚秋季に至り講義再始の都合に相成候節は御通知可申上候

ボールス拜

宮森様
侍史

ANSWER TO THE ABOVE.

Tokio, June 29, 1904.

Dear Rev. G. Bowles,

We are much pleased to hear of the birth of a child to Mrs. Bowles. Allow us to offer to you our most sincere congratulations. With our kindest wishes to Mrs. Bowles,

Yours Sincerely,
Mrs. & Mrs. Miyamori.

P. S. Please to accept the accompanying.

同上返事

拜復御令閨御出産の由承り大慶至極に存候此品些少ながら御祝の印までに進呈仕候尚御令閨様に宜敷御

傳言のほど願上候

宮森麻太郎
同　たみ

ポールス様
侍史

·ASKING EOR LOAN OF BOOKS.

15/16 Daimachi, Akasaka,
June 4th, 1904.

Dear Mr. Urabe,

I return the *Daily Mails* with many thanks. May I have some more? If Angus Hamilton's book on Korea is in the library, I should like to borrow it.

I am glad to say I am making good progress; have had the plaster casing taken off, and after undergoing a course of massage, must learn to walk again, at first with crutches.

Who has charge of my classes now? I may be able to come down one day and pay you a visit before the term ends.

With kind regards,
Yours sincerely,
Edw. B. Clarke.

書籍借用を依頼する文

拜啓兼て拜借中のデイリーメイル謝辭を添えて御返却申上更に其後の分を拜借致度候又ハミルトン氏の朝鮮に關する著述書館に有之候はゞ拜借の義願上候
小生病氣も日を追ふて快く相成膝喰の足被は既に取除申候今後暫らく按摩療法を行ひ候後は再び歩行の練習(初めは拐杖を用ひて)を致度と存候
目下誰氏か小生の級を擔當致居られ候や小生も此學期終結前に一日貴君を訪問申すことを待べしと樂居候　草々不一

クラーク拜

占部君
侍史

II. Pleasantries.

HUGE RETURNS.

Harold.—Did your charity ball realize anything for charity?

Dolly.—Well, rather. Old Jabez Gotrox sat in a draft, got pneumonia, died next day, and left ten thousand dollars to an orphan asylum.

巨額の收益

春田『御催の慈善舞踏會では幾らかの收益がござりましたか』

土居『まづわッた方です。當夜は後藤の隠居も出席して吹き通しに座ッて肺炎に罹て翌日死んだので孤兒院へ壹萬弗の寄附金がありました』

EXCLUSIVE.

New York War Correspondent.—I wish I could send in some news to my editor that would cheer him up a bit!

His Tent Mate.—Why not send in a report that you have been killed?

面白き通信

ニューヨルク市より來れる軍事通信記者『少しは編輯者を喜ばせる樣な報道を通信したいものだ』同じ天幕に居る人『君が殺害されたと云ふ通信を發するかよいではないか』

DUG UP.

"Remember, always," exhorted the preacher, "that whatever you sow, that also you shall reap."

"Not always," replied Subbubs; "not if your neighbor keeps chickens.

ほじくる

説教者曰く『皆さん記憶せよ自から蒔けるものは自から刈取ることを得るものなることを』聽衆の一人佐兵衛答て曰く『常にそうすることは出來ません隣人若し鷄を飼ふ時は蒔けるものを收穫すること能はざるなり』

TIME'S CHANGES.

"Is the story you have written a historic novel?"

"No," answered the litterateur in hard luck. "It's a modern novel now. But I guess it will be historic before I get it published."

時の變化

『君の著はされた物語は歴史小説ですか』不運なる文學者答へて曰く『否其れは當世風の小説です、けれども之を出版するまでには歴史小説となるだろーと思ひます』

III. News Items.

THE BALTIC FLEET.

According to a Lloyd telegram, seven battleships and one cruiser, belonging to the Baltic fleet, accompanied by some coaling vessels, passed the Dover straits westerward on the morning of the 23rd inst.

ボールチック艦隊

ロイド電報の報ずる所に依ればボールチック艦隊に屬する七隻の戰鬪艦と一隻の巡洋艦とは數隻の石炭船を率ひて去二十三日朝ドーバー海峽を西に通過したりと云ふ

THE JAPANESE AT LIAOYANG.

It is stated that the Japanese at Liaoyang have already accumulated provisions and military supplies sufficient to support 500,000 men for six months.

遼陽に於ける日本人

在遼陽の日本人は六箇月間五十萬の兵士を支ふるに足るだけの食糧及軍需品を既に貯へたりと云ふ

MARSHAL YAMAGATA'S DINNER.

Marsial Marquis Yamagata, Chief of the General Staff Office, gave a dinner on the evening of the 24th inst, at which were present Count Katsura, the Premier, General Terauchi, Minister of War and several other distinguished personages..

山縣元帥の饗應

參謀總長元帥山縣侯爵は去二十四日の晩饗宴を催し首相桂伯陸軍大臣寺内大將及其他の貴紳數名を招待したりと

RUSSIAN OUTRAGE.

London, Oct. 24.

The Baltic Fleet on Sunday night attacked the trawlers in the North Sea, sinking two of the vessels, killing two men and wounding many others.

露人の暴行

十月二十四日倫敦發電。日曜日の夜ボールチック艦隊は北海の漁船を砲擊し其の二隻を沈め二名を殺し數人を傷けたり

SITUATION WANTED.

By a retired Japanese Navy Surgeon in foreign Life Insurance or as a Ship's Doctor. Understands English perfectly. Apply to "C. A.," care of the Japan Times Office.

Oct. 1st, 1904.

地位を求む

日本人の退役海軍々醫にして能く英語を解する者外國保險會社員若くは船醫の地位を求むジャパンタイムス社内シーエイ生宛申込まれたし

BICYCLE FOR SALE.

A Lady's "Rambler," little worn but in good repairs. Call on, or address, "I. W. Cate, 3 Minamicho, Ushigome, Tokyo."

Oct. 26th, 1904.

自轉車賣却

婦人乘ランブラー少々損じたれども能く修繕しあり牛込區南町三丁目ケートを來訪若しは同人宛申込まれたし

IV. Maxims and Proverbs.

The sun passes over filth and is not defiled.

太陽の光は汚穢物を照せども之が爲めに汚されず

Surfeits destroy more than the sword.

食ひ過ぎの害は刀劍の害よりも甚し

The secret of success is constancy to purpose.

成功の秘訣は絶えず目的を追求するに在り

Even a horse though he has four feet stumbles.

馬は四足を有すれども躓くことあり

It is success that colors all in life; success makes fools admired, makes villains honest.

人生の一切を彩るものは成功なり成功すれば愚人も賞讃せられ惡漢も正直に見ゆるものなり

It is a difficult task to speak to the stomach because it hath no ears.

胃には耳なきが故に之を諭すは難事なり

It is a greater offence to steal dead men's labors than their clothes.

死者の勞力を竊むは其衣服を竊むよりも其罪大なり

The fate of a nation will ultimately depend upon the strength and health of the population.

一國の運命は畢竟其人民の氣力と健康とに依るものなり

The foundation of every state is its education of its youth.

國家の基礎は其少年の教育に存す

The higher our position the more moderately should we behave.

人は其の地位高ければ高いほど謙遜ならざるべからず

わかば會

▲筆の花

筆の花は歌文に關する先輩大家の論説考証を登載す
筆の花には兼題あり競点あり競点は本居豊頴、小出粲、海上胤平、金子元臣の四大家輪番撰評なり
筆の花は毎月十日發刊

壹部郵税共金拾參錢

わかば會は歌文専修の團體にして毎月一回筆の花及び緑を發刊す
わかば會は斯道初學者のために研究部なるものを設け最も便宜の方法にて作歌の添削を取扱ふ
わかば會の規約及び研究部の規定入用の方は郵券參錢封入御申越あれ
わかば會々幹は……………塙　忠　雄

▲みどり

みどりは袖珍的小冊子なり銘打つて曰く舊派を逐はず、新派を拒ます
みどりは毎號歌人評あり批評ものあり作歌課題あり文章あり
みどりは筆の花の臨時増刊なり
毎月二十五日發刊の豫定

壹部郵税共金七錢五厘

筆の花及び緑發行所
わかば會
東京市神田區山本町二十三番地

細川十州先生序文　三輪田眞佐子刀自著

女子の本分

第十九版頃日賣切　第二十一版製本中

彩色繪入新刊菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋二六九三番　株式會社　國光社

中村陸軍少將夫人を訪ふ

一記者

彼の南關嶺の激戰に於いて、携行砲兵彈藥の將さに盡きんとするまでに奮闘し、一擧敵壘に肉薄してこれを拔き、たゞちに又一枝隊を率ゐ長驅して柳樹屯を占領し勇名一世を震はせし第○師團第○旅團長

▲陸軍少將中村覺氏

の麴町區紀尾井町なる留守邸をおとづれましたのは過ぐる十一月の四日――天長節の翌日午後のことでございました。

嚴めしき檜門を入り左へ若松の綠深き馬車廻を押し廻して、矮雞檜葉の植込を拔けて、玄關におとなへば、品良き召使の下婢出で來ましたので、記者は乃ち例の通り刺を通じて夫人に面會をお願ひ申し且つ又御家庭の御寫眞を拜借すべくお願ひいたしました。すると、間もなく『さアどうぞ、お上んなすつて下さい』とのことで、召使の方に導かるゝまゝ玄關の次の次の八疊の

▲應接室

へと通りました。其室には赤地の黑模樣のある美しき毛氈を敷き詰めてあつて、眞中には長方形の卓

子を据え付けてあり、その周圍に綺麗な椅子を四五脚ならべてあります。記者は請ぜらるゝまゝ先其一脚に腰を卸して、仰げば向ふの楣間には横長き軍隊勅語の扁額を掲げてあります。又右手の壁には支那風の極彩色の牡丹の懸額、また其下には木銃が四五挺づらりと並んでありまして、丁度衛兵所の前を見るやう、何處までも軍人の家庭の武裝的趣味が發揮されて居ります、此室は即ち洋風の應接室とも云ふべき所でございますが、さて次の十二疊のお座敷は

▲日本風の客間

でございまして、丁度襖がくわらりと開けてありましたので、記者はみるともなしに、ずつと視線を其方へ移しまするに、九尺の床の間には、見事なる狩野風の大達摩の幅を掛けてあり、又それと相並んで「爲國家事至公無私」と書した幅が懸けてありますが、何となく主人の精忠なる意氣がこゝにも發表されてあるかのやうに思はれました。その前の大なる紫檀の卓臺には赤銅の花瓶、それには黄菊と白菊とを古流か、遠州流か知らぬけれども形態おもしろく插けてござますが、これは夫人のおたしなみのそれとも推せられました。また、違棚には少將の肖像や、陸軍將校の小照や、いろ〳〵と並べてございます。また向の楣間には熾仁親王の御筆なる「仰之彌高」の扁額を掲げてございます。

菊花の薫り清くゆかしく匂ふとき、記者は暫し茫然と床の間の方を打戍目つて居りましたところ、彼方の日蔭美はしくさす障子に後庭の木の葉の影ゆらぎ、軒端に飛び來る鳥の影ちらと掠めてゆく、長閑なる景色を見て居りますると、忽ち彼方の方から人の出て來られた氣勢が致しまするので、記者は顧返つて見ますると、年頃三十七八と覺しき、背のすらりとした、頭髮を洋風に束ねた、顏色白な、目鼻立の美しい、至つて品よき一婦人、秩父銘仙なんかの地味な綿入に藤紫の縮緬と襦袢襟ほの見え、その上黑色の紋羽二重の紋付の羽織を着流されましたのは、即ち

▲少將夫人千代子殿

で、記者は急躁しく椅子を離れまして挨拶を致さうとしますると、夫人は桃花の萌のやうな唇まづ開かれて「どうぞ、そのまゝで被入いまし、」と最と快濶な、冴々した調子で言はれましたが、まづ初對面の禮を述べ、そして、直に記者も椅子に掛け、夫人と卓子を挾んで、互に談話を始めました。

記者は過る六月の中旬に、一度同家をお訪ねいたしました時、夫人は丁度他に來客がございましたので、別に御面會はいたさず、唯御令息の謙一氏に面會しましたことがあるので、また此所に面白いことは、その謙一氏と記者とは六七年前某校の同窓の友でございまして、互に顔は相知つて居りまするので共にその奇遇奇緣を呼んで笑つたこともありましたから、記者は先づ令息謙一氏のことからお話し申しますると、夫人は溢るばかりの微笑を滿面に湛へられまして、「あゝ、彼の時は私、丁度客がございまして、つひ、失禮を申し上げました。なんでございます、謙一も元英語學校とかでお友達のやうに申し、不思議な御緣で、はからず會ひました……と申して居りました。」と云ふて笑はれましたが、記者も亦笑ひました。

さて、まづ、

▲少將の嗜好

を伺ひまするに、君は舊彦根藩の人、人となり聰明活達にして將略あり、一たび戟を執つて陣頭に立てば、それこそ鬼神を避けしむる勇將でありますけれど、家にあれば叱咤の聲、犬馬にも及ばざる温乎なる一個の紳士でございます。そして、紳士として將た威愛兼備の名將として見るべき一の實例がありまするが、それは即ち乘馬を愛することで、更にまた面白いのは、如何なる駿足でも

▲鹿毛でなくては乘らぬ

といふことでございます。少將が今度の出征前までは、兼ねてより乘用してゐました、北海道産の雜種の鹿毛の駿足を殊の外愛せられて、日夕手自ら秣

を與へたり、鬣を梳いたりして、平生、宛も人に物言ふ如く『一朝事あるときは、おまへと生死を俱にするんだよ』などと語つて居られましたが、生憎其馬は出征間際になつて、前足を傷つけましたので、少將は大に落膽し、たゞちに厩舍に赴かれて『おまへも、怪我をした以上は既う詮方がないから、壯健で、俺の凱旋するまで待つて居つて呉れ！』と、言ひ含めて、その平首を撫でられましたが、馬も何が感應したところある如く、徐に首垂れて居ましたさうです。

さて、また少將が

▲出征前のこと

を伺ひまするに、少將は出征の前夜夫人千代子殿を一室に呼ばれまして、詞しづかに『かねて既う覺悟してある事だから、今更別に何も云ふことはない一度戰爭に望んだ以上は元より生きて還へることはないだらうが、お前は唯子供の教育を十分にして、この中村家の家名を汚さないやうにして……』と、言ひ遺され、更に又家族一同を集めて、種々と訓戒を遺し置き、寒風身に浸む三月中旬の比に凛き英姿で出征の途に登られましたのでございます。

▲將軍の雅懷

將軍は唯これ武勇一遍の猛將ではございませんでさながら鎌倉時代の武士のやうに、夙に和歌を嗜みその風流雅懷また掬すべきものがございます。曩に廣島滯在の際、在京の某氏の許に寄せられた書信中に同地の光景を記して、さて曰く、

鄙都、いづこのはても、もろ人の、つどひつどひてとり〳〵に、あつくねぎらひ、くさ〳〵の、はなむけしつゝ此方にも、御旗うちふり、彼方にも、もろ手さしあげ、ものゝふの、門出いはひて、萬代を、よひたゝえたる、その聲は、げにいさましく天地に、ひゞきわたりて、聞えけるかな。

猶ほ出征の際に物せられました和歌を擧ぐれば、

七たびは生きかはりてもこの仇を
うちつくさずばなにかへるべき

シベリヤのひろ野をかける大鷲を
　たゞ一矢にて誰れ射止めなむ
もの丶ふのこゝろいかにと人とはゞ
　たふれてのちにやむとこたへむ

これに由つて見ましてゝ將軍の抱負は、まことに遺憾なく發揮されて居ります。

さて、つぎに、

▲その家庭

に就いてお尋ね申しましたところ、夫人は、聲高に打ち笑はれまして、『宅は既う子供で埋りさうですよ、長男の謙一は二十三で、(工科大學)男は皆頭に謙の字が付いて居まして、謙一(二十)謙三(十七)謙四郎(十五)謙五(十二)謙六(四つ)の六人、女は長女てい子(九つ)次女がせつ子(七つ)その次女は今年生れましたいさを子と都合九人で、いさをは良人の出征する前夜、――三月の二十日に生れましたので、良人の勳功を祈る爲、いさをと名付けたのでございます。ハイ、學校でござんすか、謙二は中央幼年學校に入つて居ますが、通常の年よりは、一年も早まり、來年卒業をすると直ぐ士官學校(隊付とならずに)に入り、これも早く卒業して、直ぐ任官になるさうです。丁度二十一歳の少尉が出來ることになります。なんでも坊ちやん少尉が出來るのですから、私なんか、謙二が日曜などに來ますと、お前のやうな、子供の士官が出來ても、餘りお役に立ちますまいと申しますると、何、阿母様、私なんか、既う幼年學校で四五年も一通やつてあるから、大丈夫、戰爭でも何でもお役に立ちますと云つて、意張つて居ります。……それから、謙三ですか、これと謙四郎は、日比谷中學へ通つて居ります、謙五は番町小學校へてい子は華族女學校へ通つて居ります。……まあ、これだけ八九人も子供が居りますから日曜でない日は、晝間家に居るものは、謙六せつ子、それから、いさをとの三人で、大きに靜かでございますけれど、そろ〳〵學校が退けますると、皆ドヤ〳〵歸つて來まして、それはどうも賑かなことでござい

ます。

▲夫人千代子殿

は、矢張り少將と同じく、江州彦根藩の方で、貴婦人社會に於いても、淑德の譽高く、女藝としては茶道、活花は勿論、裁縫、割烹等何一つ心得られぬことはなく、和歌も作られ、また筆蹟も見事でございまして、天晴少將夫人として耻づかしからざる賢夫人でありますが、その周圍を形造つてゐる家庭は如何にも亦圓滿和樂で、まことに何時も春のやうに和氣靄々たるものでございます。そして、斯る目出度愛子は、一人として他人に養育を任せられたことなく、孰れも悉く夫人の慈愛わたゝかな懐に生長せられたのでございますさうですが、實に珍しく美しいお話しと申すべきではありませんか。そして、將軍も夫人も、子供の教育などには、餘り關はずに、彼の元良博士の子弟を教育すると同じく、各自の目的なども自ら好む所に從がはしめるといふ主義でございますさうです。

さて、次に、記者は、また、話頭を將軍の身の上に歸へしまして、その近況を伺ひまするに『ハイ、良人でございますか、此頃は別に手紙も暫く參りませんが、旅順の方へ向うて居るのです。なんでも昨日の天長節に陷落とかといふ噂もございましたけれど、さうも往きませんと見えます、曾國は難攻不落とか云ふ世界第一の要害でございますさうで、なかなか左樣はたやすく落すことが出來ないさうです。……』と云はれましたが、私も亦旅順攻圍軍の幾多の艱難と辛苦とを嘗めつゝあるを打ち語り、併せて少將の勞を感謝したのでございました。

すると、夫人はにこやかに笑まれて、『昨日――天長節には、大分旅順も切迫して來たやうな號外が出ましたから、もう、近々の内陷落するでせう。今も又號外が出ましたやうでしたが、何の號外でございましたやら、……』と、夫人は、今(四日の午後二時)の號外の吉報をまだ御存じないやうでございましたから、記者は透かさず

▲今の號外

でございますか、あれは萬朝の號外で、何でも旅順の敵兵が自ら砲臺を爆壊して、降服する兆候があるといふのでございました。……既う大分迫つて居ると見えます。とに角、彼所が早く落ちねばなりませぬ、イヤ、既う直に落ちて世界が破れるやうな騷となりませう。』と、號外の説明を致しますると、夫人は、いたく打ち喜ばれまして『ハイ、どうか早く陷ちまするやうに祈つて居りまする。』と、詞の端にも力を籠めて打ち語られましたが、流石は出征軍人の而かも一方の旗頭なる少將の夫人として、さもあるべき心根でございます、けれども、賢良なる夫人は、良人の身の上の如何より、寧ろ我が軍の勝利といふとに重きを置かれて居ることは勿論のことでございます。

すると、やがて、次の室から、年比四つか、五つかの、丸顔の、目のぱつちりとした、如何にも愛くるしい一人の坊ちやんが、ひよこ〳〵と出て來られました。それは

▲令息謙六さん

なので、紅葉のやうな愛らしい手には一枚の紅紙を持ち、そして、其紙を夫人の膝の上に置いて立ち去らうとしましたが、即ち、萬朝の號外でございました。夫人は坊ちやんを呼び留めて『これ、坊や、お客にお辭儀をお爲なさいよ。』と云はれて、謙六さんは、少し羞しさうにして、莞爾と林檎のやうな頰に靨を見せながら、挨拶されました、無愛想なる記者もこれを受けまして、何か云はうと致しますると、又も莞爾として次の室の方へ立ち去られました。

▲寫眞に就いて

『本號に掲載するのでございますから、御家庭の御寫眞を拜借いたしたうございますから。』と、最初にお頼み申してございましたから、記者が夫人とお話してゐます時、取次に出られた召使が、立派な硝子入の寫眞挾に入れてある御寫眞を徐に卓子の上へ持つて來ました。夫人は之を見せられて、『餘り良くは

ございませんが、これが近比うつしたのでございます。これで、宜しければ、お持ち下さいまし』と云はれて、硝子の内から拔き出されました。川澄田鶴子と申すのは、私の母でございまして、大阪の私の妹の所に居りましたが、今度出京て參つて居ましたから、皆一緒になつて、宅の後庭で寫したのでございます。……ハイ、有難とう、母は隨分達者でございまして、大阪に居たり、東京へ參つたり、氣任せに往つたり來たりして居ります。椋原敬子とは私の叔母で、その配合者は椋原秦と申すのでございます……。』

又いろ〳〵とお話を承りまするに、夫人も亦、前號にも御紹介申しました松村海軍中佐の夫人登志子殿と同じく

▲本誌多年の愛讀者

の一人でございますので、記者は亦少なからず驚きました。そしてまた、それと同時に何となく淺からぬ緣故ある、而かも此の光榮ある將軍の家庭を世に紹介することを非常に心嬉れしく感じたのでございました。

吉島海軍中佐母堂を訪ふ

一記者

十一月の三日——天節節の午後二時頃、記者は芝區白金臺町二丁目なる松村海軍中佐の留守邸より歸途に、矢張り同町一丁目なる、帝國軍艦

▲明石副長

海軍中佐吉島重太郎氏の留守邸をおとづれました。

邸は梨羽少將の邸の隣家で、眞木男爵家の前の方になつてゐまして、角の屋敷でございます。

まだ新らしい木戸門に「吉島重太郎」との表札を見まして、此所ぞと思つて、木戸を押し開けると、

チリン〳〵と怱躁しく鳴る鈴の音、やがて、山茶花の植込を越えて、三四間ばかり進みて、何となく風流に出來て居る玄關におとなへば、やがて、年頃二十五六の、至つて物馴れぬ下婢出て來ましたので、記者は先づ刺を通じて、來意を述べ、且つ又、夫人に面會をお願ひ申しましたが、やがて、年頃五十六七の、頭髪を切垂にした、氣品賤しからぬ御隱居然たるお方が出迎はれましたので、更に又、來意を申し上げますると、最と快くうけがはれまして『まあどうか、此方へお通り下され』と云はれて、徐に奥の方へ入られまするので、記者も今は遠慮することもなく、つか〳〵と玄關の三疊から其次の八疊の座敷を過ぎり、その次の

▲八疊の座敷

へ打ち通りました。請せらるゝまゝ座蒲團に座りまづ正面の床の間を見まするに、探幽の象と獅との對幅、その前には見事なる山茶花を生けてあり、また花瓶と並べて、名は知らぬが大なる貝殻を飾り、その中に萬年青の鉢を入れてございます。また違ひ棚には、牝鹿の木彫や、臺ランプや、砲彈なんどを飾つてあつて、その前には、赤銅の花瓶にうめもどきを趣深く生けてございます。また、違棚の上の方を仰げば、楣間には、鍋島閑叟公が筆になる石摺の額を掲げ、またこれと相對して「肅若松」の扁額を掲げてございます。

召使が火鉢、茶を運ぶと同時に、またも御隱居——即ち、

▲中佐母堂

が出て、來られましたので、まづ、今日の佳節の珍しい良いお天氣となつたことや、觀兵式のことや市中の賑なことや、さては戰爭のことなんどを互に問いつ、問はれつ相語りましたが、そこへ又、奥の方から、年頃二十歳位の脊の高い一人の青年が出て來られて、『私は重太郎の弟でございます……。』と挨拶せられましたので、記者も先づ鄭重に挨拶を終へやがて、いろ〳〵中佐のことなどに就いて、承りま

した。

▲中佐の略歴

に就いて伺ひましたところ、母堂は徐に口を開かれて『ハイ、日清戰爭の時でございますか、彼の時はまだ少尉でございました。ハイ、それからですかしつかり覺えても居りませんが、いろ〳〵とお艦に乘りました。……ハイ、三十三年の北清事件の時ですか、その時は何でも驅逐の艇長を仕て居りました。それから今の明石の副長となり今年の夏中佐になつたのでございます。』と。

さて、つぎに

▲中佐の平生と嗜好

とに就いて、お尋ね申しました所、今度は、令弟袈裟三氏は、少し笑はれて『ナニ、兄なんか、平生家に歸つて居りましても、別に是が嗜きといふことはございませんです。只私なんかと、種々話して居る位なものです、たゞ體育のことなどは、やかましく云ひまして、柔道よし、擊劍よし、盛にやつて居りました……。』と、云はれました。が、庭園と云ひ座敷と云ひ、すべて、數寄を凝らしてありました。が、これは唯單に中佐母堂の嗜好のみではないと推しましたから、その邊を伺ひまするに、『ナニ、兄なんか風流のふの字もないのですが、まあ、亡父が、いろ〳〵と道具だとか、植木だとか、骨董だとか、好きでしたから、いろ〳〵異な物があるのです…………。』と。

聞けば、中佐の嚴父とは彼の海軍部内に藉々の名高き

▲海軍少將吉島辰寧氏

で、三十三年に物故せられたさうでございます。そして、此白金の邸は嚴君辰寧氏の時代からの屋敷で、既う二十數年も經つてゐて、殆んど白金土着の人のやうになつてゐるのでございます。

さて、つぎに、

▲その家族

の事に就いて、伺ひまするに、今度は亦母堂にて

ゝやかと微笑まれて『ハイ、重太郎の家内も居りますが、これは孫を連れまして、只今奥の方に參つて居ります。ハイ、嫁の名でございますか、これは光子と申します、年は二十七……ハイ、孫は六一郎と申します。ハイ、これはやつと五つでございます。只今、私は此家に、重太郎の弟二人と家内三人で、下婢を使づてゐるのでございます。……ハイ、重太郎の次が次郎で是が二十四、三番が此の（袈裟三殿の顔を見ながら）袈裟三で、二十一になります…。』と。くはしく物語られましたが、私は、序に袈裟三氏に學校のことをお尋ね申しましたら、『ハイ、兄ですか、これは早稲田の方へ參つてゐます。ハイ、私ですか、私は高等學校へ往つて居ります。……ハイ、隨分遠うございますが、まづ、電車に乘つて、上野まで參りますから、左程のこともございません、本郷の方に居らうかとも思ひますが、家が餘り無人になりますから、少し遠うございますが、毎日家から通つてゐるのです。』と。

▲母堂くら子殿の御年は、今年五十七歳との事なれど如何にも健康に渉らせられて、毎朝、眼鏡をも用ゐずに新聞の戰報を覗かれて、我が軍の海陸ともに進捗するを打ち喜ばれ、只管令息重太郎氏が、奉公の大任を全うせんことを祈つて居らるゝさうです。

茲に更めていふまでも御坐いませぬが、我が忠勇なる將士が、海に陸に、常に捷利を占めて、サスがのアレキシーフも舌を捲き、クロパトキンも名譽ある退却とかいふものを毎々行つてますのも、間接にはかゝる家庭の力が、幾何許り與つて功を奏して居るのでありませうか、立派な覺悟を有たれた母堂や、令閨が暗々の裏に、此の大戰爭に盡されて居ことは、一般國民が軍人諸君の大なる働らきを感嘆すると同時に、宜しく銘肝して感謝すべきであると存じます私しは海陸將校方の御留守宅を訪問する度に、その母堂や奥さん方に向つて、心の中に始終此の感じを禁じ得ないのであります。

女學校

日本女子大學運動會

十月二十二日は名にし負ふ目白なる女子大學の秋季運動會の當日なれば、生徒達はいふも更なり、案内を受たる人々、さては生徒の父母兄妹達の、何れも晴雨定まりなき今日此頃の天氣の、せめて今日一日は晴れよかしと、祈らぬはなきに、朝來の空模樣穩かならずして、五月雨の空ならねど、降りみ降らずみの有樣なれば、兎角は電話に依りて、開否如何を確むることよけれと、幾回となくチリンチリンを擲かせて女子大學の電話番號を呼出せども、毎もお話中なるぞ是非なき、少し焦れ心となりて、モハヤ駄目々々と嘆ちたれど又た顧みれば、今日の天氣を氣遣ひて、開否を問合はさるゝ人々の吾れのみかは、その數幾百の多きにも上るべければ、同校の電話掛の繁忙も左こそと思ひ遣られて、詮方なきまゝ窓のほとりに立ちて、空合を眺むれば、何事ぞ黒雲群がり起りて、今にも降り出さん計りなれば、此の模樣にては順延ならめと、臆斷せしぞ、思へば不覺の本なりき。かくて予は遂に指屈りかぞへて待ちたりし、當日の運動會を參觀する能はざりしぞ、遺憾なれ、されど參會せし知己の人々の話、かつは家庭雜誌を始め、諸新聞の記事によりて、粗々此日の情況を知るを得たれば、掻つまみてものせんも、またせめてもの思遣りなるべし。

會場は例の廣やかなる運動場にて、四面に天幕を張

りて、來賓の観覽場に充て、彩旗を縦横に掛けつらねて、軍樂隊、生徒音樂隊、ピアノなどを各所に配置し、且つは大學部生徒一同の手づくりに成りしといふ、鮨、サンドイチ、菓子等賣店の準備も整ひて立食場は前後の庭園内に設けられたり。

午前中は運動場の濕り居りし爲め、豫定の技を演ずる能はざりしが、「プロクラム」第十回の化裝兵式體操（高女四年）を演ずる頃より、氣晴れ土乾きて、自由に運動するを得るに至りぬ。

天津御空に聳えたつ、富士の高嶺を仰ぎ觀よ、わが國民の類ひなき、雄き姿あれこそは、雪にかゞやく朝日影、村雲はらふ夕嵐、御國を守る兵士よ、いざ〳〵ならへあの山に

と打連れて唱ひつ、銃の代りに箒をもて兵式體操をなせしは、時節柄最と勇壯に見受られき、次の自轉車（大學部及び高女撰手）は紅白の綱のもとに、六臺の自轉車を二列につなぎ、終りの一臺は、海軍旗と國旗を、他の一臺は、陸軍旗と國旗を交叉し、垂髫花冠の乙女を載せさたる花車を曳き、樂のまにまにねりまはりしにて、麗しとも、目醒しともいはんかたなし、或記者之を評して、廿世紀の御所車といひしも過賞にはあらず、それより可愛き風船競爭（高女一年）哀れを渤海の水にとゞめたる初瀬（高女四五年）の舞を終りて、レーヴエン（大學部廿四名）は催ふされぬ、此は米國の詩人E.A.Poe氏の傑作なるThe Ravan（烏）の詩吟をしつゝ、佛人デルサート氏の創意になれる表情體操に基づき、そを動作にあらはせるものゝ由にて、色は淡紅色の古代希臘の服粧をまとひたる廿四名の妙齢の婦人が、ピアノの彈奏につれて、輕く跳り、緩く舞ふ風清巧妙といふの外なかりき、次の佛國の凱旋舞なるヴオトレ、サンテ（家政學第二年）も最と巧みに、次は星月夜（高女二年）にて、長く垂れたる銀色の星を黄と紫の總もて、ふりつかざしつ舞ふさま見事なり、

一　吹く風晴れて心地よき、
　けふの御空の、けふの御空の我れら星、
　世のよき人に　かたらむか
　いさ〳〵星の　心なば。

二　小さくあれど、このかげは、
　赤きな、星の　あかきな、光りなり。

薄くはあれど、この光り、
清さぞ、星の　心なり。

三　我れらの父は、天つ日よ、
赤きは、これが、あかきは、これが、おしへにて、
我れらの母は天つ月、
清きは、これが　教へなり。

四　御親の敎へ　まもりつゝ、
ひとつ御空に、一つ御空に、むつまじく、
出づるも入るも、共にして、
みがく光りの我れの星。

五　生れし世界に、うるはしの
ひかりをそへむ、光りを添へむ、願ひにて、
我れらは、こゝに、みがくなり。
磨きて、共に、すゝむなり。

こは、鹽井氏の作歌、白井氏の作曲にかゝる、此の星月夜の唱歌なり、それより春秋競爭（普通豫科）

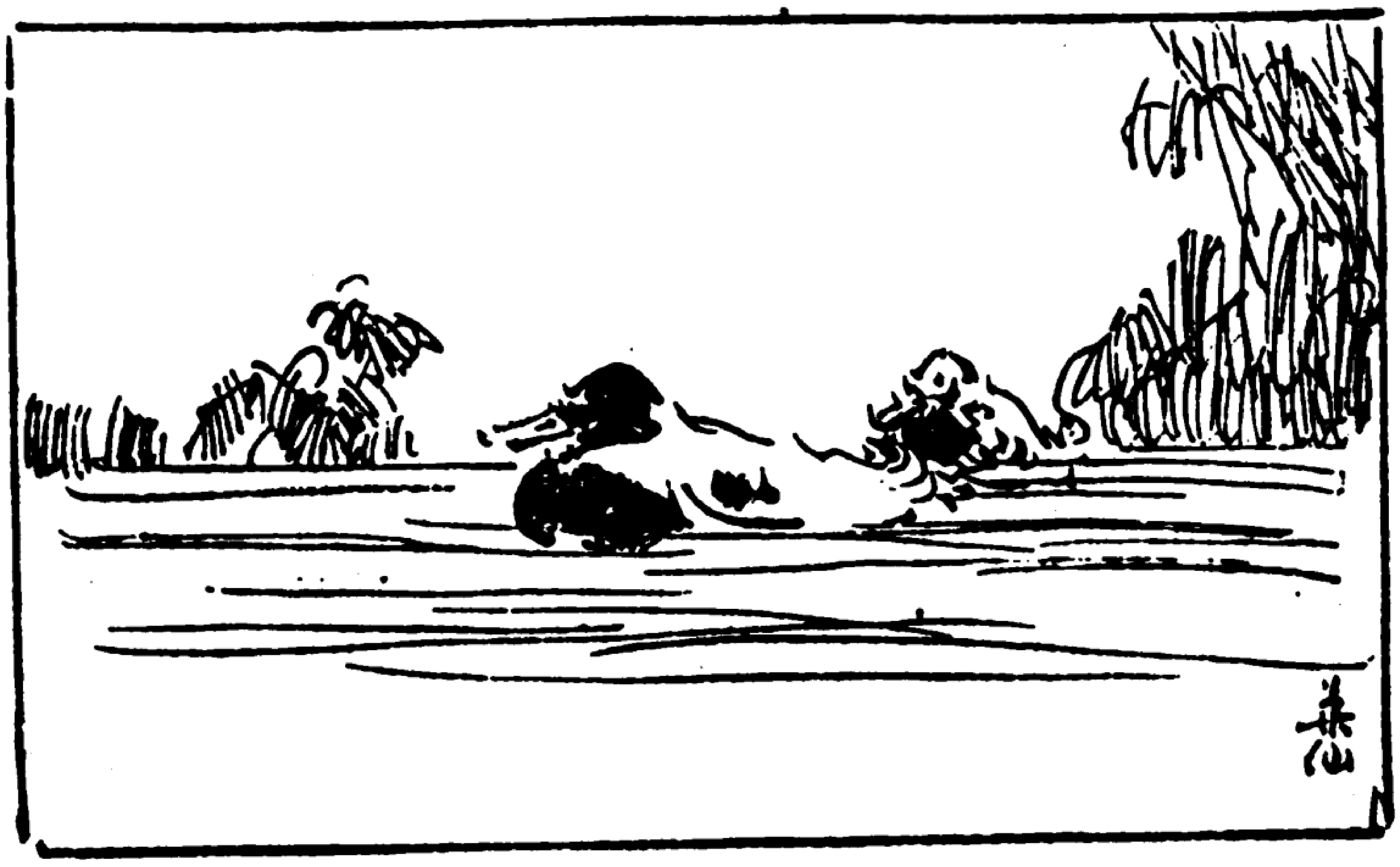


第二虹霓舞（英文學部）弓弭の響（高女五年）ありて、次の花神舞（家政學部第三年）は、美的體操十種の一にして、元來は室内舞なるを、此に演じたるもの、由なり、さて淡紅の衣つけたる十八名と、同數なる淡紫の衣きたるものとが、二組に分れて、手に手に今や盛りと咲き揃へる菊の花輪を携へつ、軍樂につれて舞ふ姿は、實に花神の姿を目神に見る心地して、覺へず感嘆の語を洩らすもありき、次は千鳥戯爭（高女第三年）次はガボハト（國文學部第二、三年）次の第二アマゾン（家政學部第一年）は一隊の

美人軍が、白鉢巻甲斐〴〵しく、盾と矛とをとりて跳り舞ふ様、勇壯とやいはん、活潑とやいはん、なか〳〵に愉快なりき、それより木環體操(國文及英文學部全員)バスケットボール(大學部五十名)バランス運動(大學部全員)ありて、風船を揚ぐると同時に、君が代の曲は一同に合唱されて、こゝに閉會は告げられにきとぞ。去年も、一昨年も、運動會の催しある度毎に、一回も不參せしことなき我れの、今年に限りて參観せざりしは、返す〴〵も遺憾なれど畢竟わが惡しきにあらず、定めなき秋の空のあしかりければなり。

女子美術學校卒業式

本郷弓町なる女子美術學校の卒業式は、十月卅日を以て擧行せられぬ、午後一時よりとの事なりしも、故障ありて、參校したるは、三時過ぐる頃にて、恰も江原素六氏の演説中にてありき、女學生の心得、卒業後の心得、妻となりし後の心得など、諧謔まじりに説き出されしかば、幾百のひめ達の、幾回か頤を解かれけん、その都度微かなる笑聲は四面に起りぬ、演説了りて卒業生總代の答辭などあり、續いて君が代の曲は合奏されて、式は終れり、それより幹事磯野吉雄氏の案内にて、樓下なる生徒の製作品陳列場に入りて裁縫、刺繍、繪畫などを參観して、やがて茶菓の饗を受けぬ、それより教員室に至り、磯野氏に就きて此校の成績を聞くに、卅四年開校せし以來、第一回より今回に至るまでの卒業生は總計二百二十九名にて其の内譯は



日本畫科　廿八名△西洋畫科　八名△彫刻科　二

名△編物科　二十六名△造花科　廿二名△刺繡科廿七名△裁縫科百十八名なる由、又卒業生の現狀は敎職に從事せる者十四名△婚嫁せる者六名△高等科又は他科に入れる者八名△在京家政に從事せる者三十名△歸鄕家政に從事せる者七十二名△自營者四名なりとぞ、今回は第六回の卒業式にて、編物、造花裁縫、刺繡の四科を通じて、卒業生の總員五十一名現在生徒は四百人以上に上り、他の公私立女學校と異なりて、少しも戰爭の影響を蒙らずとは賀すべきなり、不日復び參校を約して、辭し去りしは午後四時過ぐる頃なりき。

日本女子美術學校々友會

芝公園なる元の彌生舘を校舍とせる同校の校友會は、十一月二日を以て開かれ、生徒製造品の展覽會をも催ほさる、由、案內によりて、同日午餐を終るや否や社友笠間氏と共に、三田行の電車に飛乘りつ、同校へと赴きぬ、玄關を上りて、一室に入れば、十餘名の女生徒諸孃が、襷がけ姿、甲斐〳〵しく、バタよ、砂糖よ、饂飩粉よと騷ぎ立ちたまふを見て、今日の來客への御馳走か、あの可愛き手もて作られたるケーキの、やがては吾等ムクツケキ髯武者の口にも入るべきぞと打興じつゝ、階子を上り行けば、文友社の田部井氏出迎へられて、展覽室へと誘はれぬ、且見れば廣やかなる室に今や飾附の最中にて、職員はじめ生徒達の繁忙さこそと察せられぬ。
かゝる折に諸氏を煩はさんは最と心もとなき業なれば、田部井氏に向ひ見受け參らする所にては、開會までには、まだ時刻もあるべし、公園を漫歩きして、後に再び參らめといへば、御覽の通り準備も未だ整はざれば、失禮ながら今一時間が程さら願はるれば、結構なりと答へらるゝまゝ、一應そこを辭して、東照宮の社前に詣り、木立茂き林の落葉踏み碎きつ、丸山に上り、ベンチに腰かけて雜話に時を移し、辯

天の池の畔に出で、茶店に憩ひなどする中、時はや移りたれば、餘り後れても無禮なりと、再び學校へ還れば、ケーキ製造所も取拂はれ、製作品の飾附も粗々了へぬ、請せらるゝまゝ、三階の最と眺望よき室に入れば、五六の來賓既に卓を圍むで、談話中なり、吾等兩人も各席に就きて、一言二言交ゆる中に堆かきまでに盛れるケーキの盤と、水菓子とは卓上に排らべられ、校長佐藤刀自出でられて、懇篤なる挨拶をせられぬ、刀自は退職海軍少將佐藤氏の令室にて、德望學識共に高く、殊に女子敎育には、最とも熱心なる方なりとぞ、かゝる校長を有せる學校、かゝる校長の下に敎養せらるゝ生徒こそ、實に幸福なれ、やがてお茶よビールと、すゝめられしが、優れてうまかりしは、彼の手製のお菓子なりしも道理なり、兎角する内に談話の興も盡きて、秋の日の暮れやすく、時刻も五時過となりぬ、さらばこれより製作品を拜見せんと一同打連れて、樓下に降れば、こゝは早や薄暗くなりて、たゞ造花の奇麗なる刺繡のうつくしきをおぼろげに見認め得しまでにて、仔細に品評する能はざりき、生徒諸孃の諸處に立ちて、花籠、ネクタイ、靴足袋など指しつこれ召しまさずやあれは如何にと、頻りに愛嬌を振りまかるゝものから、何品をがなとは思ひしが、折角の紀念品を見分



けもせずに求むるも、好ましからざれば、又の日にと、並居る娘子軍の間を押分けて、幹事島田氏に挨拶して、校門を出づれば、電車は已に點燈されつゝ、かくて笠間氏と袂を分ちて、麻布霞町なる寓居へと歩を向けぬ。

第三高等女學校運動會

暖かき小春の空の、今日は特てのどけくて、氣も心も晴れ〴〵しう思はるれば、早くよりと思ひしに、好事には魔多しとかや、朝の頃より何かと用事いそがしく、一つ終れば又一つの出で來て、やうやくのことに、麻布日ヶ窪なる同校へと向ひしは午後二時過なり、されば同校の運動會場へ到りしは三時過る頃なりけん、群集せる參觀人は、設けの席に充ち溢れ、子女を連れたる婦人達の、後ればせに到りたるは、たゞ音樂の響き、競技の叫びの聲、拍手喝采の音を聞くのみなりしぞ氣の毒なれ、予は幸ひにも來賓席の片隅みに潜り込みて、不自由ながら、見物するを得たるは、仕合せなりき。

花の如き二八の令孃が、運動姿勇ましく、いづれを優れたりとは、評せ得ねど、舞踏戯の華やかなると、球戯の勇壯なるとは、殊に見物人の注意を牽きたりと覺しく、拍手歡聲四方に起りて、暫しは鳴りも止まざりき。

聞けば同校生徒の現在數は、五百五人にて、此内文官の女妹百餘名、海陸武官の女妹四十名餘にて、全校生徒の過半數は、籍を士族に措き、商人の女妹の至つて少なきは、他の女學校と稍々趣を異にするところにて、隨つて生徒の氣風も、擧動も自然他校と相違せるものありとは左もあるべし。

午後五時頃閉會は宣告されぬ、瀏喨たる樂隊の音に送られて、滿場に飜がへる飾旗を、幾回か見回りつゝ、校門を出でぬ。

○女子師範學校△△第二高等女學校運動會　は次號に掲く。

○麻布家事專修女學校學藝會　これも次號に記すべし。



米國に於ける模範的家庭

（ウヰリアム、ゲエンニングス、ブライアン氏の家庭）

米國文學博士　山下彌七郎

私は西暦千八百九十七年（明治卅一年）より米國に渡りてネブラスカ州の首府なるリンコルン市に住んで居りました、彼の有名なる青年政治家且つ「デモクラット」黨の頭領ブライアン氏と同居し、七年の間同氏の家庭に居り、其間私は州立の大學と大學院とに入學して居りましたが、是等の學校生活は、固より皆日本から米國の諸大學へ留學さるゝ諸氏と、種々の點に於て敢て大差ないと思ひますが、併し私は同氏の家庭に在りて廣き米國に少からぬ知己を有して、純粋なる米國の模範的家庭を觀察するの便を得たのは、最も悦ばしく感ずる所であります。

日本で謂ふ家庭は、英米に於ける「ホーム」であるかは、茲に私は斷言することは出來ませんが、私が今述べんとする家庭とは、確かに亞米利加にての「チピカル、ホーム、ライフ」の別稱として、米國では一般に「リアル、クリスチアン、ホーム」と呼び、「チピカル」でない、所謂模範的でない家庭を「ナン、クリスチアン、ホーム」と稱します、即ち前者を耶蘇教的家庭

といひ、后者を非耶蘇教的家庭と唱へます。

斯く名義上の區別は兎も角も、精神上若くしは事實上に於ける家庭の内容を論ずるを以て、最も適當と信じますから、聊か其の一斑を御話し致しませう。

さて耶蘇教的の家庭には、夫婦間に於ける純正の愛と情とが、自然の調和一致をして居まして、感情的衝突なく、常に理に據りて爭ひ、理に據て裁斷し、其の生活の如き、毎に趣味を帶び、精神は爲めに活動し、平和に圓滿に、而かも高尙なる家庭を形成するのであります、之れに反し、非耶蘇教的の家庭には夫婦の間が、服從と命令と云ふ所謂義務的の合同に過ぎぬ爲めに、感情の衝突多く、道理の制裁は勢ひ薄弱となり、其の結果は義理の堅い模型的又は消極的の人間が出來るのであります、今私が述べんとするは、つまり耶蘇教的家庭の事にて、少しも非耶蘇教的家庭は含まないのであります。

斯く申しますると、自然其の「ホーム」の組織及び内容の如何を説明するの必要を感ずるのであります、即ち夫婦が所謂家庭の主働者とか、又は原動者とか申すので、夫れで善き夫婦は良き家庭を形くり、惡しき夫婦は、惡い家庭を形くるのでありますから、最も緊要なことは、結婚當時に、深く注意して撰擇しなければなりません、如何にせば理想の夫婦たるを得るかといふに所謂る順序なるもの丶存することを忘れてはなりませぬ、第一に長き間の交際、第二に結婚豫約、第三に結婚と云ふ次第にて、即ち此の三要件を具備するものは、理想的夫婦たることを得、否らざるものは非理想的夫婦となるのであります、以上の順序を經過する間には、相互間に日本に於けるが如き嚴格なる義理的儀式なく、全く意志の自由に任せるのであります、去れば第一を經へない中に破談となり、又例令第一を經ても、第二の場合に到りて、破約となることが屢々あるのであります、又幸に此の要件を無事に通過するも、父母の承諾といふ條件がありますから、割合に善良なる家庭は米國では多いと云ふ程でも御座ません、併しブライア

ン氏の家庭は、實際米國での模範的家庭と世上の定評も有りますから、茲に其の一般を御紹介致します。
氏の家庭のことを記すに先だちて、ブライアン氏の概略の經歷を述べませう、氏は千八百六十年三月十九日にイリノイス州のセイレムと云ふ處に生れ、二十一才にしてジヤクソン、ヴイルノ、イルノイス大學を卒業し、シカゴの法科大學に入學して、傍ら前元老院議員ツランベル氏の法律事務所に出入し、二年の後同氏の令息ヘンリー、ツランベル氏と共同の法律事務所を起して、辯護事業に從はれましたが此時今のブライヤン夫人と結婚せられたので、實に千八百八十四年のことでありました、それから直に夫人をシカゴ法科大學に入學せしめ、卒業後は今のネブラスカ州のリンコルン市に於て、夫婦共に辯護事業に從事せられたので、此の時氏は廿四才にして夫人は二十三才でありました。
今日氏夫婦の結婚前の歷史に遡りますと、丁度ブライアン氏がイリノイス大學に居られし頃、學友二三名と會々近所の女子大學參觀に赴かれたのが、所謂實に夫婦の初見であつたのであります、氏は當年のミス、メリー、ベエアード孃の秀逸なる學才と、強健なる體質とを愛し、又孃はブ氏の口の大なると、鼻の曲りて大きく、其の頰の工合が如何にも凡人でないといふとを看破し、殊に氏が温順にして、又毎に微笑を含むで居る處を深く喜び、其後ブ氏の友人に紹介せられて、終に互に交際する事になつたのであります、斯くて三年の間始終一日の如く交情を結び、漸く華燭の典を擧げんとする機に及び、双方の兩親も亦其の伉儷を喜び、一年間の中に、先づ夫婦としての交際を試みたる後、相互の意氣相投合し、遂に善良なる今日の米國に於ける模範的家庭を形成せられたので御座ります。
ネブラスカ州のリンコルン市に遷られてからは、只一定の收入のみにて、別段新宅でも造ると云ふ樣な貯へもない所から、夫人の嚴父ベアード氏と圖り、金策をして小さい家を新築せられたのは、千八百八

十七年の頃でありました、之れより法學校時代の學友にて、當時、鐵道局雇の法律顧問官たる「タルボット」氏と協力して法律事務に從事されましたが、代言人として氏の生活は、實に二十三歲よりして三十歲までの八年間でありました。

三十歲にして氏は撰ばれて國會議員となり、玆に始めて政治家たらんとするの野心と希望を抱かれたので、三十六歲にして「デモクラッ」黨の大會に大統領の候補者となり、四十歲にして再び候補者として「マッキンレー」氏と覇を爭ひましたが、不幸にして兩回とも見事に失敗致しました、けれども氏の名譽と威望とは、依然として旭日の如く赫々たるは、素より氏の天賦の然らしむる處とは云へ、又夫人の內助の與つて大に力あることは更に疑ふべきでございません。

初め氏が大統領の候補者として米大陸を遊說せられたる當時、夫人は每に氏に從ひ、氏の健康を看護し、又其演說草稿を査め、幾多の來客に應接するなど氏に優るの働きをせられましたから、世人往々ブ氏の演說は皆夫人に據りて成り、又政治家としてのブ氏は、夫人に據て見はると申しますが、之れ固より適評ではなくても、亦多少這般の消息を傳へたのものであります、而て此の選擧後は、夫人は自からブ氏の事務長として秘書たるチャーレー、ブライアン、ウヰリアム、スウヰンド、ミス、ハワード孃を指揮して、日に數千の書面に應答されたと云ふことであります又同時にブ氏は月に平均二十五日間は留守で、其の間は一日平均二回づゝの演說をするといふ有樣であるから、其の繁劇なことは實に想像の外であります其外に其の間夫人は三人の兒女の敎育を司り、長女ルース、ブライアン孃は當年十九年にして去年の八月嫁し、長男ブライアン、(ヂュニアー)は十六歲にして當時中學校に在り、末女グレース、テキスター、ブライアン孃は十四歲にして同じく中學に通學して居ります、長女ルースは丁度十二の時リンコルン市の中學校へ入學致しましたが、原來怜悧なる性質と

非凡の學才とが、此の乙女をして餘り活動せしめ過ぎると云ふことからして、男女混合の中學を中途にして止め、イリノーイス州のゴッドフレイと申す所の女子中學校の寄宿舍生とせられますた、元來此の學校へは曾てブ夫人も居られた事があつて、其の校長たるハースウヱイ孃は、今や老年なれども、教育家として、多年の間斯道に心身を捧げて、其の天職を盡されて居るので、ブ夫人が、校長に對する信用は甚だ厚く、而して竟に其長女を以て此の中學校に一任することとしました、其後二年たちて後、再びリンコルン市の中學に復校し、十七歳にして州立大學へ假入學を許された、詮するに夫人が此のルース孃に對する教育の方針は學才を高めしむるにあらずして、常に天才を曲げ、以て大に女性の美德を發揮せしめんとするに在りました、即ち女として優柔たらしむるに意を勞せられたので、力めて男女混合の交際を避けしめ、好んで婦人の倶樂部や、遊技場に出入せしめて、大に之れを奬勵せられたので、併し夫人が長男に對する方針としては、力めて男女の交際をなさしめ、男子との交際を避けしめられた、是と云ふも其の長男の餘り我儘氣隨で、到底同僚の男子間の交際にては、之れを調和せしむることの至難なるを看破されて、女子との交際を必要とせられたのであります、丁度十歳の時から、同齡のミス、バーボアートといふ少女と親しくして、四年の間絶えず交際をして居ましだが、去年の夏から、又ミスパーガーといふ少女を學友として非常に愉快に往來して、互に學業を勵し、双方の兩親も亦之れを喜び暗々裏に此の兩人の交際を勵まして居らるゝのであります、末女ゲレスは身體が弱いなどの事情から常に當人の嗜好を容れて學業の如きも強ひて壓制的の方針を取らす、其他に關しても亦本人の自由に任せ、時々南部メキシコ西部カリホルニヤ及び東部ニユーヨーク等の旅行を促がして居ましたが、二三年前より體格も健全となり、學業も熱心となり、昨今はリンニルン市の中學校へ入學して、傍ら音學を勉強中

で御座ります。斯の如き繁き業務の内に家庭を造られて居た事が、丁度一千八百九十五年から一千九百一年迄の六年間でありましたが、夫人は其頃頻りにブ氏の健康の上に就て心配せられ、若し今日の儘で行かば或は到底普通の人の如く永く生活し得られ難いと考へ、田舎に居宅を引越すことに相談が定まり、終に四拾萬弗と申す大金を掛けて普請を始め、漸く一昨年の春其新宅が出來ました、其構造の美麗なこと諸道具の完備して居ることなど一も不足なき立派なものであります。

△家の内容

室の數が丁度彼れ是れ二十九、其内二階には客に向ての室が二つ、長女の寢間と客室とが二つ、其次に私の室が一つ、學校の教場が一つ（此事は後に説きます。）衣物の着換へ室が一つ、下女三人に向ての大きな室一つ、末女の人形室（日本の十疊敷位ひ）との九室でありまして、第一階には客のヅレスシングルーム（着換へ間）が一つ、圖書館一つ、大きなる客間が一つ、別懇なる人を引見する爲めに作られたる客間（シッチング、ルーム）が一つ、ブ氏夫婦の寢間及び着換へ間二つ、裏玄關より來る客の着換へ間一つ、湯殿と雪隱と一所に爲たる大きな室が一つ、息子の寢間、及び末女に宛てたるもの各々一つ、其外夜會等に用ゆる大きなる廊下（ホール）が此等の室の眞中にあります、そこで都合間數が十になります、今其階下即ち地下（ダウンセラー）にある澤山の室を申さば、第一奇麗にして又尤も粋を極めたるものは食堂であつて、其壯麗なことは殆んど目を驚かす許であります、其外事務室と圖書館とを兼ねたる室が一つ、新聞雜誌閲覽室が一つ純粋なる圖書室一つ、食器洗滌室一つ、臺所一つ、氷室及び物置室一つ、洗濯室一つ、石炭及び蒸氣室一つ、及び食品貯へ室一つ合せて都合十である、尤も三階は皆物置場となつて居る、隨分室内の裝飾は美麗で又華飾を極めて居るが、これ等は皆諸處の知已友人からの進物であ

つて、自分で求められた物は僅少であるとのと、今一寸ブ氏の家族の人數を申さば、下女の三人を除きて七人である、併し去年長女ルースが嫁して六人となり、此六月から私が出ましたから、今は都合五人である、即ち親子四人と、外に一人の老人（夫人の嚴父）とのみにて、丁度善き程の家族であります。

△屋敷、建物、飼養物等

屋敷が丁度百三十五エーカー（一エーカー日本の四反十八歩餘に當る）あつて、其内四十エーカーが庭、花園及び牧場等である、建物が都合十一にして本宅と六つの馬小屋と、他に又二つの住宅（之れは勞働者に向て）其外三つが植物試養場と、養鷄場と、及び豚小屋等である、別に又瓦斯製造室と、水汲機械室等が地下に備へ付けてあるが、是等は實に立派な者にて、所々方々から態々見物に來るものが澤山であります、飼養物は乘馬二頭と馬車馬六頭と、ポーランドチヤイナと申す種類の豚が十八頭と、鷄が百羽位である、馬車は丁度八臺にて、其内三臺は皆耕作場に於て用ひ、又町へ買物に行くときに使ひます馬車使ひ、花園を取扱ふ人、飼物を支配する人、百姓頭等が都合四人にて、一切本宅の回りの働きをなして居ります。

△新宅の位置

新宅は丁度リンコルン市を去ること四哩計りの、ノーマルと云ふ所で至極閑靜なる場所である、其近所にカーレッヂヴユウと云ふ面白き所が御座ります、此處は亞米利加にて唱へて居ります、彼の「セヴン、デイス、アドヴエンチスト」と云ふ宗旨家の集合して、造へた町でありますが、其處には病院もあれば大學校も御坐ります、此處へはリンコルン市より、毎日午前五時半から午后十一時半迄の間、四十分毎に電車が通つて居りまして、ブライアン停車場には、何時でも電車が一寸立寄ります、此處より私は毎日市にある大學院に通つて居りました、ブライアン氏が、此ノーマルと申す所へ引遷られてから、この場所を自ら呼んでフエアーヴユウと唱へます、夫

故今では此名がブ氏の住所の普通の名となつて居ります。

△引遷り後田舍にての家庭

前きに申した通り田舍へ遷らるゝ第一の理由は、閑靜の生活を要むることと、第二に幾許か客來が少なくなつて、眞面目に新聞事業に骨折りの出來ると云ふ事と、第三に末女の健康を助くると云ふ事にてあつた、併し引遷られた後は、第一第二の希望は充分に達し得られざりしも、確かに第三の希望は滿足に得られたのであります、夫故へ近頃末女の健康は最早や普通以上で醫者などは、驚ひて居る位であります其代りに、庭内には運動の道具と、塲所が出來て、何不足なく備つて居ります、夫人には兼ねて官立小學校の大に不完全なることを慨嘆し居られし結果、小供の敎育は、全く家庭に授くることに決心されました、夫故へ州廳からの許しを得て、官立小學校をブ氏の家庭内に置かれ、自ら敎師を聘して、小供二人と、其外市内の懇友の小供三人都合五人から成立つ小學校を立てられて居るので、亦私と長女ルースとは每日朝の七時十分から、夜の七時十分まで、市の大學校に行て留守であります、息子ウヰリアムも又每日午後二時から五時まで、羅甸語と音樂とを學びに市迄行きましたが、近頃からは全く内の學校を廢して、市の中學校へ參りて居ます、末女グレースも其通りで今は每日市の中學に通つて居ます。

△下女下男に對する待遇

ブライアン氏は、多くは留守勝ちであるから、家庭の事は全く夫人に任せてある、夫人は至極平和な且つ鷹揚な人にて、下婢僕等に對しては、常に放任主義である、即ち夫人は兼ねてそれ〴〵婢僕の爲すべき職務を命じ置き、少しも干渉をせられませぬ、併し若し己れの職務を怠るか、或は他の職務に干渉する者に對しては直ちに其人を免雇する事になし、決して別に苦情などは云はれませぬ、又働き人が外出又は旅行など致す塲合には、其人が他の内の働き人に己れの務を依賴し置くか、若しくは更らに代理

人を頼みて置くか、其人の自由に任かしてあります、又日曜には皆此等の人にも晝から休みを與へるが例になつて居ります。

下女三人(一人は料理人、一人は給仕人、殘りの一人は室内の掃治をなすもの)に對しても同樣で、全く其人等の銘々の考へに任かせてある、併し料理人は毎日其日の料理物等を夫人に尋ねることを例と致します、宿り客が殆んど一週間に四人の割りで、三人が男で他が女であります、客來の場合には、夫人が自ら下女等に凡てを云ひ付けることが常例となりて居ります、毎週水曜から金曜まで、毎日午後二時から十時頃まで、女中が交り番に外出致しまして、自分の用を足します、月曜は米國一般の例としての洗濯日で、女中は皆多忙であります、火曜日には夫等の洗濯物の始末をなし、土曜には日曜の準備に朝から夜まで忙がしく、日曜は晝飯後即ち三時頃から市に出で行きまして、夕方教會に參り、十一時頃歸りて來るのが例であります、私の考へにては米國の下女下男は、割合に氣樂なものでないかと思ひます、こんな按排でありますから、夫人の下婢僕に對する待遇法は、先づ放任主義と云つて差支へなきこと、考へます。

△平民新聞(カムモンナー)と夫れに附帶する事

一千九百一年の末、彼の「バフフハロータイムス」の持主として有名なる「マリク」氏の勸めに由て、プ氏は平民といふ新聞を發行さるゝ事になりまして、印刷所と事務所とを市内に設けられた、先づ初めの中は、只自己の政見を發表する機關となして、別に利益などには關係なきものでありましたが、創刊早々より非常なる勢にて需要が増し來り、今日の所にては年々五十萬位を出す樣になつて居ります、夫故自然今日はプ氏も全く新聞事業家として世に出なければならぬ樣な工合に成つて參りました、併し元來の氏の本職を申さば、純粹の政治家でもあり、亦演説家でもありまして、其れよりの收入は實に莫大なるものであります、併し今は先づ政治家と演説家と、新

聞事業家と、兼業にて、平民新聞の主筆欄丈けは、大概自分で書くことになし、其他は皆メットキャフと云ふ名高き記者に委ねてあります、其新聞業の事務長としては、ブ氏の弟チャーレイ、ブライアン氏が當り、演説契約等は、ブ夫人と弟チャーレーとの間に相談をして遣られます、弟の方は市内の事務所に居て、ブ氏の業務に對する文書の應答をなし、亦夫人は個人に對する書面の應答をせられます、其内に參ります書面の分にても日々平均四十、其外五十余の新聞と雜誌が參りますが、此新聞雜誌等は、皆毎晩私が檢閲しまして、必要な事丈けは切拔て置きました。

△收入と費用

氏の收入は少なくとも新聞事業よりのものを別にして、月に三千弗と云ふ大金に上りますが、其内下婢僕等への拂ひが、月に二百四十弗位ひ其他の諸費用として、家内に屬する分が、彼是れ八百弗位に上ります、此收入は只單に演説料のみであります、其新聞事業より入る收入と、費用は、亦大きなものと察せられます、右の比較から云ふと、月に餘程の餘剩金が出る樣でありますが、實際は左樣でなく、寧ろ豫想外に費用が嵩んで來て僅かの餘りしかないと云ふ樣な事であります。

△日曜以外の毎日の生活

毎朝家族の起る時刻は、午前七時と大概極りて居りますが、下女等は皆六時半に起きます、皆起き揃ひますと、七人の家族(ブ氏夫婦、小供三人、夫人の嚴父及び私まで)が一緒に第二の客間、即ち「シッチングルーム」へ參りまして、夫人の聖書の講讀を四分間位聞きます、次で夫人の嚴父の祈禱を三分間とし、最後に皆が祈りを致し、夫れより直ちに食堂に集り、此所で又食時に對する老人の祈禱が濟み、食事が仕舞ひました後に、皆銘々の業務に就きます、故に晝飲は極く少なき人數で、淋びしきものであります、併し夕食の賑やかなことは又一通りではありません、此時始めて銘々が其日の出來事を話します

が、プ氏夫婦は常に小供等の學校の成績を聞くことを無上の樂として居られます、申す迄もなく、小供等の報告は、皆な素より事實でありますから、時には惡ひこともあるが、大底は其報告中の尤も賞すべきもののみを拾ひ上げて、過分に譽むることを勉められます、私は此家庭教育を呼んで、積極的家庭教育(ポジチーヴ、ホーム、エヂユケーション)と稱します、此方法に據ると、小供の頭には善い事を致したひと云ふ考へが這入りまして、自然に惡い事が出來ぬ様になります、若し其教育方針が、消極的家庭教育(子ゲチーヴ、ホーム、エヂユケーション)であるときは、兩親は小供の報告中の惡い所を拾ひ上げて叱ると云ふ様になりますから、小供には善い事をするより寧ろ叱かられない様にとのみの觀念に止まり、自然思想が低くなりて參ります、右様にプ氏の家庭教育方針が積極であるから、皆小供の考へが非常に強健で、又活潑で、高尚であります、食事が仕舞ひますと、一時間程音樂が始まり、七人が一緒になつて歌ふやら、舞うやらで大騒ぎをして、夫れから銘銘書物を見るやら讀むやら致し、十時頃寢床に就きます。

△日曜の生活

米國人には日曜は非常の興味のある日であつて、旅人でさへ、出來る丈けの都合をして、家に歸り、家族と同じく食事を致し、又運動遊散をも致さふとするので御座りますが、實に樂み多き所謂眞の安息日であります。

プ氏の内にては、日曜日に家族の起きます時刻は、大概八時半で、夫れより例の如き儀式が終り食事が濟み、直ちにプレスビテリアン教會への仕度を致しまして、十時三十分迄には、是非會堂に參ります、最も夫人の嚴父は、老年の事と云ひ、其上盲目で外出の出來ぬ所から、留守居をしてをられます、教會からの歸りが、丁度一時過ぎになりまして、趣味ある晝飯を二時半頃に終ります、夫れから皆な銘々に馬車にて郊外散策を試みます、歸りますと、下女等

は皆外出致して居りますけれども、最早や夕飯が食堂に準備してあります、夫れを仕舞ひまして、音樂が始まり、後又夜の教會に行く人もあれば、早く床に就くものもあつて、夫れは銘々の勝手で御座ります、夫れ故に日曜日は二食で濟ますのが一般の習でありますが、ブライアン氏の内では形の如く夕食を致しますから、矢張り三食と云ふことになります。

△家庭に於ける獨立志想の注入

獨立といふ事は非常に貴きものにて、米國にては此思想を小供に注入することを熱心に强めて居ります殊にブ氏夫婦に於ては、此點に深く注意して居られます、第一其手段として、ブ氏夫婦は小供を無暗に使ひませぬ、若し使ひました時には、必ず報酬を與へます、假へば手紙を郵便函迄持て行けば、其代りにペンを一ッとか、鉛筆を一本とか、又は鷄に水を與へ、餌を與ふれば卵を幾ッとか云ふ様な工合にしてあります、決してタヾで金を與ふることのない代りに、又タヾで使ふことを致しませぬ。

一寸右に附帶した話で、大に参考するの價値ある話しがありますが、或る日の事で、息子ウヰリアムが友人を連れて來て、球投げを廊下で始めました、ところが過て硝子窓を破碎しました、其硝子窓の價は十六弗で、丁度日本の三十二圓に當ります、併し兩親は夫れに付ては何とも言はれなかつたので、丁度其翌日息子は教師の來りしを幸に、前後の始末を話し、意見を聞いた、其時教師の語るには「夫れは素より兩親が、汝に向て彼れ是れ云ふべき必要がない、何故となれば兩親は汝の碎きたるものは、汝に由て償ふものと信じて居るからである」と、終に息子自らも其道理なるを知りて、直ちに兩親に願て、毎日一時間づゝの働き口を要求した、兩親も快く其希望を容れて、數ケ月の後に其十六弗の金を息子に支拂ひ、この一事に就いても、ブ氏夫婦が、小供に與ふる家庭教育の眞髓が解ると思ひます。

ブ氏夫婦の性行

ブライアン氏は、元來優さしき寛大な、快活な、至極慈悲深き、涙多き、小供や女子の馴れ易き人でありますが、其他面の實際から考へますと、剛膽な、不屈な、自信強き上に、富を貪らない、貧を避けない、所謂正義の爲めには身をも顧みぬと云ふ立派な人物であります、併し其夫人に至りては、又少しく趣きを異にして居ります、例へば、嚴格に過ぎて如何なる事情も假借せぬと云ふ點、不義者の前には、一涙の同情を持たず、貧を哀れまず、富を喜ばず、只正義を以て物の是非と、自己の進退を裁判する利器となす人であります、夫故へ夫人に付て時々下も過の酷評もあれど、其は皆夫人を解釋し得ぬものであると考へます、兎も角も此ブ氏夫婦の性行が、多く相反して居ることは事實でありますが、永き七年間の内に、未だ嘗て家庭に風波の起りしことがなく、又夫婦間に爭論の起りしことのあらざりしは、素とより此夫婦間に於ける相互の意思が、相通じ、相投合して居つて、所謂る夫婦間の眞の愛情と云ふものが、堅く結合致して、到底風波と爭論とを起す餘地を與へぬのであると信じます、若し又私の哲理を以て、家庭調和の眞理を索めますならば、其は實に夫婦の性質行動の相異するにありと信じます。

訪問の心得（續き）

菊池雪子

親密の訪問

着實な勉勵心があつて、浮雲の虚榮を求めず、專ら家庭の生活に快樂を覺ゆる眞面目な婦人の取りては、世間に對する義理の訪問は煩はしく又困難な勤なのでたゞ據なくいたしますが、其報酬としては、今度は氣遣なく胸襟をうち開けて話すことの出來る親密の訪問なるものがございます、之れは此樣な婦人のために最も甘き慰籍になりますのです、親友といふのは數多い世間の人々のほんの一部のに與へられたる、實に得がたく貴い、親睦を示すなつかしい呼名でございますによつて、二友の間はある親密な

鎖でもつて、繋つて居るやうなもの、さて此の鎖を切斷ないやうに保つには、意を用ゐなければならず放任して置ては、錆が出て、腐るものであります。

朋友の數は少ない方が宜しうございます、而して互に眞心を盡すところの眞實の友でなければなりません、友から信實を盡された時には、我よりも充分に誠實を盡さねばならず、又友に向つて此方から衝突の種を播ないやうにし、又た友は我に向つて何を切望して居るかと寛大な心を以て交はれば、茲に始て親友を作ることが出來るのであります、親友間の鎖を切斷せずに長く續かせ、互に悦びつゝ交際しまするには、克己がなくてはなりません、友のためには我身を顧みず、得失を計らず、我が家庭に暇がありまして先方に喜ばれる限り、幾度も訪ひて、親密なる談話を致すがようございます、友の家に行きますときは、慇懃を盡し、衣服は清潔なるを着、相當に扮粧をしても化粧などに潤飾を施さず、淡泊に質素に、身じまひをするのです、殊に自己より身代の富んで居らぬ友でありますれば、猶更此處に注意を缺きましてはなりません、如何なる場合でも、自負心より起る競爭を止めなければなりません、衣裳の競爭に勝ちましたからと云つて、自負心を滿足させたところで、何も効はございません、たゞ水中に游ぐ金魚と匹敵する位でございませう、けれど、動とも致しますると、婦人は此點に大々競爭を試みるもので、學識がない、無能な婦人すらも、美服を着て、したり顏して朋友の間に交際を結ばうとしますが、識見あり德ある婦人となると、ソンナ人には洗足で逃げ出して、決して親密な交際は致しません。

親密の訪問には、時の制限がございません、何時いたしても宜しうございますが、家政の用向、子供の世話、慈善事業、食事の際、運動に出掛ける間際などに行きますことは不遠慮でありますから、斯る場合に行くと、禮を知らない不了見の者と見られます。

如何程親しいと云つても、外國人の所に行きまし

たらば、謹愼を守らなければなりません、活潑を通り越した處女、家庭敎育のないお孃さん方は、お友達の家に行つて、室内の押入を開け、机の引出を覗き、書物手帳類を自由に開け廣げて穿鑿し、召使に遠慮もせずものを命令るなど、氣儘に遣ることがないでもございませんが、之れが爲め快樂幸福であつた所の友情が變じて仲違いなど嫌なことの生ずるものです。

訪問に長い時間を費してはいけません、話も盡き除々興がなく成るやうになつたならば、暇を告げて、機敏にしかも怜悧に退かなければなりません、常に近しくして居る朋友なれば特別ですが、さもなくば、人が入り來ました時は、椅子より起ちて其場を退くのでございます。

慈善の訪問

以上申述ました訪問の種類の中で、慈善的の訪問が最も大切な結果最も喜ばしい眞の樂となるのでありまして、之れは訪問中の實に高尙な神聖なるものでございます。

慈善の訪問には色々ございますが、先づ貧に迫られて居る破れ家、薄暗い裏店社會、人間の數にもかぞへられない哀れな家族を尋ねて惠を施し、日夜貧苦に呻吟して居る人々の傷を癒して遣りますならば實に人の心身を救助けることになります。

難儀する者に慰藉の一言を與へ、贅澤物を節儉して貧困者に財を施し、老人を見舞ひまして面白い書物を讀んで聞かせる事抔も正しく慈善の訪問でございます。

猶例を擧げますと種々ございますが、今日は小春日和のうらゝかな天氣で、紅葉狩に誘はれ、祝祭日に愉快な園遊會を催すとて招かれ、心合ふ友達うち連れ立ちて菊見などに出掛るのを、病の床に惱む一人の友を見舞に行つて、自分の快樂を節して參つた樣子を少も表はさず、慰めたり、力を添へたりする孃さんがあるとすれば、之れも立派な慈善でございます。

病人の中にも不治の病に罹つて不具と成り、生涯病床を離れる事が出來ぬ者は、病苦のために多くは短氣になり、我儘を云ひ、年月重なるに伴れて兄弟朋友又は親までにさへも厭られてしまいますが、此等の人を見舞つて、病人の氣に逆はぬやうに、除ろに慰めますれば、日々面倒を見て看護して居る親兄弟よりも、病人に取つて非常に効能ある事は間々あるのでございます。

此の種の訪問を致す時の事を少々お話申ますが、髮飾、服裝等は訪問の主旨と目的とに調和するやうにしなければなりません、如何なる訪問の際にも、化粧に依つて先方に禮義を表はすものでありますから、貧しい者を訪ふ時は、決して輕佻な婦人の致す如く、流行の美服を着、金銀寶玉の時計指輪抔をきらめかして行くやうでは、自分のみ慈善を盡したと思ひましても、斯る贅澤な風采は却つて其の目的を破毀してしまい、羨望の念を起させるか、言語と外觀と相反して居ると云ふ感覺を與へるか、何れにしても、餘り好い結果は得られません。

されば、喪中悲哀に沈んで居る朋友を慰めに行く時には、出來得る丈、質素な衣服を着て、友の憂に同感の情を有つ確證を示さなければなりません、華美やかに粧うて行きますれば、先方の心中に、我も嘗て如斯樂しい境遇に居つたものをなどと、自然思に浮ばせて心中を煩はせますから。

病床に居る朋友から呼ばれます時は、前と反對に、黑つぽい質素な衣服でなく、華美色のぱつとしたのを着なければなりません、之れも前と違つて悲しげな感覺を病人に起させないためでございます、容貌はにこ〳〵して、活潑な態度を見せ、靜に暖い心を以て、愛情込めた談話をなし、病人の話を遮らず、病苦の樣を語るのを聽き、又其の話を他に移らせるなどに注意せねばなりません、さもないと病人の感情を害し、不快の念を起させるのであります。

嫁娶の訪問には身分に從ひ、美服を着け、裝飾を立派にしてあらゆる贅澤を盡して宜しうございます

茲にちよつと注意しなければなりませんことは、大切な場合とさまでもなき時とをよく識別致しまして相應に扮粧を致さなければならぬ事でございます。

訪問と服裝とは相伴つて一致しなければなりません、内部の感情、禮義、節儉、秩序、謹愼などを外部に表はすのも服裝でございますから、つまらない婦人のやうに、贅澤に粧ふを幸福とか榮譽とか思ふのは、誠に智識淺はかな、卑賤な笑ふべき事でございます、眞に婦人の價値を保たうと思はゞ、扮粧は一の義務であつて、稀には樂しみに致しても、決して之れを樂しみの爲のみと思つてはなりません、のみならず、如此無益な思想を以て、世の中に日を送る婦人は、實に自分から眞面目に家庭を維持することが出來なくつて、主婦の名を汚し、輕佻浮薄無能力の女子たることを示して居るので、つまらぬ競爭嫉妬などを起して、人の感情を惡くし、家庭に不和を生せしむるものであります。

家族の間にすらも葛藤の絶えぬのは何のためでありますか、よく其の深奥を探つて見ますると、互に虚榮心を充たす事が出來なくて、不快の感が起つたとか、自負の心を滿足せしめたとかに基くのです、況て他人の間には、よく〳〵此邊に注意せねばなりませぬ。

（をはり）

防寒と毛布

倭翁

昔元祿の朝鮮戰史に我が從軍者の中に指を墜すものがあつたと書いてある、その指を墜したとは凍傷に罹つたのであります、以て當時我が軍が防寒の用意が出來て居なかつたことが知れます、今は昔と異り軍隊衞生や軍需品の調度や其筋に充分の準備の出來てあることは、彼の萬事に拔目ない外松經理局長がペスト病發生以來一匹五錢宛で買上になつた幾十萬匹の鼠を剝製して防寒の耳袋を調製されたと云ふのを見ても知れます、されば先づ幾分の安心が出來ますものゝさて寒氣の酷烈なことは内地人の想像の及ぶ所でありません、先頃第二軍補助輸卒附の佐藤憲

兵伍長より來信の中に「氣候劇變して急に冷氣を加へたのには、一驚を喫した、一昨十八日（九月）の降雨から、俄然十四五度を降下し、大に面喰つて鞄の中から冬ズボンを出して着たが、之れでも尚足らずして、坐ろに防寒用被服の必要を感じた、先頃土人が此の地には秋と云ふものが無つて、夏から一足飛びに冬に入るのだといつたのを聞て、何だい嚇すなと笑つて居たが、斯うなつて見れば、土人の言つた通りだ云々」とありました、今や内地は漸く晩秋で所謂小春日和の暖かさには肌着の一枚も脱ぎたく感づる位ゐでありますが、我が皇軍の戦ひつゝある滿洲の地は雪は降る氷は結ぶと云ふ早や嚴冬の光景であります、この先きの駐軍の苦しみが思ひ遣られるでありませう、ですから如何に其筋に手落なく行届いて居ると信頼しつゝも、夫の遠征を懷ふ妻女が燈下に靴足袋を編んだり、伜の出陣を懷ふて秋窓の濕袍を縫へる老媼があるは、誠に同情に堪へられません、そこで彼の國民後援會など出來て毛布の献納の擧ある如きは最も時を得たもので實に美擧と云はねばなりません、時節柄以上防寒と毛布とに付て御話を試み、一讀を要請いたします。

▲日本人は寒氣を恐れず

我が日本人は家屋の構造や衣服の習慣によつて、常に身體を外氣に觸しめるやうになつて居りますから自然と皮膚が健康で、寒氣にも比較的耐へ得らるゝのであります。

我が參謀本部で初めて、西比利亞を旅行せられたは陸軍歩兵中佐菊地節藏君であります、君は秋田縣の人で明治十四年參謀本部から命せられて露國軍艦トングス號に乘組み、浦潮斯德に滯在すること前後三回で、彼の各地方面を探險されました、次には明治十五年再び浦潮斯德に赴任を命せられ、更にブラスゴウエシチエンスクに滯在を命せられましたので、君は冬季旅行を思立つて十二月中旬を以て橇車旅行を企て翌年一月中旬に彼地へ無事到着されました、君がその途中ハバロフカ府で軍務知事から午餐の饗

應を受けられたが、時に知事はふと君の外套を探つて其の甚だ薄きを見、驚いて云はるゝには、「なぜ斯る烈寒中に斯樣な薄い外套を用ゐなさるか日本軍人の無謀な事には實に喫驚した、これから北は寒威は殊に酷しいから、足を失ふやうな事もあらう、御用心なされて十分防寒の用意なさるやうに御忠告いたします、」との事でありました、然るに君は這は寒中旅行の試驗の爲めであるかと、體よく好意を謝してさて其まゝ旅行をつゞけて目的のブラスゴウエシチエンスクに着されたのであります、十六年の秋にバイカル洲からイルクトスク府に到り、キャクタ、賣買城等の視察を遂げ、それから黒龍江を下り、ニコライスク港を經て、薩哈嗹島アレキサンドルスクに北部首長を訪ひ、南部コルサコフを經て沿海洲の各港を巡視し歸朝されました。

十七年の秋に三たびブラスコウエシチエンスク府に赴かれ、專らアムール哥薩克兵の聯隊に就て親しく研究され、翌十八年の秋に滿洲に入つて黒龍江省愛琿、墨耳根、チゝハル城に於て彼の地の將軍に招待せられ、親しく練兵法等の觀察を遂げられました、それから松花江中部の富源地なることを知つて、是非探りて見やうと思ひ立たれたが、彼の地方は清國で極秘密にして居るのと、當時馬賊の交戰地でおつたのとで、折角の希望を妨げられ、轉じて伯都納街道の方面に出で所有る妨害を受けながら、辛くして其目的を達し、爲にこの無限の富源地は初めて世上に紹介せられたのであります、此行は三姓城から先年清の呉大徵將軍が靖邊軍を督し開設した、寧古塔に通ずる秘密の軍道を探り、同方面の形勢を審査しそれから吉林、奉天、遼陽などを視察し、且つ遼河河畔の形勢を觀、牛莊を經て歸朝されたのであります、これ福島少將の單騎旅行や、廣瀬中佐の橇旅行より遙か以前の事であります、君がブラスコウエシチエンスク出發の時に、軍務知事はデレマーク食品を携帶なされと注意して、呉れたに係らず、君はそれさへ用意しないで、彼の地方住民と同じ食事を

爲て唯多數の蠟燭のみ用意して携へられたから、此地の土人から君は蠟燭を喰ふにやなどと頗る異樣に感ぜられた、而もこの蠟燭が君に取つて最も貴重品であつたので、三更人定てから地圖を引き紀行を書かれて、以て不滅の土產を齎らされたのでありました。

菊地中佐の事情は日本人の寒氣に强い一例であります、實に日本人は寒氣と對抗することが出來ます、又寒氣を恐れません、併しこの恐れない處から日本人は失敗を取るのであります、日清戰役のときでも無頓着なる我が邦人は元氣に任せて雪中を薄足袋一枚で步き廻つて、體の凍傷し手足を失ふやうなことも出來ました、勿論日本內地の寒氣と滿洲邊の寒氣とは比べものになりませんが、我慢强き邦人の常として、薄き外套一枚で、一冬を凌ぎそれで身體の强壯を誇る風がありますが、それは到底永く身を保つ仕方ではありません、一兩年の內には必ず種々の病を發することとなります、ですから防寒の注意は能ふべき限りせねばならないのであります。

▲露人は一番寒氣を恐る

露人は寒國人であるから寒氣は屁とも思はないであらうと思はれますが、中々そうでありません、寒氣を恐るゝと虎の如しで、人爲的防寒に專ら力をいたす結果、少しも皮膚を外氣に觸れしめない、爲に頗る皮膚が薄弱となつて少しでも寒氣に感ずれば直ぐ寒冒に罹るのであります、曾て僧侶が布敎の際、罪惡を重ぬると焦熱地獄に陷ると云つて、地獄の繪圖など示して說法して居ると、段々信者がなくなつて來ること不思議でならない、依てその原因を調べて見ると、彼等は少しでも、罪惡を冒して地獄へ落ちて、火焰の暖き處へ近づきたい希望であつたと云ふ話があります、こんな工合でありますから露人は九十度の暑中に厚き羅紗の外套を纏つて額から玉なす汗を流しながら、平氣で横行いたして居ります、之に反して寒氣を恐るゝことは先天的でありますから、隨つて防禦方法が完全に講ぜられて居る次第で

あります。

▲防寒具

防寒には一箇所でも欠點があつては駄目であります衣服のみ綿や毛で以て温かく拵へてあつても、頭部手足部等で一箇所不完全な所があれば、その場所を傷ふ爲に全身の活動力を失ふ恐れがありますから今露人が防寒具の有樣を一通り申上げて、參考に供しませう。

○靴　足に充分の餘地ある大形のものを用ゐるのであります、丈夫にして大なる靴を穿き、足を毛布或は麻布で幾重にも輕く膝の邊まで卷き上げ、まだ餘地ある靴の内には、枯草なり毛屑なりを入れ置くのであります。

○上靴　露名はカロージと云ふのであります、普通靴の上に穿くもので、其内部は温き毛氈類で造り、外面はゴムを以て拵へてある、底もゴムに切形を付け氷上を行く時に滑らない樣にしてあります、此の上靴だけで、脛部の寒さが耐へられない時は、我が國の脚絆甲掛の樣に羅紗製か毛布製の脛當を用ゐて居ります。

○長靴　露名ではカートンカと云つて、膝の上まで及ぶ長靴であります、この靴を穿くときは、足部の冷ゆる心配はなくなります、如何なる極寒の候でも寒氣の徹することはありません、夜番又は番兵の如きは此の長靴を穿かなければ夜間猛烈なる寒氣を凌ぎされないと云ふことであります、此長靴は毛にて製つたものじやそうで、水濕の場所にては内部へ浸みる恐れがあるから、底の外部に皮を蔽ふてあります

○外套　重からずして暖かいものを用ゐるのであります、重ければ少し運動すれば發汗し、靜止すれば汗が冷えて非常の寒さを感ずるものですから、成る丈け外套の輕いのを用ゆるのであります。

○帽子　種々ありますが、頭部の暖いやうに、又頭巾を被るに差支ないのを用ゐます。

○頭巾　これは我が國の外套に附屬したる頭巾に、巾廣の紐を付けたやうなもので、頭巾と襟卷とを兼用

させるのであります、これは帽子の上に頭巾を被り耳は勿論、襟から口鼻の邊まで卷き、僅かに目計り出す樣にするものであります。

◎手袋　普通のものを用ゆる上に、屋外にて勞働するものに限り、拇指丈け分れた大手袋を用ゐて居ります、其手袋は毛屑を入て非常に温かいものであります。

▲毛　布

さて防寒第一の需用品は毛布であります、從來我が國では如何にしてその需用を充たしつゝあるか、この貴重品は差當り滿足に供給することが出來ませうか、我が國斯業の現情は如何でありませう。

◎◎◎◎◎内地の製造　毛布の製造法は他の織物のやうに複雜でありません、隨て器械の如きも簡單な機織道具で充分間に合ひますから、在來の機屋で毛布製造に從事して居るものも少なくありません、今日會社組織の製造所は、品川毛織會社、島田毛織會社、東京製絨會社、大阪毛布會社、日本織物會社で其他は官業の千住製絨所と、泉州堺や尾州名古屋邊の機業家で舊式の手織道具を用ゐて製造するものであります、而して一ヶ年の製品高は、品川毛織會社で二萬組、東京製絨會社で五千組、島田毛織會社で三千組、大阪毛布會社で六千組、日本毛織會社で四千組、泉州尾州地方での製出總額約二萬組であります、此等は皆內地の需用に供しつゝあるので、猶ほその不足は此外に海外よりの輸入品で補ふて居る有樣であります。

◎◎◎◎◎和製品と舶來品　近年著るしく斯業の發達した爲めに、大抵は和製品の方が舶來品よりも、遙かに勝つて居るので、舶來品の格安なるにも拘はらないで、和製品が歡迎せられて居ります。

最も一枚十二三圓から十五六圓もする最上等の品物となると、和製品はまだ到底舶來品に敵する事が出來ません、併し上等品は需用者が少數でありますから和製品に取つて別段痛痒を感じませんが、さて歐米より賃金の安い我が國で製造したものが、却て外

國製品より高價なるは、一寸受取れにくい話しでありますが、其原料の羊毛が內地で得られないから不廉なる輸入品を用ゐる爲であります。

○○○○○

色毛布の變遷　十年以前までは赤毛布が最も勢力があつたもので、之に次ぐものは靑毛布で、白毛布に至つては甚だ需用が少なかつたのであります、所が二三年前から著しく變化を來して、一體に內地では白毛布でなければ賣れない有樣で、彼の東京見物に來る地方人でも昨今は白毛布を纏ふやうになりました、赤毛布は僅に其名にのみ殘つて、其實は少々支那朝鮮へ輸出せらるゝ位ぢやそうであります、又陸軍用のものは、乘馬隊では鞍下敷として鼠色毛布を用る、步兵隊ではもと將校用が白色毛布、兵士用が赤毛布と極つて居ましたが、今度は將卒の別なく一般にカーキ色に改正されました、獨り赤十字社丈けが依然白毛布、赤毛布を使用して居る位であります。

○○○○○

輸入の羊毛　毛布製造の原料である羊毛は、內地の產出としては下總の御料局に飼養せられてある羊一萬頭が主なるもので、其他各地にて飼養するものから得る羊毛は、一ケ年五六千圓位で、到底多くの需用を充たすとが出來ません、所で會社は勿論のこと個人の機屋でも稍々規摸の大きい處では、全然輸入品のみを使用する事となつて居ります、隨て斯業の進步に連れて輸入額の如きも明治二十七年度では五十萬圓でありましたが、三十年度には一百萬となり更に三十六年度には四百六十萬圓に增加いたしました。

さて一方毛布の輸入は如何と申せば、廿七年度には五十五萬圓、二十九年度には二十萬圓、三十五年度には僅に十二萬圓位しかありませんでした。

防寒員の主位を占めて居る毛布の年々製造高は上の如くで、大抵概算することが出來ませうし、又その製品は一年限り消耗して仕舞ふと云ふのでありませんから、熱心なる後援會有志諸君の盡力で充分需用を充たすことが出來ませう、所で先きに申ましたや

うに防寒には一箇所でも缺點があつては駄目ですから、靴足袋なり、手袋なり、襟卷なり、頭巾なり、腹卷なり、凡て不自由を感じないやうに成る可く致したくぞんじます。
是れには是非天下の女性を煩はさんければなりません、日本人は能く寒氣と對抗し、寒氣に辟易する軍人ではありませんが、若し世の女性の後援で以て、防寒が完全に出來たならば、一層目醒しき活動も出來やうと思はれます。

（完）

冬の衛生

小畑蓬城

氣候の暑い寒い、空氣の乾燥濕潤が、人の身體に及ぼす關係は大したものです、誰でも知らるゝ例を以て言へば、極めて暑い日や、極めて寒い時やには不快を感ずる、それは、血液の關係から、腦髓が混亂するためです。
此の腦髓の不快といふことが、身體の衛生に大關係があるので、不快な時には、氣が沈んで、爲すべきことを爲なかつたり、或は運動を怠つたりして、それから生ずる害がなかなか容易ならんものですが、さういふ間接のことは別として、概して寒い時に直接罹り易い病氣は、内で風邪、外で凍傷、彼の凍膕や裂腐などです。
感冒といふものが、諺にも萬病の基といふ如く、いろ〳〵なものに變じたり、媒介したりするものでして、通常風邪位として、放置て置くなどは大變な間違です、彼の忌むべく恐るべき肺病の如きも、發病の初めは多く風邪に依つて誘はるゝですが、それより、もつと近いことは、風邪を引いて、鼻液が出るのを、幾度も〳〵捨てゝ置く爲に、鼻を惡くし、鼻が惡くなれば、神經の交感作用で腦が惡くなるので時には是が爲に死に至ることがあるのです。
感冒が氣候に原因することは慥ですが、現今の學理では、單に氣候のみでなく、倘ほ一つ何か原因があるに違ないけれど、未だ、如何いふものか、病理上

解らないのです、だから、或醫者や素人の或者は極端に恐れて、襖の隙から漏る丶微少の風をも苦にして防がうとしますが、かう心弱く恐る丶のは、寧ろ感冒に罹る助にこそなれ、防ぐの利益は更にありません。

一體、暑い時には小血管へ血液の流入することが盛ですから、隨つて體温も膚際へ浮く譯で、膚際に浮く體温は外氣の爲に奪はれ易いです、然し過度の體温が體内に鬱結して居るよりは散ずるだけ散じた方が可いのですが、寒冷の時には、膚際の小血管に血液の注がる丶ことが盛でないに拘らず、外氣の爲に體温の奪はる丶ことが烈しいから、相當な方法を以つて外氣を防がないと風邪に罹ります。

但し、皮膚の外氣に對する抵抗力といふものがあるから、外氣を防がんとするが爲に此の抵抗力を傷はない樣にしなければなりません、此の事は倘は後に說きます。

既に感冒に罹れば、鼻なり、口なり、喉なりの局部に、血液の瀦がる丶ことが增加しますから、其の部分の粘膜は薄紅を潮して、腫起りますから、局部々々に應じて、噴嚏、咳嗽、羞明といふて明ひ光線のまぶしいこと、咽喉の乾燥ぐ樣な感覺、嗄聲などいふ症候があつて、粘液の分泌即ち涕液や啖やが多くなります。で、關節僂麻質斯といふて節々が痛むの、筋肉僂麻質斯といふて通常風毒と稱するもの、腰痛、疼痛性神經病即ち顏面痛、腹部疼痛などいふものも感冒の一部で、又、呼吸器病、消化器病などを併發したり、時に依つては眼や耳やを侵すこともあります。

呼吸器病、彼の肺炎氣管支炎などいふものは、寒い時に冷た空氣を急に吸ふから、肺炎は肺が風邪を引き、氣管支炎は氣管が風邪を引くのですから、寒中に口で以つて、冷えた空氣を吸ふことは愼まねばなりません。息も精になる寒い朝などに、口を開いて深呼吸をして居る人を折節見受けますが、あれは最も悪いので、何でも深呼吸は鼻ですれば可いといふ素

人考でせう。
一體人の身體の道具立はそれ〴〵の必要があつて備はつてあるので、鼻の孔は、空氣中の塵埃を除くと共に、寒い時には空氣を温める作用をするのです。で、鼻孔の中には、鼻甲介骨といふ、薄い骨が三段になつて居る、其の一段每に唇の樣な紅い皮が被さつて、皮の下には海綿狀のものがある、其所から粘液が分泌して、空氣中の塵埃を取つて涕液になつて出たり、香を嗅いたり、寒い時には空氣を温めたりします。ところが、風邪に罹つて、彼の海綿狀の所が腫る、涕液が出る、放つて置く、これが度々になると、鼻甲介骨増息といつて、腫れた儘で原の樣にならぬやうになり、それが爲に頭に大變の害を及ぼしますから、之を防ぐには可成風邪に罹らぬ樣にし若し鼻が變だと心付いた時には、早速専門の醫者に診せるのです。
人の精神といふものは、必ずしも腦髓にばかりあるのでなく、身體中に充ちて居りますが、言はゞ、腦髓は精神の政府ですから、腦髓の活潑と不活潑、爽快と不爽快は精神總體に關係し、精神が衰へると、血行が不活潑で、血壓が沈降します、血壓が亢進すれば身體も暖で、外氣に對する抵抗力も强いのですが、血壓が沈降すれば、寒い時にはいよ〳〵寒く、忽ち感冒を引く譯ですから、常に精神を安靜に保つて、氣が充つる樣にして居らねばなりません。
精神さへ慥ならば、感冒に罹る樣なことは無いと、禪宗坊さんなどの言ふのは、右に申す道理に能く當つて居るのでござります。設例ば、詰らぬ者が失望すると、落膽するから風邪を引くが、豪い人は、失望する樣なことがあつても、落膽なんかしませんから、精神と共に血行も盛で、血壓も普通ですから、風邪を引く樣なことは滅多にありません、寒い時に非常に屈托して、其れが爲に、何時の間にやら風邪を引くことは誰も經驗があるでせう。
食事の後には、凡そ五六時間かゝつて、それを消化して滋養分だけを乳糜管といふものから靜脈に送り

静脈から心臓に入つて、動脈の血液となつて、身體中の骨や肉やに滋養分を分配します。ところが、骨や肉も、新らしい滋養分を取ると共に、古い滓（退行變成物といふ）を捨てること、人間が口で食して滓を糞すると同一ですから、食後五六時間は取つては捨てゝ居ますが、それから後は捨てるばかりになります、ですから、寒い時に空腹で居れば風邪を引き易いのであります、扨てそこで、體温とは一體如何いふ譯のものかといふに、血液が心臓から出て身體を循環る前、小循環といつて、肺臓の周圍を循環ります、其の時、血液の中にある炭酸を呼き出して、空氣中の酸素を吸ひ込みますが、此の酸素と、食物中の炭素とが合つて炭素は酸素の爲に燃えまする時、熱を發して體温となるのです。

だから、體温を起すには、脂肪、含水炭素即ち澱粉砂糖などを食すると、多くの炭酸が出來て、體温が増加します。ところが、それにも亦度合がありますから、無暗とさういふ物を食するが能でもありません、大概、身體に合せて度を量るのです、尤も、肉類を食へば随つて脂肪もある譯ですが、肉類には野菜をも併せて食ひませんと、腸の機能が弱うござりまして、肉の滋養分を充分吸收しないで糞便になります。

前にも言ふ通り、暑い頃には外氣の爲に毛細血管が擴大して、血液が多く膚際に浮動すると共に、汗が多く流れて、尿の量が減じますが、之に反して、寒い時には、汗が流れずに尿が多いです。ところが體温は寒い時の方が多く奪はれますから、如何しても體温を補ふ爲に脂肪又は含水炭素を夏よりは多く食しなければならぬ。

尤も、殊更に勉めて之を爲なくても、南清料理よりは北清料理の方が膏こく、蒙古人は北清人よりも膏こい物を食ふ樣に、自然と寒い所にはそれを好むやうです。

要するに、風邪は病理上充分の説明がならぬにも拘

らず、誰も其の罹つたことを知り、又大概は何時罹つたといふことも知らるゝもので、治療の方法はいろ〳〵ありますが、是を豫防して必ず罹らぬ樣にといふことは困難で、統計上雨に濡れても急に乾すことのならない職務の人、設例ば兵士の如きに感冒に罹るのが多いですから、衣服の濕つた場合には可及的早く着更へて、乾いたものを常に着るやうにしなければなりません。

右に申す樣な譯で、風邪に對する豫防方法を言はゞ

一　精神を安靜と旺盛に保つ事

これは普通の醫者さんの言はぬことですが、原來衛生、即ち病に罹らぬ樣に身體を衛ることは、醫者、即ち病に罹つたのを治す人の仕事とは少し異つて、設例ば茲に一個の鐵瓶がある、若しそれが損じた場合に修理すは錺屋とか鑄掛屋とかいふもので、修理す經驗から、如何いふ風に使ふと斯ういふ損所が生るといふことは委しく、隨つて損所の生るを防ぐ方法も知つて居る譯でせうけれど、鐵瓶を滿足に使つて、且鐵味をも能く保つといふとに至つては錺屋、鑄掛屋よりは茶人の方が委しくて豪いです、先達井上醫學博士が、腦病などを治すは醫者の仕事だが、豫防することは教育家の爲ることだと言つて居られたのは寔に當を得たことだと思はれます。

普通の醫者がいふと言はぬとに拘らず、この精神を能く保つことは、病、殊に風邪などを防ぐ上に大切な關係を持つて居ります譯は、前に申す通り精神と血行血壓と大關係がある故であります。

一　呼吸を調製ふる事

先頃長谷川醫學博士の演說中にあつた外、これも普通の醫師の口からは餘り聞かないことですが、このとは、天臺大師の摩訶止觀といふ書に說かれてより、禪宗の人、近くは原の白隱禪師なども熱心にこれを行つた樣ですが、人の呼吸は、身體にある酸素の量と關係して急にも緩うもなるもので力仕事、勞働又は走つたりした時に呼吸の急にな

るのは、組織の筋肉が強く働いて多くの營養分を消費しますから、多くの酸素が炭酸になる其の要らぬ、炭酸を呼き出して、要る酸素を急に吸い入る〻爲、斯う呼吸が急になるのです、で、筋肉中に酸が足れば呼吸が緩うなりますが、呼吸が緩うなれば又血行が不旺になつて、血壓も沈降しますから、息の不揃は血行の不揃を來し、血行の不揃は皮膚の溫度を不揃にし外氣に抵抗する力を不揃にする譯ですから、呼吸を調離へることは健康を保つ上に大必要です。

一 冷水灌頂、冷水拭擦、

共に皮膚の抵抗力を强うする、氣孔を開いて皮膚呼吸を旺にする、血行を促進する、隨つて體溫を增進する、風邪などを防ぐには最も必要ですが、灌頂の方は、身體の壯と不壯とで身酌せねばなりません。

一 衣服の厚さを量る事

外氣を防ぐため、衣服を相當の厚さにすることは寒い時當にすべきところでありますが、俗に着や着寒といつて、厚く重ねた當時は暖いが間もなくそれでも寒くなつたり、頸に物を捲けば、外した時に風邪引いて咽喉を痛めたりする、これは皆、暖いに馴れて皮膚の抵抗力が弱るのでありますから、大概に量つて、見苦しくない限り、寒くない限りは、漫に厚うして弱くするよりは、寧ろ薄うして、外氣に對する抵抗力の強い習慣性を養ふ方が宜いです。

彼の、火に溫めた衣服を着るなど最も宜くないことであります、といふて、已に溫めたものを着る習慣がついて、殊に精神の弱い人など、冷つと感じて、急に回復することがならぬなど、もう其時に風邪を引きますから、已に惡い習慣がついた人は、徐に更めるやうにするのです。

一 激動後の注意

寒中、熾に運動して、體溫が急に增進して汗が出る様になつた時、俄然に運動を止めて、疲勞を覺

えて、氣を緩めたり、放心したりすると、得て風邪の神に襲はれ易いものですから、さういふ時には、徐々と運動を休める、氣を旺にして居るなどの注意がなくてはなりません。

一空腹を補ふ事

空腹を補はねばならぬことは、前にも言ふことですが、これは特に注意せずとも、腹が空いて食物を要することも、寒中空腹で寒いことも、誰とて知つて居ます、が、食物に就いても多少注意して脂肪のあるもの即ち肉類、含水炭素物即ち澱粉の樣なものを食すれば、體溫を增加ことは受合であります。

一濡れた衣服に就いての注意

濡れた衣類の毒なことは誰も感ずるのでせうが、いろ〳〵の事情から、急に着更へることのならぬ人もありませうけれど、可及的注意して着更へなくちやなりません。

大凡は右に擧げた樣なものですが、此外に、單に風邪の爲とではなく、衞生上注意しなければならないことを、寒いが爲に、知らず知らず、又は知りつゝ怠ることがある、それは第一

一換氣

といふことで、朝などは尙更、室の戶障子を明放ちて、外の空氣と、室内の空氣とを交換せねばならない、抑も人の呼息から出る炭酸は身體の組織内に不要だから出すので、身體の爲には非常に毒なものです、西洋と違つて、日本の室は障子だから幾分か宜い樣なものですが、それでも、密に閉ぢ籠つて居れば、室内と室外とは空氣が換りませんから、自然、呼息の炭酸が室内に溜つて、呼吸が詰つて斃れるかそれ程でなくとも、炭酸に中毒つて昏倒したり逆上したりしますから、室内の空氣と室外の空氣とは折折換へなければなりません、普通の人は小い密室でなければ毒にならない樣に思つて居りますが、密閉した室は廣くても毒です、何故といふに、炭素と酸素とが合つて炭酸となるには、双方共に一定した量

がありますから、其の量以上には何程酸素があつても、炭酸は炭酸として空氣の中に存在してありますだから、廣い室、又は酸素ばかりある室でも、密閉したる限りは、呼息の炭酸がだん／＼積つて、吸息に引入れられまして、炭酸中毒を起させるのであります。故に、室内の空氣は折々外のと交換しなければなりませんが、寒い時には如何しても怠り易いから勉めて爲られんことを望みます。次に

一　冷水で顔面を洗ふ事

は、誰も其心持の宜いことを知りつゝ、中產以上か左も無くとも湯で以つて洗ふ自由のある人は、一時の冷いのに恐れて、姑息にも湯で洗ひますが、これは必ず冷水で洗ふべきことであります。又次に

一　變則に身を温める事

を愼まんければ不測ざる害を招くことがあります、設例ば、長く寒風の吹き晒す所に居つた、人などが急に炬燵の中などへもぐり込むと、身體の下部の、收縮した血管が一時に膨張して、血液を急にそれへ灌注ぎますから、人に依つては腦貧血の急性症に罹ることがあります。

扨て斯様に要愼しても、時の調子で風邪に罹つた樣な場合には、それからは、醫者の範圍ですから、輕症の中に醫者にかゝつて治すのですが、醫者は、術と共に人物の高い人を撰ばないと、利かない薬を長く服される様なことがあります。

勿論極めて輕微な風邪などは賣藥でも可なりでせうが、撒兒的兒酸那篤留謨、一匁（普通藥なれば誰人も容易に購ひ得べし、大凡一匁二錢位）を二三回に分服して、夜具を被つて汗を發せば治ります、此のものは水揚酸曹達、約めては揚曹と稱へて、何所の藥舗にもあるものです。

劇藥、毒藥に屬するものは普通の人が購ふ譯にもならず、又購つても、素人が用ふることは危險ですが振り出し藥、即ち、加密列といふ藥物を小い布袋に入れて、熱湯で振り出して、一回に一合足らずも服んで寢ると隨分効力のあるものです、此の物は一斤

十二錢で、何所の藥舗にもあつて誰でも買ふことが出來る上、一袋を三四度振出すことが出來るから便利です、尤も、一斤も買つては大變ですから、價でいふなら、二三錢も買ふのです。

寒い時に罹る外の病は凍傷、といつても、手が落ちるの足が落ちるのといふ樣なのは普通になくて、よく罹るのは、凍腫、裂膚などですが、身體の中でも動かす部分よりは動かさない部分が罹り易いので、耳朶などは最初に侵されるです、日本人には素足に履物を穿つて居つて、其れが爲に凍腫などに罹る人もありますが、小く優しく見せ度い爲、狹小に過ぐる靴、足袋、手套などを用うる人がありますが、あれは最も凍腫の爲に惡いやうです。

凍腫、裂膚なども凍傷といへば凍傷ですが、普通の稱に凍傷といふものは、是等の樣なものでなくて、もつと酷いものです、最も溫暖なところに住むものにさういふ虞はありませんが、極寒に遇へば、まづ皮膚の血の色は失せて寒冷となり、次に硬固となりそれからいよ〳〵血色は失せて蒼白い色となり、次に水疱が出來るといふ順序で、遂には恰も脫疽の如き狀に、手でも足でも落ちる具合は如何にも慘いものです。

四肢の凍傷に罹るのは、寒い時に室の外、家の外で眠つたりなんかするからで、軍人が極寒の所で歩哨などに立つ時には、絶えず足を踏動かす等の注意もするのですが、先年北海道根室國の根室で、土方が酒に醉つて他家の軒下に眠倒れたところ、幸に凍死はしなかつたですが、右足の膝から下が軒外に出て居つた爲、明方眼が覺めるまでに、股引、脚半足袋を穿つて居つたに拘らず、其の部位が凍え爛れて遂に落ちて仕舞つたそうですが、凍傷も恐いものではありませんか。

寒氣から來る、最も烈しいものは凍死です。耳や、鼻や、手や足や、指やが落ちれば誰も困るでせうがそれでも死ぬる程酷いことはありますまい、然し、凍死者は全く死ぬる前に假死といふ狀に落ちるもの

ですから、假死の中に發見せば助けることが出來ます、若し寒氣の爲の假死者を發見したらば、硬直した四肢を屈めたり、曲げたりすることの無い樣に注意して、まづ暖くない室に移すのです、已に、大切に取扱つて暖くない室に移した以上は、早速衣服を脱がせて、雪か、濕布かで徐に、氣長に摩擦すると最初に硬直した四肢が屈る樣になつて、それから蒼白色が去つて、血色がだん／＼出て、體温が回復して來て、呼吸する樣になるのですが、體温が回復した時に温めない床に入れて、患者自身に呼吸する樣になるまで、人工呼吸を施します。假死者を急に温い室に移せば、温度の變化から眞に死んで仕舞ひます。ですから、かういふ樣に取扱つて、呼吸する樣になつたらば、まづ微温い茶、珈琲の類を與へ、それからブランデイ、葡萄酒などを少量與へて、初めて温い室に移します。局部の凍傷患者、前にいふ手足などの凍傷に罹つた場合にも、療法は凍死前の假死者と同樣で、假死者は全身を摩擦し、局部の凍傷者は局部を摩擦するのですが、此際特に注意すべきは、皮膚の剝れ傷かない樣にするので、若し傷ついて、潰傷、彼の凍腫のくづれた樣になつたら、容易に治るものでありません、局部の凍傷を雪なんかで摩擦した後へは、油又は膏藥を塗つた綿、布の類を纏ふのであります。冬、雜巾がけなどを湯ですれば凍腫にかゝり易いです、凍腫の潰れた場合には石炭酸軟膏を貼付するなど最も簡單にして効力のあることです、又手足のアレには、オリーヴ油を亞爾個保兒に溶かして置いて毎日二三度宛も塗れば、如何にアレ症の人でもすべすべになります。

四季の臺所（五）

中川雪枝

十二月

飯

『蕎麥めし』は、石臼にて蕎麥を粗く挽き割り

米の飯の火を引く時、釜に入れて蓋をなすべし、此飯は淡鹽を加へて炊くか、又は鹽を加へずして炊き淡醤油を注けるかいづれにてもよし、

「いわし飯」　成るべく大きなる鰯を、頭をとりて三枚におろし、肉のところを水にてよく洗ひ、水氣をたらし、飯の常の如くふき上るを待ち、肉を釜の飯の上に並べ、能く蒸して後肉を取去り、膳に向ひて、茶碗に飯を盛り、其上に肉を置き、味汁をかけて食す、また鰯の頭と腸を抜き、始めより釜の中の米に逆さにさし置き、尾を上に殘し、飯の炊き上るを待ち、尾をつまみて引抜けば、中骨のみ尾とともに抜かれて、飯の中に殘るべし、之を能く攪きまぜ、味汁をかけて食ふもあり、

「さんま飯」　その仕方、いわし飯に同じ、

「粟の飯」　常食には兎に角、偶にはよきものなりよくつきたる粟をよく洗ひ、笊にうち上げ、水をたらし置き、さて飯を水加減するには、粟だけの水を餘分に入れ、炊きてふき上りたる時、前の粟をいれかきまぜることなく、粟の高低を杓子などにて平均し、早く蓋をし、炊上げたる後しばらくむして飯櫃にうつすなり、

左の二種は、本誌を讀まるゝ方などの、覺え置かるる必用なきが如くなれど、時節柄、經濟と其の割合に賞味し得らるゝと、また歴史をもてる食品なればこゝに記すべし、

「雜粉團子汁」　そば粉のかすとて殆んど捨つるも惜しからぬわらき粉と、温飩粉の下等（右二品のわしきを用うるはいざ鎌倉といふ折の、經濟より割出したるなり）なるをまぜ合せ、水に少し鹽を入れ其水にてよくこね、棒にて蕎麥温飩の如く厚さ二分位にのべ、幅四五分、長さ二寸位に切り、扨て鍋に味噌汁を仕かけ、大根を長さ二寸、厚二三分、巾四五分に切り、葉も二寸位に切り、これに里芋を大ならば二つに切り、中小ならばそのまゝ入れ、よく炊きて、その中へ前記の伸したる平團子を入れて煮ふげ、しばらくして食す、無論之は飯の代用として食

するものなり、

「粟のかゆ」　盧生の夢の故事に引出されたる食料なり、米を相當に水加減して炊き、ふき上る時、あらひたる粟を入れ、少し火をほそめて、よしと思ふ頃、米を二粒三粒つまみ見て、少し堅き位を度とし、薪を引き、オキをひきつくしてかき交せ、しばらくむして釜より食すべし、粟は米と等分なればよし、

汁

「百合根」　へがして、若芽の細々に切りたると輪とうがらしを加ふ、

「小芋」　輪切にして、菜の細かく切りたると、

「草石蠶」　葱としろ根とゝもに長く切りて、

「小蕪」　葉をつけてたてに切り、もやし獨活を短冊に切りて加ふ、

「赤貝」　のへぎたるに、小芋を輪切にし、芹のこま〳〵に切りたるを添へて、

「餅」　小餅の燒きたるに、燒豆腐の大賽切に、干山椒を、

「小鳥」　のたゝきたるに、干菜のこまごまに切りたるをはなす、口は柚子よし、

「おこと汁」　これは芋を四半に切り、大根をいてうに切り、人參を輪切に、燒豆腐を角切にし、赤小豆を入れて共煮にするなり、

吸物

「金海鼠」　太く切りたるに、もやし獨活のはす切をあしらひて、

「ひき蛤」　これに鹿尾藻と草石蠶を加へて、

「鯛」　骨附切に蕗の臺のこま〳〵に切りたる、

「鹽鱈」　の切身に、靑昆布を結びて、口は胡椒

「鰕」　肉を取りて、庖丁の背にてたゝき、鹽少し入れ、酒と鶏卵の白味にてのばし、そをゆるめ、鉢などに入れて蒸上げ、くづしとなりたるへ鹽松茸に三葉の細かく切りたるを加ふ、

膾と刺身

「黑慈姑」　賽に切り、天門冬をたてに切り、か

らし酢味噌にす、
「大根」　繊にうち、串柿をほそく切りて二杯に
「鮑」　細作りにし、大根を短冊に切り、もみて海膽酢にて食す、
「烏賊と針魚」　いづれも細作にし、生姜酢にて
「鮪」　大賽に切り、湯を通し、卸し芋を加へ、生醤油にて賞翫す、
「鮭」　の平づくりに、鰕の湯煮して皮を去り、一寸許に切て細く引裂きたるものを加へ、山葵、入酒にて味ふ、
「海鯽」　三枚におろし、中骨を去り、筋違につくりたるに、茹葱を加へ、蕃椒酢にて食す、
「ひき蛤」　大根の切干を加へて、胡麻酢味噌、
「海鼠」　小口切にし、蕃椒を細々に切り、大根おろしにおろしませたるものをあしらひ、二杯酢にて、
「小鳥」　胡椒を入れ、玉子酢にて食す、

和物

「獨活」　に蓮の根を加へて青味噌にてあへる、
「胡蘿蔔」　百合の根とゝもに、胡麻味噌にて、
「百合根」　一枚づゝ離して、海苔と酢あへに、
「紫芋」　淡味をつけて、胡麻味噌にてあへる、
「ばか貝の舌」　湯がきて、蕗味噌あへに、
「白魚」　ざつと湯を通し、鶏卵味噌和にす、鶏卵味噌は黄味ばかりを味噌にすりませ、醤油を少し加ふるなり。

煮物

「太牛蒡」　を筒切にし、湯煮して酒にて煮、柔かになりたる時、摺りたる味噌を入れて、それに煮山椒の粉をふりませて食す、
「草石蠶」　湯を通し、酒醤油にて煮つけ、慈姑をおろし、蒸し、よく摺り、白砂糖に鹽少し入れ、焼鍋に黒胡麻をふり、裏表とも燒き、隨意に切る、
「荒布」　茹でゝ半日ほど水に浸し、味淋醤油にて味をつけ、鯛又は鯵などの骨を除り、肉を細長く二寸程に切り、同じく味をつけて荒布にて卷き、干

瓢の帯をして、更に汁をふくませて煮上ぐ、

『鯛』　亂切にし、湯煮して橙酢をかける、

『鰗』　おなじく亂切にし、すつぽん煮にす、

『榮螺』　鹽煮にして、金柑とうま煮を添ふ、

『金海鼠』　煮付にして、自然薯の燒鹽を添ふ、

『大鮒』　丸のまゝ燒きて酒味噌煮にす、酒味噌煮は、赤味噌をすり、酒を入れてうすくのばし、よく煮て粉山椒をかける、

『燒鯊』　山査子を五六粒入れてよく湯煮し、味をつけ、大根をさゝかして、ざつと湯煮して、甘鹹く煮しめたるをあしらふ、

『干鰕』　大根の半月に切りたるとゝもに湯煮し淡味に煮あぐ、

『鷄肉』　蒟蒻のむしりたるを入れて煮る、

『小鳥』　何にても羽其他を去り、豆腐少し、寒晒しの粉少し入れ、よくすり、酒醤油すこし入れてゆるめ、椎茸、木耳、銀杏、三ッ葉など刻み入れ、よき程にとり、胡麻の油にてあげる、取合せものには何よりの御馳走なり、

炙物

『鯛』　味噌燒にして、唐煮の蜜柑をあしらふ、

『針魚』　結びて鹽ふり燒にす、

『魴鮄』　ひらきて、胡椒醤油にて附燒にす、

『甘鯛』　丸のまゝ白燒にし、山葵味噌をかける、

『山鳥』　肉を串にさし、蕗味噌の田樂にす、

『鰈』　大なるを拍子木に切り、醤油一ぺんつけて焦げぬ程に燒き、油少し引き、味噌をつくる也、醤油をつけねば、火うちへ通らず、

『はまち』　短冊に切り、蕃椒味噌にて魚田に、

浸し物

『干芋莖』　そろへて胡麻酢醤油にて食す、

『小松菜』　亂切りにして、芥子醤油にて、

『獨活』　短冊切に、生栗の賽とを酢醤油にて、

『人參』　の繊に、銀杏の小口を、胡麻酢醤油にて、

漬物

「澤庵漬」　大根の性よきを撰び、土を洗ひ、日あたりよき處へ乾場をしつらひ、十四日乃至廿日あみて日にかはかし、夜は霜げぬやうに手當し、乾して小皺のよりたるほどを見て漬くるなり、桶は四斗樽の酒のあけたては殊更よし、又古き四斗樽をつかはゞ、米などを入れて底の間にはさまり居るは甚あしく、米粒あれば酸味を生ずるものなり、小糠もよく篩ひ、小米のまじらぬやうにすべし、一樽の分量は、大根の大小によつて差別あり、凡そ大根五六十本又は七八十本、或は百本、小糠七升、鹽三升、鹽糠ともによくもみ合せ、桶の底の方へは大根のふときをまはし、一段々々に糠をふりて漬るなり、隨分壓のつよきをよしとす、水の一ぱいに上るを度とするなり、それより少し押石をゆるめ、鹽水のこぼれぬやうにしてたくはふ、

これはあくる一月口をあけるのなり、かくするは二三月頃までにつかひきる仕方なり、又麹一枚を入るもあれど、それには及ばぬことなり、

又四五月後、夏の土用越には、糠六升、鹽四升、又五升五升と等分にするもあり、糠を減じ、鹽がちにすれば、いつまでも味のかはることなし、

「淺漬」　大なる大根をえらび、よく洗ひて水氣を去り、酒樽の明たてへ漬くるをよしとす、大根五十本、花麹一枚、鹽一升、麹と鹽をよくもみ合せ、一段々々にふりて、其間々に新藁を十五六本づゝ敷くなり、上のかはに鹽ばかり二つかみほどまき、押蓋をして、強き壓にて漬けるなり、水十分にあがりて、二十日ばかりにて漬かげんなり、風味よき所十餘日のうち也、日を經れば酸味の出るものなり、早く遣ひきる方よし、

「大阪淺漬」　細き大根を洗ひ、葉を去らず、莖ともに四斗樽ならば、鹽一升ばかりを加へ、壓を強くして漬くるなり、水よくあがりて、二十日ばかりを經てつかふ、但し刻みて醬油をかけて食す、當座のつけものなり、

「菜漬」　つけ菜をよく洗ひ、かぶを切捨て、庖

丁目を入れて漬くるなり、桶の大小、菜の多少によりて鹽加減見はからふべし、菜は押強すぐれば葉の色赤くなるものなり、

献立の一例

「本膳汁」　蜊、白魚、干菜、或は白味噌にて、小ぐし魚、椎茸、たゝきな等、

「同鱠」　焼鮒、生姜の味噌酢、或は雉子、針魚鰤、青にんにく、くり、芹、

「同壷」　白味噌にていひ蛸、長芋、岩茸、或は松魚、たつくり、鰯、刻み午蒡、芹、生姜、

「刺身」　鰤、雉子、にんにく、味噌或は酢味噌にて鯔の刺身、

「焼物」　魴鮄の白焼、丹波納豆、

「平」　焼鮒、松茸を茶筌の形に切りたるもの、大根或はうなぎ、田螺、款冬のとう、

「茶碗盛」　そば豆腐、にしきおろしを煮返し醤油にて用う、

「大猪口」　いり酒にて鮑に松露、

板の上

魚は前號のものと大差なし、野菜は其の大關なる大根の料理を、左にいさゝか、

「大根」　材料、四季ともに多きを以て、料理には重寶なる食品なり、殊にこの期は味よく、各家臺所の平均半分を占領す、

△ふろふき　大なるを皮むき、輪切にして蒸し、これに生姜味噌また黒胡麻味噌をおく、

△せんば煮　一寸程の輪切を、薄くまた堅に切り鹽魚の切身を汁澤山に煮るなり、

△わら煮　輪切にし、鹽魚のあらとともに煮る、以上二品鹽魚に限るにあらず、

△海苔酢和　これは皮を剝きて小角切として茹で淺草海苔をあぶりて細かにもみ、酢につけ、大根のさめぬうちにあへる、

△青海苔かけ　皮をむき、小角切にして鹽茹にし器に入れて、あぶりたる青海苔を上よりかける、

△煎だし　皮を剝き、よきほどに切りて、胡麻油

にてよくわげ、蓋ある器に入れ、上より大根おろし醤油か、又生姜味噌などかけ、葱の細かく刻みたるを上におく、

△吸物　葉付大根にして薄くへぎ、ざつと茹で、太郎梅又は小うめぼしを二つばかり入れ、鹽仕立にして出す、

實驗 牛乳日本料理（第七回）

清水鈴子

▲椀盛

まづ胡蘿蔔を千ろくに打ち、よく湯煮し鹽にて味つけたるものを用意して置き、次にはさはらの切身を熱き湯に通して鹽（此の鹽は生鹽を用ゐず、一度煮たるものが、食鹽がよろしうございます）にかけ置きたるものを合せて椀の中に盛り、倘若菜のゆでたるものを添へ、その上に湯せんしたる牛乳を掛け、終に熱き湯をそゝぎて蓋をなし客に出すのでありまする、但し露には鹽を加へませぬから、にんじんなり、さはらなりを充分鹽して置ねばなりません。

▲一口吸物

牛乳に食鹽を加へて煮ますれば、玉子の白味のやうに固まりますから、その時碗に煮え湯をつぎ、金杓子の如きものにて、右の牛乳をすくひ入れ、白ぼし、魚せんべいなどをそへ出すのであります、中に三ツ葉の少しにてもちらしてよろし。

▲揚麩

焼き麩をとり、牛乳を沸したる中に入れ、やわらかになりたる時、箸にてしぼりわげ、皿の如きものにウドン粉を廣げ、それを衣としてわげるのでございます、若しまた衣が手際よくまゐりませんときは、ウドン粉を溶き、麩をきつく絞りてわげるので、又粉をとくに、一度牛乳と鹽とを煮固めても宜しうござゐます。

演壇

奉公人に對する理想

江原素六

女學生諸君、諸君が學を卒へ人の妻となれば、諸君は當然一家の支配者たるべき運命を有するものにして、諸君の養成し得たる人格は此時に於て最も多く發揮さるべき機會に逢着するなり、故に諸君は、家庭内は勿論家庭に關する各種の方面に、其の人格を發揮するの覺悟なかるべからず、中について奉公人に對する考の如きは、固よりその一部分に過ぎざれども、其の用意の如何によりては、一家經濟の上はいふまでもなく、兒女敎養の上にまで多大の影響を及ぼすことゆゑ、之を大きく言へば、奉公人に對する理想にして宜しきに適へば、社會改良の一端ともなり、其の益する所極めて廣大なるものあるべし、即ち諸君が一家の支配者となりたる曉に於て、主人よりして受取りたる一家經濟に充つべき金錢の半ば以上は、大抵下女下男の手によりて、薪屋に拂はれ米屋に拂はれ、其他種々なる買人物の價として支拂はるゝなり、左れば此等の奉公人を撰擇して、之に對する考へを周密にし、彼等をして悉く正直なる信切なるものたらし

むると否とは、一家經濟の上に及ぼす利害の關係甚だ大なるものなれば、一家の支配者たる諸君にして正直親切なる奉公人を召使ふことを得ば、其の益する所決して少なきにあらざるはいふまでもなけれど、併しながら、是れ極めて小なる問題なり、奉公人に對して尤も注意の多分を拂はざるべからざるは、小兒との關係なり。

抑も一家の主人たる諸君の所夫は、常に家庭外の職務に服して家に在ること極めて少なく、諸君も亦た妻となり母となりたる後に至りて、或は家庭の境遇によりて外に出で、小學敎員、會社の書記、其他の職務に就くことなしとも限るべからず、之に加ふるに、來客の爲めには之に接して應對をなし、買物の爲めには少なからざる時間を費すべき身分なるを以て、勢ひ愛すべき小兒も之を奉公人に一任せざるべからず、是に於て乎、小兒と奉公人との關係は、日一日と漸を逐ふて親密の度を增し、其の親密の度を增すに從つて、摸倣心に富める無邪氣なる小兒は、奉公人の所行は一より十まで之を見習ふこととなり、遂には其の性質、容貌まで同化さるゝことのあるものなり、現に華族女學校などに通學する幼兒の中には、其の容貌保姆に酷似するに至りたるものあり、道理に闇き人々の中には、彼の令孃は彼の保姆の出所にあらずやなど、あらぬ疑ひを起すものすらありといへば、其の性質はいふまでもなく、萬般の事悉く保姆に同化されつゝあることは、些の疑念をも容るべきにあらず、此の一例によりて見るも、多くの奉公人を使役する家家に在りては、奉公人の撰擇に充分の注意を拂ふべき必要あることは多言を俟たずして明らかなり、而して此の奉公人撰擇の責任は、一に一家の支配者たる諸君の双肩に懸るものなるが、一旦此の撰擇を全うして既に之を雇入れたる後に至りても、其の召使ひ方にして宜しきを失へば、僅かに苦心して撰び得たるものも、忽ち自由自在に逐電することあるのみならず、爲めに初め善良なりし性質のものも、世に所謂ヒガ

ミ根性なるものを生じて、害毒を貽すことも少なからざれば、之に對する取締りの方法に就きても、容易ならざる注意をなさゞるべからざるに至る、殊に昔日とは事情を異にする今日に在りては、家庭の支配者が奉公人に對する用意は、一層周密にして切實なるものあるを要す。

西洋各國にては、小兒の玩弄物として鍵、錠前などを供する場合屢々なるが、日本は君子國なればにや、玩弄物として小兒に鍵などを授くる場合なきのみならず、鞄、簞笥など、平生當然鍵を卸し置くべきものさへ、其の鍵の卸されざること數次なり、此等は言ふまでもなく、奉公人取締の點より見ても、鍵を卸し置くこそ其の宜しきを得たるものなるに、我國人は幼時より鍵を卸すことの習慣を缺ぎ居るが爲め、之を怠るの傾きを有す、現に女學生諸君の如きも、机を求むるには必らず鍵を卸すべき設備あるのを買入ながら、曾て之に鍵を卸したることなく、其の鍵も朝夕使用する必要のなき爲め、買入れ後三日も經過せざる中に、早くも之を遺失して其の儘に放置する人も往々あるが如し、此の如き日本人の家庭に於ては鍵を卸し置かざるが爲めに、其の中に藏し置きたる貴重品の紛失することも珍しからず、事玆に至る時は、自己が鍵を卸さゞる怠慢は棚に上げ、奉公人などにあらぬ疑ひをかけ、之が爲めに彼等のヒガミを增さしむること擧げて算ふべからず、尤も人格の大なる人々に在りては、此の如き際といへども決して容易に奉公人を疑ふことなく、三たび探り、四たび索め、自から其の怠慢を悔悟すれども、人格の低き小なる人々は、忽ち疑ひを他人に嫁して、玆に奉公人のヒガミや怨嗟を導火として、一家の不整理を爆露するこそ遺憾なれ。

總て僅かなる事柄の爲めに輕々しく奉公人を疑ふが如きは、人を使ふの道を知らざるが爲めなり、人を使ふには自己と同等の人間として人間的に使役せざるべからず、牛馬若くば器械の如く心得て、無遠慮に使

役するは其の宜しきを得たるものにあらず、然らば如何にして之を使役すべきかといふに、其の人間たる名譽を重んじて使役するを可しとす、奉公人とはいへ同じ人間の事なれば、之が名譽を取り去りて使役するが如きは頗る慘酷なり、而して之と同時に或る部分までは奉公人を信用して之に自由を與へざるべからず、之を信用して自由を與ふれば、奉公人といへども其の責任を重んずることゝなるべし、人誰か名譽の貴ぶべきを知らざるものゝあるべき、其の名譽を貴ぶの心は、奉公人を驅りて充分に其の職務を盡さしむるを得るなり、之に反して或る仕事を命ずるに、信用もせず自由も與へず、而して之れに對して「お前は●●●●ずるいよ」と罵るが如き、人として心地よく聞くべきの理なし、今卑近なる一例を擧げんに、甲の妻君は奉公人に對して一々に命令を與ふるの癖あり、假令ば椽側に雜巾をかけしむるにも、東の椽を終りたる後新たに西の椽にも同じことをなすべく命じ、其の終るを待ちて、更に中の椽にも同じことを繰返さしめ、其の間に妻君は要もなき時間を費し、奉公人は彼是繁雜なる手數を重ぬることあり、而も之を乙の妻君のなすが如く、椽全體の雜巾掛を一時に命じ置く時は、奉公人は何れより始むるも自由にて、且つ初めより此の仕事の始終につきて思考するの便あり、二つの水桶を用ゐて一氣に之を終ることも得べし、即ち奉公人を信じて而して之に自由を與ふる時は、要もなき干渉を加ふるものに比して、時間よりいへば半ばにも足らず、其のなし得たる仕事も出來榮えよきのみならず、指揮者には面倒なく、奉公人をして心よく命令に服せしめ得るの利益あるなり。

次に、奉公人中の下女と小兒との關係を說んか、世間往々目睹する所によれば、小兒が其の無邪氣なる資性に任せて、下女の頭部などに手を觸るゝことあるに際し、下女は殊更に痛苦の態を裝ひて、オ、痛など眉を顰むることあらんに、母なるもの又は姉なるものゝ傍に在りて、今一つと慫慂すること數次あり、此

等は其の小兒をして奉公人を翫具同樣に心得しむるの原因となるなり、下女といへども元より一個の人類なれば、頭部に手を觸れられて喜ぶべき道理はなきも、殊更に再び三たびせしめて倘ほ平然たるものは、偏へに主人の意を迎へんが爲めのみ、然るに是を之れ察せずして、幾度となく繰返さしむるは、徒らに其の小兒の我儘心を增長せしむるに止まりて、一面下女をして主人の眼前にては如何なることをも忍ぶべく裝ひ、陰に廻りては「主人の前の忠臣は主人の後にての虐臣」となり、小兒の意思に逆ふのみならず、甚しきは自己の意に從はずとて、打ち抓りなどして、其の小兒を虐待するに至ることあるなり。

小兒をして其の我儘を充さしめ、弱きものを輕侮するの習慣を養成せしむるは、人生の恨事なるに、多數の奉公人を使役する家々に在りては、此弊の尤も甚しきを見るなり、既に我儘を充して人となり、弱きものゝ境遇を察せず、又た其の意中を恕することなきため、自から尊大にして他を輕侮するの心を生じ來るものにて、所謂官尊民卑の弊風の如きも、其の因て來る處は此外に出でず、爲めに大臣などの高位高官に在るものは、多く下情に通ずることなく、自己の境遇を以て他を律するの弊を長じ、茲に上情下情の融和は全く望むべからざるに至り、上下乖離の不幸を見ること往々あり、米國の如きに在りては、大統領すら車夫馬丁の言にも耳を傾くるならひにして、從つて他を卑しむが如き弊なきなり、而して此の如き好き習慣を得せしめ置くは、小兒が他日大成して大臣となり知事となりたる曉に利益する處多かるべし。

又た世界各國中、日本の如く奉公人を多數使役する國柄は稀有のことなるが、勿論、奉公人を多數使役することは外見如何にも重々しくはあれども、之が爲め其の小兒をして放漫怠惰に陷らしめ、自己の身の廻りをさへ自から始末し得ざらしむるに至り、事々物々勿體らしく繁雜の手數を要せしむべき習慣を養成せしむるに至る、余の知れる或る有名なる教育家の令孃の如き、其身の朝夕の始末、假令ば蒲團の卷舒、衣

服の着換、盥漱、化粧の爲めに、四人五人の手を煩はすは常とやら、此等は畢竟其の令孃にブセウなる習慣を養成せしむるものにして、教育家の家庭の有様としては不似合千萬なり、要するに小兒には努めて奉公人を使役することなからしめ、何事にまれ自から處理するの習慣を養成せざるべからず、然らざれば他日生長して社會に立つに當りて大に困難を感ずるなるべし、彼の大臣若くは會社の社長などが、一通の添書を認むるにも、之を自からするの習慣に乏しきため、下僚をして其の草案を作らしめ、其の上位に在るものをして之を改竄せしめ又其の上位に在るものをして更に筆を加へしめ、更に自から檢閲して、而して後に之を清書せしむるが如き、其の繁雜なる手數を重ねて時間を要すること夥しく、急速の用務を辨じ難きは平生の事なり、故に小兒には平素努めて何事にても、自から處理するの習慣を養はしめざるべからず。

次に尤も大切なるは奉公人の境遇に對する注意なりとす、世間にては奉公人を以て、自家の生計が困難なるため出でゝ他に使役さるゝものとのみ心得、使役してやるといふが如き恩惠的の考へを持てるもの少なからず、是れ大なる誤解なり、人間の貧富は其人其時によりて限られたる運命なれば、之が爲めに人間といふ價値の上に甲乙あるべきものにあらず、之に加ふるに、多數なる奉公人の中には、實際家計の困難なるものあるは免かれざらんも、家庭の事情若くは其の身の修養の爲め、家計の裕かなる身を以て、特に此の境遇に在るものも少なからざることゆゑ、決して一概に卑しむが如きことあるべからず、彼等は彼等の勞働によりて、之に對する相當の報酬を受け居るものにて、主家が之に對して與へつゝあるものは當然支給すべき義務あるものなり、然り、一として恩惠的ならざる限りは、彼等を貧乏人と速斷して「使役してやる」といふが如き考へを起さしむるは沙汰の限りといふべし、故に奉公人をして或る用務を辨せしめたる折などには、小兒をして優しく劬はらしむるの習慣を養成すること緊要なり、西洋婦人の如きに在りて

は、僅かなることにても、必らず優しく其勞を謝するの習慣あれども、日本婦人には此の習慣あるもの極めて少なし。

以上、奉公人に對する一家の支配者たる人々の注意につき、思ひ出るがまゝを概述せしが、こは悉く其の人々の人格が種々の方面に向つて發揮さるゝものにして、其の人格の大小高卑に從つて、善ともなり惡ともなり、奉公人使役の上に、其の巧拙適否の差別を生ずるものなれば、一家支配の責あるものは尤も留意せざるべからざるなり、左れば、諸君は豫じめ今日に在りて其の人格の養成に努め、其の効果を他日に收むることを期せざるべからず、往昔、ソクラテスが其弟子の妻に向つて「汝は意地惡き奉公人を使役せざるべからざることゝなれり、其の感如何」と問ひしに、彼れは「喜ばし」と答へぬ、而して其の理由を問へば「其の意地惡き奉公人の心を矯め直し之を馴致して善良なるものたらしむることそ望ましき限りなれ」と答へたり「然らば其の奉公人にして萬一病に罹りし折には如何」と問ひしに、彼れは「眞心を以て其の病を看護して壯健なる身體に復らしむるを喜ぶ」と答へたり、而して「彼の奉公人は何事も知らず至つて能なきものなり」といひしに彼れは「其の無能なるものに諸種の技能を授け立派なる婦人たらしむるは尤も喜ぶ所なり」と答へしとか、諸君は此の妻女の如く快活なる意氣に富みて事に當るべく心懸けざるべからず、勿論、單に快活にといへばとてニウトンの所謂「粗暴なる快活」に陷ることなく、去ればとて、全然意氣に乏しく「頗るよく出來たる人形」と笑はるゝことなきやう、自から顧みて特に注意を怠るべからず。

（此編は君が嬌風會に於て女子の爲めに講演されし大要なり。）

日本婦人の行動

阿多廣介

▲一休和尚が、正月は冥途の旅の一里塚、嬉しくもなし、悲しくもなし。との歌は、正月に際して彼れが人生觀をうたつた有名なるものであるが、今年もはや其の季節になつて、我々は又一つの齢を重ねなければならぬ、即來年は今年より一歩冥途へ近寄るのであるが、人の身體は斯く年と共に老い行くけれども精神は時勢につれて年と共に新らしくなつて行かねばならぬ、されば正月は矢張嬉きものと觀するのが余の人世觀である故に、我々は年末に於ては爲し來つた過去の我が行爲を省み、年首に當ては是よりなすべき未來の計を立て、體は老いても心や行爲は歳と共に新に進み行くやうに心掛けなければならぬ。

▲先づ今年中の事を回想して見るに、我々は國民としても個人としても非常なる運命に際會したもので、此の一ヶ年間の出來事に就ての經驗修養は、想ふに十年や二十年を費して得る處のそれに比すべきものではなく、一世紀則百ヶ年間に得る處のものに値する丈けの好機會に際會せるもので、現在の日本國民は、數千年來我が祖先の夢にだも思ひ及ばなかつた程の好運兒である、然しながら、是は一に皇室の威光と祖先の賜とに外ならぬからして、我々は皇室に對し祖先に對し、深く感謝せなければならぬ事で、從て又國家幷に祖先に對し、此好運を子々孫々に傳ふるの絶大なる義務を負擔すべきことであります。

▲吾人は此雜誌上に於て、戰時の日本婦人の覺悟として、毎號愚見を陳述しましたが、夫に就て敢て先見の明を誇る譯ではありませぬけれども、我が女鑑が主義とし方法として此の一ヶ年間唱道した處のものが、讀者諸君は素よりのこと、一般婦人社會に迄實行されつゝ、行くのは趨勢の然らしむる處とは云へ、幾分か

世上に貢獻せし處のあること、信ぜらるゝので、歡喜に堪へざる次第であります。

▲戰時に當り幾十萬の父子兄弟は、寒を凌ぎ、暑を犯し、滿洲の曠野に身命を曝し、一家團欒の樂を割いて義勇奉公の聖旨を遵奉し、幾萬の死傷者を生ずるも敢て顧慮せずに立ち働き、慘事是に過ぐるものなきに拘らず、我兵士將卒の母たり妻たり姉たり妹たる人々は、喜んで其の子弟を送り、笑て其の屍を迎へ、恰も元龜天正時代の國風を發揮し、スパルタの國民をして後に瞠若たらしめたのは、是迄たゞ柔弱卑屈とのみ稱せられ解せられし我が婦人のやさしき胸中に密に懷抱せられて在ったる眞綿に包んだる懷劍の樣なる氣質が、玆に大に發揚されて、世界に日本婦人の名譽を挽回されたので、眞に愉快なる事であります。

▲開戰匆々園田孝吉君は我邦の兌換準備を豐富ならしむる爲め、全國の人民が死藏して居る所の金銀類を献げて日本銀行に提供されましたが、其れに就ては種々の議論もありましたけれども、我が邦婦人は、命より一番目として大切にされてある金銀の指環髮飾を立ろに提供し、日本銀行の倉庫に山の如くに堆積されて、大に兌換準備を强固にし、外債にも、内債にても毎回三四倍の募集額に達するのは、何と潔いことではありませぬか。

▲彼のマギー夫人が、萬里の波濤を犯して我が赤十字事業を援護せんとしたる時に於ては、吾人は心私かに我が國婦人が從來の意氣地なき樣と、歐米婦人の勇壯なる事とを合せ省みて、慚愧に堪へませんでしたが、マギー夫人が渡來せられてより後に於ける我が婦人の覺悟と赤十字事業の發達とは、却てマギー夫人をして慚色あらしめたと云ふ事を聞くに及んで、實に愉快に堪へませんでした。

▲戰爭の初まつた當座に於ては、我が婦人は如何にして軍國の妻女たる責任を盡されるだろうかと云ふ事に就て、亦心私かに我が國婦人の意氣地なきを憂ひて居りましたが、吾人の杞憂に反して我が婦人には、或は出征兵士をねぎらはれ、或は遺族を慰撫せられ、又或は死傷兵士を看護せられたり、繃帶を製造され

たり、恤兵救恤至らざるなく、特志婦人會に於ける、愛國婦人會に於ける、報公婦人會に於ける如き、非常の熱誠を以て男子に劣らざる事業を營まれ、出征兵士をして後顧の憂なからしめしのみならず、其愛情は一層の勇氣を興奮せしが如き實に壯快の事であります。

▲學校教育に於ても、衣服改良運動奬勵を大に必要と存じましたが、改良服もぼつ〳〵行はれ、本年の秋季の運動會は東京の各女學校に於て盛に擧行され其運動法も新規改良の趣きを見受けました、又初め或る當局者の如きは、教育は戰時と平常と異るべきものではないなど〻唱へて、恰も軍國に於ける事を知らざるもの〻如く思はれましたから、我々は之に向ひ痛論した事がありましたが、我が女學生諸君はそれ等當局者の言には耳を傾けずして、熱誠に軍國の爲に盡さんと云ふ意志を發表せられ、輿論も亦大に之を奬勵せし爲、文部大臣も遂に各女學校に訓令を發して、軍人の衣服を裁縫し、或は軍事品を供給する事に就て、學生として爲し得らる〻丈けの事業は奬勵すべき旨を發表せられ、且又軍國の出來事に對しては、教育資料として實地教育上に應用すべきやう、教員に奬勵せらる〻やうになりましたが、果して其効果顯はれ單に被服供給上に時期を短縮せしのみならず、其勢力より得られし、賃金は之れを恤兵部に献金されたのは、國民として個人として、實に稱賛すべき行爲でありまして、誠に喜ばしい事であります。

▲而して、軍人家族援護に就ては、金錢物品等を以て救恤するは依賴心を起させ、却て人を墮落せしむる事と心配を致しましたが當局者幷に有志家は、それ等に就て種々の方法を設け、我が杞憂を空しくせしめ今や至る處、勞力を以て救恤する方法を實行せられてある事尠くありませんのは、實に國民が着實に進步して行くのを認むる次第であります、殊に救恤する人の側のみならず、惠を受くる人々に於ても、已むを得ざる事なき限りは他の憐恤を受けまいと云ふ考のあるは一ト入感ずべき事で、或る遺族の夫人は窮乏の極町村に救恤を受くべきものと認定せられ、役塲から金品を送らうと致しました處が、夫人はそれを辭

退致しましたから、村吏が怪んで尋ねますと、最には老姑あるが爲めに已むを得ず救恤を受けやうとは致しましたが、今や老姑は他行しましたから、僅ながらも一家の糊口を持することが出來ますから、それにも拘らず救助を受けましては出征中の良人に對して濟まず、又如何にも腑甲斐ない者のやうに思はれるもつらき故、他の惠は受けませぬと立派に答へて、其の後家業を熱心に勉めて居ると云ふ事で、此の一例を見ても如何に我が國の人心が着實に進歩し行き、又かよわき婦人にも如何に犯すべからざる氣慨があるかが分る事で、眞に喜ばしき事であります。

▲次ぎに御婦人方も對外思想を發揮して、大に積極的の行動を取らるゝ事を奬勵する本志でありますが、河原操子孃の蒙古に於ける、安井哲子孃の暹羅に於ける教育事業の如き、男子も及ばざる功績を擧げつゝあるのはほんとうに壯快ではありませぬか。

▲又此頃は義勇艦隊建立に付て、船と女子は其性を同ふすると云ふので、有地會長は其義捐金の事を貴紳淑女に計られしに、大に賛成を表し、熱心に其募集に從事せられてあるのは、實に壯擧でありましてどうぞ偉大の功を奏せらるゝ事を禱り居る次第であります。

▲最後に恐れ多き事ながら我が皇族諸殿下がなさるゝ御行動に付ては、感泣の外はありませぬ、彼の常宮殿下周宮殿下が戰死將卒の氏名を手づから記録され祭殿を設けられて祭祀の事を自らなされつゝありと謂ひ、皇后陛下皇太子妃殿下、其他の妃殿下が自ら繃帶を巻き、又製せられて、負傷者に下賜せられしと謂ひ、皇后陛下が義手足を負傷者に惠まれ、敵國の俘虜も亦其徳に浴するとの事は、一視同仁徳四海に及ぶ譯けであります、又私は東京赤十字病院の近傍に卜居して居ります上に、日出と日没とに、各妃殿下が特志看護婦人會に御往復遊ばさるのを仰視しましてあります上に、去る十五日には、皇后陛下が病傷者御見舞の爲め、御行啓遊ばさるゝのを拜しまして、私かに感涙を催しました。

雜錄

ワーテルローの戰

文學士　濱田紅於

旅順口外、仁川港頭、數十發の霹靂に、日露の平和破れて天兵の向ふ所は海岳風雨もこれを拒ぐこと能はず、我が海軍は既に制海權を得て、旅順口の敵は甕中の鼠の如し、陸軍は鴨綠江に南山に、得利寺に摩天嶺に、また大石橋に析木城に、克く勁敵をうち破りて、滿洲の南半旭旗の飜らざる所なし、露軍は常に豫定の如く退却して遼陽を死守せしも、わが三軍の將士の、衝天の勇氣に壓倒せられて、更に奉天府に向て豫定の退却をなさざるべからざるに至りぬ、奉天や哈爾賓や益〻我武を揚ぐる所、而して將士の意氣は直に露都を衝かむとす、亦盛ならずや、この頃者予偶〻ワーテルローの戰を讀んで、その酷だ遼陽の戰に似たるを想ひ、聊かこゝに記述する所あらむとす、然れども戰術と戰略とは予の知らざる所、讀者幸に不知者の言に迷ふこと勿れ。

さすがに蓋世の英雄も、天命に勝つこと能はざりけむ、西暦千八百十二年九月露都モスコーの愛國兵火は、エウロッパの形勢を一轉せしめ、同盟軍は四方に起りて、同年十月、ライプチヒの自由戰爭には、ナポレオン再び大敗の辱を被りぬ、かくてパリの籠城二ケ月、よく同盟軍と苦戰せしが、武運遂に開けず、翌年五月地中海の一小島エルバに配流の身となりて、雲井を慕ふ籠鳥の思に堪へざりき。人間の魔王一たび姿を隱しゝかば、亂麻の如き世態を整理し、國力の平均を恢復せむがために、千八百

十四年十一月、列國の使臣はアウストリヤの首府ヴインナに會しぬ、然れども使臣は互に爪牙を鳴らして自國の私利を主張し、會合九月に亘りて、議事は少しも捗らず、げにプリユッヘルが評せし如く、市場の喧噪を呈して、遂にエルバ島の魔王に再雄飛の機を與へしこそ、嗚呼の極みなれ。

さる程にナポレオンは、少嶋孤島に蟄居の狀を裝ひしが、蛟龍は終に池中の物にあらず、ヴインナ會議の紛亂を探知して、千八百十五年二月廿六日の夜、千二百人を率ゐて、密にエルバを遁れ、フランスのカンネーに上陸せり、守備兵は弋を倒にして出で迎へ、ネー、ラブドエールの率ひし征討軍も忽ち心を飜しぬ、天は未だ彼を捨てざりき、國王ルイ第十八世はベルギーのジヤン市に走り、ナポレオンは恙なくパリに入りて再び帝位に登りぬ、乃ち各國に通牒して、決して平和を破らざることを誓ひしもこれを承認したるは、ナポリ王ミユラー一人のみなりきヴインナ會議にては、彼を以て平和の破壞者、列國の公敵となし、聯合軍を以てこれを征討せむと決しぬ、これワーテルロー激戰の由來なり。

聯合軍は約二十二萬人、プルシヤの將プリユッヘルは十二萬人を率ゐ、イギリスの將ウエリントンは十萬人を率ゐてベルギーに集りぬ、ナポレオンは十三萬人に將として順次にこの二將を破らんと企てたりこゝにベルギーのサムブル河岸にシヤルロア町ありこれより道は二岐となり、一は北方ワーテルローを經てブルッセル府に至り、一はリニー市を過ぎて北東し、終にドイツに通せり、聯合軍は共に北より來り、ウエリントンは前者を進み、プリユッヘルは後者を行きて、遂にシヤルロアに合併せむとせり、然れどもナポレオンは機先を制して、早くこゝに來りしかば、ウエリントンはブルッセルに留りて動かずプリユッヘルは急行の必要を認めしかば、シアルロアの北東二里の所に進みけり、兩軍の陣地漸く相近づきしかば、フランスの元帥ネーはブルッセルに向ひ、カートル、ブラーにてワイマル公の率ゐしオラ

ンダ軍を破りしが、ビクトン大將五師團を率ゐて來援ひ、ブラウンシユワイン公もドイツ軍を以て來會せしを以て、ネーは退却したり、尋でナポレオンは中堅を以て前進し、ブリユツヘルを撃つ、ウエリントン援ふこと能はず、ドイツ軍大に破れて北東に退却せり、ナポレオン乃ちグルーシーをして三萬人に將として、これを追撃せしむ、グナイゼナウ諫めて云へらく、我軍退かばイギリス軍必ず襲撃せられむ如かず道を北に轉じてワーヴルに退き、機に臨んでイギリス軍を援はむにはと、ブリユツヘルこれに從ひぬ、さればグルーシーの追撃も功なかりし、この退却は能くフランスを欺き、後日ナポレオンをして數度の失敗を重ねしめて、前日の敗北を償ひたり、かくてウエリントンもこれと連絡を保つためにワーテルローに陣を變へたるが、その夜大風雷雨、天柱折れ地維裂けむばかりなりき。

あゝ千八百十五年六月十五日の夜、この風雨なからましかば、エツロツパの形勢は更に一變せしなるべし、數滴の水はナポレオンを猶豫せしめけり、彼が勝利の終結たらしめむとてや、天は少量の雨を呼び起しぬ、時ならぬ雲のちぎれも、この時には千金の値ありけらし、土地乾固なりせば、ナポレオンは拂曉六時に戰を開き、プルシヤ軍の達せざる前に、凱歌を奏せしならむ、如何せむ土地濕ひて征馬進まず大砲動かざりしを、ナポレオンの計畫は、敵軍の中央に猛進して、その連絡を中斷し、プルシヤ軍をライン河に陷れ、イギリスを北海に擠さむとせしなり、されどこれも全く水泡に歸しつ。

兩軍の陣地を視るに、イギリス軍の右翼はフーグーモン城を中心として、メルク、ブレーンの谷に亘り左翼はラヘーサントの農家を中心として、テル、ラ、ヘー寺に連り、兩翼の中央には尙空隙ありき、フランス軍の右翼はプランシユノア村を前にして、ラ、ベル、アリヤンスの田畝に陣し、左翼はシユツプ街道を占領せり、要するにイギリス軍は便益ある高地に在りて、フランス軍は不利なる低地にありき。

午前十時戰は始まりぬ、砲聲は雷の如く、銃聲は霰に似たり、イギリス軍は高地を占領せしにも關らず、フランス軍の射擊正確にして、彈丸雨の如く下り、イギリス軍は動搖し初めて、只砲兵を臺地に留めて、他は皆谷間に隱れたり、ナポレオン一聲高く、『敵軍退却』と呼びて、居丈高に鐙を踏張りぬ、勝利の閃光は彼の眼に輝きつ、急に傳騎を顧みて、これをパリに報ずべく命じたり。

ナポレオンは騎兵を臺地に派遣せり、三千餘の駿馬は縱隊をなして砂烟をあげぬ、臺地の陰には、イギリス軍が十三個の方陣を形づくりて、蹄の音に耳傾くるなり、双方共互に敵を見る能はざりき、騎兵は驀地に臺地に駈け上りしに、こゝに深き濠あるを見出しぬ、されど味方の勢は後より犇々とつめ寄せければ、最早退かんやうもなし、馬は蹄を空にして倒れ、人は投げ飛ばされぬ、イギリス軍を粉碎すべかりし襲擊は却つてフランス軍を傷けたり、動かざること林の如かりしイギリス軍は動き初めたり、砲彈は騎兵の頭上に破裂すること萬雷の如し、騎兵は殘り少なかりけれど、一人當千の勇を振うて競ひかかりぬ、イギリス軍も今は一歩を退かざるなり、ウエリントンは騎兵をして步兵に助力せしめぬ、ナポレオンは步兵をして騎兵を援けしむるを忘れたりそれぞ兩軍勝敗の決する所なりき、フランスの騎兵は今や八方敵を受けて、旋風の如く八方に當らざるべからず、ウエリントンは更に豫備兵を麾きぬ、フランス騎兵は力つきぬ、ナポレオンが叱咤の聲も遂に功なかりき。

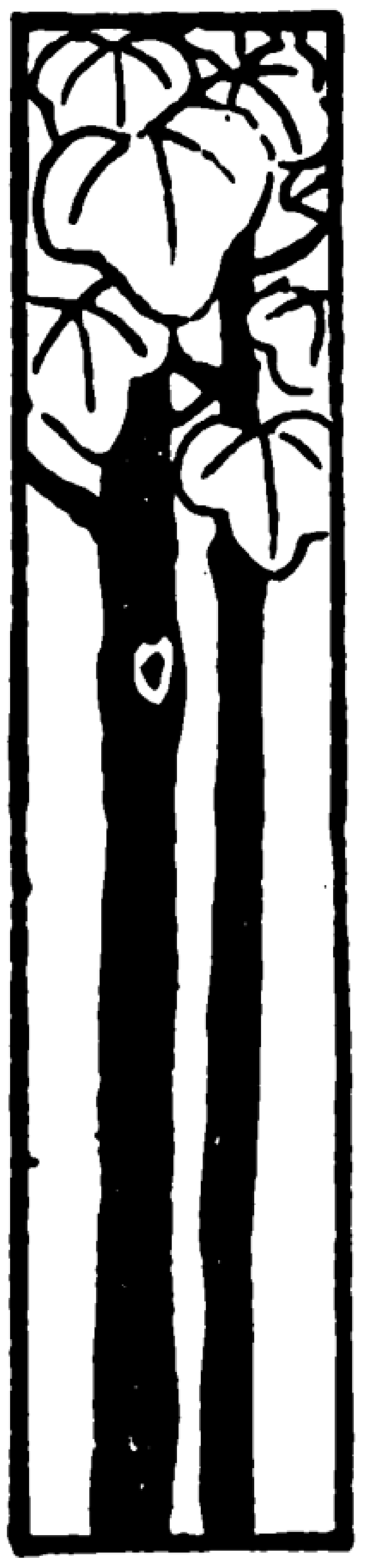
午後七時、一軍の東より來るあり、ナポレオンおもへらく、グルーヒーの援軍なるべしと、豈に料らむやビューローの率ゐしプルヒャ軍ならんとは、ビューローは已にプランシュノアに着して、攻擊に加はり、直に敵軍の右側を衝きぬ、イギリス軍はこれに力を得て銳鋒火花を出して攻よせければ、フランス軍の運命は再び恢復すべからず、山に野に死傷者算を亂し、背嚢彈藥盒は血汐にたゞよへり。

日は傾きて光淡き所、ウエリントン、ブリユッヘルの兩軍は握手して、今日の大勝利を祝し合ひ、ナポレオンは限りなき憂を含みて、蕭然パリに歸りぬ。終に臨んでこの英雄の末路を語らしめよ。

敗報一たび傳はるや、フランスは激昂と失望とを以て滿たされぬ、ナポレオンは位を逃れて、ロッシユフォルに赴き、アメリカに逃れむと企てしが、イギリスの巡洋艦はその海岸を封鎖せしを以て、遂に意を決してベルロフオン號に至り、艦長メートランドに謂へらく、「わが公生涯は已に終りぬ、我は最早やうき世に野心なし、たゞイギリス國民の好遇と法律の保護とによりて、わが殘年を送らむことを願ふのみと、かくて彼はプリアス港に送られぬ、されど上陸を許されず、列國はおもへらく、ナポレオンは天下の公敵なり、これをイギリスに置くは、虎を野に放つが如しと、遂に遠流の刑に處しぬ、ナポレオンはいたく抗議したれどかひあらばこそ、コックバーン大將の指揮せしノーサンバーランド號は護送を命ぜられ、ナポレオンはモントロン、ベルトラン、グールゴーの三將とラ、カース伯爵とを從へてその甲板に上りぬ、號砲一發、船は萬里の波を蹴り初めたり、颶吹き來りて征衣寒し、浪のしぶきは涙に変はる、千古の英雄もさすが故郷は



こひしかりけむ、十月十六日彼は大西洋の一孤島セントヘレナに着きぬ、彼の館舎は島中のロングウードに建てられたり、知事ハドソン、ローは監視の任に當りぬ、彼はこの島に在ること約そ六年、風土はその身體に適せず、運動の不足はその健康を害し、知事の惡性はその心を痛ましめぬ、かくて彼は胃癌にかゝれり、西暦千八百二十一年五月五日（我仁孝天皇文政四年）、暴風浪をあげ岩を砕き、迅雷地軸を挫かむばかりのうち、あはれ人間の大魔王は、「軍隊の頭領！」の一語を殘して逝きぬ、年五十四、彼が盛時には威名雷の如く宇内にひゞき渡り、勢力風の如く列國をなびけぬ、彼が臨終の天候は、天も誠に心ある如ぎを思ふなり、かくてその遺骸は島の中央なるスレーン谷に葬られぬ、こゝは彼がその生前に選び置きし所なりきといふ。



軍國の片影

彈丸除（上）

笠間醉雨

『御免遊ばせ。』

年頃は三十二三であらう。頭髪を銀杏返に結つた、四つ道具の揃つた細面の、華美やかなやたら縞の浴衣を着た婦人、深張の洋傘を窄めながら、斯う云つて、只ある烟草屋の店先へ入つたのである。

『被入いまし、お烟草は何を差し上げませう？』

帳場に座つてゐて、烟草の袋を製へてゐた年頃十七八の桃割は此店の娘であらう。輕く立ち上つて、膝の上ばた〳〵と一つ二つ。

『いゝえ、烟草でございません。ちとお願がありましたので。』

「へえ、何でございまして？」

『何と申して……妙なことをお願ひに出ましたので……。』

と、云つて、銀杏返は洋傘を下に置いて、胸に押し當てゝゐた紫メレンスの包を披いた。中からは白木綿と赤糸と。

『あゝそれですか？』

と、何事が包まれてゐるかと見てゐた桃割は、輕く首肯いて、莞爾と笑つた。

『ハイ、彈丸除の腹卷でございます、ひとつ縫ふて下さいまし！』

と、銀杏返は、細やかな手に、雪と白き木綿を、すつと引き伸した。長さ八尺ばかり、絣のやうに黒點が一面、その黒點の所を赤糸で一つ〳〵縫つてある。が、まだ其五分の一も出來てゐない。

『縫ひませうとも、そりやお安い御用で。』

『どうも恐れ入ります、では……。』

と、銀杏返は、木綿に針と糸とを添へて渡した。

桃割は白魚と優しき手に針を取つて、ちよいと前髪へ針の尖端を當てゝ、手早く縫つて、結いて、糸先を剪刀で切つた。

『ハイ、出來ました。』

『どうも、有難たうございます。』

と、銀杏返は、それを受け取つて、直に元の風呂敷に包まうとした。

『いーえ、どう致しまして、まあ、御一服召し上りまし……。』

と、莨盆の火を檢めながら、

『…何にしろ、千と云ふ數ですから、お大底ではございませんね、一人が一つ宛では。』

『ハイ、なか〳〵骨が折れるのですよ、けれど、寅の年齡のお方が被居れば、其年齡の數だけ縫つて頂きますから、大分捗りますけれど……。』

と、茶が勝つた夏帶の間から、美しい莨入を取り出した。

『左樣です、寅の年齡の方がございますると、早い

んですがね、……家の姉樣が居ますれば大分出來ましたが、生憎出掛けて居りまして……。」
「へえ、お姉樣がおゐんなすつて、では、お二十七で被居いますか。」
「ハイ、二十七で。」
「さいですか、それは惜しいことを仕ました。お姉樣が被居れば、どつさり縫つて頂きましたのに。」
と、吹殼を吹き落して云ふ。
桃割は少し笑ひながら、
「もし、貴姉、まだ二百も出來て居ないぢやありませんか。」
と、風呂敷の端を捲つて、中を覗くやうにした。
「ハイ、今朝から、辛而、これだけしか出來ないんですよ、そして、寅の年齡のお方は一人も被居いませんのですよ。」
「左樣でしたか、それでは隨分 骨が折れましたでせう。御存じでもございませうが、淺草の觀音樣なんかへ、是を以て大勢出て居られますよ、彼所は女の方の參詣も多うございますから、隨分捗りますよ、妾も一昨日お參りしまして、三人の方のを縫ひました。」
「あゝ、さ樣でございましたか、それは〳〵、……本當に觀音樣なんか宜うござんせうね、大分出て居られますか。」
「ハイ、そりや大勢なんですよ、妾の縫つたのは、たつた三つでございましたけれど……。」
「だが、なんですねえ、此お暑いのに、人樣を呼び止めて縫つて頂くのは、ちとお氣の毒なものですね。」
「なに、貴姉、氣の毒なことはありやしませんは、なにも軍人の爲ですもの。暑いから可厭、五月蠅いから可嫌なんかと云ふ人は一人もござんせんは皆、快く縫つて呉れますは。」
「そりや、さうでせうけれど……。」
と、煙草を丸めて、煙管に詰めた。
桃割は左の袂を膝の上に載せながら、思ひ出したや

うに、
『失禮ですが、貴姉のお身内の方でも戰地へお出なさいますか。』
と、話頭を轉じた。
『ハイ、私の弟が……金澤の步兵になつてゐるのですが、近々の内、戰地へ參りますので……。』
『さいでございますか、弟樣が……步兵で……そりや、何かと御心配でございませう。』
『ハイ、心配したつて、これもお國の爲めですからどうも致方がございません。まあ、一度戰爭に出ました以上は、生命は無いものと諦めて居りますけれど、女は矢張り女で、未練らしく、こんな彈丸除なんかを拵へるのですよ。オホヽヽ、こんな物を送つて、大きに本人に叱かられるか知れませんけど、まあ、せめて私の志で……。』
『何に、貴姉、未練も何にも有りやしませんよ、人の爲で宜いと云ふことは何でも爲る方が宜うござんすよ、此際ですもの。』

此話は七月五日のことであつた。根岸は御行の松の片ほとりに、小やかなれど物奇麗なる氷店を開いてゐる駒村屋の主婦のお壽美が、實家の弟の步兵第七聯隊の上等兵池田耕一郎へ送るべく、いま彈丸除の腹卷を拵へつゝあるので、煙草屋とは根岸より程近い坂本通りの蔦屋である。

丸彈除は、翌日、煙草屋の娘の盡力で、その直ぐ裏になつてゐる入谷小學校に持つて行つたが、數多の少女はこれを喜んで、妾も一つ、妾も一つと互に競ふやうにして縫つたので、お壽美はまだ二三服も吸はぬ間に目出度出來上つたとのこと。

(下)

『もし、耕一から手紙が參りました。』
と、主婦のお壽美は、さも嬉しげに突然に叫んだのである。
『なに、來たか。』
と、年頃三十七八の、でつぷりとした赧顏の主人の喜平は、撥ね返へされたように、午睡い夢から身を

起した。そして、取る手遲しとばかり、封を披いて

「拜啓、甚暑の候、御二人樣御變も御座なく候哉伺上候扨て小生義七月十六日宇品を發し韓崎丸にて清國柳樹屯に無事に到着致し候、夫れより「ホウカン」まで行軍し、續いて旅順方面に向つて出發致し候、二十六日に至り當聯隊は始めて敵と相見え戰鬪開始し、二十八日敵の陣地「アンセト」山を占領し、進んで三十日除家屯を占領致候此時戰死十一名負傷七十三名有之候が小生は幸に無事これも例の彈丸除の御陰とも思ひ居り候は師團は中央隊にて右翼は一師團、左翼は十一師團にて乃木將軍これを指揮せられ、三軍の士氣大に奮ひ天險防備何の糸瓜と何れもステッセルを一摑にする意氣組に御座候、しかし、今後は何時戰死するかも知れず候、地形は迚も南山の比にあらず、極めて嶮峻にして、防備も遺憾なく出來居り候間、攻勢の我軍は嘸や死傷者も多かる可きことと存じ候先づはこれまで。匆々頓首。七月三十一日。除家屯にて、池田耕一郎。」

と、一ト息に讀み付けて、ちらと主婦の顏を見た。主婦のお壽美は默つて耳を傾けて聞いてゐたが、いつか既う双の眼には涙の露を宿してゐた。

主人は、猶ほも、此手紙を拾ひ讀みにしながら、何と思つてか、

「お壽美、こんども、彈丸除で助かれば宜いな。」

と、云つたが、主婦のお壽美は、ほつと太息を漏らすのみであつた。

○留岡幸助氏の前夫人を想ふ

一瀬初子

一

夕陽正に落ちんとして、彼方高く白煙の靜かに立ちのぼるを見る。次第そみて行衞をと見れば。いづくぞは ては、はてはいづくぞ、次第くに淡く薄くなりて、やがて見えずなりぬ。あゝ逝くもの遂にかくの如きか。

二

朝顏の心に一日なく、松の心に千歲なしとは云へ、世は彼れを惡しとなきて、こを目出たしと仰ぐぞ是非なき。見よ、優しく立のぼり、のぼり〳〵て、つひに消え行く夕の煙、其

い心に瞬時なしと云へども、冷情の眼よりは、あはれとぞ見ゆ、こは人情の道理ならずや。

あゝ床しの夕烟、清麗極なき夕の空に、限りなきの風致と、はてなき雄容とを添へて、のぼりつ、のぼりつゝや、がて神の如く消えぬ。

あゝそは留岡前夫人の生涯に似たらずや、と我は思ひぬ、思ひくて思ふがまゝに泣きぬ、慕はしの君、生前に面影をさへ、知らずに只人傳に聞きしばかりなるに。

三

不良少年！

我はそを新紙の上によみぬ、而してそれと共に我が腦裡に浮びしは。

家庭學校！

てふ床しきそれにてありけるなり――世は知らん、良からぬ少年を敎へ導き正しき道に歸さんとの、あふるゝばかりの同情と慈愛と熱誠とを以て、こゝに家庭學校てふ優しきもの生れたるを――而してこは留岡幸助氏によりて立てり。

甲は富を逐ひ、乙は名に走り　丙は肉に飽かんとして東奔西走、人樣々の世なれども　誰か成功を喜び、これを求めざらん、古今然り東西然り、老いたると若きの別なく、男と女の差なく、日常の瑣事と國家の大事に於けるを問はず、私生活にあると、公生活にあるを問はず、人生の目的は如何なるとも、あらゆる人類は皆成功を理想として走り進みつゝあるなり、留岡氏またそを追ひぬ、而して成功の光は家庭學校の上にありき。

四

犯罪の裡には必ず婦人ありと、云ふ勿れ、只犯罪の裡にのみならず成功の裡にもまた婦人あり。

見よ、留岡氏前夫人を見よ、思へ、留岡氏の成功を思へ。

五

ヤソ敎？

こは如何に氏の父の耳朶に響きけん、氏はじめて齡廿の頃キリスト敎の洗禮を受けらるゝや、嚴父の怒其極に達し、遂に鄉里に身を置くの術なく、逃れて伊豫の國今治にと走られぬ。

主義のためとは云へ、鴻恩海の如きなつかしの父には背き、故山をば捨て、獨り異鄉の空に流浪する身の、如何に人情のほだしにせまられて、さすがに一滴の涙は宿りけん。

袖に涙のかゝる時、友の心の奥ぞ知らるゝ、氏に友なる乙女ありき。

六

彼の乙女如何しけん、凡そ婦人の常として權勢になびきやすく、利に迷ひ易く、男子の人格は問はず、只世に地位あり富あり、若しくは名ある貴顯紳士の前には爭ふて媚を呈し、競ふてそが友たらんとはすれど、……されど　郞よ君よと、朝に夕に、かしづきし女も、一朝男子の失敗と、其他辛酸の境に至らば、捨てゝのがれて、厭ふを常とすと人は云ひぬ。

今留岡氏故山を遠く世の激浪と鬪はんとするに當りて、苦樂を共にす可き一つの友なく、世の權勢なく富なく名なく、四面皆途上の人……かゝる中に友なる乙女は如何にしけん。

怪しむなかれ、彼は尋常の婦人にあらざりしなり、彼女は同情に泣きぬ、而かも泣くのみの婦人にあらざりき、血あり勇あり誠ある佳人の胸は默ふるの術なく、見よ單身友の後を追ふて今治に至り、けなげにも氏を助けて情愛至らざるなく、やがて偕老の契はなりぬ、これを留岡前夫人なりとす。

七

高山に達せんと欲せば　岐路をよぢざる可からず、人生の行路難は理想ある人士にして、いよく其の大なるを覺悟せざる可からず、留岡氏素より理想によりて立ち、夫人またこれに由つて動く、行路の難

敢て驚くに足らずかし。

吉凶苦樂を共に攜ふ夫婦が、情愛の錦になほ花を添ふ可く、いとし子の數は生れぬ、されど家計はいよ〳〵迫りて當時夫君がもたらす僅少八九圓の收入を以て、よく家を治め子女を教養せんは、これ非常なる覺悟と忍耐と勇氣と愛とを要するは勿論なるべし、君それ一婦人の身を以て、よくこの難にあたり、萬苦を嘗して、遂に夫君をして成功せしめたるはまた偉ならずとせんや。

八

然して君また勞働を重んずるの美德を有し、臺所の調整は云はずもあれ、暇あれば家居のほとり、春あたたかきに雜草のしげるをひき、秋の日の散りしく落葉の庭を掃除し、彈琴の道は得ざるにあられど、音樂の妙なる思はざるにあらざるも……されど勞働の神聖は、これ君が腦裏に、いや高きの位地を占めたり。

されば、君また高き理想を抱きながら、常に婢女と等しく働き玉ひぬ。

九

また聞く、君常に人の世話を好まれきと、蓋し其の先天の性質なりしなり。

いれざれば勞れ、食せざればうゆ、思ふに君が先天の性質と人の世話とは正に人の身と衣食との如かりしならん、これまた君が得色にして而かも世の所謂世話好きの如く、ともすれば輕浮に流れ。浮華に走らず、質朴なる美德は、黄金の冠よりも美しかりき。

一〇

かつての事なりきと。



現代留岡氏悄然として物思はし氣に、默し玉へる樣の如何にも心元なく、夫人は、ひそかに何事にやと問ひ玉へり、然ればなり、明日は人の依賴に應じて、さる方の通辨す可く諾せしかど、さて着る可き洋服のなければと今更に吐息し玉ふ、かくて夫人は何とや思ひ玉ひけん、そこ〳〵に立出られしが、やがて歸りましつ。

これにて用立玉へやと差出さるゝ、意外や十五圓、……今の貞に、いづくより、如何にしてか、人の情にすがりてか、あらぬか、將た、それ如何にして？。

問へど答へず、以來幾星霜を經にけん、しかも遂にそを語らずして北方一片の煙と消えませる。

あゝまたも夕烟！寂寞たる中に一道のながめを添へて、のぼりつ
のぼりつ、淡く薄く、つひに消え行けり。
あゝ君かくの如く逝きませるか。

二

はるかに思想のつばさにのりて、消えゆく夕烟の末をたどれば、今し縹緲たる紫雲の中に、君の御姿のあらはれて　いづくにか床しの御こゑ聞くが如し。
あゝ現か幻か、奇しき思は、我が胸に忍びて、君が靈と相抱けるにはあらぬか。
げに君がかゞやく成功の生涯は、流星の如く美しかりき、死は君を奪ひぬ、さはれ留岡一門の人々は、常に君が恩惠の深きに感泣しつつありと聞く、見よ微光のかゞやきは永劫に老いじくちじ。
あゝさるにても、夕烟、のぼりつ、のぼりつ淡く薄く途に消えぬ。
あゝ君かくの如く逝きませるか。
夕陽全く落ちぬ、夜は方に地上の萬物を掩はんとす、されどかゞやく明星の光り、是れ恐らく君が魂にはあらざるか。

碓氷の紅葉

梅廼舍主人

今茲霜月の初め三人の友だち語り合ひて碓氷の紅葉がりに趣きました。汽車は上野一番で午前の九時過ぎころ難なく高崎まで進みました。名にし負ふ碓氷の山はハヤ遙に眞向ひに見えて、そが右なる肩の上にスト立ち聳ゆるのが淺間山で、今しも烟は乾の空にながれつゝある。シテ右手に當り劍を立てたやうに峻しいのが妙義山であります。此妙義と碓氷と淺間山とはホンの僅かの間にズラリと雁行して居りますので地形の上に込み入つた關係を持つて居りますから、先づ碓氷の紅葉を味ふには、第一是等の山々をスッカリ呑み込まぬとヨリ多い趣を噛み分けることが出來ません。デ、お話の都合により汽車の進行は暫くお預りにして、ズット妙義山より碓氷峠、さては淺間山まで一と飛びに掻い摘まんで申し上げたいと思ひます。

(一)妙義山

之は此度車中で耳にした一節でありますが、善光寺への道者らしい一人の老婆、フト妙義山を認めて「オヤマア、山が柱で出來て居るやうぢや、」と呆れ顔に一行を見すまし、「旦那へコリャ何んチヨル山でゴワスノウ」と無躾らしい尋ねながら、其評言の如何にも面白く思へば妙義の妙は此一言に其妙を穿たれた

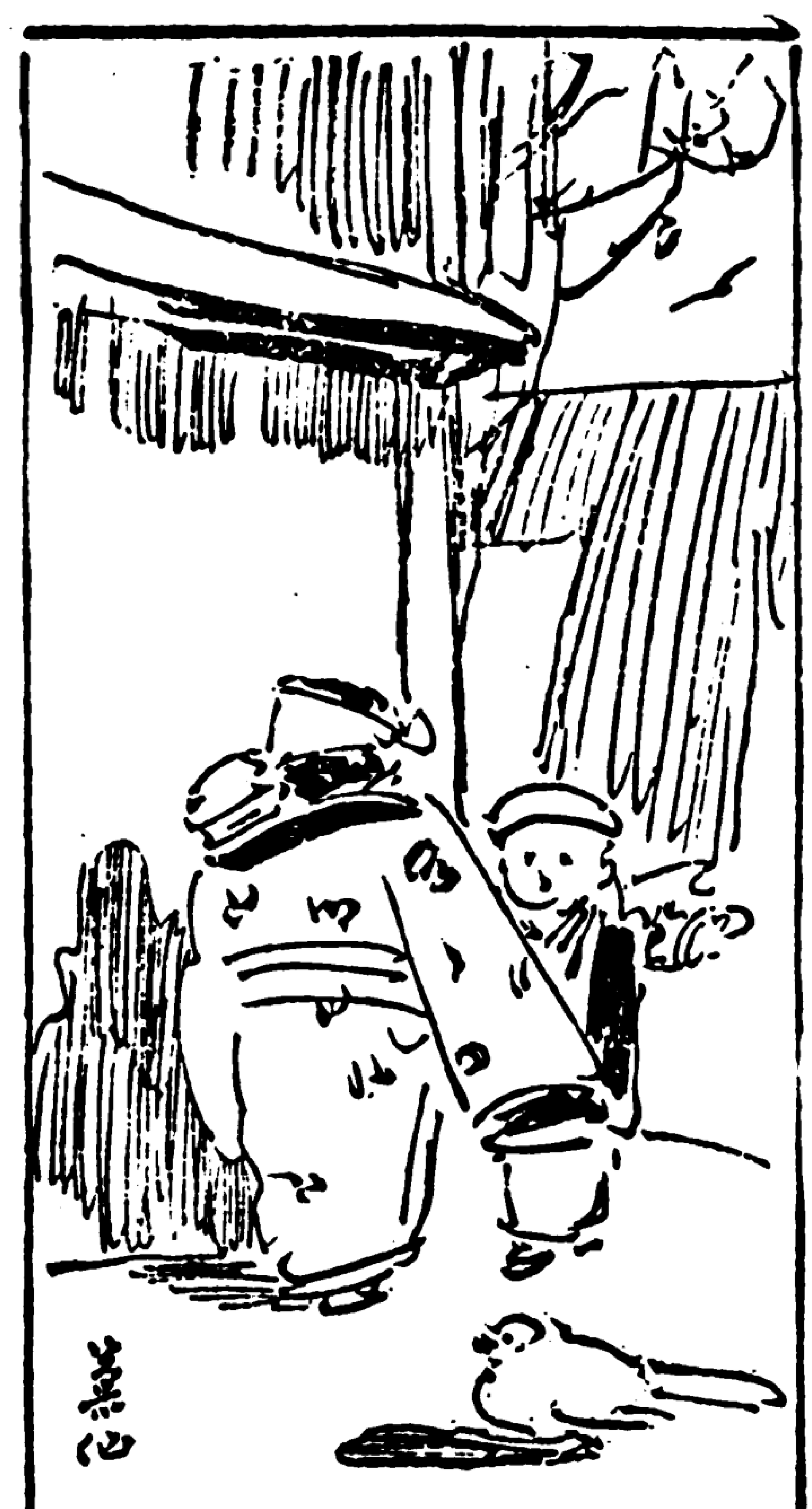
やうな心地して、取敢ず同行の一人、「之は妙義山と申して上州北甘楽郡より碓氷郡に跨り、其高さが一一六五メートルで、アノ柱のやうな岩が幾本となく聳ちてソレハ〱奇妙不思議、全く天工を鍾めたものと申す外はありません」と、答へ畢るや更に一人が横合から、「此山は其大昔浅間山のやうに火山でわつたが、噴火は中途から止んだので、幾千萬年の間に恐ろしい雨や氷や雪のために侵害されて、其上面の脆い所は殘らず流れ落ち、云はゞ其骨のみがアノ柱のやうになつたのである」と、チト六ケ敷お話に老婆は呆氣にとられて目を丸くして居りました。スルト今一人が氣の毒氣に「ドウもお婆さんには六ケ敷お話で分りますまい。マアそれより直ぐ分る妙義の北裏の方でも御覧なさい。ズット碓氷峠につゞいて頂にはソダを並べたやうに立木が見えませう。茲からは見えないが、アノ立木のツヒ下から裾にかけて紅葉が限りない程ありますが、アレが即ち碓氷の紅葉と申すので、此汽車から西に眺めて參るのであります。此横川の停車場より僅か三四十分位で、天下の名勝を見られますが、ナニシロ愉快ではありませんか」と、如才ない言葉に、老婆も相格を崩し「ドウも今日はありがてー、珍らしい山やもみぢよ見るツて、之も善光寺様のお力じや」とお禮が却てアベコベに成つたのは一入滑稽と申さねばなりません。ソハ兎も角此老婆の一言の外又更に申しやうも有るまいと思ひますから妙義のことは此位に止めて更に

（二）碓氷峠

の方に移れば何より先きに紅葉を思ひ出しますが、ツヒ先頃までは、サウ世の人に持囃されたでも無いのでした。否碓氷峠と云へば旅人が顔をしかめた位で中々紅葉を見物するどころでなく、汗水を流して苦んだばかり、諸大名が幕府に參勤の折此の峠を無事に越えた時は、國元の內室へ、碓氷峠御無事御通過と云ふ飛脚を立てた程の所でありました。勿論之は舊道時代のことでありますが、明治の初年此舊道よりズツト西に下つて新道が開け、引つゞいて鐵道馬

車も出來ましたが、是れ亦頗る險呑な通路で、とてもノンキに紅葉などを眺めて居るやうな譯に參りませんのみならず、通交の人も甚だ乏しくて、云はゞ風流な旅行家が會々此紅葉を紹介する位のことでありましたが、ソコへ間もなく鐵道が開通して、輕井澤へ外人が避暑に參り出したので、ソロ〳〵紅葉の評判が高まつたばかりでなく、春の躑躅までも世に歌はれるやうになりました。只今ではチト氣の利いた方で碓氷に遊ばぬものは無い程でありますが、かやうな名所に變つたのも全く鐵道のおかげと云はねばなりません。否外人の力と云はねばなりません否々寧ろ輕井澤の勝地があつて始めて此盛況を見るものと云はねばなりません。ソコデ此輕井澤と申す處は碓氷峠の北麓で、海拔一〇〇〇メートル以上の高地にある些々たる驛に過ぎません。賑やかな場所でコンナ高い所にあるものは日本全國中また二つはありますまい。それゆゑ麓と申してもスグ山頂に手の屆くばかりで、オヤ之が麓かと疑ふ位汽車が頂に登りつめて輕井澤の停車場に至るには、坂であるのか平な道であるか、更に氣のつかぬほどであります。唯に舊道の邊が小高いので輕井澤から見れば蜿蜒たる一つの丘陵が起伏し居るやうなものに過ぎません、此丘陵のつゞきがクルリと東に廻つて其尖先に淺間山が聳ゆるから、輕井澤は此懷の箱庭のやうな芝生の原に其位置を占め居るのであります。内外人の別莊はソレ〳〵勝景に據つて白堊の閃めいて居る樣はサナガラ小瑞西の觀があると申しても差支がありません。近年此仙境に暑を避くるもの追々增加して、數千の人を數へるに至りましたので、附近の山村に於ける農產物にシタヽカなる變化を起しました。由來此地方は寒氣が酷いため、僅に粟やそば位の取入れに過ぎませんでしたが、外人の多い處から西洋の野菜やらスイミツ糖、唐林檎などが盛んに栽培されて、然かも品質良好產額豐富なので、東京橫濱へ輸り出すと云ふ盛況であります。夏でも華氏の七十五六度、極寒と云へば鼻下の八字髭へ呼氣のか

かるの、か凍る程なれば、其以前は山民何も此寒さと貧乏でブル／＼震へて居つたさうでありますが、今では其生活の程度も亦全く一變して居ります。況んや此地は中仙道に於ける信州の南極で交通の咽喉を扼し居れば、彼の兵士の入營の受け渡やら、顯官珍客の送迎やら、アラユル管轄上の關係交渉に出入する人々など殆んど絶間なきに於けるおや。偖も地の利を得ると否とが如何に人文發達の上に大なる關係を有するが、從て斯る箱庭の一小研究が如何に地理的趣味を活躍せしむるか、思へば地理上の研究として中々に忽にならぬのみならず、大いに進んで其趣味を求めることに力めなくばなりますまい。去れば之より題目を一新して、火山の活動を



(三)淺間山

によつて研究いたしませう。却説此山の雄拔なる實に八千餘尺の雲表に聳へて常に烟を噴く樣は、何時如何なる活劇を現はすか實に壯大に思はれます。シテ其最近に於ける大活動は鈴木正長が天明の變災なる一篇に遺憾なく物してあります。即ち……七月になりしかば、雨に交りて砂を降らし、風に連れて白毛の如きもの飛び來り、大地の震ふ音夜も晝も聞えけり。こは信濃國淺間山の燒け出でし火

勢の凄さひゞくにぞありける。山の上の煙は空を覆ひ、電光夥しく、雷きびしく鳴りはためき、二三里が程は闇となり泥土を降らし火の石を飛ばし、震動雷電いやまさり、終には淺間崩れて大水出で、燒石泥を押し流し、其勢の恐ろしさ、たとへて云はむやうもなく言語に絶えしことゞもなりき。中にもおそろしきは高さ三間長さ十三間の大石さへ一夜の中に押し流され道のり十三里にて止まりしこととなり。之は元より燒石なれば其の流の水も大熱湯と湧きかへり、石の上にかゝりし物は草も木も忽に燃え上り、おそろしなんど云はんも愚なり。かほどの大石だに押し流されしとなれば其水筋の村々五十三ヶ村、一時がほどに押し流され、掘り穿たれし地は深さ三丈二尺の水を湛へて新に沼となれり。人馬の死亡數知られざる由聞えぬ。水の色赤きこと血の如し。實に古今未曾有の地變とこそ云ふべけれ。……一讀身の毛もよだつばかり。ゲニ恐ろしき荒れ方なれど然かも一面に於ては其噴出せる堆積物が年と共に雨雪にあひて雨毎に崩落し遂に膏腴なる土壤を化成するのみならず、山々の景色を多趣多樣に變じて人生に一大快樂を與ふるのもソガ活動の結果に外ならぬのであります。即ち輕井澤停車場より一面西に開け居る廣野に落葉松の生ひ茂れる、碓氷の紅葉に富める如きは其地味の如何に肥えて居るか、此山中の景致が如何に變化に富んで居るかは彼の箱庭の樣、高根の畑、さては谷間の紅葉などを見ても思ひ半ばに過ぐるでありませう。要するに妙義と云ひ碓氷と云ひ淺間と云うて三つに分れ居る者の、少しく大きく見れば火山岩的組織の一大公園に外ならぬのであります。此公園を跋渉する外國の婦人が妙義に淺間に男子と相驅逐する壯遊の樣は柳腰的チヽコマリ主義の我婦人者流に好個の訓を與へるものでありませう。

ソハ兎も角も此山々が我邦地理上の地位に於ける價は頗る重要の者で、其山脈の一つは兩野の國境を劃して直ちに白河の關に亘り、他の一つは上信より甲武の界線をなして遠く伊豆半島に斗出し、關東の噴

野を包んでソガ外郭嶺をなすのみならず、兼て東北日本と中部日本とを分界する一大脊骨を構成して居ります。其昔日本武尊が此碓氷の山頂に御言を宣せ給ひしことを伺ひ奉るに、かゝる好眺の場所がらだけ、端しなく優しき御思召のほどを洩させ給ひしことゝ推し參らせます。して此有りがたい御言は碓氷の名聲を我歴史の上にまで輝したもので、山の由所として並ぶものがムますまい。却説また此中部日本と東北日本との一大區分があるだけ、此分界嶺の陰と陽とは僅か壁一重でありますが其氣候や風俗や人文やが、ソレハ〳〵メッキリ變つて居るには誠に驚く外はありません。ソレに付て一つのお話がありますが曾て信州の狩人と上州の狩人が一所に落ち合つて兎狩の話が始まりました。上州の狩人の申すには、「我地方の兎は毛の色がミンナ茶色であるが信州の兎も矢張り左様であるか」と問ひ出しました。信州の狩人は「イヤ左様ではありません。我地方のものは雪のやうな白いものばかりである」と申しましたので兎の毛色論が持ち上つて互に茶と白とを言ひ張つたと云ふことをきいたことがありました。

勿論兎には茶もあり白もあることは誰れも承知して居りますが、上州と信州との兎には此狩人の論爭した理由があるのでムます。ソレは碓氷の山陰の方は何時までも雪が積つて居るので、此上を驅け廻るに都合の善いやうに其毛の色が眞白に變るのであります。一寸見たばかりでは兎やら雪やら見分けが付きませんから、狩人の目を首尾よくまぎらすことが出來る、之は動物の保護色と云ふ一つの働きに外ならぬのであります。所が其山陽の方は殆んど雪がなくて山野は枯芝の色に覆はれ居りますから、此の地の兎は生存上の必要として茶色であるのは丁度雪國の兎が白いのと同じ道理であります。之は氣候の格段な違ひを理科上から見た一事實に過ぎませんが、コンナ例は幾らもあるとでありますから、大抵にして次に紅葉の事を述べませう。

（四）紅葉とアプト式

高崎に於て略々山の案内がついたから、之より車の駛るに連れ、ソコ、の景色を見落さずにズット横川停車場に進みました。横川は碓氷の南麓にある一つの驛で所謂碓氷の關所の遺蹟で、汽車は是れより名にし負ふアプト式を軋らせ、拔けてはくゞるトンネルの山又山の懐を縫ひながら徐ろに山頂に上るのであります。却説山の入口は木々の葉の色未だ綠の褪せぬ所も多いが、山上は早眞紅に染め出でゝサナガラ古錦襴を懸けたやう、ゲニ天然の油繪で何とて

紅葉ちるながらの山に風吹けば
　　錦をたゝむ志賀のうら浪

の小看のよく及ぶ所でありませう。若し夫れ熊野平停車場（峠の中央にありて全國最高所の停車場）に下車して此間を逍遙し、徒歩直ちに輕井澤に越え出るならば、碓氷の粹を拉して都門に携へ歸りたき心地がするでありませう。

終りに

（五）紅葉の學理

に就て一言しませうならば、由來植物の紅葉するも

のにカロチン即ち黄色素と、アントチヤン即ち紅色素との二た色がありまして、前者の代表者は公孫樹で重に西南の暖地に分布し、後者の代表者は槭樹で碓氷の紅葉は多く此アントチアンなのであります。勿論アントチアンは日當りの善し惡しで早く紅に染むと染まぬと、鮮かなると鮮かならぬとの相違が出來ます。ゲニ此碓氷でも山上の日當りが十分な所ほど早く赤くなりますが、下の方に下ると赤いのやら黄色いのやら分らぬやうであります。ソコデ此槭樹の綠色の色素は秋に至ると霜を受け、日光に逢ひて一の化學的變化を起し、赤いタンニンを止めて地下に下りますゆゑ、こゝに綠葉は變つて紅葉となるのであります。



滿洲事情

四、（つゞき）

從軍記者　園田紅村

何處の停車場でも、少し大きい處では、數十棟の大厦高樓が、巍然として聳へて居るが、大石橋では、三百餘棟の洋館が、甍を並べて居るのは、餘程な見物で厶います。これは、停車場の家屋もあり、兵舍もありますが、中には、武官の住宅らしいものも見えるやうで厶います、こゝは營口を去ること七里、同所へ通する鐵道の分岐點で厶いますから、斯く思ひ切つて、大經營を爲した者で厶いませう。

こんな立派な建物や、便利な鐵道を吾々に遺して置いて、北へ〳〵と、ヅン〳〵逃げて行く露西亞人こそ、我に取つては實に難有いものです、いやこれも皆我忠勇なる軍隊のおかげで厶いますから、吾々はよく其恩を謝せなければなりませぬ。

建築の材料は、赭色の滿洲石と煉瓦とを用ゐてあります、そして屋根は赭色の瓦とゝたんとで葺いてありますから、見渡す所、眞赤な建物で厶います、これらは皆冬を標準として造つてあるから、壁が厚くて、窓が少ない、そして各室必ず煖爐の設けが厶います。

要するに、露西亞人の遣り方は、大仕掛だ、日本人のやうに、けち〳〵して居ない、それに又、まだ家だけ建てられて、屋根のないのがあるが、これは、今將に建築の最中であつたとのこと、されば、露人の滿洲經營も、たゞ其緒についたまでゞ、まだ充分の事が出來なかつた樣に思はれます、これで見ると軍隊の增派だけに忙殺されて、民政上などには、尙着手が出來なかつたかも知れません。

滿洲人は、日本人に至極懷いて居て、占領地の民は皆日本の領土の樣に考へて居ますが、露西亞人と云ふと、餘程惡んで居ます、彼れは、暴力を以て、掠奪を恣にしたに引き換へ、我は仁政を以て、これを懷けたからで厶いませう。

一つ面白いことは、日本の貨幣ならば、紙幣でも、銀貨でも、銅貨でも何でも通じます、又此度政府で發行された軍用手形は彼等に最も受けがよろしい、これで見ても我國が如何に彼等に信用されて居るかが了解ります。

私が 北瓦房店から、熊岳城へ進行する途中、丁度午になつたから、晝食する爲めに、路傍の民家へ這入りました、こゝで六十位のお爺さんが、大きく豚の肉を切つて、大きな釜で盛んに煮て居りました、傍らに湯沸があつたから、これを借りて、湯を沸かし、北瓦房店で知り合ひの人から、雞卵を贈られたのを持つて居たから、半熟にして食べたが、彼是親切にして呉れたから、そのお爺さんに、半分辨當の飯を分けてやり、又若干の錢を與へたところ、お爺さん、大層喜んで居た。

私は其時ヘルメットの奈破倫帽を冠つて居ましたので、服裝が兵士とは違ふから、お爺さん變に思つたのか、私に向つて、お前は何かと聞きますから、

私は傍らなる硯を取つて、大袈裟に、我は大日本帝國の新聞記者なりと、筆太に書きましたところ、新聞記者と云ふことは、了解らないやうでしたが、大日本帝國と云ふ字を見て、頻りに、可々と申して、敬意を表して居るので厶いました。大日本帝國皇帝陛下の御稜威が遠く外つ國の民草まで及ぶと云ふのは、何と嬉しい事ではありませんか。

五、露國の捕虜

露西亞兵は、非常に大砲の精良な者を持つて居る、我が軍の所有する砲よりも二千米突は遠方に到達する相です、それに小銃も我國のより劣つて居る譯ではない。

それから、城堡の築き方も、隨分手際が好くて、迚も我兵の及ぶ所でない、とは或る工兵大尉から、親しく聽いた事實談で厶います、それから戰闘に從事した人の話を聞くと、戰爭も中々上手である、彼等は、我兵の三分一ほども彈丸を費やさない、始めは少しも小銃を打たないで居て、我兵を二百五十米

位の近距離に引寄せてから、掩堡なり、或は家の屋根なり、支那家屋の壁などに據つて、一齊射擊をすると云ふことであります。

此近距離の一齊射擊は頗る効力があるとのことで厶います、それだのに、何時も我軍が連戰連勝の榮譽を得るのは、一は、戰畧戰術の巧妙なるに基因するだらうが、一は又我兵の勇猛絶倫、唯々死あるを知つて生あるを知らないのと、他は又我一兵卒と雖も上官の命を俟たずして、各自に地形地物を應用してよく戰鬪的技能を發揮するからで厶います。

私が大石橋の病院に這入つて居る時に、一つ壁を隔て丶、次の室が露西亞の負傷捕虜の室で厶いました總てが十一人で、其内一人は逃げる際に砲彈で、尻から股に掛けて遣られたから堪らない、頗る重傷であつたが、他は極々の輕傷で厶いました。

彼等は申すまでもなく、體格は非常に大きい「大男總身に智惠がまはり兼ね」、なんと云つて川柳などで冷すけれど、我兵などに比べると、さほど智鈍の差はないかと思はれた。

けれども其服裝は、種々樣々で、一定して居ないが概して汚れて穢いのには驚く、眞岡木綿で上衣を造つて居て、下に繻袢も何も着て居ないから、一見しては、シャツだけ着て居るやうに思はれます、その木綿が眞黑に汚れて居るのである、之れに比べては我兵の服裝は整頓して餘程奇麗で厶います。

彼等は、寢るのが好きだ、板の間に、アンペラを敷いて、何時でも、ゴロ〳〵寢てばつかり居る、もつとも椅子がないのだから、起きて居るのも、随分體屈だらうけれど。

彼等は、又随分と呑氣千萬の人種のやうに思はれます、徒然を慰める積りか解らぬけれど、時々聲を揃へて、露西亞歌を調子面白く歌つて居ります、これらは、他國に捕虜となつた身としては、日本人などには、とても眞似の出來ないことでせう。だが、私はこれが爲めに病中の無聊を慰藉してもらつたのは難有かつた。

「敵ぞとて、何にしに、人の憎からぬ、同じ浮世に同じ身なるを」左樣〳〵、彼等も同じ國家の爲めに生命を犧牲に供して戰つたのである、今と爲つては一視同仁、何にしに憎まれませう。彼の負傷者に金蠅とか玉蠅とか云ふ蠅が、數千匹たかつて、卵を產み附けやうとするのでありました、さも五月蠅さうに見えたから、私は、團扇でこれを追ふてやりました。　(をはり)

米國通信

桑港　澁谷うまのかみ

△日米未亡人美談一對

◎過ぎし七月二十五日に、スタンフォード大學の美術館に於て、東洋美術品の展覽會がありました、其陳列された美術品は、各地方より出品して貰ひましたのではなくて、スタンフォード未亡人が、一手で日本から買ひ取りましたものだけで御座いました

◎其美術品數千點の金額は日本金にして二十萬圓で買ひ取りました者なさうで御座います。

◎賣主は池田某婦人、これも昨年良人に先だたれまして、今は未亡人で御座います。

◎池田某一生涯の力を盡して集めました書畫、陶器で御座いますから、實に稀世の珍品が多う御座います、池田未亡人が惜氣もなく之を賣拂ひましたのも之を悉く軍事費として政府へ献納する爲めと申しますれば、誠に感心の至りで御座います、良人も草葉のかげで本懷と思つて居られるで御座いませう、スタンフォード未亡人の義俠心を以て、大金を出して買ひ取りまして、之を大學に備付けましたのも同じく感心の至りで御座います。

△やもめ男の美談

◎桑港ラーキン街に、勝田商店と云ふ日本人の店が御座います、去る八月の末日に店先へ見知らぬ米人が立ち寄りまして、主人に向ひて申しますには、「私は此近邊に住つて居る者ですが此度正義人道の爲めに滿洲の野に戰つて居る貴國兵士を慰めたいと

存じましたが、別に多分の富へある身分でも御座いませんに依つて、所持の指輪を寄附致したいと存じますから、何卒之を現金に代へて、貴國政府へ御取次ぎ下さるやう御願ひ申したいので御座います」と殊勝に申しますから、主人は丁寧に挨拶をしまして其指輪を手に取つて見ましたら、格別高貴の品と云ふでも御座いませんけれども、其の背にウ・イズ、マイ、ラヴと云ふ三語を彫刻して御座いますので、其米人に向ひ「御志は殊勝ですが彫付けられてある文字を見ればいづれ仔細のある指輪と思はれます、御持ちになつて居た方がよいでは御座ませぬか」と云ひましたら、米人押し返して「さればで御座います、此指輪は我が最愛の妻なりし人の忘れがたみで御座います、今は彼の女に先きだゝれまして」と聲やゝうるみまして、詞がとぎれました、この指環をはめて居まするばかりに、夜として晝として、一時片時も亡き彼の女を忘れやらず、亡き魂が身にまつはり居るやうの心地しまして、食事する心も起らず況んや家業など更らに手に付き申しませぬ、此かたみの指環さへ持て居なかつたならおのづから忘れる時も、御座いませうかと、せめてもの思ひ餘りの末に、貴國の忠勇なる軍人を慰むるしろにもせばやと持參して、御願申すことになりましたので御座います」と如何にも眞心こめて申します、米人の詞に主人も、もらひ泣きを致しまして、之を受取りまして、其の名を聞きましたに「名だけは許して戴きたいとて明かしませぬに、愈以て主人は感を深うしまして早速日米新聞社にまゐりまして、一伍一什を物語りまして、取次ぎ方を依頼しました。日米新聞社は之れを日本帝國領事館に轉送致しました、いづれ領事館で之を現金に代へて、恤兵金に寄附の手續をするで御座いませうが、其指環は十四金でつくり目方は三匁八分ばかりのもので御座います。

△小學校教員は悉く女子

◎であると申してもよい位な所は、カリフオルニヤ洲のシヤスタ郡で御座います。

◎全體から申しますれば、米國の小學教員の總數の中に就て、三分の二以上は女子で御座いますさうですが、シャスタ郡の例は最も甚しいもので御座いませう。

◎シャスタ郡の小學教員は、皆で百二十人で御座います、中に百十一人までは女子で御座います、殘りの九人の男教員の中に、六人は校長で御座いますから、平教員で男子たるものタッタ三人と云ふ少數になります。

◎桑港クロニクル新聞は、此事を記載して、論じまするには『シャスタ郡の人民は、全體女教師を聘する事を好みますのでありますか、但しは他に理由がありますか、或はまたシャスタ地方の男子は、他に適當の職業がありまして、教師をする事を好まないのでありませうか』と。

◎女教師の月給は、大抵日本金では一百圓で御座います、それで御自分一人をさゝへて行きますにも、中々困難なさうですから、況んや親兄弟を養ふなどは、出來ない次第で御座います。

△女辯護士法廷を驚かす

◎去ぬる七月八日に、當市警察裁判所の法廷に於て判事コンラン氏の前に立ちまして、圓轉たる鶯のさへづりを弄し、ゾセフ、コニエと云ふ佛國生れの男の毆打創傷の罪を辯護し、其の無罪を主張しまして、滿廷の人をして舌を卷かせました、辯護士は、クラリベル、デヴイットと申しまして、年若く小形で、愛嬌のある美人で御坐いました。

◎デヴイット孃は、カリフオルニヤ大學を卒業して文學士の學位を受け、更にヘステング大學を卒業して法學士の學位を受けましたもので御坐いますからなみなみの婦人とは異つて居る所が御坐いますのです。

△日本縮布の流行

◎近頃著しく目に立ちますのは、反物屋の廣告に日本縮布の着荷を報じてあるのです。

◎日本縮布の需要は、是迄あまり多くなかつたさう

ですが、今年に入つて、メッキリ流行り出しましたのは、矢張陸海軍連戰連捷のおかげで御坐いませう

△跡見玉枝女史の來米

◎八月二十九日に、日本から桑港へ着きました汽船カプチック號には聖ルイス博覽會へ赴かれます北里醫學博士、穂積法學博士、跡見玉枝女史、其他ミス、カテリヌ、アウグスタ、カールなど云ふ有名な方々が乘つて御出になりました。

◎翌三十日の一英字新聞は、北里博士以下の肖像を掲げまして、之に添へるに、讃辭を以て滿された小傳を以てしました。

◎英字新聞は、尙ほ跡見さんが、日本第一流の女性畫家で、貴族社會に持て囃やされて居る事を述べて最後に附記するやう『二博士及び跡見女史等を出迎のために、日本人の小さくて栗色した顏の紳士たちは數多波止塲に集つて來た、此人たちが連りに腰を屈めて、挨拶するは、一の奇觀であつた、或る人の如きは、少くとも九度は腰を屈めた云々』

◎禮の方法は、國々各々慣習があります、私共の目で見ますれば、白人夫婦らが、多人數の中に接吻するなどは、見つともよい事では御坐いませぬ。

△西太后の肖像を畫いた婦人

◎カゼリヌ、アムグスタ、カールと申します米國婦人は、聖ルイス博覽會へ出品になりました、支那西太后の肖像を畫いた方です、此婦人の兄弟の一人が支那政府から博覽會出品事務の管理を委任されまして、只今聖ルイス市に滯在して居ますので、カール婦人は、之に面會のために、同地へ赴かれる途中にありますのです。

◎カール婦人曰く、『西太后が世間から色々惡い評判を受けて居ますのは、誠に御氣の毒な事です、實際あんな高貴にして温雅なかたは世間に見られませんよ』

◎又曰く『私は二年間、西太后の宮中に伺候して居ました、其間に四枚の肖像を寫しました』

◎又曰く『是から二年間當國に居まして、更に又支

那に行きませうと思ひます。」

◎うまのかみ曰く、此西大后の肖像は、女鑑の讀者諸嬢の既に御覧になりました所の者です。

△聖ルイスに於ける米國紳士と日本貴女と

◎米國大統領ルーズベルト氏の令息が、博覧會見物に、聖ルイスに御越しになりましたついでに、先般桑港へ上陸しました時、クロニクル新聞社員を驚かせました所の日本の貴女（實は日本のゲイシャガール）に正式に會見を遂げられましたと、聖ルイスの新聞は特筆大書して報道しました。

△女子が男子になつた

◎矢張大統領ルーズベルト氏の家に、料理番を勤めて居まする其名をエムマ、ビークルと云ひまして、五十前後の婦人がありました。

◎此ビークル婦人は去る八月二十八日に、今日は日曜とて、ハドソン公園へ遊びに行きまして、歸路夜ふけて、とある料理店に入りました。

◎其の料理店でシタヽカにウイスキー酒をキコシメシました所が、俄に急病になりまして、七轉八倒の苦みをしました、人々之を介抱して騷いで居まする所へ、巡行の巡査さんも立ち寄られました。

◎何分病氣とは云ひながら、泥酔して居ますので、氣が慥かでありません、其擧動がどうも婦人のふるまひとしては見られませんで、巡査さんが、それから種々機轉をきかして、取調べました所が、不思議に見えましたのも道理、このビークル婦人と云ふは全く男子でありまして、其白狀しまする所によれば凡そ二十年の間、女子の眞似して過して來ましたと申します。

◎今は棄置かれず、巡査さんは其ビークル贋婦人を拘引しまして、翌日裁判に附して、四ヶ月間の懲役に處しました。

◎此贋婦人は、ニウヨーク生れの本名はクリスチアン、ビークルと云つて、當年取つて五十歳の男子でした。

△婦人用海軍外套

◎露都ペテルスブルクからの報知によれば、露都では、仁川の海戰以來、婦人が海軍風の外套を着る事流行致しました、然るに此頃警視總監は命令を發して之を嚴禁しました、如何にも連敗海軍の紀念を止めまするは、縁起のわるい事でございます。

△娘子軍の蜂起

◎處は米國カンサス州のクバ市、時は八月の二十八日、二十七人の婦人たち、四軒の酒屋を襲撃して之を破壊しました。

◎エ、オ、ファイテス婦人とウイリアム、マクドナルド婦人は、共にクバ市に名のある商店の婦人ですが、此二婦人まづ斧を手にして一酒店に闖入し、宣戰をもなさずして直ちに酒樽の打擊を開始しました、續いて二十五人の婦人の一隊が、進んで入りまして、大瓶、小瓶、ビール、葡萄酒、ブランデイ、見當り次第に薙ぎ倒しました、酒屋の店番は不意討ちを喰つて敗走して、其行衛を知りませぬ。

◎總勢二十七人の婦人は、既に一酒店を屠りましたが、之に滿足せず、續いて其他四軒の酒店を屠り盡しまして、連戰連勝の勢に乘じて、市役所に至り、其倉庫に沒收して蓄へ置きましたるビール樽を數多ころがし出しまして、盡く之を大道へ押し撒けてしまひました有樣はまことにすさまじかつたさうですが、女子には甘い米國政府は之に對してどう云ふ處分をしますか。

△四萬人の下女

◎八月十五日發紐育の報知によれば、最近六ケ月間に、外國から出稼ぎに來ました、下女の數は、四萬人に達しました、之等みな紐育附近に、それぞれ働き口を求めて入つてしまひましたと。

△二十三人の黑奴娘

◎十九歳以下の花盛りこれも下女奉公する目的で、西印度諸島中のポルト、リコ港から、遙々合衆國へ渡つて來て、聖ルイス市に落ち着きました、聖ルイス網索會社のフランシス、リンチ氏の世話で、其會

社の仕事をする事になりましたのです。

△一人の支那娘

◎年は二八、名はミー、ホー、香港から神戸から、横濱から、長の船路をやう〳〵桑港へ着いたと喜びました甲斐もなく、七月廿五日着港より今日まで幾十日の間、日本波止場の小屋の中に留め置かれ、進退茲にきはまつて憐にも氣の毒の至り。

△勝田女史

◎角筈女學校長たりと聞えました同女史は、フイシヤーと云ふ宣教師の東部に行きまするに同道して桑港を出立し、暫らくボストン府に滯在、をりを見て歐洲に渡られますとのこと。

御題詠進に就て

中村牧子

◎年々初春の御式として宮中に行はせらるゝ歌御會始に、一般臣民の詠進を許さるゝのみならず、其の詠進を總て乙夜の覽に供せらるゝのは、詠進者に取

りて幸榮此上もなきことであるから、御題詠進に就ては愼重の上にも愼重の用意を要するのである。

◎然るに御題詠進者中、尙ほ　聖意の忝なき程を充分に辨へ得ずに、違式の詠進をなすもの年々に少なくないのは、奈何に歎はしき次第ではあるまいか、來ん年の歌御會始の御題は、去る頃既に「新年山」と下し賜はりた今日、豫め詠進者の注意を喚起して置くのは、最も必用なことであらうと思ふ。

◎我國の中古時代、百般の事唐制に模倣せられて、漢文學の隆盛を極めた折には、宮中に於かせられても、年中行事の一として詩文の御會始を行はせられたもので、それは內宴と稱して正月廿一日うち〳〵の御節會あり、文人ども題を給はり詩を作りて、やがて御前に講せられ、其の御會始終れば、一二獻の後、親王公卿に若菜の「あつもの」を給ふの御例で、これは嵯峨天皇の弘仁三年に始めさせられたものであるが、保元年中僧信西が申行ひじ以來は、其の御式も絶へたるやの說がある。

◎其の後、延喜の聖朝に和歌所を置き古今集を勅選せしめられて此方、流れ絕へせぬ敷島の道、言の葉草の咲き匂ふことゝなり、歷朝勅選の御例も少なからず、歌御會の御催しもより〱行はせらるゝ例になつて、後柏原天皇の朝に於ける歌の御會のめぐらし文といふものが、故本居翁の隨筆「玉かつま」の中に見えて居る、其文に曰く、

甘露寺大納言元長卿記云、永正五年正月十四日和歌御會書廻文、以奉殿遣之、依有慶音、右御題、來十九日可有披講、可令豫參給由、被仰下候也、正月十四日、元長、中御門大納言（此の處同しつらに二十三人の名あり）袖書 尅限可爲午一點也、丞相別紙以折紙相觸之、

◎近く慶長元和の後となつては、正月十九日歌御會始の式あり、題は兼日ふれられ、宮方へは勾當内侍奉書にてまゐらす、入道親王などへは宮方より傳へられ、攝家方門跡大臣などへは和歌の奉行よりつたへまゐらせ、其の外は和歌奉行折紙ひとつに書きつらねて知らする也、秉燭の比、各々參りあつまる、講じはてゝ退出、清涼殿にて勸盃の事あるなど、種種の記に見へて居ます。

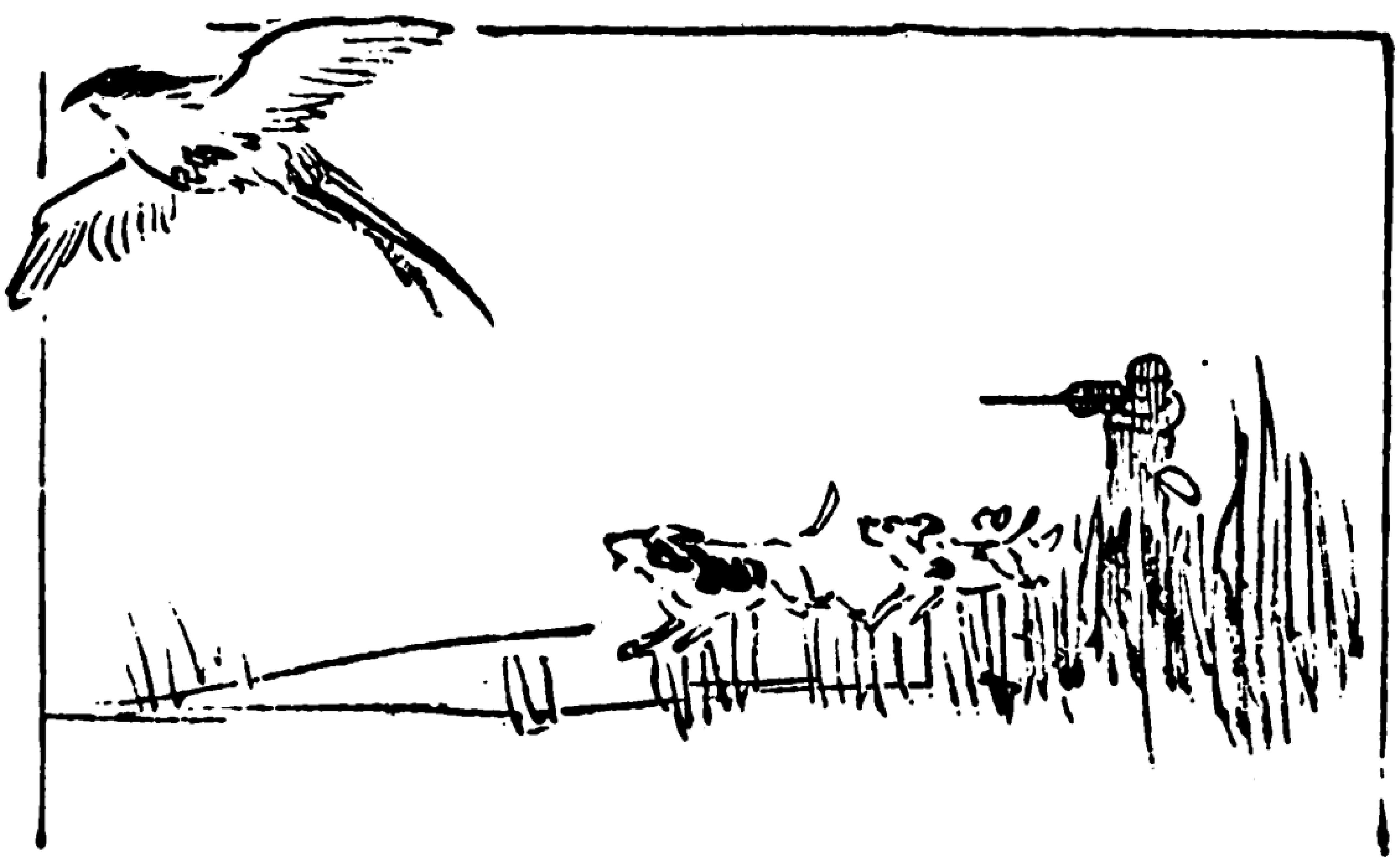
◎かく、歷朝歌御會の式は絕へしことなく、勅選の御例も少なくはないが、貴賤貧富老幼を別たず、一般臣民の詠進を許させられて、其の詠進を天覽あらせらるゝのは、立國以來只だ明治の聖朝あるばかりである。

◎謹んで承はるに、當今文學に關する宮中新年の御公事は、御講書始と歌御會始の二つなので、就中歌御會始は明治三年以後年々引續き行はせられ、最初は皇族、華族、勅任官に詠進せしめ給ひ、次で判任官に至るまで歌道に心掛けあるものは詠進致すべしと仰出され、明治七年よりは一般臣民にも詠進を許され、其の歌は當日叡覽に供へ奉ることゝなり、十二年よりは更に一般臣民の詠進中より、屬籍の尊卑を論せず、點者の撰拔に預りたる秀逸の歌五

六首を、御製及び懐紙に加へて披講せしめらるゝことゝなつたので、歌道奬勵の大御心の程は、かしこしとも畏み奉るの外はない。

◎さて又、詠進　天覽の御順序を伺ひまつるに、帝國内はいふも更なり、海外よりの詠進を併せて、數萬首の多きにも及ぶものを、仰出された詠進式に違はぬ限り、皇族、華族、高等官などに種別し一般臣民の分は臺灣道廳府縣別に次第して、之を製本し、御式後直ちに御手許に奉るの御例に定めさせられ給ふてある。

◎然るに、年々の詠進中違式のものが多いとは、聞くだに恐れ多いとではないか、曾て違式の尤も甚だしきものとして、御題を聞き誤まり「新年海」を「新年梅」としたる例しもあるが、明年の御題は聞き誤まるべしとも思はれぬまゝ、他の重なるものをわげて見やうに。



◎違式の多分は書きざまの如何にも粗末なことで、或は名を略して「上」と書くべき筈なのを「名上」と記したものがあり、或は歌の次に「宮内省御歌所御中」などと書いたものがあつて、違式とも非禮ともいはん方なく、往々掛員を抱腹絶倒させるものがある。

◎次に、用紙の違式なのも亦少なくない。薄葉、半紙などは何ほ恕すべしとして、中には巻紙を繼合して長々と認めたのさへある、此のやうなのは合本して叡覽に供へやうとするにも、全體の體裁を損ずるから違式として棄てねばならぬ、又薄葉などにしても合本とするには、如何にも見すぼらしいものであるから、式に定められた通り美濃以上の紙を用ゆるが可い。

◎勿論、美濃以上の紙といつた處で、善い限りの紙を用ゐやうとして、大高檀紙を其のまゝに用ゆるなどは、まことに非禮の極みである、元來、大高檀紙を其のまゝに用ゐさせらるゝのは、陛下はがりなので、皇族方といへども、特更に其の寸尺を縮めて、潜越の嫌を避けさせらるゝ程のものである。

◎要するに、詠進者の尤も心に銘すべきことは、貴賤貧富を問はず何人の詠進も、其歌の調ふたのと調はぬのとを論せず、總て其の筆のまゝ紙のまゝに、陛下の御覽に供せらるゝことなので、撰に預かつた歌が御前に於て披講せらるゝ榮譽はいふまでもないが、撰に預からぬものでも違式でない限りは、堅詠草のまゝ製本して、御會始の當日叡覽に供へ、陛下には御手許に留め置かせられて、一々御目を通させ給ふことであるから、詠進者たるものは之れを以て無上の光榮とすべく、苟且にも式に違ふやうな粗略があつてはならぬと共に、總ての用意に於て謹嚴を旨とせねばならぬのである。

◎見しは昔、當君江戸へ御打入りより此かた繁昌し家居多く出來たり、されど皆草葺にて燒亡しげし、然るに慶長六年霜月二日の巳の刻、駿河町かうのじやう家より火を出す、此火燒亡に江戸町一宇も殘らず、御奉行衆仰にて、町中草葺ゆゑ火事絶えず、幸なるかな此序に皆板葺になすべきよし御觸わりければ、町ことごとく板葺に作る處に、瀧山彌次兵衞と云ふ者、諸人に秀でゝ家を作らんと工み、海道をもてむねより半分瓦にて葺き、後半分をば板にて葺きたり。人皆沙汰しけるは、本町二丁目の瀧山彌次兵衞は家を半分瓦にて葺きたり、さても珍らしや、奇特かなと人褒美して、異名を半瓦彌次兵衞と云ふ。是江戸瓦葺きの初めなり、古歌に、瓦の松、軒の瓦、かはらの屋などゝ詠せり。瓦屋を心かはら屋と心つかはるによせて讀みたる歌あり。件の彌次兵衞が人に心かはらやせしこと古今異ならず。

（老談一言誌）

小説

無限恨

中村春雨
西村醉夢

『如何で御座います？』

と優しい、情の深いやうな聲で、露と美くしい眼を患者に注ぎながら、恁う云つた看護婦は、二十前後の花盛り、白い頭巾に白い洋服、赤い十字に眞心を現せて、職務に忠實な有名の女、髮黑く、色白く、顏には愛嬌ほろ〳〵と溢れて、すらりとした撫肩に、翠翡の羽をつけもしたならば、全で空から天降りました天地その儘！

『あゝ、今日はね、大分……………。』と患者の聲は秋の末つ方の蟲の音か許り、末は消えて分らなくなつて了ふ。

『今日は宜しう御座いますか、ま、それは結構です、何卒氣をお樂に持つて、心配なんぞ成さらないで……呑氣が何よりも一番の妙藥ですよ、よしんば何なに重い病氣でも……。』と看護婦は慰め顏に恁う云ふのであつた。

『有り難う御座います。』と患者は後を言ひ難ねて、苦しい息をほつと吐いた。患者の名は大山秀子、年五十一、病名心臟病、脉搏體温衰弱を示し、豫後不良との事。ここ一月程前に入院して、逐日快方に赴いたので、一同は皆愁眉を開いてゐたが、四日程以前から病勢頓に革まつて、到底助かるまいとの診斷が院長によつて下された程。

二人は暫しの間、相對して默つてゐた。外には暮れゆく秋の風幾陣、ばら〳〵と枯葉を捲いて、何となく物悲しい夕暮である。

『日外、貴方は阿母樣を失つたとか、仰言いましたが。』と息を繼ぎ『それはお國許で、御座いましたか。』と、秀子は苦しい息の下から僅か數語を放つのであつたが、聲は肺腑を絞つて出て來たかと許り。

『はい、左樣で御座いました……。』と怪しい眼附の看護婦は、眤と眸を患者に傾注で、何事をか云はうと爲てゐる者の如くであつた。

『何時かのお談話によりますと、貴方は全でお母樣に捨てられたやうなもので御座んすが、それでも貴方は、矢張り……お母樣がお懷かしう御座いますか……え、貴方。』と肩で息をする。

『そりや貴方、親子ですもの、懷かしう御座いますとも……假令お母樣が私をお棄てに成つたとしましても、私を產んで下すつたのはお母樣で御座いますから。』と後は言はで俯向く看護婦、眼からはほろりと一しづくの泪、それが秋原に散る露の玉かとも。

『矢張り〳〵……お懷かしう御座いますか、ねえ、貴方、お母樣に棄てられたにしても。』と咳拂二つ三つ、『それかと云つて、お母樣の方でも……憎いからお捨てなすつたと云ふ譯でも御座いますまいし……其處に何か云ふに云はれない樣な譯があつて、それでお捨てに成つたのだらうと……恁やうに私は思ひますが……それに違ひありませんよ、貴方、決して〳〵お怨みなさいますな、貴方を捨てたお母樣は捨てられた貴方よりも、屹度一層苦しい思をして居らつしやるに相違御座いません。』

患者は是だけ言つて矢庭に口を噤んだと思ふと、餘程疲れたのであらう、夢見るもの丶如く、混沌として無意識、無感覺の境に入つて了つた。唯一縷の、去過世から通ふかと思はれるやうな息の音が、風吹き

凪いで、寂寥と靜まつた病室の中で、幽かに〳〵、譬はゞ靈魂が體中を拔け出でゝ、絶對界へ歸入する時空間に起る氣の動搖であるかと感じらるゝ程に通ふのみなので。

此の儘！若しか此の儘！大山さんは眼を瞑つて了はれるのぢやないか知ら、何故自分は看護婦と云ふ身分を忘れて、患者を疲れさすやうな談話をしたのであらうか、餘りに職を曠じくすると云ふにも、程があるではないか………。けれども始め大山さんの入院せられた時、自分は何とはなしに懷かしくて、戀しくて、恰度分れて未だ一度も會はないお母樣に、始めて逢つたやうな心持がした。それから自分は大山さんの顔を見ると、氣が自づと上ずつてきて、夢を見る樣な、幻にでも接してゐる樣な思をするのが常である。事によつたら、彼は眞實の、自分を產んで、自分をお棄てなすつたお母樣ぢや無いか知ら。間違つたらお免し下さい、大山さん！私には何うしても、貴方が……貴方が私のお母樣としか思はれません、世の中に此な不思議な邂逅と云ふものが、有るか無いかは知らないけれども、若し有りとしたならば、私と貴方とが此うして此處で廻り合ふのも、矢張何かの因緣で御座いましやう……。あゝ、又しても下らない事を考へ出した、おう、最早外方は漸暗いぢやないか。

と空想から醒めた看護婦は、魘夢より覺めた時のやうに、悚として身に泌む寒氣を催すのであつたが、つと立ち上つて電燈の栓を捻ると、燈光はぱつと四邊を照らして、わが影は壁にぼんやりと。

『あらまあ厭な電燈ッたらない、全で死んだ蝶々の羽のやうな色ぢやないか……。』と看護婦はぶるゝ、ぶると身顫をした。

だけれども可笑い、何う考へても可笑い、大山さんは乾度、自分の產の母に違ない。何故ッて、口振が可怪しいもの……何時だつたけ、爾う〳〵五日程前の、あの日曜日の朝方だつた、母親が若し何かの

事情があつて、現に實の子の前にゐても、私はお前のお母樣だよと、名乘を上げることが出來なかつたら何れ程苦しいとお思ひなさるか、ツて、自分に尋ねられたことがあつたではないか。若し、大山さんが御自身で、子を捨てた――生かすか殺すかと云つた樣な塲合に、可愛さうとは思ひながら、わが產の子を捨てられた事がないなら、彼のやうな疑問の起る譯がないぢや無いか……。乾度、大山さんは何かの事情で、切迫つまつて子をお捨てなさつたに相違ない、その子が自分であるか無いかは、それは容易く分らないけれども、兎に角お捨て成すつたに相違ない。而て世の中に爾な塲合が澤山あるで有らうか、有る道理はない、ないとも〳〵有つたら噓だ、何うしてもお故鄕は仰言やらないけれども、言葉の樣子は慥かに伊豆！それも韮山のによく似て居る……而て自分は韮山で育つたのだもの、大山さんが何故、私のお母樣でない事が有るものか、今の世に子を捨てると云ふのは、搖籃の中へ入れて道端へ捨て丶置くのぢやあるまい、大山さんが子を捨てたと仰言るにも、矢張り自分のやうに、親子の緣をふツつりと切つて、若干の養料を附けて誰かにお與れなすつたのだらう……自分で自分の歷史を知らないと云ふのは可怪いけれども、自分は實際自分の生立を知らない、十二の歲の暮までは、あの阿母さま、韮山に居らつしやるのを、本統の阿母さまだと思つてゐたんだもの、隣の源七爺が秘と云つて與れなかつたら、今が今まで知らないでゐるんだもの……。

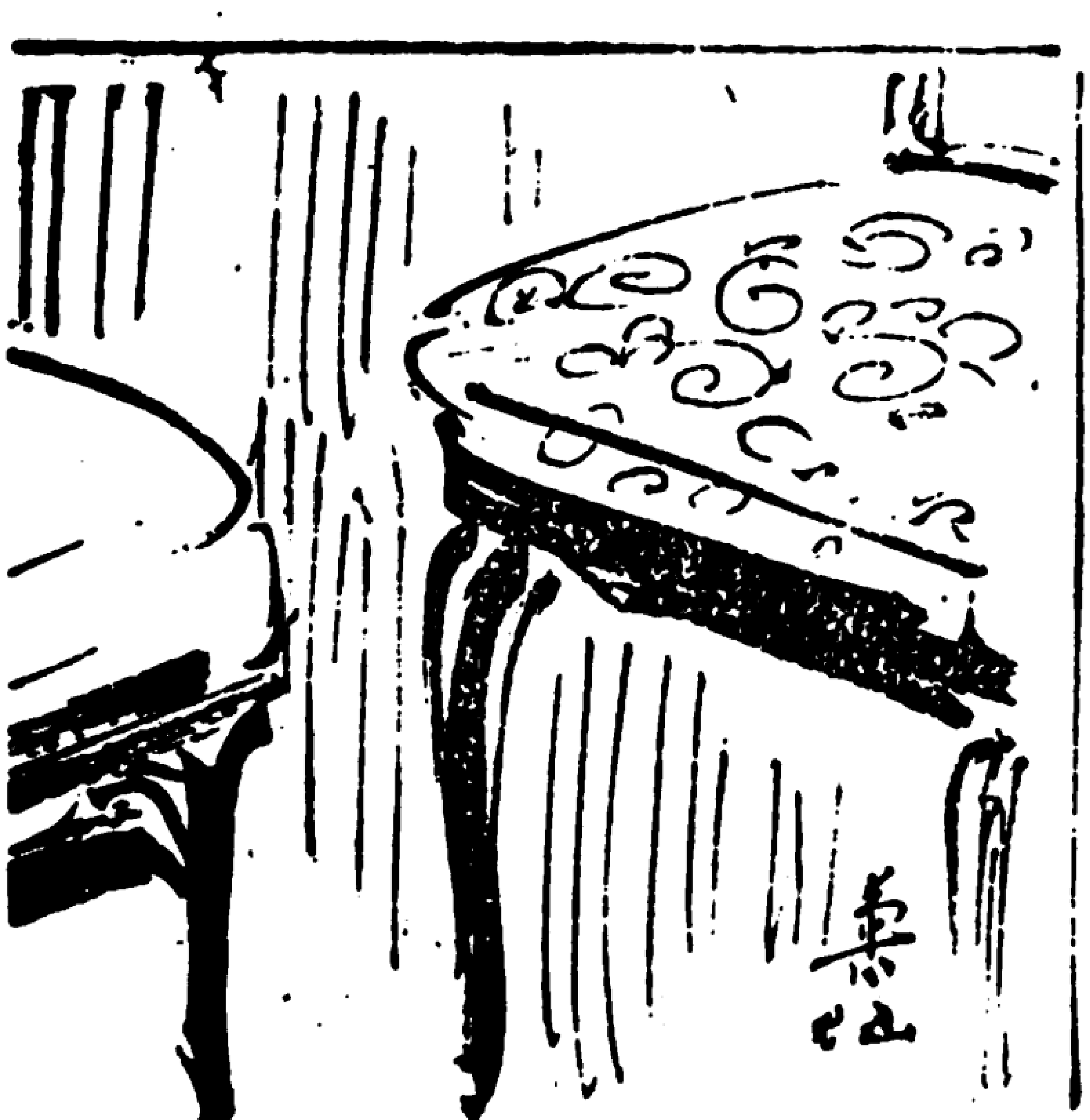
『貴方は今の家へは、小さい時分に貰はれ子に來なすつたので、本統のお母樣は別にお有なさいます、貴方の實母は世にも怜悧な女でしたが、何うした譯か、始めて緣附かれた家から離緣せられ、二人の間に出來た貴方を打捨つて置いて、直ぐ東京へ上つて行かれましたのです、其後噂を聞きますと、お母樣は何處かへお片附きなさつた相に御座います。』と始めて源七爺から聞いた時には、失禮な事を云ふ老爺だとも思

つたけれども、よく聞いて見れば夫に相違がなかつたので、自分は夢ではないか、夢なら、若しも夢なら早く覺めよ、此な夢は厭々々と思つた甲斐もなく、それは實も實も大の實であつた。併し、お母様が自分をお捨てなすつたと云つて、自分は少しもそれをお怨み申す譯はない、お母様だもの、懐しいお母様だもの……えゝ、最う寧名乘つて了はうか知ら。大山さん、貴方は私のお母さんに相違御座いません、何故早く爾うは言つて下さらなかつたの？餘りでは御座いませんか、私は貴方に會はうと思つた許りに、何れ程苦勞をしたか知れやしません、だけれどもお母さん、私は少とも貴方を怨みはしません、貴方は私を可愛想だと思つて下さいますか、えゝ大山さん、ぢや無い、阿母様……。さふ〳〵と吹く風の鋒先、酷く窓の硝子戸に觸れて、がた〳〵と鳴るのに驚かされた看護婦は、屹と立ち上つて患者の顔を眺めた。

秀子は何を夢みてか、片頰に笑を含んだかと思ふと、小さい〳〵聲で唯た一言『まあお前が……。』

看護婦はハッと思つて、二三步後方に退つたが、つか〳〵と寢臺の傍に寄り添つて、又しても視線を秀子の顔に注いだ。

搖り起して名乘らうか知ら、若し違つてゐたら何う爲やう？違つてゐたら夫までの事ではないか、搖り起さう〳〵、お母様に相違ないんだもの、何で、名乘るのが惡いことが有らう、名乘るのは惡くはないけれども、若しか名乘つて病氣でも募らしたら何うしやう？申譯がないではない乎、親不孝に成るではない乎、子としての義務を盡したと云へないでは無い乎……待たう〳〵、最う暫らく待



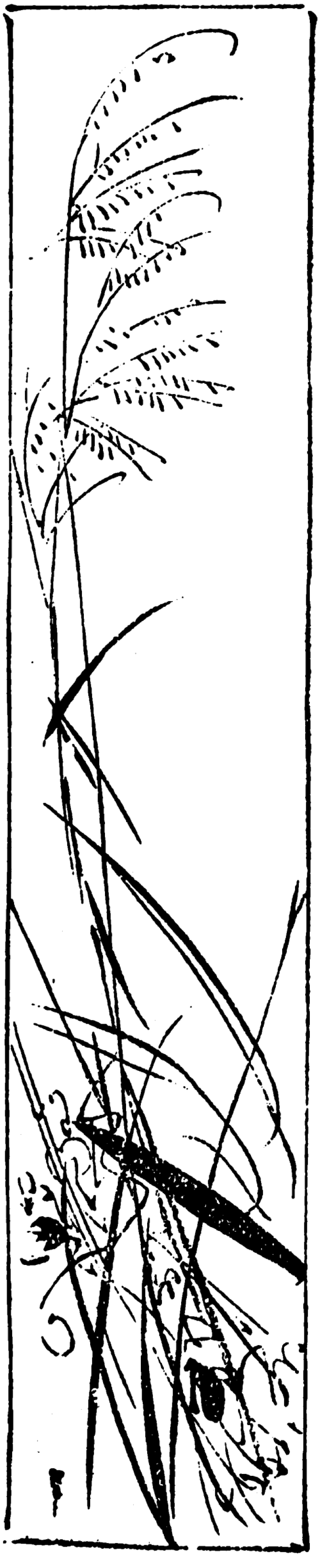


たう、待つて居たらまた名乘る機會が有るであらう、此人がお母さまだと知れてさへ居れば、何も名乘を急ぐ必要はないぢやないか。

夜氣蕭森として秒を刻む時計の音と共に、更けゆく空には星の光きら〳〵と、木枯吹き荒む時には木の葉が散らう、夢幻の境の中に、懐しい母親の事を想ひつゞけて、身體は哀れ藻抜の空の、ひとり飛び出で て燐火のやうに、み空を彷徨ふ靈魂の如くである。

捨てたる親か、捨てられし子か、疑の雲晴れやらぬ胸の中では、名乘らう〳〵と思つてゐる間、その母らしい人は、死の神の手に導かれて、永劫覺めざる長への眠に入り、秘密はこれより幾千萬年、遂に解け難き疑問標となつたのである。

（完）





各宮殿下の御歌

常宮昌子内親王殿下

出征の兵士を見て

勇みたつますらたけをを見る度に
つゝかなかれと祈りこそすれ

出征の將卒を思ひ遣りて

くにのためいさむ心はもゆるとも
なれぬさむさに肌やこほらむ

旅順決死隊の行爲をきゝて

沈むへきふねに乘居て雄々しくも
みなとの口をふさきけるかな

陸軍の捷報をきゝて

御軍はかちわたりぬときくからに
先つこそおもへ益良夫の身を

昨日まて露のおきゐし城のうへに
朝日のみはた今朝なひくらし

雪のふりける夜

白妙にみゆきふり埋むからくにの
野へにふすらむ人をしそ思ふ

春の歌の中に

花鳥のいろにも音にもなにとなく
こゝろとまらぬ春にもある哉

祝捷會の提灯行列を見て

國民のよろこひいはふもろこゑは
みやこ大路になりひゝきけり

周宮房子内親王殿下

出征の將卒を思ひ遣りて

浦安のくにをはなれていくさひと
ゆきにふすらむもろこしか原

紀元節の日に

御軍は日のもとつくにかちたりと
みたまも天にきこしめすらん

旅順閉塞隊の行爲をきゝて

鬼神も泣きぬへきかな身をすてゝ
ふねを沈めし仕わざきゝては

陸軍の捷報をきゝて

陸の仇うちしほまれは先きつ日の
ふないくさにも劣らざりけり

祝捷會の提灯行列を見て

ともしひを手にたづさへて國民の
御代祝ふ聲のいさましきかな

櫻を見て心に思ふことを

しきしまのやまと心のいさぎよき
名に匂はなんやまさくらはな

燕の軒に巣くふを

みいくさのおわりともしらて軒傳ひ
のどかに遊ふつはくらめかな

夏の初めに

冬よりもなほたへかたき夏はきぬ
身をいたはれよ益良夫のとも

閑院宮妃智恵子殿下

日露戰爭につきて

ふないくさかちつゝきたる御いくさは
くかにもわたをうちや盡さむ

山階宮妃常子殿下

折にふれたる

朝夕にかみにむかひてみいくさの
かつことをのみ祈るころかな

我君はいくさにいてゝまこゝろの
あらんかぎりを盡しますらん

久邇宮妃俔子殿下

廣瀬中佐の勇ましき戰死を聞きて

ものゝふのみちにちりにし櫻はな
いつの世までも香に匂ふらん

身は船とともに沈めてをゝしくも
わたのみなとをふさぎつる哉

久邇宮俔子殿下

水雷

四方の海に轟きにけりわたのふね
　うちくたきつるいかつちの音

軍艦

日の本の國のまもりのいくさふね
　かすそふ世こそ嬉しかりけれ

遠征軍をおもふ

君か爲とらふす野邊のゆきふみて
　仇まもるらんますらをのとも

出征軍人の家族の心を思ひて

老らくの杖とたのみしひとり子も
　家おもふなといましめにけん

騎兵

後れしとくつはみそろへて乘出す
　駒のわかきのいさましきかな

待旅順口陷落

かの港わたのまもりのかたくとも
　攻め入らん日はほとやなか覧

雨中進軍

雨降りて暗き夜半にもいくさひと
　わたのとりてに進み行くらん

遼陽の占領を祝ひ奉りて

こゝそとて仇の守りしとりてさへ
　わかみいくさの物となりにき

賀陽宮妃好子殿下

折にふれたる

御軍のたゝかふことにかつみれは
　神もいてゝやまもりますらん

いくさ人つるきいよ〳〵とき磨き
　しこのしこくさかり盡してよ

待旅順口陷落

今日もまた鈴の音聞きてかのみなと
　おちししらせを待ち渡るかな

雨中進軍

山みちにしのつくあめも物かはと
　進むみいくさいさましきかな

遼陽の占領を祝ひ奉りて

うちつゝき仇のとりてを攻取りて
　いよゝかゝやく日の御旗かな

伏見宮妃經子殿下

折にふれたる

とつ國の海路はるかにひゝくらん
　わかみいくさのかちときの聲

梨本宮妃伊都子殿下

綳帶製造をなしつゝ

つゝとらぬ女なからもくにのため
　なしえむかきり勉めてしかな

をりにふれて

日の御旗うらるの山に押し立てゝ
　君か代うたふときは來にけり

後室北白川宮富子殿下

赤十字社にて綳帶をまける時

白布にわかきこゝろをまきこめて
　つなきとめはや人のたまの緒

出征の軍人を思ひやりて

いくさ人君かためとはいひなから
　いかに寒さの身にはしむらむ

勝報をきゝて

かちいくさしらする文をみる度に
　まつつはものゝ上をしそ思ふ

後室華頂宮郁子殿下

をりにふれたる

御軍にいさをあらはすものゝふの
　つよきこゝろそ尊とかりける

宮中月次御歌會兼題詠進

大葉子（調伊企儺妻）

こほたれてあらはれにけり大はこの
　そこにをさめし大和錦は　正風

うつしうゑし百濟の種の女郎花
　やまと心をひとにみせけり　千秋

大はこもをのこなりせはからくにの
　きのへにたちてたふれむものを　直大

わかせこにならふ心と韓國を
　しりへになしてひれはふりけむ　豊穎

からくにのからきにわひて日のもとの
國しのひつゝひれふらしけむ　眞頴

しきしまのやまとにむきてひれふりし
君かことはの玉そたふとき　清

から國のきのへにたちて今はにも
やまとこひしくひれふりにけむ　美靜

いきなにもおとらさりけりひれふりて
やまとをこひしいもか心は　隨彦

わたのてにとらはれなから大葉子は
やまと心をあらはしにけり　通禧

とつ國の風になひかぬ大葉子の
そのみさをこそをかしかりけれ　光照

とつくにのつゆとちりても女郎花
やまとこゝろはなひかさりけり　利器

しらき人おとろきぬらむいきなにも
おとらぬ妹かたけき心に　光善

ふきすさふしらきの風のはけしさに
をしくもちれる女郎花かな　忠敬

からくにのきのへにたちてひれふりし
その言の葉は千代にのこれり　恭仲

から國の風になひかぬ女郎花
みさをあらそふものなかり見　愛子

日のもとにむきてひれふるたをやめの
心やいかにをゝしかりけむ　堯熙

ひれふりてきのへにたちし大葉子の
たけきこゝろそ偲はれにける　隆敎

外國の風になひかぬ女郎花
ちりての後も名はかをりけり　文子

なにはえのあしの一葉のかれのこり
ひれふりにけん昔かなしも　良子

大葉子のひれをふりにしいにしへは
思ひやるたにくやしかりけり　嚴夫

日の本のねくらこひてやはふきけむ
ゆふつけ鳥の林かくれに　正臣

ふるさとの難波へむきてふる領巾の
わたに心はなひかさりけり　久敬

なてしこもつま木もかれしわたしのに
かなしく殘る松風のこゑ　道子

をみなへしわたの大野の秋風に
ちるとき如何にかなしかりけむ　兼子

とつ國の風にちりても女郎花
大和心のいろはかはらす　花子

いさぎよくちりにける哉女郎花
わたの大野の風になびかて　愛子

からきそのせにならひてやたをやめは
ひれふりつゝもとの國しのひし　楓邨

敷島のやまとにむきて領巾ふとふりし
そのよのかけの今もみえつゝ　有經

もろこしの秋の霜にもわらそひし
操ゆかしきやまと撫子　粂

今もなほはたへにさむしから國の
きのへにふりしひれの下風　秋愛

とほきよのことはしらきのしらねとも
やまとへむきし心ゆかしも　正風

領巾振りてやまとしたひし操には
なさけ新羅のわたもなきけん　鯛二

ふきすさふからのきのへの風をいたみ
わへすしをれし女郎花かな　夏樹

夫と子のかはねに心ひかれけむ
やまとへむきてひれはふりしも　朧明

ふきおろすこま山國のかさゝきに
たちし姫松みさをたかしも　英一

しきしまの大和にむきてひれふりし
君かむかしをしのふけふ哉　義清

ひれふりしそのおもかけをまのあたり
みる心地する君かことのは　小舟

たく衾しらきの霜にかれにけん
大葉子草は色かへすして　宍夫

言のはのつゆたしろかて女郎花
きのへにたちしこゝろをゝしも　信依

紅葉〔時局によせて〕

御歌所寄人從七位　藤原朝臣粲（小出）

山里もみいくさいはふ日の御旗
もみぢのかげにてりかはしつゝ

御歌所參候正八位　藤原朝臣正夫（鎌田）

山かげにちるもみぢ葉はみたれけむ
沙河のさかよせみるこゝちせり

詞苑

従二位子爵 黒田清綱先生撰（代撰菊池武則先生）

歳暮

天

何事もまなひえさりしおこたりも
今更をしきとしのくれかな
東京市麻布区飯倉町六番地 上田徳子

地

ひとゝせの積りし塵をうちはらひ
はる待暮になりにけるかな
埼玉県秩父郡大宮町 澤田伸子

人

雲水にまかせける身もけふのみと
おもへはをしきとしのくれかな
肥後国菊池郡隈府町 千和波橋子

甲

いかにせんなになす事もならすして今年もけふになりにける哉　大和 栗山高子

としなみのなかれて早き月日をはたゝいたつらに過しけるかな　奥 和住千鶴子

乙

みいくさのかちをそしめのまつかさり萬歳うたふはるをまつ哉　秩父 澤田房子

いとまある暇なき身もとゝめあへすとしもいぬめり今宵限りに　武蔵 田中拾葉子

もくろみしことのなかはもなさぬまに早くもくるゝ年の暮かな　東京 林 環子

萬つ世のかゝみなるらんみ軍のみそ七とせも今日そ暮れぬる　本郷 星野千代子

くれてゆく年の早さも忘れつゝたゝみいくさのたよりをそまつ　福岡 中島武子

おもふとちこよみのおくをひらきみて春の設けをいそくくれ哉　埼玉 横田音羽子

くれ竹の世のうきふしは數へてもさすがに惜しきとしの暮かな　東京　三好珍子
こひとゝせを月雪花にあそびてもをはりときけはをしきけふ哉　神田　金原たまき子
おもふこと無て過ぬる老のみもくれゆくとしのをしまるゝかな　東京　山口琴子

行年をゝしめはことにこのころは日あしも早きこゝちこそすれ　長野　岡田千穂子
山川のいはきりとほしゆくみつのせきとゝむへき年のくれかな　和泉　福原菫子
おもはさる心やはるをまつ人はわが身のをいをいそくなるへし　神田　山田靜子
小車のみつにおされてしはらくのなやみもあらす年はくれけり　神田　山田婦美子
錦なるもみちも人とゝほさけはのころひかすを讀まぬひそなき　京都　森本秀子
春ははな秋は月にとあくかれしことしもひと夜をしまぬもよし　麹町　石川薫子
いたつらにすきこし後を恨みてはまたこの年もくれんとすらん　日本橋　牛山素子
おこたりて過にし身にもゆく年ををしむこゝろは人なみにして　山口　村上操子
ひとゝせのうき節しきにかゝはらて暮れはやがて惜まれにけり　松山　上原のふ子
あすありとたのまさりせは行年にくいはふかくは殘らさらまし　松山　田村多豆子
暮てゆく年のさかひにふるゆきはこそとことしのへたてなき哉　大和　栗山俊子

何こともなさて月日をいたつらにことしもけふとなるそ悲しき　福井　打本はま子
きのふけふ春待わさにいそかれていよ〳〵をしき年のくれかな　本所　三坂鏡子
いつしかもあたらつきひをくれ竹の一夜はかりに成にし悲しさ　牛込　郷田隆子
年の瀬をいさ堰きとめん文机のふみのかす〳〵とりあつめつゝ　大阪　船越小仙子
をとめこが春のまうけのきぬはかまぬふてせはしき年の暮かな　東京　渡邊初子
こん春をまつのかさりもうるはしきみやこ大路の年のくれかな　京橋　渡邊名和子
年のゆく事もわすれつかちつゝく我みいくさのいくさかたりに　三河　永井さい子
としなみのたつをもよそに霜こほるほこを枕のものゝふやさそ　赤阪　山本波子
となりにはすゝはく聲のいそかはしまたぬいあけぬ春の晴ぎぬ　上總　高石とよ子
今さらにみのおこたりをなけきつゝいよ〳〵をしむ年のくれ哉　牛込　後藤喜代子
家ことにはるのまうけとひくしめのいや數そひて年くれにけり　麻布　林艶子
行物となにをしみけんとしなみはかしらにつもる雪にみえけり　大阪　桝田往子
はれつくと指をりまちしそのかみを遠さかりゆく歳のくれかな　下野　井上絢子
せわしくもまたたのしきは年の暮まとひそなして春を迎へむ　群馬　ひろ子
芝　松永綠子

とつ國にかゝるひかことおほくして暮る歳をもわすれてしかな　廣島　宮本　尾々上子

くれゆくも知らで暮して今ははやかへらぬくれの老のさかみち　名古屋　不破きみ子

月はなといたつらにのみ過しきてくれゆく年のおしきけふかな　埼玉　横田秋子

いそかれてみつよつふたつ咲出ん梅のにほひにくるゝとしかな　愛媛　薫子

さしてとるわさはなけれとしかすかに心たらぬとしの暮かな　肥後　佐々小琴子

今日はゝや歳の暮とそなりにけるつくえの塵ははらはすにして　肥後　佐々有鄰子

一年を今日か明日かとおしうつり夢のまにこそふゆもくれけり　肥後　徳永武深子

老の浪よせてはかへる年のくれけふのゆくへやいつこなるらん　肥後　徳永多瑠子

くれはつる今日そくやしき一年をむだた過せし身をいかにせん　肥後　徳永廣子

一年の短かきこともくれてゆく今日ことさらにおもひしるかな　肥後　秋吉輝尾子

一年をあそびくらしていたつらにくれゆくことのをしまるゝ哉　肥後　岡山登喜子

いたつらに昨日とくらし今日とすぎくれゆく年の惜くもある哉　伊豫　たけ子

この年もはかなく暮れていたつらに過し月日そおとろかれぬる　大阪　鹽見峯子

今日と暮れあすと暮しつ早今年も七七三貫る撃そ歳暮とそしる　福田　嶋岡　美津野子

ゆまくるまはにこふ貫のかすそひてつもれる歳のくれそゆたけき

年毎にかひなくつもるふるとしをゆつりはそへて贈りてしかな　山形　香澄露子

ためしなの皇軍のほまれ名とともにとこ世に殘す歳のくれかも　大阪　山本伊勢子

月日をは仇にすくせしおろかさをくやむかひなき年のくれかな　秋田　伊東よし

行年にこしかたのみそかこたるゝ今年もあたにすきぬと思ひは　福島　鈴虫

いたつらに年をすこしていまさらに殘る日數のをしくもある哉　滋賀　馬淵波子

世のちりを逃れて住めるかくれかも心せはしきとしのくれかな　富山　白百合

ゆく年はかへらぬものと今更にせきとゝむへきてわざなからむ　富山　白菊

北のそらやすきおもひも絶えなくに今年もいつか暮てゆくらん　埼玉　松野みさを子

年月のくれてゆく身はしらゆきのふりまさりたる巳かかしらに　長野　小泉德子

今さらに身のおこたりをとかめつゝこゝろいそかるゝ年の暮哉　岡山　小山松枝

海へたつこまもろこしも大御代の春をまたるゝとしのくれかな　麻布　松田君子

兵士のうちたす玉のおちつきもまた見えぬまにくるゝとしかな　麻布　松田濟子

立かへりくるものなからたれもみなわかれちをしむ年の暮かな　三重　神田みよし子

治まれるみよのみつきとしら雪のふりつもりたる年のくれかな　筑後　鏡山増代子

筑後　武田龜子

何事もなくてすきにしつきひをはのとかにおくる年のくれかな
筑後　青柳榮子

くれてゆく吾みの年もゆつりはにかふ人あらはそへてうらはや
秋田　綱矢はる子

何事もなさてそすめるみなれともくれゆく歳はをしまれにけり
福井　岩橋花子

老の波よするまにくひとゝせとゆきゝも早きこゝちこそすれ
伊豫　さゆり

軍人いかなるはるをむかふらんこゝろさひしきとしのくれかな
山梨　櫻武子

花月にあくかれもせて暮す身もしはすのそらはせはしかりけり
なだまき

しめなはやときはの松をかさりたて初春まつやとしくれのいち
長野　小泉たつし

暮てゆくとしはをしめと止まらて今よひ一夜となりにけるかな
長野　少泉みつし子

なす事もなさて過きにしおこたりも絶えてかひなき年の暮かな
長野　山本民年子

瀬を早みなかれて暮るゝとし月はうき世の人になみそたてける
長野　小泉餘念子

うき舟の岸によるさへ知らぬ身は渡るにかたしとしのしからみ
長野　山本恭子

ふりつもる雪の中みちたゆれとも暮ゆくとしはとまらさりけり
長野　山本直枝子

世をうしと思ひける間にこの年のひま行く駒のはやすきにけり
陸前　前田河千年子

一とせをたゝ徒にすこしぬとおもへは惜しきとしのくれかな
薩摩　松原みれ子

こん春は待るゝものゝくれてゆく歳もわつかにをしまれにけり
秋田　古瀬りく子

くれてゆく年なかりせはみいくさにかちし日数を何にかそへん
秋田　古瀬愉子

あしきひもよきひも今はくれはてゝひとよ二よとなりにける哉
神田　荒井あさ子

ひとゝしは一夜のゆめのひちまくらいつしか歳もくれにける哉
日本橋　神戸壽兆子

一と年は矢よりも早くあけくれていそかはしくもくるゝ年かな
埼玉　横田やゑ子

あふ人もかたれはおなし春またんいとなみしけき年のくれかな
埼玉　澤田伸子

はつ春もちかしと求める少女男の子の羽根よたこよと賑ふ暮哉
播磨　本多宜子

小車のめくるつきひのくれたけのことしも末のひとよとそなる
神戸　太田たけ子

きのふけふ行きかよふ人いそかしさこよひ一夜に歳もくれゆく
東京　黒崎えつ子

おこたりのちりのみつみて文車はやゝもめくるとしのくれかな
東京　ゆり子

きのふけふ羽子やかるたにまり遊び小女にのみは春やきつらん
横濱　寺田光子

ふるさとをいてゝ一とせいたつらに學びの庭にくらしつるかな
埼玉　清水茂子

思ひつゝあたにすこしてこの年もあすはあらたの風のふきくる
牛込　齋藤すみ子

いたつらにあかしくらしゝ一年を思ひかへしてをしむけふかな
武藏　松本まつ子

早川の早くなかれてゆくとしをかけとゝむへきしからみそなき
埼玉　戸田折香子

夢のまに又このとしも果てにけりあけなん年はこゝろしてはや　下谷　椎野秀子

すきやすき月ひはそれとしりながらおとろかれぬる年の暮かな　伊豫　岡田いの子

年の初めねがひし事はならずしてくるゝとしないかにかもせん　神戸　今西みさを子

かこちつゝあたに過せり一歳をながれてはやきとしのくれかな　山城　鈴木菊子

夢なれや今年もいよゝくれ竹のうきふししげき身をいかにせん　東京　中村顯子

苔むせるいはまがくれの月かけをながめておかす年のくれかな　埼玉　町田静子

頼りのなき身なりせは歳のくれ如何にやすけくあらましものを　東京　五十嵐せい子

あすか川早くながれてけふははや年のみなととなりにけるかな　神戸　大橋涙子

いたつらに今日と暮せしとしもはやはかなき夢の一夜なりけり　伊豫　高橋かめよ子

豊年と家内ゆたかににきはひて早やあたらしきとしを待つかな　神戸　山本松野子

年浪のとゝめもあへすながれ来て春のしたくのいそがるゝかな

杖

天

陸前栗原郡若柳町　前田河千年子

植おきし庭のわかたけちよをへて
君の御つゑとなるそうれしき

閨秀

地

秋田縣由利郡本荘町裏尾崎町十三番地　古瀬りく子

萬代のかめにいけたるくれたけを
はゝか杖にもつかせてしかな

人

東京市神田區駿河臺南甲賀町八番地　金原玉城子

呉竹の杖にちとせやこもるらむ
つけともつきぬなかきよはとは

甲

千世の坂こえむと思ふ今日よりもたのむは杖のちからなりける　麻布　上田徳子

呉たけの一ふしことに千代こめし杖をたのみてとしをこへなむ　大和　栗山高子

とし〳〵の坂をこえゆく老の身は杖をちからにのほりゆくらん　日本橋　牛山楽子

老の坂にのほる今こそたのみけれむかしは杖もおもはさりしを　長野　岡田千穂子

おいぬれは杖とたのみておもふかなとほきむかしの竹馬にして　三河　永井さい子

老の身はつき雪はなのたのしみをたのめる友は杖にそありける　陸前　前田何みさを子

乙

老の身の杖とたのみし一人子もくにのためにはなしまさりけり　愛媛　高橋茂子

松山　上原のふ子

呉竹のすゑにすかりてゆく人は世のうきふしもつきつくしけむ
大和　栗山俊子

みるか中にゆきふりつもる野邊の道たゝねん友や杖をひくらむ
麻布　林　艶子

いつはらぬ人のこゝろのまことこそ世わたる道の杖となるらめ
群馬　竹のふし

事しげきうきよの中をわたるにはこゝろの杖そたのみなりける
筑後　青柳榮子

かくはかり老はてぬとは思はぬに杖つくみとはいつなりにけん
大阪　船越小仙子

いかにして大御恵みにこたへめや鳩のつえまてゆるされし身の
東京　渡邊初子

大そらの月のひかりもみえぬみのたよりはかしの杖はかりなり
東京　渡邊名加子

友となりたよりとなりてしはしたもはなしかたきは老の杖かな
松山　田村多豆子

つまつくな常なる人の世はなへて杖をこゝろにつくへかりけり
山口　村上操子

いつまても親のいさめの杖のみは子の心にそつくへかりける
神田　山田靜子

身をさゝふちからとたのみつく杖は老をたすくる若木なりけり
神田　山田鮎美子

まれひての後は甲斐なし人の身はたふれぬ先きの杖そとふとき
京都　森本秀子

なにことものそみなき身の翁さへこれはとたのむ杖のたからそ
福井　今村田鶴子

たつかつゑありし昔にあらぬ身はつかのまさへも過しかねつゝ
赤阪　山本嵐子

はなのあした月の夕へはやまに野にわれに伴なふつゑそこの杖
上總　高石登代子

なよ竹の一ふしもなくおいはてゝいまはまこ子のちから杖なる
牛込　後藤きよ子

たまほこの道ゆくほとたゝしきにみち行きくるゝあはれこの杖
麻布　林　環子

いたつらに世をは過して手束杖手にとる身にもなりにけるかな
大阪　桝田粂子

老人も若きもいまはおしなへてめてつゝつかん世とはなりにき
本郷　星野千代子

木からしのおとのみすこきさ夜中に杖ひきて行くめしう人の聲
芝　松永德子

くもふかき竹のみ園につくつゑは國のはしらとなりしみさほし
名古屋　不破きみ子

すなをなる竹のみさをゝ杖とせはいくうきよをも渡りやすかれ
福岡　中島武子

大君のふかきめくみの杖によりみのいたてさへ知らぬつはもの
滋賀　馬淵波子

杖のみはおきなのものと思ひきやおいせぬ人ももつ世なりけり
武藏　田中拾葉子

老いし身は竹つゑことに頼のみうきふしみせそよのもろひとよ
伊豫　多計子

老か身の友となりけり竹のつゑつく／＼過きし世々をしそ思ふ
横須賀　岩橋化子

つく杖にこゝろも身をもさゝへてそたとるにやすきあはれ旅人
大阪　山本伊勢子

ゆきとつむとしの重りをなみ竹のをゝしくも立つ人のつゑかな
東京　三好珍子

千代こめし庭のくれ竹おほきみのつくともつきぬ杖とさゝけむ

[illegible]へんいはひの杖にすがりつゝいまよりこえし千代のふるみち　埼玉　横田音羽子

たらちねのいさめしつゑをちからにて心のやまを行へかりけり　埼玉　横田秋子

けふよりはこゑやわつらふ老の坂杖とたのみしまこにわかれて　愛媛　薫　子

虎ひけをむれにかきたりいくさ人ひゝら木の杖つきていてたつ　肥後　佐々小琴子

老人ははとの杖ひきあさよひにまもりをいのるうふすなのかみ　肥後　佐々有鄰子

年をへて腰もふた重のおいか身はつく杖のみそちからなりける　肥後　千知波橘子

老の身のこゝろのまゝの道ゆきはあかさの杖のちからなりけり　肥後　德永萬壽子

くれ竹のそのふしことに千代こめて老をたすくる杖そめてたき　肥後　德永多瑠子

老か身の力となれるこのつゑはいつこのやまのわか木なるらん　肥後　德　永　廣子

たらちねのいさめの杖をたよりにてあらき波路を渡りこそすれ　肥後　秋吉輝尾子

ふみなれぬ浮世の道のやまさかを杖をちからにたとりゆくかな　肥後　岡山登壽子

いくとせとかきらさりけり一ふしにやちよをこめしくれ竹の杖　麻布　松　田　君　子

老か身の世をやすかれといさなへて花にもみちにくれたけの杖　麻布　松　田　清　子

ゆく道のたつきとたのむひと本の杖はめしひのいのちなりけり　三重　神田　みよし子

うま人もきこりの友もおしなへて杖はなきなのたからなりけり　筑後　上野　はつね子

山人かこゝろをこめしつゑによりたゝすむほらのうちそ樂しき　筑後　武　田　総　子

老ぬれは杖をわかみのともとしてやまにや行んのにやあそはん　筑後　鏡山増代子

のほりゆく山坂みちはけわしくも杖にしよらばやすけかりけり　三河　榊原てる子

山さかのけはしき道をのほるにも杖のちからによれはやすけり　失　名

なからへていと嬉しきは老の身のちからとたのむ杖のひとすち　秋田　細矢はる子

手ならせし杖をこの世に祖父の君死出の山路をいかにこゆらむ　伊豫　さ　ゆ　り

あてひとかのれるくるまのそれよりもめしひかすかる杖は尊き　山梨　棵　武　子

三たひまて不二詣てせし兄君のたよりとなりしつゑそなつかしき　長野　小泉　たつじ子

世の人におくれぬさきに杖とりてふみ分けゆかん文のはやしに　長野　小泉　みつじ子

としの坂登るへき身のたよりには千代ふる竹をつゑとなしつゝ　長野　小　泉　德　子

親よりの此たまものとつきとめし杖とるおのかちからなりけれ　長野　山本民年子

おやを思ふこの一ふしのたけつゑをつきこそめせと捧けつるかな　長野　小泉餘念子

老の身の道ゆく本となりぬるはたゝ一すしのつゑにそありける　長野　山　本　基　子

老て行く世の中みちにまよはしとこゝろにたてる杖のひとすぢ　長野　山本直枝子

世につくす心はいつもかはられと杖をたよりの身とぞなりける
埼玉　松野　みさを子

たよ〳〵とのぼる坂路にうれしくもうさ忘れけり竹の杖をえて
岡山　小山松枝子

たらちねのいさめし杖も今はしも老のたすけとなりにけるかな
呉　和住千鶴子

ひともとの杖をたのみてたび僧は山またかはをこえやゆくらむ
薩摩　松原みれ子

釉のなきこころもまとひてはとの杖いきつきみちをゆく人やたれ
秋田　古瀬惟子

むつましき杖ともたのむ友ひとり波ちのゑんにゆきしこひしさ
神山　荒井あさ子

すゑ終に杖にきるへきたけなれとよきふしあらは笛になしてん
埼玉　横田やな子

日くらみてあやめも分かぬうき人をたすくる杖ぞやさしかりける
秋田　伊東よし子

いましめをうけし昔しの杖によりて老をもやすくよを渡るらん
下谷　椎野秀子

友垣のへたてぬ心ぞなによりのかたき杖ともいふへかりけり
埼玉　戸田折香子

つきなれし杖をちからにはら〳〵とたとりやゆかん老の坂みち
本郷　寧子

ひとふしにちよのこゝろも呉竹の杖をちからにわれはさかえむ
下谷　五十嵐せい子

花をとひ月をなかむる老のみはつゑありてこそたのしかりけれ
日本橋　中村たみ子

ちとせ山こえゆく君かつく杖はうきふししらてちよもへぬらむ
瀧の川　松本まつ子

神戸　太田たけ子

秋のひにおてらにまゐる老いひとは杖をたのみと思ひける哉
埼玉　町田勝子

たかさこのまつも杖つく齢してなほすめらきの御代をことふく
神戸　今西みさを子

今はたゝなきみ姿のしのはれて杖見るたひになみたなりけり
神戸　清水薫子

夕ぐれの空うちなかめたゝひとり杖にすかりて彳たゝすむ

歳暮

新玉の春の御そぎもとゝのひてゆたかに暮るゝとしをまつなり
尾道　片山松子

怠らずなすとはすれと怠りのつもりつもりてくるゝとしかな
香川　鎌田光恵子

今更に過ぎし月日をかそふれはさらにおどろくとしのくれかな
下野　秋野菊子

いたづらに明し暮して残る日はひと日ふた日となりにけるかな
壬生　岩森みと子

一年ははかなきゆめと消えはてゝ今年もつひに暮れて行くかな
下野　松野みどり子

ゆめのまにあたら月日を過し来て惜しむかひなき年の暮れかな
壬生　松岡たか子

あすか川流れてはやきとし浪をせきとゞむへきすへなかりけり
壬生　松山しげる子

すゝ払ふこゑさへいまはしつまりてひたすら春をまつそ楽しき
東京　若谷浅子

杖

つく杖のすくなる節はおのつから千代の齢ひをこめてけるかな
東京　岩谷浅子

老の坂こえんつゑにはわかやとのちひろの竹をきるへかりけり
大阪　山中ます子

華族女學校教授 井上賴圀先生選

家庭日記（三日間）

天

薩摩國伊佐郡山野字村布計 松原みね子

十一月三十日、昨夜よりの時雨ひる過る頃晴る。七時頃朝げしたゝめて、主人は例の如く出勤さる。今日亡舅様の御其日とて、佛檀をふき淨め、花などとりかへて、心ばかりの御靈具を供へまつる。御辨當は例の時刻持せやりし。されどいつに變らぬ料理とて、心にかゝりし故、午後持ち歸りし折早速あらたむるに、殘りなく食へ盡してありければいと嬉し。

晝飯後四時すぐるまで裁縫す。

四時過る頃、珍らしく鮮らしき魚を持ち來りつれば、晩の調度はなし安すかりし。

夕げの用意終りし後、勝手の方にてけたゝましき音のしてければ、何ならんと出で見るに、あやまちて玉子五つ六つきづゝけて、いかにせばやといひて下女は涙ぐみ居れり。なくには及ばしとさとしつゝ、食道樂にてよみし、山家にても燒かるゝてふ、輕便法のカステラの事思ひ出で、試みしに、思の外加減よく出來たれば、あやまちの効名などゝ、主人もわらひつゝ味はれし。夜は新聞を讀む。

十二月一日、此朝霜深く、散り殘るまがきの菊の、花に葉に白うおきたる冬景色あはれなり。

今日定めの休日なれど、しらべ物ありとて、主人は十二時まで書齋より出でられず。おのれは昨日よりの裁縫す。午後おのれも手傳ひて座敷書齋共床の軸をかけ替へ、花も後の山より山茶花のいき〳〵しきを手折り來りてさし替ゆ。

此日實家なる母上より來狀あり。短かき御氣性にも似給はで、文は例の山鳥の尾のなが〳〵し。殊に幼き妹の事共しるされたるくだりは、愛らしきふるまひを、まのあたり見る樣に覺えられて、いとなつかし。今夕は主人の好みにて雞をもとめ、くさ〴〵に料理し、入浴もいつより早くに終へて、いざ夕げの膳に就かんとせし折柄、某の君のおとなはれたれば、折こそよけれと、一酌すゝめ參らす。主客共に深く嗜まれねども、うちとけて快く夕げは終へられし。猶更くるも知らで語らひつゝありしに、數多うつ時計の音に客のおどろかれて、何となう樂しきものからいつも歸るを忘れてと立ち給へば、さればこそ介室にすゝめ參らすを、そを今より待ちつゝあるとあるじの言ひ出づるに、またかとて頭かきつゝ出で行かるゝをかしさ、かくてあと片付けてふしどに入りしは十一時半。折柄後の峯に吹く木枯の音寒し。

同二日、朝風は身にしむ許り寒けれど天氣よし。

主人出勤後漬物などし、十時頃よりは空晴れ渡りて暖かなれば、はしためをたすけて夜のものを干す。御辨當は例の十一時半持せやる。午後は靴下を編む。三時過る頃より暫し詞の花筐をとり出でゝ讀む。今日は魚うる人も來らねば野菜と玉子にて夕餉の用意す。

此夕は事務繁かりしとて、主人の歸りは一時間許りもおそかりし。夜は下女にたやすき算術を敎ゆ。

地

大阪市南區惠美須町二丁目六六三　船越卜仙子

十一月一日、晴、

昨夜より、良人やゝ腦に異狀ありとて、今朝は臥して靜養したまふ。好物の栗のキントンこしらへてまゐらす。珍らしく味よしと宣ふ。嬉しかりし。

午後戦地の義弟よりこま〴〵と認めし書状届く。義弟は今旅順背面の攻撃軍にあり、その家には若き妻と出征後生れし男児と淋しく其凱陣を待てるなり。その生れし子のおもかげ見たしと何時の手紙にも書添ふる義弟の心おもひやられていぢらし。

十一月二日、晴、風寒し、

東京にゐます良人の母君へ小包おくりまゐらす。

故郷の父上より御消息あり、この頃の寒さ氣をつけて風ひくなよと、言葉は短かけれど溢るゝばかりの御慈悲身にしみ〴〵と嬉し。

十一月三日、晴、

けふは戦勝國の天長節、まして月の三日は我等二人が新たに家庭を作りし紀念日なればとて良人は力めて臥床を離れたまふ。

夜に入りて小雨そぼふる。

人

東京麹町區三番町　石川薫子

十月十日、晴、天候冷、朝例の如く公園散歩、體量十二貫五百目、昨日より二百目の増加、重着の故か？。

午前姉上の許を訪ひ、晝餐の饗應に預りて歸る。午後友の古き手紙をあさる。初子孃の文より卓花一つ出づ。「こは北の海より送り越せしりゝと申花、香いと高く、長き旅路に色香少しあせぬれど、懐しの姉君に參らす……」例の如く美敗軍の跡！手にすれば床しの香高く、有し昔の高き香のいと忍ばれつ。友の心の優しさも又一入……、オ、それよ、其折我は此花の送主の或武士なりしと、又りゝと呼ぶ勇ましの名とを取りて、初子の君をなぶり參らせしよ。

十月十一日、晴、散歩午前入浴、岩田の孃ちやん來る。此頃は足も大分丈夫になり、一疊位の處僅に歩きつ、愛らしさ云はん方なし。染物出來、直に仕立に取かゝる。おのが物と云へば中々に勉强な事と冷かされぬ。來客多し。熊本の羽田姉より來書。

十月十二日、晴、朝とく床を出でゝ散歩す。霧こめて蒼空雲なく、曙光遙かに東天に昇りてオレンジ色となりつ。大呼吸をなせば冷氣は全身に循環りつ、快氣云はん方なし。終日裁縫、夜は歌文集を繙きて後床に入る。けふ來客來書なし。

歳の暮に故郷の母君に贈る文

近江國野洲郡北里村江頭　馬淵なみ子

天

日月の過ぎ行く速さは、何處も同じことながら、他鄕の空に文學ぶ身は、殊にいち早き心地なん致し候。妾が、膝下を辭しはる〲此地に參りしは、未だ昨日の樣に思はれ侍れど、月日に關守なく、昨日と過ごし、今日と暮す中に、早や三度の新年を迎へ申せしが、只月日の過ぎ易くして、學業の成り難きを打かこつのみに候。母上樣には、過ぎし日頃、村中一家に一人は彼の魔神に犯されざるなき程の、惡性流行感冐にもかゝらせられず、いと御健かにいらせられ候よし、心の中の心から神に謝し歡び祝し申候。年毎に鶴齡の御高壽つませ玉ふこと、寔に目出度かぎりなれど、人はいつ迄も變りなきものならねば、御老衰もやと一は以て歡び一は以て憂ひをり候。

母上樣には平常御心がけゐさせられ候へば、今更年の暮れになりしとて、御急ぎなど候はざらんと存じながら、妾み側に侍り候はゞなど、思へば、只もう胸腙焼くが如く、焦るが如くに候。されど今暫しにて學校

も卒業の事なれば、御心慰め得らるゝも遠きにあらずと、それを楽しみに専心勉勵致し卒業の曉を期しをり候へば、今暫し御忍び下され度候。次にこの頃は、稔子琴の御稽古は如何、雨ふる日近所の娘子が、おさらへなど聞き候たびに、稔子が首をかしげては、あやしげなる節にてうたひ彈ぢたる姿、目の前にうかび候。別封改良服、近頃當地に大流行にて、可愛らしく見え候まゝ、稔子新年のまうけにと一着買ひ求め御送り申上候。かしく。

地

東京下谷區御徒町三ノ三三　岡田柳子

行く年波にしがらみなくて、今年も早殘り少なうなり侍りぬるを、母上樣には、如何に御事繁くおはしますらん。例よりも寒さ嚴しう候へど、御恙もあらせられずとか、嬉しさ限りなくてなん。扨も私事都に上り候てより、早三歳の春秋を送り侍りしが、怠るとには候はねど、年の終りにはいつも己が業のえ進まぬを歎きかこつのみにて候ひしが、今年は聊定めし業をなしをへたるやう思はれて、何となう心のどけく、是を限りにて、此後は、又と是迄の果敢なき繰言をくり返すまじう誓ひ候ひぬ。且先頃よりは、師の君の發企にて、學業の暇々に繃帶卷を致し、拙き身ながらも、聊御國に盡す片端と思へば、いと嬉しう、哀れ今年の暮ばかり愉快を覺え候事はこれなく候。こは元より師の君のみ蔭によるとはいへ、其源は母君が深き御惠の露にこそと、嬉しき涙さへ暮れ行く年波と共に流れ申候、懐かしき母君よ、返すゞも御寒さ厭ひ給へや。あなかしこ。

人

薩摩國伊佐郡山野村字布計　松原みね子

いたづらにすぐせしとには候はねども、歲月人をまたずの言の葉も、年の終にぞ今更に思ひ知られ申候。さて本年もいよ〳〵今日明日とおしせまり候處、いかに渡らせられ候や、定めし妹共もとり〳〵に、帶よ袴よと春着を御ねだり申など、さらぬだに御事繁き中へ、一しほの御世話もおはし候御事と推し參らせ候。次にこなたにては、御蔭樣にて家事の整理も年々になれゆきて、大かた用意とゝのひ、樂しき春を相待ち申居り候得ば、どうぞ〳〵御安神遊ばされ度候。此鰹節御歲暮御祝ひのしるしまでに、小包郵便にて御送り申上候。別に父上樣御召料の莨少々相添へ申候。皆々樣寒さ御いとひ遊ばし、御にぎ〳〵しく目出度御年むかへ遊ばし候樣、いのり上參らせ候。猶申上度事も御座候へ共、何となう心いそがれ申候へば。こん初春に殘し置き候。かしこ。

家庭日記（三日間）

東京　米窪たね子

十月廿七日、川中島の友より不意に書留郵便、何事かと破る手元に、落つる楓の一ひら。

「八幡原の嵐に訪はれし紅葉、散り樣のあまりに哀れなるものから、千曲の水に浸けて非備都の君へ………」

紅葉の跡はまだ濕める儘に、さながら故郷の秋を忍べとて?。

廿八日、小春日和、午後の日暖かに、南天の實赤くこぼれて、秋は此所にも閑なり。今し表の方に剛の鬨崩れて、健ちやんは菊、雁來紅の勳章いかめしく凱旋し來りしが、自慢の功名譚の後に、「僕は是れから名譽の切腹するから、姉さん御覽よ。」とて小さき草刀逆手に倒れしが、暫時にて背を日向にしたるまゝかすけき鼾の音さへたてぬ。妾の膝に枕したる儘。

十一月三日、千代田の宮の彩雲湧きて、行幸の朝名殘なう晴れぬ。萬馬の嘶き秋の空に轍りて、青山の原はげに軍神なんどの降りましけんよ。

村はづれ翁媼の裝へる籬にも、御代の秋菊うち笑みて、折りから國旗に通ふ朝風に一際高き其香を送りぬ。あはれ都も鄙もおしなべて樂しき今日の日や。

奥　和佐千鶴子

一日、終夜ねざめの床の寒けさにえたえずして、とく起き出づれば、曇れるにや、日影も見えず。洗ふ可き衣あれど、日和あしければせず。夫のきぬ縫ふ。いつ凱歌をあげて歸りましゝな著るら

むなど思ひき。午後より友の訪つれませり。夜としなりにければ、秋の庭に出す和歌、國文、つれ〳〵の言の葉ものしていねぬ。

二日、今日は昨日に似で、よき日和なりしかば、洗濯物、筆もたわわになしぬ。床に挿したる花のしぼみそめければかへつ。かくてありけるに、郵便の一聲、と見れば仇ぞすむ異國の原より、ふりはへての消息にてありき。すこやかなる由、いとうれしく。御國の爲、君のため後に心なな殘し給ひぞ、ひたすら務を盡し給ひてよなど返り事せり、夜女鑑よみていねぬ。

三日、日和よかりき。今日は亡き姑上の失せ給ひし日なり。つとめて起き出で、身を清め、みあかしまゐらせ、君いまさねば代りてよろづ行へりぬ。おいなき母君よ、犬のさち守らせ給へなど心の中にねぎまゐりて、靜かに日を送りぬ。まさきくおはしける時の事ども忍びつゝ伏月に入れば、結ぶ夢にみ姿のあらはれて、いとなつかしかりき。

尾道　片山松子

十一月三日、木曜、晴天、朝五時起床、先づ結髪し、身體を清め、東の空をふしをがみ、心の内に大君の萬歲を壽き奉る。新吉は商業學校に、滌吉は尋常小學校に已に我家を出でぬ。暫時の後御父上樣も商業學校の拜賀式に行き給ふ。後我は姉上と共に朝日、藝陽、尾道の諸新聞を見る。かゝる程に待ちに〳〵たる女鑑來りければ、嬉しさ一方ならず、先づ口繪の兩殿下を仰ぎまゐり、記事はゆつくり見んと題のみ見て置きぬ。午後よりは女子大學なる村上文子の君に天長の佳節を祝し、且此間の贈物の禮狀をいだす。其後女鑑を見る。入相告ぐる頃夕餉すまし、二弟を連て濱邊を散歩し、淨土寺に上り、上道を通る。恰かも連絡船小島丸は今日の負傷兵を善通寺に送り、今正に鶴灣に入る風情げに哀しくぞ見えたりける。其れよりをちこちの佳景を眺めつゝ、女子高等小學校の前に來り、そゞろ二三年前此學び會にておしへの庭にうるほひし時の事ども思ひ、なつかしさ云はん方なし。途に本町より我家にかへり、火桶かこみて面白く話します。あゝけふの佳節の目出度愉快なりし事よ、かくて十時の時報する程に床に入る。

十一月四日、金曜、晴天、朝は五時十分起床。今日はあまりの晴天故、布團を日光に晒し、ハンカチーフ三ツ洗ふ。今晩より氏神の祭なれば、何にかと手傳をなす。午後一時頃京都なる兄上の許より姉上と自分とに當て御文來る大學の解剖の樣子委しく記されたり。夜は七時より十時まで復習、讀書、習字をなし。又女鑑を讀む。

十一月十一日、金曜、晴天、朝は五時起床。今日は尋常小學校の運動會とて、弟は常は一番の朝寢坊なるに、けふはとくより起きいで、早くして下さいと側にきて賴む。漸く辨當も出來袴を細みじかにはき、海軍帽を被り、五六人の友と溢るゝばかりの笑顏作りて出で行く、姿、いと邪氣なくて愛らし。其後父上樣の銘仙の袷を縫ひにかゝる。表と袖四ツ作り置く、夕方頃郵便と勇ましき聲、いそぎいで見ればなつかしき文子の君が櫻楓會より出づる家庭週報を送りくれ給ひしなり。嬉しき事限りなし。夜は七時より九時半まで女鑑家庭週報を讀み、歴史を復習す。今日御兄上樣に外套送る。

本郷　星野千代

十一月二十二日、霜さえし朝の空に立ちのぼる烟、遠き富士が嶺の山腹をかすめて、砲兵工廠の煙筒の高くそびゆるも、今朝は一入ほあはれに覺ゆ。窓に吹き入る風いと寒ければ、障子しめませうれと、云ふに、とし子は、しきりに九段のあたり打ながめて動かず、二階の掃除もすみぬれば、例の五人にて、朝飯を食す、主人は、一日の事どもしか〳〵云ひ置かれて出で行き、とし子には下女の利を供はせて、幼稚園にやりつれば、あたり片付きて、縫ひさしの羽織取り出しぬ。晝飯すみて二時頃縫ひ上げつれば、お

したゝみなどする程又、宇都宮なる妹より封書来れり。見もて行くに、いとくれなゐに紅葉せし、楓の一葉こぼれ出づ、其後に「日光のもみぢな一葉参らさん、そのかみしのぶ草とせよ君」とあり。先につかはしつる返しなれば、うれしくて日記の中に入れて止めつ。先の月母上と共に日光にものせしことゝもいと多かりけり。夕つ方より雨いさゝか降り出で、寒さもとみに加はりたる心地す。今日の来客は。山崎氏、新村氏なりしを夜間帳簿などしたゝめ給へてよりは、とし子の折物唱歌などの相手して居るに、程なくとし子は打ちねふれり。

十一月二十三日、新嘗祭、昨夕の雨いと心もとなく、打ちあんじつるに、名残もあらぬ空の色、いとうるはしくすみ渡りて、心地よき朝風に、国旗のひらめくなど、いとおかし。九重の御内あたりは更なり。伊勢の御廟に、今日の御かしこき、仕へ奉る人々、如何にすがくしう思ぼし給ふらんかゝふりて、心ばかりの、海の物造つ物さゝげて御祭りことし、とかしこし。昨日約束せし河村氏の奥様綾子様と共に来られぬれ給へつる程、楽み居つるとし子をも伴ひて、上野なる動物園に行きたり。ば、先づ打ち入りて見るに、象かんがるーを始とし、坂を上りつゝ、下りつする程、彼方此方にいとめづらかなるもの多く、子供等は何所にも足をとゞめて見入りたる中にも、尾長猿の互にのみならんか取りあふもおかしく、人の様にも似通ひておかしければ、あはれがりて立ち去らんともせざりき。かくて此所を出で、川村の君と分れを告げ、池の端を廻りて家に帰りぬ。今日の一日は、皆夫夫に遊び暮して、夕飯も早く片付け、一家集ひて語り合ひたりしが、とし子は実に楽しかりしと見え、さもおもしろげに、動物園のことなど、くはしく言ひくてはさわぎけり。来客は夜に入りて、水町氏来られ、一時間計にて帰り給ひぬ。

二十四日、昨日の如く晴天来客は松嶋氏、今泉氏、夜になりて北村氏一寸来訪せらる。

愛媛　高　橋　茂　子

十月二十二日、朝曇、少し風出づ、午後晴、朝六時に床をはなれ、受持の父母の間、兄上自分等（妹とゝの事）の室を清め終り、今日学の師帰らるゝ日なれば、いそぎ朝食すまし、組二つ三つまらひ、次は妹にゆづり、お昼の用意を手傳ふ。十二時師は帰らる。やがて役場の書記の方お出でになり、父上と出征軍人に送る古毛布を此の字にても十五枚は必ずして戴かなければと話して居られる処へ郵便来る。雑誌なんなも共に来る。其端に父上御らんになり、軍隊傷病者用帽子寄附………の事有りしに、思ひつかれてさ、致しかけの帽子と靴下を一寸お目にかけられよと申され、他人になと外の事とは異り殊に心苦しく思ひながら、其方にも促がされ、よぎなくお目にかく、なんなに目をとほしたき事限り無けれど、いそぎの袷を縫ふつらさ、針さへおくれ勝なるもおかし。五時より夕飯の用意いそぐ、馳走の出来やうはづ無けれど、楽しく集ひて夕食終る。相變らず愉く戦争話にすぎ、夜は我の古毛布のふれに付人に尋れ来りしに、父上話さる。母と妹は他の用事す。我待ち兼て雑誌新聞など見る。十時半日記して床につく。

二十三日、曇、昨日ににけ無き冷気ゆ。例の掃除終り、朝食後父上軍人留守宅慰問にと出でらる。母上は女下男に何かとさしづに忙し妹と我裏の菊畑に遊ぶ。思ひく我は白菊を露ながらに手折来て机上に挿す。一時間餘習字す。九時過ぎより仕立物す。昼食後お友達東京の石川様へ手紙認め出す。郵便来る。弟よりの手紙受取る。かれて軍人の希望の事とて、何によらず愉快さうに、殊に昨日修学旅行より帰りしとか、宿にて色々豊後別府辺の事委しくしるされたるを讀みてはまのあたり話し聞き居る心地して面白く感す。仕立物四時半おき料理を手傳ふ。六時賑はしく夕飯したゝむ。夜新聞見ておのれ例の帽子縫ひ、妹靴下あむ。十一時日記して臥す。

二十四日、雨、昨日程に冷覚えず。

六時起床、皆と共に朝飯終り、数かけの帽子の附屬品締紐切れ、兼て處々求めさせしが無く、遠方より取りよせるも待ち遠く、片田舎の不便致し方なく、板織（小供のよくする）なれば此の紐に似付かんと云ふがまゝ、其事妹に頼む。明日送る事に定めあれば今日は他の用事をさて帽子仕立つ。晝前隣の人に出征せる子に送る手紙書きてよと頼まれしに、かゝる樣の事は戰時のつとめと思へば、心よく云ふまゝに認む。無學の者にも愛國心に富み、利事に走らぬには感じ入る。弟の昨日の返事葉書にて出す。夕餉の後常に無くゆだんせず。妹と二人今夜遲く迄かゝりやつとの事帽子思ふ數々とゝのへ、小包の用意迄して床につきしは十二時もとく過ぎにし頃。

肥後　千知波情子

十月二十三日、曇天。今日は遼陽方面の首山堡の戰爭に名譽の戰死をとげられし本田某の遺骨の町葬とて、妾等も愛國婦人會の一同に案内せられしかば、同窓につらなりて式を拜みぬ。郡長はじめ高等小學校長などの吊文の朗讀を聞て、うからやからの人たち、そぞろあん涙にむせばれしさま、いとあはれなり。日も暮方にすみぬれば、家にかへり來て、めし仕の男女にも今日のありさまをかたりきかせて、軍國の臣民の心おきてを示してふしどに入りぬ。

二十四日晴天、子供二人三人ひきつれて千種の花にほへる野べにとうかれいでぬ。山みれば紅葉の錦織はへてながめうるはし。そこゝとさまよふをりから、しめぢ初茸などみつよつふたつかりえたるもをかし。かへり來りて夕げの膳には初茸のあつものをぞもてなしぬ。

二十五日、雨天にてことに冷氣つよければ、家にこもりゐて衣縫のわざに心をつくしぬ。かたへに日露戰爭の新誌をよみゆけば、皇國のため名高き將軍たちの死傷の實記にはたとむねはふたがりぬ。

肥後　秋吉輝尾子

十月廿一日、おきまどはせる白菊も一しほうるはしくさき出しかば、今日は父上樣の御同役一同の御出にて、母上はじめ皆いとものせはしくおはします。妾は學校より茸狩にゆきぬ。歸ればあいらしき弟は、山づとにせし八千種の花を嬉しげに受取て佛前にと持ゆく、いとけなげなり。机上には友垣の君のよこさせ給ひし水莖、それに友の兄君の名譽の御負傷なされ給ひしよし承りぬ。御兩親方の御心もおしはかられてなん。夜は湯あみして後茸狩のものがたりなどしてふしどにいりぬ。

廿二日、空曇、朝とく玄關に音つれしは町内の出征者、某君が日露の戰爭に首山堡とやらんにて名譽の戰死をとげられし報知なり。父上はそが兄上とまたなき友なればとて、一入直に吊儀にと出ゆかせ給ふ。母上は今日の愛國婦人會に出席なしたまふ。父母ともに午後四時ころ御かへりになりて、やがて夕飯の上に一杯をきこしめしぬ。

二十三日、晴天、日頃ひかへ目なる妹の氣色もよし。二人打つれて城山に栗の實拾ひにゆき、かへりみれば兄上に軍事郵便もの着せり。六月のころ布教師として海外萬里の滿洲の野に本願寺より差立られし北島氏のものされしなりと。風なまぐさき戰場の光景さながら見るがごとし。午後七時ごろ松千君音づれ給ひぬれば、夜ふくるまでものかたりす、

森本秀子

二十五日、曇、さびしげなる朝日ほのかに障子にうつり、庭の梅木には早や三四羽の雀囀れり、やをら起き出で、口を嗽ぎて脊よの池にきて見れば、こはいかに、昨日まで元氣の好かりし鯉の苦しげなる樣にて、驚き急ぎそゝき救ひやり、ストを呑ませ暫時桶に入居たり。それより朝餉もたふべ終りて後、これと云ふ用もなければ、我が書齋にて文のかずかずひもとけば、中々に興多く、時のうつるもおぼえざりき。夜に入れば無邪氣なる弟の話に耳か

たむけつゝ閨なりしに、すゞろ夢の境にゆく心地すれば床をのべ寐につく、折しも中の間の時計の十時をほうじぬ。

二十六日、晴、昨日にひきかへて不思議程の晴天なれど、春夏とは異なりて、野も山も何となく哀れに心細くてなん。午後よりはなにのすべもなく、唯机に向て最愛の女鑑手にする折しも、下婢一通の手紙を持ちて、御仲好のお友達よりとてさし出す。何事を云ひ起せしなど様々に心をくばりて見れば、「今宵は心ばかりの忘年會いたすべければ、夕方より御車うながさせ給へ」との文にて、いとも嬉しく　この事も、あの面白かりし事も話すべくなど、心に笑て、母上のゆるしをえて、早速身仕度して、心も空に我家を出づ歸りしは九時なりき。

二十七日、曇、かしこもこゝも歳末の事とて、此日朝まだきより餅つき、煤拂ふなど、急がしく立ち働く様見て嬉しきやうにも思はれ、又悲しきやうにも感ぜらる。夕刻湯浴に入りて後、庭の白菊を見んと下りたちしに、ついこの前まで咲きゐしに、最早白露の玉ときえ、霜にとざされて見る影だになし。あはれこの花の如く妾は今年を名殘惜くもちらせし事の愚かさよと思へば、今更に恥かしくて、身も心も小さくなる心地しけり。

肥後　佐々有鄰子

明日は舊暦十月十九日の甲子の日なり、先代より出雲大社の甲子祭をぞ庭内の鎭守神社にて受持奉仕の社掌を請して祭式執行することなれば、朝より夕にいたる祭場のじゆんびに日もくれはてぬ。夜は御神前に御燈をたてまつる。今日は十一月二十六日、土曜、舊暦の十月甲子なり。父母の兩君も、朝はやくおき出たまひ、御神殿に詣でたまひ、おごそかなる神拜をなしたふ。御祭の式は午前八時よりなり。社掌殿も七時ころ馬上にて神饌所に到着されたりければ、献供の品々を取まとめて祭式にとりかゝるなるべし。第一皷にて神職着床、次修祓、次齋主幣を揚ぐ、次神饌を供す、次祭文、齋主神饌を撤すなど其式おごそかなり。祭場の式すみければ參詣の有志の人々には本膳立にて酒饌をたまはる。數多の婦女などは目醉にいたりぬ。夜は有志者よりの奉納の花火數組ありていとにぎはし。

二十七日、昨日の御祭式の場所を夫々のとりかたつけに召仕の者を仕役して夕日のくだちに及びぬ。

歳の暮に故郷の母君に贈る文

前橋　竹のふし

月日の流れいと早く、今年ももはや指かゞなうる程におしつまり候へば、例の春衣の新調はた冬籠りの漬物等數々の御用意に、此頃は定めし御夜なべ迄もと推し參らせ候。御地にあらば及ばずながらも御手傳仕つらんに、遠く隔る身の詮無く、誠に心許無く存じ候を、此度は兼て御丹精の織物、いよいよ御出來にて、妾に迄御送り下され、いと嬉しうて、早速仕立に取掛り申候。地質の良否はさて置き、御手織の厚き母上様の御心の程辱うて、密に袖をしぼり申し候。昨日今日の烈しき御寒さにも御障りおはさぬ由、隔る身には何より心強く嬉しう存じ候。去ながら、御老體故、必ず御むり遊ばさぬ様願上候。恒ちやん春ちやん等、毎夜百人一首暗誦に御忙がしき事と、有し昔の忍ばれていと床しう存じ候。妾事御膝下にありし折は、寒中毎朝の日課なる掃除をうしと思ひ候ひしが、火桶の設無きに苦み給ふ友の君達に褒まるゝ身となりしも、慈母様の御情の賜と、千里の外に悟り申し候。まだ申上度事は落葉の數ほどしげく候へど、余は又來る年にゆるゆると申述可く惜しき筆とめ申し候。氣候御厭ひ遊ばし、よき年迎へ給ふ様祈入候。先は思ひ出の儘のあらましをかくなん。

東京　岡田ちか子

かしましき砧の音は、夜の間に絶えて、今朝は花咲きたらむやと

に白雪のふり積り候て、一入寒さ堪へがたく候を、母君には如何に凌がせ給ふらん。實に年月に關守なしとかや。今年も早暮んの日數僅かに相成り、嘸かし忙はしう渡り給ふらむと推しはかり奉るにつけても、己れは、只文机の上なる硯の海に棹さして、年のいそぎもよそに、物學びする事の嬉しさ、何にかたとへ侍らん。思へば〳〵、み情の程限りもなう、いかにして、此篤き恩に報いまつらん。いでや、來ん年よりは、心の駒にむちうちて、學びの道を勉め勵み、はえあるしるし文を御目にかけまつらまほしうなん。母君よ、幸に御心休め給ひてよ。このシヤツ、手袋は、學びの暇に作りたるものにて、粗末には候へど、御寒さ凌がせ給はん料にもとて差上まつり候。かしこ

山城　てふ子

久々にて文し參らせ候。今年は常になき寒さにて、當地すらなほ堪へがたく候を、まして故里は、いかにかおはし候らん、殊に、御年老へさせ玉ふ御身には、さこそえ堪へ玉ふまじと、寒夜の目ざめ、ひまもる風にも、思は故鄉にはせ申候。いかに御さわりもおはさず候や。先づ何よりも御返り事聞かまほしう候。さて御別れ申し候ひしは、花さきにほふやよひのなかばに候ひしが、日月は、積り積りて、のこりもはや、指折り數ふる許りと相成申候。さるにても、此一年はゆめのやうなりしなどいふは、なべての人の常なれど、妾は御別れの折、母君が、さとし給へる、「年の暮に悔なからしめよ、後悔は先だゝぬものぞ、よく〳〵今より心して、今年は更なり來ん年も又來ん年も必此心忘るな、かゝれば、年月と共に汝が業も進まん。必ずよ、」とくりかへしくりかへしのたまひし御言葉をたがへじと、ひたすらに、いそしみ候ものから、すぐる學期試驗には首尾あしからで、別紙の如き成績を得申候。これと申すも全く日　より御さとし給ひし、母君のあつきめぐみと、常にはつらかりし御戒めの節々さへ、今更に、有がたく思ひいでられ申候。されば今より後も、御さとしのふし〴〵深く心にしめて、三年の後には必ず錦きて里のほまれともならんの心得に御ざ候間、何卒御心やすく御思し下され度候。別封に致し候小包は、學びの手ひまにものしたる毛糸細工にて、御めし物の下にめさせ給ひ候はゞ、幾分の寒さ防がん代にもならんかと、心つくせし物に御座候。老の御身には、御攝養の上にも御注意遊ばされ候て、つゝがなくあらせ給はるやう祈り上參らせ候。先は、右のみ申上げんとて、なほ春ながを待ちてよろづ申上ぐべく候。かしこ

埼玉　戸田折香子

年波の流れ最と早く、詫しと惱ちし秋の哀れも、時の間にいつしか吳竹の、今年も指折りかぞのふばかりになり侍りて、一日〳〵と寒さいや勝り、埋火のみ戀しう存ぜられ候折柄、御母上樣には如何おはしまし給ふにか、木枯吹きすさぶ頃には、くさ〴〵のいたつきも起る者と承れ〳〵聞き侍れば、御母上樣には、御持病とてはおはしまさざりしも、もしや時の御さわりもあらせ給はずやと、一しほ忍ばれて、御懷かしさはいとゞ增鏡、霜置く朝雪降る夕べ、扨ては後れし雁の渡るにつけ、つばさに懸けて言づてまほしう思ひ侍れども、海山遠く隔てし身のせん術なく、只々御地の空のみ伏し拜み居り候。妾事も露變らず學びの園に務め居り侍れば、必ず〳〵御心惱ませ給ふ間敷候。古へ人の讀みけん歌に、「親思ふ心に勝る親心子を思ふ道に思ひくらべて」とか有し、實に妾の思ひよりも御母上樣の思召はさこそと御察し申せども、おこたり勝の身には萬後れ勝ちにて、何くれと殘りし業の繁きがまゝに、振りはへてもみけしき伺ひ奉らず、水莖のあと絕ち候罪御許し給はり度候。歲暮の事とて嘸ぞかし御多忙に渡らせらるゝ御事とは存じ奉れども、母君よ、いましばしの間御忍び給へてよ。希望の春に逢し候はば、高根の花を手折りて母君の家土產となさん其の秋を。や寒さきびしき折柄、御自愛遊ばさるべく候。聞え上奉らん事ば、冬の落葉の數極みなけれども何も〳〵年改まりてこそとかきの

こし候。あな可祝。

岡山 小山松枝

隙ゆく駒の足はやく、今年もはや指をりかぞふばかりに相成候へば、御母上様には年の始の御用意に御暇もあらせられず、まして御無人の折柄とて、御心づかひさこそと推し上、殊に寒氣さへ例よりもまして侍れば、若し御持病など御きし起り給はずやと、つねに御按じ申上候。さるを物學びのためとはいへ、遠き旅ぢに世の事にかゝつらはで、御慈の蔭に、おくふかく文の林にわけいる身のありがたさ。かれての御教訓をまもりてつとめはげみし月日にしがらみなく、はや三年を過し申候。いよ〳〵來春は卒業致すべく、さすれば御膝下に歸りて御心をやすめ奉り、手だすけをも致したくと、夫のみ樂しく、身心ともに健にて一層いそしみ居候御母上様には御老體におはしませば、あまりすぎたる御運動遊ばさぬやう、何とぞめでたく年を御迎へ下されたく、夜ごとにかよふ夢路にも御ありさまのしのばれて、はしりがきに一寸伺ひまゐらせ候。よろづは年あらたまりてこそ。かしこ。

東京 米窪たれ子

あはれ母上よ。

蕭殺たる涼風の告ぐる秋も一時の間にて、暮れ行く年の名殘なる師走も餘日賴む甲斐なくなりぬ。嵐の夜半にゆめさめて、空ゆく鳥の音にかりの世を忍ばせ給ふ事おはさずてか。夜や寒むく月や悲しきに、老いたる御身に砧うつ御手のわびしからずてか。

あはれ母上よ。

祇園精舍の櫓は朽ち、セントヘレナの墻荒れて、俗衲の人に媚ぶる所、涙の淺き心持てる人のみ増り行きて、血に飢え利に渴き、淺ましき蛇の智惠のみ逞しく、果てはナザレの神の御教も橄欖山の神の御法も、よそになり行きて、涙の色は怨恨の炎にあせぬ。かくして旅の嫁に最若く花安けき希望を追ひ、運命を求めたりし神命の子は、三年の秋を並に暮して、只罰の色の淺ましき世を厭ふる身とはなりはべりぬ。

あはれ母上よ。

淺間の煙は永久にもえ、千曲の流れは涙に千古の「時」てふものを傳ふるに、などてか人の世のみかくははかなき、年は暮れ、母上は老い給ふ、ひとりさすらひの子は旅に痛みて人生を咒ふ。斷外の胡笳にも慰安の調ありしと聞くものを、あはれ年も行く、春、われも行く人、落つる木の葉も定めなし、あはれ母上よ。

尾道 片山松子

其後は久しく御伺ひも致さず候處、御母上様には此頃の寒さ如何御凌ぎ遊ばされ候や、一度御伺ひ致さんとは存じながら、とかく學びの業の暇なき爲め、思ひながらも御無さたを重ねし段、御許し下され度候。扨て其御母上様には、我行末の事みこゝろに掛けさせ給ひて、常々の希望を許させ給ひ、都をさして上りしは、櫻花未だ開かざるやよひの初なりしに、今は早師走の末ともなり、今年も數日の内に暮れんと致し居候。げに月日に關守なしとかや、此後も一きははげみ、一日も早く桂の枝を手折らんと餘念なくいそしみ居申候。されど御母上様のみことばの如く、旅路にさまよふ身は身體のすこやかを保つ事第一に候へば、學びの暇だにあれば、必ず運動をよくし、身をすこやかに致し居候へば、必ず〳〵我身には御心づかひ遊ばさず、ひたすら御身御大切に、三年の間御待ち下さるやう神かけて祈り上ら〳〵。いづれ新玉の年を迎へ、都の様にもくはしく御聞えあげべく、先は御機嫌御伺まで、末ながら此度は御父上様には御無さたいたし候へば、よろしく御つたへ下され度皆々様にもおなじく寒さ御用心のほどくれ〳〵も祈り上ら〳〵あなかしこ。

東京 山口八重子

今年も早や殘る日數も僅なるに、何事もなす事なくて暮しけるよと、人の例口ながら、走せ行く年におはれてや市人は足を空にまどふが如く走せ交ふ大路の樣は修羅の衢と存ぜられ候。そが中

一出征軍人の宅は、さしも靜に門松を立並べ、せわしき暮も淋しく見受け候。嗚呼、花咲く頃御慈愛濃き御膝を辭し、故郷を去りて東都の文屋に來りしより茲に初めて新年を迎ふる事に御座候。さらぬだに暮てふものは人の感を動かすものなるを一人暖き爐邊の集ひにもれたる身は、一層去年の暮を忍ばれ申候。母上様には家事多端にも拘らず、何時も御壯健にて渡らせ給ふことゝ悦び居候。今や劍を揮ひ銃を荷ひて彼のふゞきの荒き滿洲の野に義勇公に奉じ、鬼神となられし人も數多あることとて、田舍の習慣とは云へ、歳暮の祝の鏡餅を搗く音も稀なるべく、いとせわしき年の夕べ、一家團欒の樂を破られし家も、いかばかりあるなんと存候。されば、夢結ばれぬ夜寒の床に心引くも何彼と思ひに沈む事も有之候。いざ、來ん年を迎ふると共に前栽の梅花に習ひ、只管勉強し、自かじゞ職務を全うし、父母の高恩と將國恩に報ぜんと存候かしこ。

愛媛　高橋茂子

隙行く駒の足早く、今年もいつしかわづかを殘すのみと相成申候處、御變りなく御過し被遊候事、此の上なく嬉敷存申候、さて先日はこま〴〵と御情深き御心づけ、今更ならねど身にしみて、思はず熱き涙に咽び申候。折よくは早々宿りにことのお言葉、如何ばかり嬉敷候はん、仰のとほり私も以前とは異り、少しは心かけつゝ侍り候らへ共、去年迄は只温き御膝下に隔てなきはらからとのみ起臥し、露ばかりも浮世の涙に足踏み出しゝ事なき身の、他人の中の心づかひ、わけても年の暮の人々の忙はしき見聞くに付けあゝもなさば角もせばやと心のみは早り候らへども、またそれ〴〵家風のたがふ事の多くて、もしあやまりては如何にせん、なまじひ妨げにもやと思ひ、いよ〳〵惑ひ苦み居り申候。されば何につけ御上のみ戀しく、御言葉を待つ迄もなく明けなば早々伺ひ、つもる話を聞えも上げ伺ひも致さばや。まだ〳〵わからぬふしの多かりしも、委しく御教へ願はやと、今より其れのみ相樂しみ居り申候。母上様にも嘸や御多忙御困りの事と、山々御察し申上奉り候。何卒御間に相懸候とも、御氣長く、大方ははした者へ御申付給ひ、折角御身御いとひ願はん事ねんじ上奉り候。

呉市　和住千鶴子

冬の初のからつ風ふき荒ぶこの頃、古里にゐます御母君には、いかにましますらむ。冷かなる風の御身にしみ、變らせ給ふ事おはしまさずやなど、日夜おもひ煩ひ侍る。氣候のあしく侍れば、一しほこゝろし給ひてよ。いつしか今年も暮近うなりにけるを、寄る年波に母君のいかに淺ざかれてやおわすらむと思ひやりつゝ、晝は事繁きものから、よな〳〵縫ひし此衣、おかしけれども、こん年の寒を防ぐ料ともなし給ひてよ。猶、新玉の春ともならば、また〳〵花見がてら御出でましをこそ、ひたすらねぎ奉るになん。いざとく、もろ〳〵の業なしをへて、隔つれど母君も妾も、ゆたけき年を迎へ侍らん。あなかしこ。

山形　香澄露子

流れて早き月日は何處しも變るべうはあられど、殊に東の都にありては、いと早き心地なむ致し候。妾の御母上様の御許より離れまつり、はろ〴〵と此地に參りしは、未だ遠からずと思ひけしに、昨日と過ぎ今日と暮す中に、幾多の月日を積みてはや歳の暮と相成候。母上様には新玉の晴着とて、一はりごとにま心を御そへ下され候いともよき衣を御贈り下され、忝く拜受仕り候。あゝ例年に候はゞ、妾も年暮には母上様と裁縫にいとまなく、又あれよこれよと、不束ながら御手傳仕り、いとも目出度新年をも迎へ候を、今年は海山遠く隔りて、心のみを故郷にかよはしながら、及ばぬことにて、御恩を思ひては人にをとらじものをと、母上様よりの御消息はいつも〳〵座右銘と相成り候。御母上様の御消息に、いかで一日も早く目的の彼岸に着し、うれしくも御面會致し度存じ居り候。先は母上様には御身御健全に新年を迎へられむことを祈り上候。かしこ。

福井 今井田鶴子

花の春秋の紅葉とうつりかはる四季のながめにおこがれて、まぼろしの如く日をかされ、哀れ今年もはや暮れなんとする折から、日頃なつかしの御母上様には、如何御くらし遊され給ふや。一年のくれとてさぞや御いそがしき御事と、あけくれ御あんじ申し、御膝許にあらんには、いさゝかなりとも御手助いたすものをと、遠くへたゝる身の悲しさには、降る雪につけこがらしあらき日も忍ばれてはるかに御地の空のみながめ暮らし居り候、實に〱深きとも深き御恩を受けながら、御老體の御母上様を一人わびしき山里にいつまでものこさんはといつもしのびがたなきことに存じ居候へども、やがてむかへん春には業を卒へ、なつかしき故郷に懸しき御そばへ侍り、御心やすませ參らんとそれのみ樂しみ申居候。これよりは春とは申せど名のみにて、寒さいやまし候べければ返す〱も御養生御おこたらせ給はぬよう御ねがひ申上候。まづは今年のなごりに一筆申上候。

肥後 德永廣子

ひまゆく駒の足はやく、心なき身には歩うつゝにて、はや今年の日も十日にたらぬ今日、御兩親様御はじめ、皆様いかが渡らせ給ふにや、御なつかしさいはんすべなく候。こなたにては、御伯母君も御用しげく、諸事に御心をくだき給ふ此ごろ市人の足音かしましきにつけても、いたく故郷のしのばれて、こひしさとび立ばかり。まいてなりはひしげき田舎にては、さぞかし御心を勞し給ふらん。時候とは申すものゝ、此さむ空に侍れば、もし年越の御心づかひなどにて、御いたつきにもならせ給はずやなど、思ひつづけて心もとなきままに、夜などは一人庭前にいで、西の空をふし拜みはべることもいく度かは、夜いたくふけて霜さゆる空に、月の影さへ氷るばかりにくまなくてり。あはれもふかく、御なさけのほど身にしみじみとおぼえ侍る。まことに姿寒、御ひざもとに居侍りなば、御手つだひをもなし、少しは御心やすらかにさせまゐらせんに、かく海山へだたり侍りては、かりそめの御用にも立申さぬが上へ、かへりて御世話まさせ參ることこそ、罪深きわざにて、心ぐるしう覺えはべれ、とかく年なみのながれ短き日に歸國いたせばとて。無益の事に侍れば、心のかぎり伯母君の御ひざもとにつとめ侍るまま、かまへて御心にかけさせ給はぬやうねぎ侍る。其上にかれてよわらせ給ふ御身にしましませば、ことさら心細く思ひ侍れば、萬の事御氣ながく思召たまひて、長閑なる春の日をまたせ給ひなば、藤立都の空よりいそぎ歸り侍りて、朝な夕なたのしく仕へ參らんと、ゆびをりて待はべれば、何よりも御身御大切に御すこやかなる御けしき拜し度、かへすがへすもいのり參る。かしこ。

京都 森本秀子

錦あや織る紅葉もはや散はてて、四方の山邊の落葉を誘ふ風のいと物さびしき折柄、母様には如何渡らせ給ふにや。こゝ賑ひろ都さへ、吹く風寒く身にしみわたる程に覺え侍るを、まいて片山里に侘び住なされ、一人待たせらるゝ御心淋しさいかばかりならんと、旦暮御地の空眺めて御案じ申すになん。兼て新聞にて戰爭の事とも御存じに候が、當地にては勝利ごとに提灯行列をして、市中をくれり歩く樣、御覽遊ばされなば、日頃の沈みがちなる御心も浮たち給ひつらんを、かく遠ざかりてはさることも叶はずなど思へば、殘念さいやまさりて、先立つ物は涙に候。かゝる愚痴を申すも、かへつて御心をわづらはすのに候へば、彼樣の事は扨ておき、これよりはいよ〱學びの道にいそしみはげみて、一日も早く業を卒へ、御膝下へ歸りて、御心慰めばやと、その日を指をりかぞへて待ちはべりぬ。これよりは寒さもいとはげしくなり侍れば御身御厭のほど偏に願ひ參る。かしこ。

大阪 塩見峯子

昨日今日と過ぎ行く年の足早み實に月日に關守なきたとへの如く、今年も殘る日數もはやわづかに相成申候。外面には七五三〱

とよばゝる聲家内にてはすゝはらひの音、かしましく、此處彼處にて餅つく音聞え、誠に新まる年をむかえん爲の忙しさ、目のまはる如くにて、猫の手も人の手とかの諺、實にもと存候。殊に母上樣には老の年浪數そはせ給ふに、何くれとの御用意、さぞかし御忙しき事と推し上候。又皆々樣にも御かはりもあらせられず候哉。私事も學びの奥をたづれん爲、住みなれし故郷をあとに當地に來りてより、指折數ふ見ればはや三度の春秋を過申候。殊に都は田舎と異り、人々の心も忙しげにて、なか〳〵御兩親樣の御ひざ許に居て我まゝ云ひし時の如くまゐらず候。妾が我家に在りし時は、深き〳〵考へなりしに、其理想の十分一も出來さるに、今年も早暮れ近く相成り、誠に面目もなく候へども　過ぎ行く月日はとゞめんよすがもなく、只此上は來年の用意こそと存じ居り申候。まだ申上度き事は山々おはし候へども、忙はしき折にかゝる緑り言致すも甲斐なきことゝ存じ、春の日長にとゆづり申候。先は歳暮の御伺ひまで。かしこ。

肥後　佐々有鄰子

歳暮の御祝儀目出度申納候。故郷の御母上樣には、萬事御さはりなく年をむかへまします御うれしさ、千鶴萬龜の御歳暮と遙に奉祝候。此もとにても、夫君は征露出兵中にて、世のことわざしげくいといと事おほき暮に御座候へども、私をはじめ子供等もすこやかに有之候間、御心やすく奉願候。いづれ新年の候を期し候。目出度。かしこ。

肥後　秋吉輝尾子

昨日とくらし今日とすごし、今年もはやくれなんとする今日とはなり侍りぬ。年のいそぎを、都もひなも相かはり不申、御母上樣には、いかにくらさせ給ふらん。千年もかはらぬ年の坂路、ことなくこさせ給ふ御事と、嬉しく存上まゐらせ候。降りて私方にも一同かはりなく、年のをはりをむかへ申候。御心やすめさせ給ひてよ。御同樣にいろいろいそがしきままに、おこたりかちなるも、なにとぞさるかたに御容赦下され度候、例にまかせ歳暮の御しるしとして、此品を御目にかけまゐらせ候。小包の郵便にて心にまかせ不申、御笑納奉願候。目出度御伺ひまで如此御座候。謹言。

京都　千代子

闘守なき月日のいつしかくれ、今年も日數少なう成申候折柄、御母上樣には如何渡らせたまふらむ。常々御まめやかにおはす御身ながらも病はおこり易う候へば、御心したまひてよ。降て妾も健かに學び居り候へば、御安心下され度候。さても三年てふながき日をおわかれ申て、いつまでも御心をわづらはし奉る事、なか〳〵に罪ふかう候へど、來ん成功の春を待ちて、亡き父君の墓前に美花を手向けまつらんを樂しみにまちたまはり度、其折こそは御傍近う仕へまつりて、雨の朝、風の夕をもなぐさめ申さんと、まちらしき事のみを筆記いたせしものに候へば、おいとまの節は御識み下され度、返す〳〵も御身のやしなひ專一にせさせたまはんを、切にれき奉るになむ。あなかしこ。

肥後　岡山登嘉子

ひまゆく駒の足はやみ、今年もはや十日あまりを殘すのみと世の人々は誰れかれのへだてなく、年のくれのいそぎにいたつき侍りぬ。をりから故郷にすませたまへる母上樣にも、さだめて御いそがはしくおはし給ふらんと、はるかに御察し申上候。降りて私事も、おかげにて事なく侍れども、日頃怠りかちなるまゝ、取重たる世の事業のいつはて來るべくもみえねば、あはてまどふばかりに候。幼きをりは年始の樂しき事など思ひて、いと待ちどほしかりしものを、今は月日のながれにしがらみもかなと、いとをしまるゝものは時刻にこそ。常に世の事のしげきがまゝ、心にもなき失禮のみいたし、なにとぞあしからず御ゆるし給ひてよ、申上度事はやま〳〵侍れども。年あらたまりてより萬々申上べく候。久しくきこえ奉らざりし御わびごとを、年の内にとてかくなもかしこ。

武藏　田中拾葉

いとかなしう御名殘り惜しく母様の御許をはなれ、都にものせしよりは、いとしづみがちなる胸の一入思出度く、折々御うつしゑ取り出し、樂かりしまとひなどしのばれ候。かゝる中、心さす業の進み難れ、昔のまゝなるに、流るゝ如き月日は至り至りて、惜めどかひなく、年の暮れとは成候。申までも無けれどいづこも同じく、又來む年を向ゆる人の心は自からせわしう思はれ候。さるを例年より秋の實入も宜しく、豐かに候らひし由、祝ひなどにきにきしき事もなさゞりしとか承る。かたき村のひとへに戰時に盡さばやと、夜目にも成す業の務せられ候。妾は斗にいつくしみ深き師の君、やさしき友垣の中に慈なう學びの道をたどりつゝ、今は試驗中に候。こ度は餘むづかしき事の有られば、多分大丈夫ならむと存じ候。夜なく／＼あみ成せし物、目のふぞろにて御恥しく候へど御地山國は御寒さもことさらに候へば、母様の御身につけられなばこよなき幸よと、御送り申候。何卒朝夕御身御大切に御厭ひ遊ばされ度、只管ねぎ居り申候。暖かにも成らば見物に御のぼりなされます様、叔母君もそを樂しみに案内致さむと申し待ち居候。かしこ。

肥後　千々波檀子

よどみなき月日はながれながれて、今年もわづかに相成申候。をりから寒氣はげしく、母上様にはいかゞわたらせ候やらんと、朝夕申くらし居候處。いとすこやかにすぐさせられ給ふよし、何より嬉しくぞんじあげまゐらせ候。扨兄上様御事、各所の戰爭に參加し給ひ、わけて遼陽方面の首山堡とやらの戰鬪にも、名譽の戰死をなし給ひし將士だちも多かる中に、薄手だにおひ給はざりしよし、かくては敵全滅までも皇國のため千變萬化のはたらきをもなし給はんといと／＼うれしく、兄上様の御てがらを聞くたびごとに、耳人も軍隊ならぬ市人の身をかこちまゐらせ候。年あらたまり候はゞ、早速消息もてうかゞひ、つもる御ものがたり承り度候。御老體の御身御養生あそばし候様ねんじまゐらせ候。まづは歳末の御伺まで目出度かしこ。

大阪　山本伊勢子

年の名殘りの荒びにや、昨日今日は吹く風もこと／＼敷、深雪は都の塵を埋めて、唯白妙の清けさは、何處の空も同じき様、そゞろに故郷のよすが偲ばれて、最も懐かしさの餘り、一筆訪ひ參らするになん。扨も其後御母上様にはいかに御過し給ひつらん、日々の御消息も伺ひ參らす可に、久けき御無音の罪は、たゞに許させ給へ。次に妾にも、何障り無く、最まめやかにて朝夕の學びに怠りも無侍れば、何卒何卒御心安らかに思召給ひてかし。いよ／＼今年も殘り少なく成りぬ。都も鄙もへだてなき年の瀬の賑ひ、御いそがしきことにおはしつらんとぞ推し參る。實に光陰は矢の如しとかにて、年の早みに關守はなく。春風吹かば月の夜と、早くも四歳をすぎぬる程に、又も暮れて行く年の、名殘りも最ど惜まるゝよ、さあれど、初日輝やく春にもなれば、學びの業も殘りなく終へて、雲路遥けき懐かしの母上様に、面見へまつらん嬉しさをも偲びては、哀れ再び歸らぬ年の急ぎ行くも、こよなく嬉しう待ちあこがるゝになん。先は殘んの年の內に御無沙汰勝なる御詫すとて、斯はあら／＼申聞え參る、猶寒けさ最ときびしくおわしませば、何を措いても、御身の程を厭はせられ、千代の新春御重ね遊さん事をねぎ參る。あなかしこ。

失名

吹く木枯に木の葉ももろく、四方の山々末枯れて淺間だけには雪白く、冬ぞ淋しさ勝りぬる今日此の頃、御母君様には如何に候や。妾こと若き者すら、朝夕は埋火の影戀しき心地するを、まして年老いさせし御身には、さぞかしと御察し申し上げ候ふ。姉ちやん富士さんも毎日學の道に御いそしみの事と、嬉しう存じ參らせ候、廣子もいと健かに、日々學業にいそしみ、御ねもごろなる、御教訓の程、みにしめて御玉章のあとくり返し拜し參らせ

候ふ。御心安う思召しの程願ひ上げ候ふ。

もはや、歸省しまぢかく、指をりかぞへなんまでになり侍れば、こひしさ勝る故郷の空、そゞろに思ひ出だされ、及ばぬながら少しの御手傳ひもがなと、今より樂しみ居り申し候ふ。末ながら皆皆樣によろしう、時節柄折角御身御大切に、くれぐれも君子さんにもよろしく願上候。

御土產には壽ちやんにタレ帽子、富士さんには、ノートブツクを、購ひ參るべく先はこれにて惜しき筆留め參らせ候。

あらあらかしこ。

山梨　標　武子

先日は新年入用の品ならんとて御送り下され候御情の數々、殊に細々と御書添へ下され候御玉章、母親なき同室の友を幾度か泣かせしことを思へば、常々御無音にのみ過しゝ罪のいよいよ深うていとゞ心苦しうなむ侍る。御老體に在せば、交際廣き家にて内外の御心遣ひ、迎ふる年の御仕度に、さこそと陰ながら心を痛め侍るを、何の御恙も在せ給はぬ由、嬉さは淚と變り、毎々の御教訓身にしみて拜讀致候。斯く三年餘の、ひまさへ賜はり文明のいとし兒となりて學び得らるゝ身には、學ぶ資の足らずして苦學する女性の多きとか、見つ聞きつするにつけ、御慈愛の身にあまりて、人知れず袖をしぼり侍るになむ。數ならぬ身にも、來ん彌生には業を終へて、戀しき御膝元に歸り、何時も變らぬ、御情のもとに仕へまつらるゝかと思へば、暮れ行く年も惜まれず。嬉しきまとひ、さては學びし家政もがなと、今より空想にふけり居候。先は一筆かく聞え上まゐらせ候。かしこ。

福井　杉本はま子

哀れ今年も早暮れ行て、殘んの日數指折數ふべき時と相成り候折柄、御母上樣には、御持病とは御座しますず候へども、御老體の御身、若や折からの寒氣にて御わづらひも御座しますずやなど、日頃思侍りて、御なつかしさはいはん方なく、何に付け、遠く隔てし身の詮方無く、朝な夕な御地の空のみ拜み居り候、ついで私事は恙なう毎日學屋に通ひ居候間、けつして御心な惱まで給ふまじく候。私も御老母樣の御事につけ、此年暮の際に如何に渡らせらるゝかなのみ思ひをり候。時節がら寒さいやまし候へば御養生おこたらせ給はぬ樣、陰ながら偏へにねんじ上げ參らせ候

かしこ。

短文

墓前の淚

伊勢　曉雲女

今日あつて明日定めなき人の身は、前生の規約、天の定むる所かは知らぬが、我れと親しき友……

……我がなつかしの君よ、今何處をたどりつゝあるであろうか。思ひ出せば一年以前、わが遊學しつつあつた學校にはるばる尋ね來て、二三日を共に倶に樂しう語り親しう交つて、過ぎし昔竹馬などに乘つた頃の事を思ひ出だして、愉快に相語つたのであつたが、彼の友は我れよりは二つばかり年長で、小學校に居る頃から、常に淺學なる我を導き教へて、少なからぬ利益を與へてくれた。我れは常に思つた、此の樣な良友を得たのは、一生の

利益、終生の幸福、愚鈍なる我れを憐んで天が與へたのであらうと。
彼れが盡せぬ名殘を惜んで歸鄕するに際し、涙をふるつて我れに云つた。
君よ無事なれ、多幸なれ、然して且つ奮勵せよ。一日再晨なり難し……や丶暫く默して、又、君よ長命たれ、忘る丶勿れ、人生僅か五十年とは云へ、疑問の内に生れし人間は必ず疑問の内に死すべきものぞ。

明日ありと思ふ心の山櫻

とは誠やよく、否深く人生の無情を探求して居る歌ではないか。
と、後は咽びて得語らず、我は答ふるに、
有難……、
の一言を以てせしのみ、今より其當時を懷古すれば、友の語りし彼の言は、父としての遺訓、友としての遺誡、我は冬季休暇を待ち兼て樂しく親しく語らんと勇みいさんで歸省した詮もなく、彼は早……見れば木がらしに落ち散つた紅葉は、枯れ草の上に……彼れの墓標の傍に、我は昔のわれなるに已に彼の友は、其の……其下に……、わたら蕾の身を、嗚呼何たる無情ぞ、天はそも。

菊

薩摩　松原みね子

おのれいたく菊を好むものから、今年も春の頃より植ゑおきて、夏の朝夕水をそ丶ぐなど、丹精したる甲斐ありて、大菊小菊とり〳〵に匂ひ出でたる秋の嬉しさ。丈高き黄菊の優にやさしければ、露ながら一本手折りて、み佛に手向け參らす。湖紅ゐなるは乙女子が袖の模樣にも染めたらんにはと思はれてまたなく艶なり。みどりなす千とせの松の根方によりて、咲き出でたる白菊の朝露にぬれたる清けさ氣高さ、たとふるにものなく、おのづから人の心もすが〳〵しうなりぬ。あはれ此山里の賤が垣根の花さへか丶るを、はるけき雲井のみ庭に一本千輪とかに咲き出でたるてふ花はいかに香はしき匂ひならんと推し量り參らするだにかしこしや。

評曰、文亦菊花の香あり。

秋の夜の思ひ

[illegible]島　すゞむし

限なく照らす御空の月、千草にすだく清き蟲の音に誘はれて、そこはかとなく立ち出づれば、秋の下葉はらひて吹き來る風いとすゞしく、月は昔を語るが如く、蟲は妾を慰むるが如し。

嗚呼月の君よ、去にし年の今宵は庭のあたりに、妾と友の二人の影ありしを君は覺え給ふらん。彼の友と妾との間は、常に睦ひて語りしを、君は久方にありてかすかに眺めつらん。如何に吾等が間に深き契りありしかを君は知れるか。吾等が互に末の世かけて契りてありし時、君は雲の内に姿を隠しぬ。かくて友と妾とは暗の内に心亂れてありし時、君は雲間より吾等が胸の戀の異心を照しにき。

嗚呼蟲よ、君は友と妾とたゞ二人、庭の草葉の露打ち拂ひて吹き來る風を袂にうけつゝ、互に思ふ心の内を、語り合へつゝありし時、君はうるはしき歌の聲を停めぬ。吾等が燃ゆる思に亂されて言の葉絶えにし時、また妙なる音を以て、吾等が亂れし心を慰めしは、そも去年の今宵なりしぞ。

あはれ人の命は朝露の如しと實に理にこそ。月にあこがれ蟲に音づれ、樂も苦も共にせむ、生れし年は異にせるも、日をば同じうして死せむと、かたみに契りかはしつゝ朝夕共に文見しを、月にむら雲花にかせ、散りてはかなき世の習ひ、あはれかくなつかしき友の君は、無常の風に誘はれて、假りの宿りを立ち離れ、死出の山路を辿られてかへらぬ旅路を急がれしこそうたてけれ。

おゝ月よ、蟲よ、樂しく遊び暮したる去年の今宵は、まこと一時の夢なりしぞ。汝もし去にし時と變らずば、共に契りし友は今何處を彷徨ふらん、行方敎へて、月よ、蟲よ。

花は散りても復こん年に咲き出でぬべし。月はかくれたりとも復照らさむを、如何なれば失せにし友のみ歸り來らざる。嗚呼悲しや失せにし友、冥途に何の樂しみありてかかく黄泉に急がれし。嗚呼うたて、失せにし友、如何で我が身一人を殘したる。

折しも月は雲間にかくれて、蟲の音いとあはれに浮世の無常をかこつが如し。

評日、其人を戀ひてか友を慕ひてか、虫忘れずば我に耳語け。

亡き友を思ふ　　愛媛　高橋茂子

日をふるまゝに忘れんと人は云へども、如何てかわすらるべき。此の後友を得ぬ身のなほ更に、月雪花の折はおろか、あけ暮思ひ出ぬ時だになきは、今は世に亡き俗子の君、我には一つちかひの姉様なりき。あゝ友と親しみはらからとたより、行末長く助け合はんと思ひしものを、あへなく無情の風にさそはれて、後に一人我かなしみ如何ばかりぞや。思へば十二も未だ稚なりしに、如何に君は大人ぶりてありしよ、今なほ耳に殘る話ぶり、十年過ぎにし今日の我身に未だ及ばぬふし多し、愛らしきみ姿やさしのみ言葉如何でか忘らるべき、年ふるまゝに戀しき思はましぬ。さればうつしゑだにあらはとかこつ事ぞも幾度ぞ、あゝ之れもせんなし。世に云ふ一むかしの事にしあれば。

父君戰死の悲報に接して　　京都　千代子

空は青うすみわたりて、朗らかなる小春日和に心勇み戰のちまたにおはする父君に奉らんかとて靴下あみつゝ寄宿舍のおばしまに身をよせかけ、「看護婦となりて、愛する大和男の子のために、白衣をあけにそめんか、」など思ひに耽ればいつしか手の働きはやみて、身動きもせず、次より次に思ひをはこぶ中、煌々たる朝日脊中を照らして心地惡しきまゝ、身を反して庭もせに向ふに、風なきに木々の黄葉ひら〳〵と散りて、目馴れし庭も見わかぬ詠め、我を忘れて見入りし折しも、けたゝましき號報の聲、先胸とゞろかせつゝ何ぞと急ぎ打開けばあゝ悲しき哉父君戰死の報。兼て覺悟の事にはあれど、さりとて今萬歲の聲出づべくもあらで、女々しと知れど落る涙の止めあへず、心ははや故鄕の空を彷徨いぬ。定めて母上も同じ思にやむせび給ふらん。と歸鄕の念矢の如くなるに、さるにても尙手にせる編みかけの靴下の怨めしさよ。

マギー女史を懷ふ

牛込　米窪たね子

慰安の光に無數の星は天に輝き、讃美の香に無豹の花は地に開く、其光落ちて薫しき其香に宿る所、やがて常世の靈は結ぶ。此靈始めて千八百四十五年クリミヤの野に秘垣洩れてより、其所に幾多の火になやみ、鐵に傷める寂しき人の子は救はれぬ。血と骨とに汚れし野に、再び虹の立つらん心地して歡喜の聲は湧きぬ。爾來平和の光に伴ふものは常に紅く清く聖なる十字の旗風なりき。思ひ出づるも怨しき、今年まだ春淺き頃、ふと、わりなれ河に仇浪立ち、わしの深山に月影うせて、滿洲の醜草又もや血に染みてより、幾多の職えは骨をひしがれ、肉を砕かれ、高梁の蔭に、葦沼の傍に、胡沙ふく風に晒され、寒山の嵐に泣く、是をきき之を想ふさらぬ者だに吝かならぬ同情の涙あるを、況してや、やさしき心根もてるもの、愛の情を汲める人々のいかで忍び能ふべき。よし其俗は異り、神は同じからずとも、其如てふ愛の心の通ひなば誰か言葉の通せざるを憾まむ、何をか辭せむ萬里の波濤の荒らくともと、斯くして、吾の人道の權化、愛の女神たるマギー夫人は蒼濤高き太平洋のあなたに起てり、起ちて蹶然我國に來れり、恰もクリミヤの野に於ける鶯嬢のそれの如く、あはれ其雪の如き纎手をば紫の血に染めんとて。以來松山海岸の浪は夫人の夢を破りて幾夜か高かりき。黄海の怒濤餘りに吼えて病院船の夫人を痛めし事幾日なりしか、今や夫人は、やみ難き情實の下に暫し去つて故山に放浪せらる、而も戰局は益進み、傷者は日に多きを加ふ、此時に當りて益去れる人を懷ひ、ありし日を忍ぶ、古も雁山の暮雲に往くを惜みし人もありけるを。今や酷寒骨に泌し、雪風身に迫る、遙かに語を寄す、故山の冬幸に御身に恙なくてか、秋雁春燕切に其健在ならん事を祈る。

以上の外に猶ほ十數篇の寄稿ありたれども或はゝ切期限後に到着し或は長文に失するもありて悉く本號に掲くる能はざるにより次號に讓ることとなしぬ尚寄稿者の注意を乞ひ度は文章の成るべく簡潔なるをなり名文にても長きものは本欄の目的に適はざるにより遺憾ながら掲載せざることあるべし。
又狙歌令嬢の寄稿も數多あれど紙面の都合に依り次號に掲載することゝなしぬ　讀者諒焉



○御聖徳の一端

畏くも　天皇陛下、軍國の御事しげき御間にも下民の情を忘れ玉はざる叡慮の一端をうかゞひ奉るべきは此程、御製なりとて人の敬唱するを謹でひそかに記し奉れば

御製

こらはみな
いくさのにはに
出てはてゝ
翁やひとり
山田もるらむ

と詠れ玉ふ草野の末の健兒が出征、そが留守の翁の情まで叡慮に懸けさせらるゝの深き御仁徳、申し奉る言の葉もなし又御製は

ちはやふる
神のこゝろに
かなふらむ
わかくに民の
つくす誠は

我が國民の精神は斯くも受納ましますなり我が國民は資財も身をも此　大君に捧げて何遺憾あらむ猶一つ

四の海
みなはらからと
おもふ世に

なと波風の
立さわくらむ

四海兄弟、一視同仁の聖慮昭乎なり爲國誰れか仰がざらむ敵國のもの之を承らば如何に恐縮感佩し奉るべきや

○皇后陛下の仁慈

皇后陛下には去月十五日親しく傷病將卒を豫備病院に御慰問あらせられたり承る所によれば當日澁谷分院なる樓上の便殿に於て御晝餐の供御ありし際特に傷病將卒の食物一通を召させられたりとか、坤德海の如し斯くと聞くもの誰れかは感涙を以て陛下の御仁慈を仰ぎ奉らざる者ぞ

○歌御會始御題

來る明治三十八年歌御會始御題は

新年山

と仰出だされたる由詠進は一月十日までに宮內省御歌所に差出すべく料紙は檀紙、奉書、杉原紙又は美濃紙を用ゐ書式は

竪詠草(但し五つ折り)

名上

御題

初 二 三

四 五

裏面書式

某府縣下某國某郡市某町村住

華士族 平民

苗字 名

官位勳功爵を有するものは苗字の上に記載すべし

折角詠進したるものも違式甚しきものは天覽に供し奉ること能はざること多し斯の如きは遺憾千萬なれば詠進者は十分注意ありたしとのことなり

○北白川女王御降嫁

故北白川宮能久親王殿下御長女滿子(二十四)の方は樞密院副議長東久世通禧伯の御媒妁に依り勸修寺家一門の宗族たる伯爵甘露寺義長氏令嗣受長氏と結婚の約整ひ客月十四日午後一時紀尾井町御本邸御出門、先驅警視二騎、警部一名次に儀仗兵近衞騎兵半分隊、次に金菊花御紋章ある美麗なる御馬車に召され老女松岡(大野なか女)御陪乘次に松平家務監督、麻生家令同乘馬車にて供奉し次に儀仗近衞兵半分隊次に後蹕の順序にて千駄ケ谷なる甘露寺伯爵家に御降嫁相成りたり同邸にては御媒妁人東久世伯爵夫妻を始め親戚勸修寺伯某家の人々玄關に奉迎、御休憩室に入り御服裝を改めさせられ表廣間に於て父義長伯以下受長氏の兄弟、姉妹に御對顏引續き御結婚の儀式を濟ませられ直に祝宴を開かれ同三時三十分結了したり右に付御祝儀として兩陛下より左の如く御下賜ありたり

滿子女王殿下へ

一、紅白縮緬　二匹

成久王殿下へ

一、御酒　一荷

一、鮮鯛　一折

尙東宮同妃兩殿下よりも左の御祝儀を賜りたり

一、交魚　一折

又常宮、周宮、富美宮、泰宮各内親王殿下よりは紅白縮緬二匹其他伏見宮、有栖川宮、閑院宮、東伏見宮、伏見若宮、久邇宮、賀陽宮、梨本宮、小松宮、各殿下よりも夫々御祝儀の品を贈らせられたり

○華族女學校運動會

華族女學校にては十月廿八日午前九時より校内運動場に於て第十九回秋季運動會を開きたるが兼て仰出されし如く皇后陛下には高倉典侍御陪乘香川皇后宮大夫山内同宮亮森永侍醫外女官數名の供奉にて午前九時三十時御出門御順路を同校に行啓あらせられ便殿に入御暫時御休憩の後是より先八時卅分高輪御殿御出門にて御參校相成りたる常宮周宮兩内親王殿下

に御對顔あり續いて御先着の梨本宮伏見若宮兩妃殿下幷に細川校長、下田學監、淺岡幹事等に拜謁仰付けられ細川校長の御先導にて直に運動場なる假玉座に臨御各生徒の催せる左の運動競技を御覽あり正午御退場便殿に於て兩内親王幷に兩妃殿下と共に御晝餐を召させられ午後一時再び臨御各技を御覽ありたる後午後四時御機嫌麗はしく還啓仰出されたり此日陛下には淡白茶地御洋裝、兩内親王殿下には紫地縫模樣の御振袖に海老茶の御袴を召させられ御髮は東髮に上させられ又陛下よりは金若干を東宮妃殿下よりも特に錦小路東宮侍醫を御差遣同じく金若干を同校に御下賜相成たりといふ尙は來賓の主なるは島津及び毛利公爵夫人、山内侯爵夫人、花房宮内次官、久保田文部大臣、菊池學習院長、村田少將、長崎調度局長、成瀨日本女子大學校長、府立高等女學校長以下約二千餘名又外國人にては英國武官サーニコルソン少將、同トーク大尉、米國通信員ミーチンエガン氏、同武官ウード中佐、同夫人、白耳義公使、同夫人、翰林院侍讀孟慮榮氏等を首として男女合せて約一百餘名なりしが折柄秋天淸く晴れ渡りて小春日のいと長閑なる後庭に優美なる服裝せる生徒の華やかに各技を較べたるいとゞ參觀人の心を歡ばしめ交戰の世の中とは思はれずなど囁き合へる外人もありしとなり

○義勇艦隊婦人會

去月八日午後二時より華族會館に於て義勇艦隊建設義金募集に關し婦人會を開き會長有地男海事協會の成立及び義勇艦隊建設に關する詳細なる趣旨を述べ終て伊東軍令部長は發起人として諸氏に盡力あらんことを述べ次に左の勸誘書案を決議したり

茲に長くも總裁宮殿下の令旨を奉戴し又本會の奨勵せられたる本意書に依り微力あらん限り有志の諸夫人を勸めて補助船舶の建造に務め以て我等が微衷を盡さんと欲す

抑々四方海を環らせる我大日本帝國の如きは其有時平時とを問はず能ふべきたけ船舶の多きを欲するは云ふ迄も無し二十世紀の世界の機勢の單に海の力に賴らざる可からざるとは小學兒童も能く知る所なれば又今更に喋々するの必要なかるべし況んや船舶はもと女性に象りし者にして而も我貴顯の渡航ありしは實に神功皇后を以て嚆矢とす因緣の歸する所また偶然ならざるに似たり是故に我船舶益々多きを加へて各方面の航路次第に擴張せられ我等同胞

姉妹も又陸路に依らんよりは寧ろ海路によるを便なりとするに至り爰に始めて海外の貿易も殖民も完全に其目的を達するに至らん海國の女性は宜しく船を以て家とするの覺悟なかる可らず然るに我日本女子の多數が猶舟行を悦ばすして寧ろ之を忌避するの傾きあるは他無し海上を行くと陸上を行くが如く頻繁ならずして其習慣の航海に疎なりしが故にやあらん返す／＼も我船舶の數を増加して世界進歩の大勢に後れざらんことを務め以て交通貿易の發達を圖ると共に有事の日に於て海軍の任務を補け兵商兩用の途を全うすべき補助船舶の建造は實に刻下の急務なるを信ず彼の塵埃も積れば高き山となり點滴の水も集れば深き淵となる
希くは此壯擧に發興せらるゝ同胞姉妹各位の協心戮力以て速に成功を助けられんことを切に熱望して止まざるところなり

來會者何れも其趣旨を贊助し一同發起人たることを承諾し終て茶菓の饗應あり席上餘興として貞水の常陸土佐兩船遭難實況談あり同五時散會したり當日來會者の重なるは大山元帥東郷大將、奧大將、鍋嶋侯土屋中將、出羽中將の各夫人、毛利公母堂、佐々木伯、園田男、有池男、三ノ宮男、肝附少將の各夫人下田歌子、山協夫人等五十餘名なりき

◎東洋婦人會の擴張　鍋島侯爵夫人の會長たる東洋婦人會は清、韓、暹羅等東邦婦人の交際友誼を厚くする目的にて設けしが、本年六月華族會館に於て始めて發會の披露をなし、爾來數月にして、會員贊助員の數既に三百名に近く、殊に當春同會役員の地方遊説の結果、神戸、横濱の紳商、清國領事を始め同地清國豪商及婦人等の贊助、寄附又は入會するもの多く、去月孔子生誕祭の時の如き、横濱の清國婦人は同會の顧問、理事等を招待して、爾來和互交遊の道を開けりと云ふ、因て同會に於ては去月二十日第一年會總會を鍋島會長邸に開き、神戸、横濱兩港の重立ちたる男女清國人幷に在京清、韓、暹羅等の人々を招待し、又朝野の名士貴婦人等の臨席ある筈なり

◎京都淑女學校　京都市下京區猪熊通六角南入同校は本年一月新校舍に移轉後益々教育の改善を圖り同校の特色たる貞淑の婦德を涵養しつゝあるが去る三四の兩日は同校内に於て恤兵部へ寄贈の目的を以て慈善市を開催し同校生徒の手に成りし各種の手藝製作品千五百余點を陳列しけるが二日間にて四千余名の入場者ありて其大半は初日に賣り盡し翌四日正午過には一品も殘らず賣り盡し物品賣切の貼紙を出

せしと云ふ而して其賣上高金百十六圓九十九錢の全部を校長田島教惠氏より己に陸軍恤兵部へ寄贈したる由

○第一高等女學校生徒の美擧　小石川竹早町なる第一高等女學校及び東京府女子師範學校職員及び生徒團は曩にキャラコ地に繪畵を書込み各自の姓名を記したハンケチ一千枚を出征中の某軍隊に寄贈せしが此の程岐阜愛忠婦人會が雑誌、手巾、石鹼等を同地停車場を通行する凱旋軍人に贈る由を聞込み同校生徒一同は大に其擧を賛し太陽、新小説、女鑑、女學世界其他あらゆる諸雜誌の讀み古るし一千部を纏めて同會に贈り尚ほ今回各生徒の畵けるハガキ一萬枚を出征の軍人に贈らんとて昨今學科の餘暇を割きて專らこれが製作に從事しつゝある由なり

○女學生の奉公裁縫　香川縣にては戰傷者用蒲團及び袷病衣を女學生奉公の一端として裁縫せん事を當局に計りたるに頗る適切の義擧なりとし直に其意を容れたれば蒲團二百枚を縣立高等女學校現在生徒(四百六十二人中運針未熟の者若干を除く)に裁縫せしむる事とし學科の餘暇日沒まで之に從事せしめ先月中に仕あぐる筈にて先月十二日(休暇後開校)より着手せり又高松市私立和洋裁縫女學校及び同高等裁縫女學校に於ても袷病衣を分擔裁縫する事とし已に見本も交付されたれば不日着手すべしと云ふ

○愛國婦人　近頃獨逸ケーニヒスブルヒ市にて露國の一貴婦人或店に至りて物品を素見しゐる内日本製の皿あるを見忽ち色を變へて手に取り日本人此の如しとて振り上げ地に抛ちたれば賣子の娘は其の破片を拾ひ紙に包みて此の代價は御拂ひ下されませうなといふ婦人尙堪へずや其の包みを引奪り獨逸人此の如しと呼はりつゝカチリ地上に抛てば破片は飛んで散亂す賣子の娘腹に收めかねツカ〱と進みて痛いといふほど婦人の耳の邊を彈き奴露西亞人は此の通りぞと呼はりたる騷ぎにパット一時大騷ぎとなりしといふ

明治三十八年 和歌文章兼題

	歌	文
一月	艦上新年 / 水仙	松の内の事を記す
二月	水邊梅 / 水雷艇	初午詣での記
三月	澤若草 / 馬上春風	雛祭り
四月	菫 / 電車	戰死せる軍人の未亡人に贈る
五月	夜聽蛙 / 筍	落花を惜む
六月	百合 / 松下禪尼	綠陰に書を繙きて

●投稿規定

一女子は何人にても投稿する事を得

一用紙は文章及新體詩は半紙、和歌今樣は半紙半裁又は端書を用ふべし、

一題異なるものは必ず用紙を別にし、二葉に渉るものは必ず紙捻にて綴り置くべし

一題目の下には必ず住所姓名を明記すべし

一文字は必ず楷書にて句讀點を施し鮮明に認むべし字體亂雜のものは沒書とす

一文章は一行十五字詰にて兼題ものは四十行以内、短文は二十行以内に限る新體詩も亦廿句以内の事

一兼題文章及短文今樣新體詩等總て一人一篇づゝに限る

一兼題和歌は一題に付一人一首、短歌は一人一首に限る但上下句中二音の漢字三字を入れ他は悉く平假名にて認むべし

一投稿宛名は國光社女鑑編輯局とすべし

一原稿〆切期日は雜誌發行の廿日前即毎回前月十日迄とす

一〆切期日に後れたる兼題は總て其撰に入れず但短文短歌今樣新體詩等は次號に掲載すべし

一右の規定に違ひたるものは總て採用せず

一兼題當撰者には文は天一圓、地五十錢人三十錢、歌は其半數に當る計算を以て代價相當の書籍を呈す

新刊批評

◎セーラ、クルー物語（若松賤子譯）最と面白き英國貴女の物語を流麗なる筆もて譯せられたれば讀みもてゆく間に興味の更に盡きざるを覺ゆ殊に一々原文を揭げて對照の便に供しあるが故に英學研究の上にも甚だ便利なり（定價三十錢本鄕西片町内外出版協會發刊）

◎英學生　アーチスト、ルース、斯波貞吉、山縣五十雄等の諸氏が中學程度の英學生の讀物にとて編輯せる毎月二回發兌の英文雜誌なり今日の新聞、小話、著名人物の談、戰爭話など面白き記事ありて文章の平易なるに加へて別に註譯を揭げたる附錄を挿入しあれば英學生課業外の研究に甚だ便利なるべし（定價一册二錢五厘小石川區小日向臺町三ノ七一東西社發行）

◎寫眞月報　寫眞に關する技術並に談話等を揭げ美麗なるアートタイプの風景畫及び美人畫を挿入せり寫眞學上必讀の良雜誌なるべし（一部定價十二錢日本橋區本町三丁目小西本店發行）

◎二十世紀の婦人　北海道婦人同志會の機關雜誌なりといふ編輯人は今井歌子川村はる子なんど何れも一騎當千の女流文學者のみなるは何ぼう目出度ことならずや（一册十錢麴町區飯田町五丁目北海道婦人協會發行）

◎經濟新聞　面白味なき數字的算盤珠的記事を旨く綴ひ上げて文學的趣味を添へ女子少兒と雖も讀みて倦まざらしむる手際は天晴れといふの外なし附錄常盤隱の占術、知十庵の發句、料理などを入れたるは更に妙なり（每月曜日發刊定價三錢五厘日本橋區蠣殼町二丁目經濟新聞社發行）

新刊書目

誌名	號數	所在地	發行所
六合雜誌	第二百八十七號	芝區三田四國町	ゆにてりあん弘道會
女學世界	第四卷十四號	日本橋區本町	博文館
兒童研究	第七卷第十號	神田區神保町	富山房
日本婦人	第六十一號	府下豊多摩郡	同會
寫眞月報	第九卷九三號	日本橋區本町	小西本店
女子之友	第百五十八號	牛込區谷田町	文友社
二十世紀婦人		麴町區飯田町	同發行所
婦人と子供	第四卷第十號	本鄕區湯島町	フレーベル會
をんな	第四卷十一號	麴町下二番町	大日本女學會
愛國婦人	每號	同	愛國婦人發行所
婦女新聞	每號	牛込東五軒町	同新聞社
上野敎育會雜誌	第二百五號	前橋市	同事務所
婦人世界	第四十二號	大阪南區鹽町	浪華婦人會
慶應義塾學報	第八十四號	芝區三田四國町	慶應義塾
成功	第五卷五號	本鄕區弓町	成功雜誌社
敎育公報	第二百八十八號	神田區一ツ橋	帝國敎育會
東京經濟雜誌	每號	京橋彌左衛門町	同社
經濟事情	每號	芝區櫻川町	經濟研究會
音樂之友	第七卷一號	下谷區仲徒町	樂友社
大日本婦人敎育會雜誌	第百六十九號	麴町區永田町	同會事務所
家庭週報	每號	小石川高田町	櫻楓會
國學院雜誌	第十卷十一號	麴町區飯田町	國學院
英學生	第一卷一號	本鄕區元富士町	日高有隣堂
大八州雜誌	第二百二十一號	神田三崎町	大八洲館

新年の女鑑

鬼に笑はるゝ位は少しも構いませぬが、餘り翹々しく吹聴するのも、手前味噌のやうで、愛讀者諸君に對して、氣恥かしく感じますから、詳しい豫告は止じにして、大略摘んで、趣味の一端をお洩し申しませう。

奇麗な、奇麗な、眞に飛附きたい程奇麗な、アートタイプの口繪と、面白い新年に關する種々の記事と名流大家の卓拔なる女子敎育上の意見と、文豪の苦心の中に出來た文章（小説散文等）とは、趣味深き家庭女學校等の記事と共に、意匠優れたるうつくしき表紙の中に包まれて、新年の御挨拶を致します、口繪の内にも、記事の内にも、確かに金錢では求め得られない程のものがあるとを思召せ。

その口繪の何であるか、文章の何人の作に成れるかは、言はぬ方が、却つてお樂みと存じます。

新年の女鑑は改良と擴張の實を擧ぐる爲め、數萬部を増刊致します。

定價

一册	前金貳拾錢
三册三ヶ月分	前金五拾七錢
六册半年分	前金壹圓拾錢
拾貳册一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁 三十二行	金八圓
一頁 六拾四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認めありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十七年十一月卅日印刷
明治三十七年十二月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊索一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

此の日記は他に比類なき唯一の女生日記なり

國光社編纂

明治三十八年 女生日記

菊袖珍總クロース
金文字模様入
定價廿五錢郵稅四錢

本書は特に女生の爲め編纂したる者にして古今東西の婦人に關する金言俚諺和歌等を日々の紙欄に掲上し日々の出來事を記錄すると同時に知らず識らず古今の聖賢學者哲人等の名言と詩文と諳誦し其の學識を深くし品性を高うするを得せしむ又卷頭には女子職業案内其他種々の事項を載せ毎月の初めには大祭祝日の唱歌古賢の訓戒及び四季折々の遊樂料理等を明細に記しあるを以て學校にあると家庭にあるとを問はず女學生は勿論一般婦人の必ず座右を放すべからざる良日記なり

國光社發行

女生日記特別割引券

●本券有効期限は明治卅七年十二月卅一日限とす
●本券は直接本社宛御注文者に限り有効とし特に定價の一割引す（但し郵稅は別に申受く）
●期限經過後は無効とす
●前金添へ（郵稅共）御注文に非されば無効とす

東京築地二丁目
株式會社 國光社

体裁優美製本高尚女子の携帯に適す

!!

大町桂月著　**常磐御前**

國府犀東著　**靜御前**

長田偶得著　**顔世御前**

小林雨塔著　**勾當內侍**

濱田廉著　**袈裟御前**

四六倍判 三切洋裝
各定價十三錢郵税二錢

!!

和軒梅澤精一著

清少納言と紫式部

定價卅五錢　郵税六錢

清女が宮仕の動機を論じ中關白派と御堂關白派との勢力の消長よりして椒房の光景を敍し美的皇后を描き李義山を論じ枕草子の文章をば内外二方面より觀察し最後に歌人としての清女に及び又後者にありても父が交際範圍夫の逝去等より紫女が宮仕源語製作の動根に及び往生要集によりて時代精神を論じ天台宗と源語との關係に及び紫女が人生觀女性觀を敍し又小說としての源語を評し躬れて古今東西の源語論を批判し最後にダンテが神曲と紫女が源語と比較せり

現今諸名家撰述　〇女鑑編輯局編纂

新編

ひめかゝみ

菊版美裝全一冊
定價金二拾五錢
郵税金四錢

近世女子敎育の年に月に盛んなるに隨ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも稱すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、專ら智育を主として重きを德育に置かざる餘弊にや、さばかりの才媛にても其操行如何を顧る時は案外眼に一丁字なき鄙の賤の女にも及ばぬ者多く、其甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み盡せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社茲に慨すること久し仍て本書を編纂刊行することゝなせり、抑方今文明日進の際時勢に伴ふて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝兩全ならざるべからず、學藝は花にして操行は實なり花あり實ありてこそ始て完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花實を兼ね備へ玉はんことを

杉谷正隆編

家庭歌訓

修身百首

菊版洋裝
定價二十錢
郵税四錢

發兌元　東京築地　株式會社　國光社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

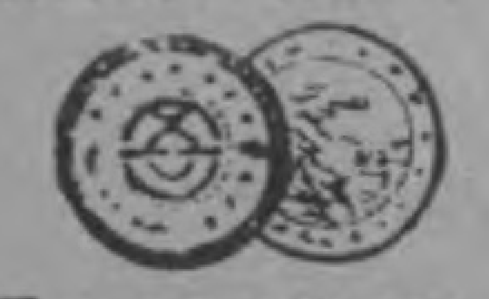
第五回內國勸業博覽會

銅牌并に褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい



壽美禮おしろい

● ねり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

グワイオレツト水



錫栓附乳白硝子罎入

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟等を以て配剤しわるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性わり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかにゝにきび、そばかす、あせも等を生ぜす御肌へを清々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろひ』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

● 皮膚艶白剤壽美禮あらい粉 ●

綠、藍、紅彩蝶番ひボツクス入三錢

鑵詰六錢五厘　袋入壹錢

● 弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞讃する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

● 常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生ぜす又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

● 使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHILNG IOWDER.

壽美禮あらい粉



製造本舖

東京東兩國(兩國橋際)元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

明治三十七年十二月一日發行 毎月一回一日發行 第拾四年第拾參號
明治廿五年三月十二日 第三種郵便物認可

東京築地株式會社國光社印刷